文學士　宇田久著

去來抄新講　上（先師評）

東京　俳書堂版

序

芭蕉が自作を示して門人の所懷を叩き、或は門下の句について批判を與へ、時にさびしをりを說き不易流行を論ず、語簡に意長く、片言隻語といへども皆應機の說法にして誘導啓發の妙を極め、之を仰げば彌〻高く、之を鑽れば彌〻堅しの概なくばあらず。師翁と及門子弟との風貌情味を窺ふべきもの此書に過ぐるはなし。去來抄はそれ蕉門の論語か。之を讀むこと愈〻

久しうして但意味深長なるを覺ゆ。

零雨子の新講は博く異本を搜りて字句を校合し、類書に依りて文意を發明する所多し。俳諧の談理を好む者も之によりて得る所あるべく、俳諧の制作を樂しむ者も之によりて悟る所あるべし。

昭和十年二月

藤井紫影

敍

嘗て、或る人が、芭蕉歿後の元祿俳壇と、子規歿後の明治俳壇とは、おもへば、期せずして同じやうに「努力して月並へ」の過程を踏んだのである、といふ意味のことをいうたことがある。さういふ廣汎な問題を、今こゝで論議しようとするのではないが、たゞ卒直にいふと、爾來、吾々は、現實の問題としても、明治・天明の俳諧よりは、一時代前の昔に遡つて、元祿の蕉門俳諧の研究に、より

多くの關心を持たねばならぬやうな情勢に刺激されて、今日に及んでゐるのである、というても差支へないとおもふ。

これまでにも、先覺の種々有益なる研究が相亞いで發表せられ、また續多の貴重なる發見と相競うて俳壇を稗益したことは、寔に敬慶に堪へぬ次第であり、また、さうして、次第々々にそれ等の惠澤に浴しつゝ、吾々は、蕉門の俳諧理論とその指導原理の如何なるものであるかを、懇切に誨へられて來つゝあるのである。

然しながら、色々と古俳諧に關する研究が盛んになつて來たとはいへ、それが單に、感想とか興味觀賞のものだけでは、未だ必ずしも滿足を與へるものとはいへないとおもふ。どうしても、國文學上からの、多少窮屈でも確つかりとした、學問的に系統立つた新研究が、しきりに蜀望されてゐたのである。それが、殊に、蕉門の俳諧原理といふ問題になると、一層、その感を懷かしめて止まぬものがあつたのである。

向井去來といふ人の、實直律義な武士氣質が、師翁芭

蕉の遺訓を守り通させたことは、苟くも蕉門俳諧のためには、まことに大いなる功績を遺して呉れたものと云ひ得よう。　今日より見れば、その言説には、かなり固陋矛盾の點があるけれども、蕉門に去來の如き堅固な人がゐたお蔭で、後來の吾々が、どの位、啓蒙されるかは測り知れないのである。　徒らに功を急いで、新らしがつたりすることは、永い間には、結局、雲散霧消に終るものであることが、こゝにも好い例とされてゐるともいへるのである。

「去來抄新講」は、上中下の三巻を以て完了するのであるが、各巻はいづれも、俳諧の過去のみを物語るものとして、看過したくないことである。今日及び明日の俳諧原理を、繰り返してこれより學び得ることゝ、また學ばねばならぬことゝを、銘記したいとおもふ。

幸ひに、俳諧文學專攻の立場から、吾々の意圖に賛同せられて、本書の完成に、獻身の努力を惜しまず盡して下され、遠くは京都、長崎の地にまで出向いて史料を考覈せられた、零雨宇田久先生の御精勵に、衷心から謝意

を捧ぐるものである。

昭和十年二月

愛吟會にて

上川井梨葉

例　言

一本書は曉臺梓行本の『去來抄』を底本として、これに準據し、その複刻・校異・講述等を收錄せるものである。而して、底本が上(先師評)・中(同門評)・下(修業敎)の三冊より成るに因み、本書も亦以上の三冊に分ち、ここにその上(先師評)を最初に梓行する次第である。

一想へば昭和七年の春、俳句雜誌『愛吟』誌上に連載すべく、愛吟會より「去來抄新講」の執筆を委囑せられた。予は淺學未熟の故を以て、之を謝絕したのであつたが、同年冬に到り再三の懇望默止難く、遂に杜撰をも顧みず決然起稿し、同八年一月號『愛吟』誌上より連載するや、先輩諸雅の好評を博し得たのことは望外の幸であつた。かくて、上(先師評)

には、昭和八年一月號より同年十二月號までの毎號に發表の部分を、更に增訂して之を收めたものである。

一本書には先づ底本の表紙及び跋文を口繪として掲げた。但し、原本は縱七寸五分、横五寸三分五厘、薄青色表紙の仕立に成つてゐる。

一本書には拙著『古板俳諧七部集』に於ける複刻の形式を採用し、先づ本文を寫眞版として掲げ、次に活字による複刻をなし、且つ章を分ちて一々番號を附し、兩者照合の利便を計つたのである。但し、寫眞版に於いては、原本の柱字(序文には「序」、本文には「上」)及び丁附(序文には「〇」、本文には「一」より「十六」)を省略した。又活字による本文複刻には、原本に使用された誤字・略字をも保存するに努めたが、及び難かつた二三の例外もある。それは今後の機會に一括して記載しようと思ふ。

一本書には活字による複刻を四十五章に分ち、各章毎に「校異」・「訓讀」・「口譯」・「語釋」・「參考」の五項目を設けた。

一「校異」には、京大古梓堂文庫本舊久原文庫本（略號久）・落柿舍遺稿（略號落）・帝國圖書館本（略號帝）・青坡自筆本（略號青）・贄川氏所藏本（略號贄）・架藏本（略號架）の六種の異本を採用した。之等の詳細なる紹介は、中（同門評）附錄の「去來抄論」中に讓るが、以上の六種の古寫本が予の囑目し得たものの中では、特に內容の相異に重要視せらるべきものがあり、從つて傳承の系統に關して興味深き暗示を含むものである。校異の方法は、以上の各異本をそれぞれ複刻本文と照合し、先づ複刻本文の行數を符號（例へば①②③等）を以て表し、次に底本の字句を再錄し、その直下に異本の字句を擧げて底本と如何なる相違あるかを對照して示すこととした。その相違は、たとへ誤謬と雖もそのまゝ出して、たゞ漏らさざらんことを期したのであるが、その誤謬の極端な場合には右側に「マヽ」と傍註を施さざるを得なかつた例外もある。

一「訓讀」には、底本の誤字・略字・古字・俗字等を訂し、萬葉假名・變體假名を平

假名に改め、假名遣の誤を正し、送假名を附し、濁點及び半濁點を施し、必要に應じて句讀點及び返點を打ち、更に漢字には總べて振假名を設けた。以て現代の文法に應じたものとしたのである。

一「口譯」は口語體を以て叙し、原文を平易に且つ興味深からしむる爲めに、或は大膽なる意譯をも敢へて行つたものである。嚮に誌上へ連載發表の際、試みに附したものであつたが、意外の好評によつて、本書に於いても更に舊稿を改訂して初學の參考としたのである。

一「語釋」は原文中のやゝ難解なる語句を拾ひ、それ〴〵に複刻本文の行數の符號を明かにしつゝ、註解を施した。但し、その語彙の重出を避けた結果、先に一度掲げた語句は、後の場合には意味の相違せぬ限り省略した。これは下(修業教)附錄の「總索引」に依つて、更に檢索に便があらうと思ふ。なほ「語釋」に振假名を附さなかつたのは、前に「訓讀」の項目があるに因り、その煩を除いた爲めに外ならぬ。

一「參考」には、各章の句の出典・考證、又他書との異同・比較、及び積翠園の評語等を收輯した。而して、及ぶ限り自己の論斷を控へて、何等かの關聯を持つ他書を援引し、特に蕉門の俳論を集成せんと務めたのである。なほ引用書は、句讀點及び濁點・半濁點を附し、それ以外は原本を濫りに改めぬを原則としたが、明かに誤字と思はれ、且つ訓讀に支障あるものは正し、又は振假名を施した場合もある。

一本書には上(先師評)附錄として、「去來評傳」、及び「新編去來發句集」を添へた。前者は改造社發行の『續俳句講座』第一卷「俳人評傳篇」中に予が執筆せしものを聊か增訂したものであるが、なほ自ら不滿とする點多く、更に研究の上、且つは筆蹟等も多く拾集し得て、後日再び發表する機を得たいと望んでゐる。後者は安井小洒氏の快諾を得て、同氏編『蕉門名家句集』第六輯去來の部を改編增補したもので、去來の發句集としては、現在に於いて、やゝ自信を持ち得るものであるが、今後なほ

逸句の探索に務めて更に完璧を期したいと思ふ。

一本書には下(修業教)に於いて數種の索引を附録し、又引用書の略解をも添へる豫定である。今後それ等も支障なく作成され、三册完備の上は更に本編の不備を補ひ得ること尠くなからうと信ずる。それまで暫くの時日を與へられんことを願ふものである。

一本書には藤井乙男博士・上川井梨葉先生が、或は種々示教を垂れ給ひ、或は常に予を激勵鞭撻せられ、更に過分なる高序を賜うたことは、予の最も光榮とする所で、滿腔の謝意を捧げる。なほ、本書は先輩諸雅の御厚情に負ふ所頗る多く、就中、伊藤松宇・籾山梓月・贄川他石・志田義秀・潁原退藏・高木蒼梧・安井小洒・鈴木重雅諸先生が、祕襲を開き資料を示されて、且つ親しく指導を賜うたことは、寔に感激に堪へざる所で、謹んで厚く感謝する次第である。更に複寫その他に就いては、愛吟會の近藤白亭氏を煩はしたことが多く、校正その他に就いては、石橋貞

吉・林昇・林富士郞・久保田幸子諸氏の助力を受けたことも少くない。共に記して謝意を表する。最後に本書の犧牲的出版を快諾せられたる俳書堂にも、こゝに謝意の一端を述べさせて頂かうと思ふ。

一本書に由り、『去來抄』を通して、蕉門俳諧の眞髓の幾分かにでも觸れることを得たならば、もとより予の欣快はこの上もない。然し、今や駑馬に鞭うちて漸く本書を成せども、菲才遂に啓沃の盛意に副ひ得ざりしかを、私かに恐るゝのみである。庶幾くは、大方博雅の士の寛容を仰ぎ、批正の勞を賜はらんことを。

昭和十年紀元節の日

去來の生地長崎よりの歸路京の旅舍にて

宇田久識

去來抄新講上（先師評）目次

去來評傳（附錄第一）

去来抄

上

去来抄

上

去来抄叙

芭蕉翁ひとたび此道に斧ふるひして竈(カマ)をうち毀れたるを拾し俳諧の生いころを傳へてより後は尊を抑し均して一派八隅にわたり支流湧かごとく終に川水となりぬわらはも菜摘女も耳に觸て口にあらはす時は風調をしなべて泥むこととなりて其意を模すること

窮て風體を折き感説十襲して今時
平地に波瀾を起し其弊を擾すに至
いたし訝哉之来る魚ある處此秋渉く
漁て呑舟の魚をとらし次事あれとや

安永三甲午十月

曉臺

去來抄

上

一

先師評　外人の評有といへとも先師の一言まじはるハ
もれなく爰ニ記せ

蓬莱にきゝたや伊勢の初便　芭蕉

深川より此文ニ此句さま〴〵の評あり汝いかゞ聞侍るやとなり

去来曰都ハ京の便ともあれ伊勢と侍るハ元日の

式のこゝろしめやかなる神代をおもひいでたるより此句也と

道祖神のたちや獨申をきゝハうしなひとして蒙侍れと申

先師返事に汝か聞くまゝにたがハぬ今日神のかく

しなきあらハれを書出て慈鎮和尚の詞によりて初の

一字を吟じ清浄のうるはしきを蓬莱に對して結びたる也と

からさき松は花より朧にて　芭蕉

或人曰にて留りの難あらんやと云其角答曰にてハ哉にかよふゆゑ哉留め發句ににて留の第三を嫌ふといへど句切迫れバにてとも侍るとなり　呂丸曰にて留の事ハ其角が解あり又是ハ第三の句なりいかに發句とハなし給ふや去来曰是ハ即興感偶にて發句なる事疑なし第三ハ句案に渡るもし句案にわたらバ第三等にくだらん先師重て曰其角去来が辨皆理屈なり我ハたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと

行春をあふみの人とをしみける　芭蕉

先師曰尚白が難に近江ハ丹波にも行春ハ行年にもなるべしといへり汝いかゞ聞侍るや去来曰尚白が難あたらず湖水朦朧として春をおしむに便有べし殊に今日のうへに侍ると申き先師曰しかり古人も此國に春を愛することをさ〳〵　都におとらじ　去来此一言こゝろに徹す行年近江に居たまはゞいかでか此感のましまさん行春丹波にゐまさバもとより此情うかぶまじ風光の人を感動せしむる事真なるかなと申先師曰汝や去来ともに風雅をかたるべき者なりとよろこび給へりし

此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

猿蓑撰の時に此句書おくり冬の月霜の月置わつらひ侍る
よし支曰衆議冬の月によし先師曰其角か冬霜に煩ふ
つべき句にもあらずとて冬の月に定め入集させられけるをはじめハ
文字つまりて柴戸とよみあやまり然るに出板の後大津より
先師の文に柴の戸にあらず此木戸なりかゝる秀逸ハ一句も
大切なれバたとへ出板にかゝるともいそぎ改むべしとなり凡兆曰
柴の戸此木戸させる勝劣なし去来曰此月を柴の戸に
寄て見れバ尋常の氣色なり是を城門にうつして
見れバ其風情あはれに物凄きいふばかりなし実もさすが角か

をくあふらゝへるもてはりなり

五

うらやましおもひきる時猫の恋　越人

先師伊賀より此句を書贈て曰心に俗情あるもの一たびは不出といふ事なししかれど風雅是に至りて本情をあらはせりとなり是より先に越人名四方にかゝやく人のえてしてやさしき讃句多しされとも爰に至りてしらしめて本性を顕すとなり

六

こがらしに二日の月の吹ちるか　荷兮

凩の地にも落さぬしぐれかな　去来

去来曰二日の月といひ吹ちると働きたるあたり予か句は

ちるかに勝れりと覚ゆ　先師曰荷兮が句ハ二日の月といふものにて作せり其名目を除けハさせる事なし汝が句ハ何を以て作したりとも見えず全体の好句なり　たゞ地迄とかぎりたる迄の字いやしとて直し給ひぬ

七

春風にこかすな雛の駕籠の衆　　荻子

先師此句を評して曰伊賀の作者あだなる処を作して尤なつかしとなり　丈艸曰伊賀のあだなるを先師も賞し給へれどそのあだなるハ先師のあだなるにや

八

清瀧や波に塵なき夏の月　　芭蕉

先師難波の病床に予をめして曰頃日園女か方にて志ら菊の目にたてゝ見る塵もなしと作す句に似たれは清滝の句を案しかへたりはしめの草稿野明か方にあるへし取て破るへしとなり然ともはや集にもれ出侍りて侍るに及ハす名人の句に心を用ひたまふ事志るへし

凉しさの野山にみつる念仏哉　去来

是ハ善光寺如来の洛陽真如堂に遷座有し時の吟也はしめの冠ハひいやりとあり先師曰かゝる句ハ全体おとなしく仕立るものなり五文字しかへてよしとて風薫と改め給ふ後猿蓑の撰場にて再改て今の

冠をきせられたれ

一〇　面梶やあかしとまりの郭公　荷兮

猿蓑撰の時去来曰此句ハ先師の野を横に馬牽むけよと同前なり入集すへからしハ先師曰明石の時鳥といへるもよし去来曰明石の夜とまりハさる事なれハ一句たゝ馬と舟とかへ侍るのみにて句主の手柄なし先師曰句の働においてハ一歩もゆつらす明石をとりえたるハ荷兮か家へとなり終にいりしに

一一　君か春蚊帳ハ萌黄に極りぬ　越人

先師曰発句ハ落つかさる所をもて其の発句にあらしハ越人か発句既落着たり

ミこゆハ又われもこお来れ了此句姉妹ハ落葉に極まるまてたれ了
月新部路なとを重て姉妹の發句となすへしとかいへる由
君か代にうけて歳旦となす侍ば人重く句寿鑿なりけれ

三

振舞や下座になほる去年の雛　去来

此句ハ予初ありて作す五文字言烏帽子紙衣ハ
いひるより意趣下人徹せんおさめしや口おしやわ
類ハたるもしと今の冠を重て窺ひ待ん先師曰
又文字に人をとらめてわかれ信徳か人の世やなるへし
十分なりけれとも振舞にて堪忍有へしと也

三

田鶴屋りの是つるわり堂の札　万乎

此句は先師の斧正ありし凡兆が句なり猿蓑撰の時凡兆曰此句見所なし除へし　去来曰屋の棟をつたひ行螢の光闇夜乃景気風姿ありといふ凡兆ゆるさず先師曰兆もし捨ハ我拾はむ幸伊賀の連中乃句に是に似たるあり夫を直して此句となさんとて終に万乎が句と成けり

大としをおもへは年乃敵かな　凡兆

此句の文字意すてふとく直て予が句也信徳曰意さらにと直へし花を騒人の思ふ事切なり　去来曰抱には趣あり古人花を愛して明るを待くらし残をしみ人を恨山せに

切透へしもいまは古今能さはしめれよきは桜と云ハ卻て
年のかゞみ也といへる事あさ出になりなむ伝使なるべ
ころえハまて先師に語る先師曰さらハ伝授を知るところに
あらハさなりき後凡兆大年をと冠す先師曰謙は一日
千年のかゞみなりいはしても立くる能はれと大笑し給ひけり

一五

賽銭も用意顔なり花の森　去来

先師曰花の森とは聞なれぬ名にてなるやハ古人も森の
花とよそへ侍れ詞を細工してかゝる掛を云つくしたる世

一六

月雪や鉢たゝき名は甚之丞　越人

去来曰此は伊丹の句に似たりとて志ハしと悔やみ給ふ

とあり越人の句入集いかゞ侍らむ先師曰月雪といへる
あたり一句働見えてしかも風姿ありさしながら嫌やと
いひくるせ歌とみえ句ならずとも誹諧の俗作をまて
趣向を立俗名をはなり侍作んだ素無みえし工夫して
折もおしむとなり

きられたる夢はまことか蚤の跡　其角

去来曰其角ハ実に作者にて侍るわづかに蚤のくひつき
たる事を誰かかくはいひ盡さん先師曰しかりかれは
定家の卿なりさしてもなきことをことごとしくいひつらね
侍るときこえし評詳なるにや

をとゝ日はあの山越つ花さかり　去来

是ハ猿蓑二三年前の吟なり先師曰此句いまきく人ある
まじ一両年を待べしとなり其後杜国が徒とよし野
行脚し給ひける頃より此文に或ハよしのを花の山と
いひ或ハこれはこれはとばかりと聞えしに魂を奪れ又其
角が桜さだめぬといひし気色をとられてよし野に
発句もなかりきたゞをとゝひはあの山越つ花と日々吟じ
侍りけるとなり其後此句をかたる人もうけとりたりいかで一
両年を待るべしとはいかでその知り給ひけん吾ハ都て
あやしき事どもなり

病鴈の夜さむに落て旅ね哉　はせを

海士の屋ハ小海老にまじるいとゞ哉

猿蓑撰の時此うち一句入集すべしと也　凡兆曰病鴈ハさる事なれど小海老にまじるいとゞハ句のかけりことあたらしく誠に秀逸なりと乞ふ　去来曰小海老の句ハめづらしといへど其物を案じたる時ハ予が口にもいひてん　病鴈ハ格高く趣かすかにしていかでか爰を案じつけんと論じ　終に両句ともに入集す　其後先師曰病鴈を小海老などゝ同じごとくに論じけりと笑ひ給ひけり

岩鼻やこゝにもひとり月の客　去来

去来曰洒堂ハ此句を月の猿とすへしと申侍れと予ハ客の字猶まさりなんと申先師曰猿とハ何事そ汝此句をいかにおもひて作せられけるや去来曰明月ニ山野を吟歩し侍るに岩頭亦一人の騒客を見付たると申先師曰是にもひとり月の客と己と名のり出らんこそいくはくの風流ならめたゝ自称の句となすへし此句ハ我も珍重して笈の小文に書入けるとなん予か趣向ハ猶二三等もくたり侍りなん先師の意をもて見れハ少し狂者の感もあるにや笈の小文集ハ先師自撰の集なり名を聞ていまた書を見す草稿半にて遷化ましましたる昔時申けるを予か發句發句か

入集なし給へるやと窺ふ先師曰我門人笈の小文に入句
三句持ものも稀なり汝過分のことを願ふ事也

二

うつくまる薬の下のさむさかな　丈艸

先師難波の病床に人〻に夜伽の句をすゝめて曰今日
より我死後の句なり一字の相談を加ふへからすと也
さまさまの吟とも多く侍りけれとたゝ此句丈艸出来たりと
のたまふかゝる時はかゝる情こそ動き侍らめ興を催し
景をさくるいとまあらんやと此時にこそ思ひ知り侍る

三

下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆

此句初に冠なく先師をはしめいろいろと置侍りて

此冠に極め給ふ兆あトと答ていまだ落着ず先師曰兆汝手がらに此冠を置べし若まさる物あらば我二たび俳諧をいふべからずとなり　去来曰此五文字のよき事は誰〳〵も知り侍れど是外にあるまじとはいかで知侍らん此事他門の人聞侍らば腹いたくいくつも冠置べし其よしとおかるゝ物は又こなたにはいかほどもあるべしとおもひ侍る也

猪の床にも入るやきりぎりす　去来

此句を窺ふ時先師しばらく吟じて兎角のことなし予思ひ誤りて先師といへども帰路詩の秋興の意を

知のうへやしきつくのよしをやゝ傳へ候先師曰、むかしも
しろき雨き古人もよく知れたるぞ明ぬとて跡ふるより
山に入る馬の聲おとれ送る萩の上風とまきよめりたる和歌
優美のうへはさへ行まてかけるを俳しきる俳諧自由の
うへにたゞ日常の氣色を俳せんと更に手柄なかるべし
一句むかしろき句を皆案じぬれと兎角に詮なかる
あるべしとなり其後おもふれは句は郭公なきつるかたと
いへる後徳大寺の歌の同案にて、いよく手柄なきこと候
知れり

蘿の葉の――

何ことやらん短冊に有けり
是は何のくの句之

此句を蘆の葉の谷風に一すぢ峯まで書流したる句と云句落
よし予先師に此句を語る先師曰発句ハ汝のごとくくま〳〵
まていひ尽す物にあらすとなり支考かたはらに有て
大に感驚しはしめて発句といふ物を知侍るとて此頃
もてなし有けり予ハ其時も篤実に受用しけるにや此事
あらためもなくしらて忘侍るこそいと本意なけれ

下臥につかみわけはやいとさくら

先師路上にて語給ふ此比其角か集に此句ありいかに思ひて
か入集しけむと去来曰いとさくらの十分に咲たる形容
よくいひおほせたるにあらすや先師曰いひおほせて何かある

予らはれいそう所に能きこゝろありたしめて幾句なるは
つたなき物加ましき事とを知れり

二六

手放るゝ中に落けり朧月　去来

魯町に別るゝ時の句也先師曰此句悪しといふにはあらず功者にてたゞいひまぎらかしたる也　去来曰いかさまにさしてなき事を句上にてあやまりたる所ありしかれどもいまだ十分に解せず予が心中に一拙侍れども句上にあらはれずと見ゆ曰いかにも是ハ意到句不到也

二七

泥亀や苗代水の畦つたひ　史邦

猿蓑の撰に予語て畦つたひと書入けり先師曰畦つたひ

と侍りしと秋容風流否なり終に睡りつりして堪吟なり
ともよめり軒雲の気色をあやまりけり筆執る人のことに
おしまる句をまもりす時おろそかなる情故なりとてきけん
何しりけり

じだらくに寝れば涼しき夕哉　宗次

さるみの撰の時一句の入集を願ひて数句吟じ侍れど
とるべき句なし一夕先師の傍に侍りけるにいざくつろ
ぎ給へ我も臥なんとおほせられければ御ゆるし候へ
じだらくに居れば涼しく侍ると申先師曰
是こそ発句なれとて今の句に作りて入集せさせ給ひけり

玉棚の奥なつかしや親の顔　去来

二九　はじめハ面影のおぼろにゆかし魂祭といふ句なり此時添書ニ祭時は神いますが如しとやせむ玉棚の奥なつかしく覚ゆるよしを申侍る先師返事ニ玉祭りの意味なつかしけれまでハ言ひニ落て悪くし註ニ玉棚の奥なつかしやと侍るを何とて句になさゞるやとおほせられ給ひけり

夕すゞみ疝氣おこして帰りけり　去来

三〇　予が初学の時発句の仕やう尋ねけるに先師曰発句ハ句つよく俳意たしかに作すべしとあり試ニ此句を

賦して窺ひ侍る又是まても大笑し侍りけり

三

つかみあふ子共の長や麦畠　游刀

凡兆曰是麦畠も麻畠とも好まん去来曰麦麻に
なりてもよきなになりてもくるしからすと論す先師曰
又ふ好る好ぬは論かしかまし無用なりと制し
給へり見る人察せよ

三

いそかしや沖のしくれの真帆片帆　去来

去来曰猿蓑は新風の始なり時雨は此集の美目なるに
此句仕そこなひ侍るたゝ有明や片帆にうけて一時雨
といはゝいそかしやよりも句はなりよく心の祢はり

三

ちくなりけん去帆もそれぞれにこそあらん先師曰沖の
時雨といひても又一ふしあつてよし されど句ハなるにおとり
侍るとなり

兄弟の顔見あはすやほとゝぎす　去来

去来曰此句ハ五月廿八日曽我兄弟の互に顔見合するを知なども
よみ侍らむかし 其かし光源氏の村雨の軒端にたゝずみしを
紫式部がかきはへりける趣なりて作す先師曰曽我とのいふことハ
其まゝ一句ハまことに見おかせんと角に評も同前なりと
深川より評し許六曰此句ハ公俳りて細なりし候
去来曰今俳りて細なるすといひてんハなくもありなん

おほせぬとも評すべし　丈艸曰今時細工ハさかしく
うけ取りぬれど是ほど合点の内なるべしと大に笑ふ

　　ふ川と稲目にむかふ　檮雲

　　まつころ庵松より花の咲こぼれ　去来

先にまつすり月庵りと花見の客なとあまたひかへりと付侍るとの
先師の教へつきをうしなひさし候え又おもむきを此句をも附
なおかす先師曰いかに思ふて附出し侍るや　予曰稲雲の
のどかに機嫌よかりしを見て初に附侍れど能見ゐるに稲雲乃
まぎれいなる付しないふそりなし是をのがしてハ論なるべしと思ひ
附出し侍るといへハ先師曰やなり初の句をハ三十棒なるべし

野浜なるなを見すへしとて今は五文字にはなりたり

三五

梅にすゝめ枝乃百なり　去来

是も歳旦の賑なり先師深川にて聞て曰は梅は二月の氣色なり去来いかにおもひ誤て歳旦の賑に用ゐるとなむ

三六

船る川らか西國乃馬　彦根の句之

許六こゝろこれを見たる時此句に長をうけたり先師曰いまさらなる手柄らしき句きゝしひ侍るとぞ手柄なり長あるなへうしに手て上京の時此句何ゆゑに手帳に侍るや先師曰船の中まて馬の煩ふて来ぬは

了西國の馬とまてハよくこそしらへたる物なりと感む

三七 弓張の角さし出す月の雲　去来

去来問曰此句も弓張なるへき趣や　先師曰弓張なるへし

雲も角も弓張月をいハすハ一句きこえたれ

三八 丁雅ゝ欅より水こかしけり　凡兆

初ハ景なり凡兆曰景気の句も中々きゝ先師曰

遍へらしたれとも風韻とかくとも二句ハ過へしたれ一句

なくてもよからむ　凡兆水ハ除む

三九 （おり）ほんとぬけたる池の蓮の実

咲花をかきおとしたる椽のかくれきて　芭蕉

此前句出る時去来曰かゝる句をのかすへからすとて終刻
案し侍れど皆くるしくなし先師は附句を示し給へと侍る
許して除給へ侍る

四〇　くろみて高き樫木乃森

　咲花に小き門を出つ入つ　芭蕉

此前句出たる時去来曰此句全体樫木の森のさま成
いつまで森の事を言はんや花を附る事むつかし
と頼しと先師の附句を乞ひたれは付て見せ給ひぬ

四一　綾乃寐まきにうつる日の影

　なくなくも小き草鞋もとめかね　去来

先師曰よき上臈の旅なるへしとそ申これをきゝて野坡此句を附侍りける好春曰上臈の旅ときゝて言下に句出たり蕉門の徒の修練格別也と感す

二つにわれし雲の秋風　正秀

中連子中きりおとす月影に　去来

正秀亭の会三たりありしめに「中格子影さへかゝる月澄てと附侍るを先師かくきゝ斧正し給ひすなはちもれ其夜亭に宿す先師曰今夜初て正秀亭の会に珍客なれは発句は我なるへしと兼て覚悟すへきをつかまつるに上発句といひて好悪を忘しいひ速く出すへき事也

一 秋のかとし遊ちくくあまた汝か発句に時なくつきハ入会す
乃念むなしうしむ陽り不與のいへりなり仍て我か発句とて
出す一しとて手秋を先師の発句なりしし正秀忽
眺を賦して二つに聞へとかけし雲の気色なりを
かく斯てやうなる清書三段かりす前句のけしきを標して
未発のすなりと教すへらいふ故にて去来曰これ時に
可然に手故にてたつるの見えてとて一句作りて此哉
たゞ何の様文子さやけなるいなんと故になつめて結を
けさても侘しとやか其先師曰此句をきハいくらく故まし
あらへ发の終帝の恥を一度するうんすと思ふへしと也

四三

ふるなしに点をうゝく哉　去来

浅芽生におもしろげつく伏見哉　芭蕉

先師京より野坡方への文に此句を書出し　はせをの他者
いまだ此趣味をしらずれば　そこもと随分骨をおりまよ
ぬてのしれたる也

四四

赤人の名はつかれたり初霞　史邦

先師曰中の七文字よく付れたり　発句の長高く意味
ふくおかしけれ

四五

駒牽の木曾や出らん三日の月　去来

此やいでらん三日月の頃といふ一句をきりくるく木曾や出らん

三日の月といふ事　先師曰此句を等閑に人の見る句

なりとおもふあり　猶つゝし

上終

去來抄新講

上（先師評）

先師評

外人の評有といへとも先師の一言ましるものは此部に記也

一　蓬萊にきかはや伊勢のはつ便　芭蕉

深川よりの文に此句さま〳〵の評あり汝いかゝ聞侍るやとなり去來曰都又は古郷の便ともあらす伊勢と侍るは元日の式の今やうならぬに神代をおもひいてゝたより聞はやと道祖神のはや胸中をさはかし給ふとこそ承侍れと申先師返事に汝か聞く處にたかはす今日神のかう〳〵しきあたりをおもひ出て慈鎭和尙の詞にたより初の一字を吟し清淨のうるはしきを蓬萊に對して結ひたる也と

【校異】

久①きかはや―聞はや。伊勢―いせ。はつ便―初たより。　②深川よりの―深川ゟ之。さま〳〵の評あり―さま〳〵の評有。

となり—と也。　③都又は古郷—都古郷。伊勢—いせ。今やう—今様。　④おもひいてゝ—おもひ出てて。たより—便。⑤給ふとこそ—奉るとこそ。承侍れと申—承り侍ると申。先師返事に—先師曰。汝か聞く處—汝聞處。　⑥から〳〵しき—から〳〵敷。　⑦吟し清淨のうるはしきを蓬萊に對して結ひたる也と—吟し出し侍る斗なりと也。「汝聞處にたかはす云々」以下ノ部分ニ、次ノ如ク傍註ガ附サレテアル。「返事に曰いせに知人音信て便りうれしきと慈鎭和尙のよみ侍る便りの一字の出處にて聊哥のこゝろにたよらす汝か聞く淸淨のうるわし神祇のから〳〵しきあたりを蓬萊に對して結ひたるを也汝か聞る所珍重ト也。」

帝①きかはや—聞はや。はつ便—初便。芭蕉—はせを。　②さま〳〵の評あり—さま〳〵評あり。となり—と也。　③都又は古郷—都古郷。今やう—今様。　④おもひいてゝ—思ひ出て。たより—便。さはかし—はかし。　⑤給ふとこそ—奉るとこそ。承侍れと申—承り侍ると申。先師返事に—先師曰。汝か聞處—汝聞所。　⑥から〳〵しき—から〳〵敷。おもひ—思ひ。　⑦吟し清淨のうるはしきを蓬萊に對して結ひたる也と—吟し出し侍る也と也。「汝聞所にたかはす云々」以下ノ部分ニ、次ノ如キ傍註ガ附サレテアル。「返事に伊勢に知る人音信て便嬉しきと慈鎭和尙のよみ侍る便の一字の出所にて聊音の心にたよらす汝か聞淸淨のうるはしく神祇のから〳〵しきを蓬萊に對して結ひたるなり汝か聞所珍重也。」

落①きかはや—聞かはや。はつ便—初便り。　③都又は古郷—都て故郷。今やう—今様。　④おもひいてゝ—思ひ出して。たより—便り。聞はや—聞かはや。はや胸中を—早や胸中を。さはかし—騒かし。　⑤給ふとこそ—奉るとこそ。承侍れと申—承り侍れと申す。汝か聞く處にたかはす今日神のから〳〵しきあたりをおもひ出て慈鎭和尙の詞にたより初の一字を吟し淸淨のうるはしきを蓬萊に對して結ひたる也と—伊勢に知る人音信て便り嬉しきと慈鎭和尙の詠み給へる便の一字の出所にて脚音の心にたよらす淸淨のうるはしく神祇のから〳〵敷あたりを蓬萊に對して結ひたる迄なり汝か聞ける處珍重なり今日神の神

々しきあたりを思出て慈鎮和尙の詞にたより初の一字を吟し出し侍るはかりなり。

【青】①きかはや—聞はや。芭蕉—はせを。此ノ句ノ頭ニ「㊀炭俵」トアル。 ②此句—この句。さま〳〵の評あり—さま〳〵評あり。 ③都又は古鄕—都古鄕。 ④おもひいてゝ—思ひ出て。たより—便。さはかし—さわかし。 ⑤給ふとこそ—たまふとこそ。承侍れと申—承り侍ると申。汝か聞く處にたかはす今日神のから〳〵しきあたりをおもひ出て慈鎮和尙の詞にたより初の一字を吟し清淨のうるはしきを蓬萊に對して結ひたる也と—伊勢のしる人音信て便られしきと 慈鎮和尙のよみ侍る便りの一字の出所にて脚音の心にたよらす 汝か聞清淨のうるはしく神祇のから〳〵しきあたりを蓬萊に對して結たるなり汝か聞所珍重なり。

【藝】①きかはや—聞はや。はつ便—初便り。芭蕉—はせを。此ノ句ノ頭ニ「㊀炭俵」トアル。 ②さま〳〵の評あり—さま〳〵評あり。去來曰—去來云。 ③都又は古鄕—都古鄕。便—便り。 ④おもひいてゝ—思ひ出て。たより—便。はや胸中を—胸中を。 ⑤給ふとこそ—玉ふと社。承侍れと申—承り侍ると申。汝か聞く處にたかはす今日神のから〳〵しきあたりをおもひ出て慈鎮和尙の詞にたより初の一字を吟し清淨のうるは しきを蓬萊に對して結ひたる也と—伊勢のしる人音信て 便嬉しきと慈鎮和尙のよみ侍る便の一字の出所にて 脚音の心にたよらす汝か聞清淨のうるはしき 神祇のから〳〵敷あたりを蓬萊に對して結たるなり汝か聞所珍重なり。

【架】①はつ便—初便り。 ③文に—ふみに。此句—この句。 ③便—たより。 ④おもひいてゝ—思ひいてゝ。たより—便り。

訓讀

蓬萊にきかばや伊勢のはつ便り　芭蕉

深川よりの文に、此の句さま〴〵の評あり。汝いかゞ聞侍るやとなり。去來曰はく、都又は故郷の便りともあらず。伊勢と侍るは、元日の式の今やうならぬに、神代をおもひいでて、たより聞かばやと、道祖神のはや胸中をさわがし給ふとこそ承り侍れと申す。先師返事に、汝が聞く處にたがはず、今日、神のかう〴〵しきあたりをおもひ出でて、慈鎮和尚の詞にたより、初の一字を吟じ、清浄のうるはしきを、蓬萊に對して結びたる也と。

口譯

「蓬萊にきかばや伊勢のはつ便り　芭蕉」——深川の芭蕉庵からのお手紙に、この句はいろ〳〵の評があるが、お前はどう考へるか、とのことでございました。わたくしはそれにお答へして、「都の初便りとも、古郷の初便りともなくて、伊勢の初便りとありますのは、元旦の儀式の今様でないために、從つて神代のことなどが思ひ出され、さてこそ、とりわけて伊勢の初便りを聞きたい、と言はれたのでございませう。そして、伊勢をお思ひやりになる心の底には、旅のあこがれの烈しさが感じられます。」と、申しました。師翁の御返事には、「お前の考へる通りです。今日、元旦に當つて、蓬萊のほとりに坐し、伊勢の神垣の神々しさを聯想して、慈鎮和尚の歌の詞にすがり、それに初の一字を吟じ出して『伊勢の初便り』とし、その清くけがれのない神々しさを、蓬萊に取合はせて一句としたのです。」とのことでございました。

①**蓬萊**　蓬萊飾。新年の飾物。三方の臺に、白米、熨鮑、勝栗、昆布、海老、穗俵などを盛つた物。これは家々の例があるが、伊勢海老などを盛る事もある。然し、それ故に伊勢の初便りと言うたのではない。又、蓬萊には、略式の掛蓬萊だの、昔堂上家の宴に用ひたといふ組蓬萊などもあるが、この場合それらでもない。なほ蓬萊の原意は、神仙思想に基づく支那の仙山の名で、方丈・瀛州と合せて、三神山とされ、この三神山が東海中にあつて、不老不死の仙人が、そこに棲んでゐたとされた。

①**伊勢**　東海道の一國、修して勢州といひ、今の三重縣の主要部分である。此國は伊勢大廟の所在地として古來著はれてゐる。芭蕉が伊勢參宮した時の句に、「何の木の花とはしらず匂哉」といふ作がある。　①**はつ便**　新年になつてから初めてのおとづれ。　①**芭蕉**　伊賀上野の藩士である。松尾氏、通稱は甚七郎。初め宗房（寛文時代）、江戸に下つて桃青（延寶時代）、後に芭蕉（元祿時代）と號した。釣月軒（貝おほひ）、桃翁（田舍句合）、栩々齋（同）、華桃園（常盤屋句合）、天々軒（春二百韻）、芭蕉庵（梅の牛兩吟百韻）、芭蕉洞（みなし栗）、鳳尾（同）、風羅坊（卯辰紀行）、杖錢子（俳諧曾我）素宣（杉風祕記）の別號がある。また尊稱して、翁とよぶ（武藏曲序）。初め上野の城代藤堂家に仕へ、主君蟬吟に導かれて、季吟の門に入つた。寬文六年蟬吟の歿後、世を厭ひ、致仕して故鄕を出た。江戸に來て江戸檀林の徒と交り、しばらくその風を趁つたが、悟るところがあつて新風を興し、遂に蕉風の俳諧を大成した。佛頂禪師に參して、禪に心膽を練り、杜子美の沈、西行の寂を慕ひ、寂莫の風韻を觀じた。常に旅を好んで一所に定住せず、深川の芭蕉庵・石山の幻住庵にやゝ永く杖を止めたに過ぎない。元祿七年十月十二日、大阪花屋の客舍に歿、年五十一。近江粟津義仲寺に葬る。　②**深川よりの文**　深川から來た手紙。深川は、江戸深川の芭蕉庵の意。即ち、そこに住んでゐる芭蕉からの手紙。　②**去來**　肥前長崎の儒醫向井元升の二男で、名は兼時、又は義焉、通稱は平次郎といふ。魯町・牡年（暮年）・千子（ちね）の兄で、卯七はその甥である。後、次郎太夫、義堂。闌亭・落柿舍の號が

ある。叔父久米氏に養はれたが、武を以て身を立つるを欲せず、父に從つて洛に出で、嵯峨の小倉山の麓に別墅を結んで落柿舍と號した。退隱してからは深く芭蕉を信頼し、篤實の聞えがあり、蕉門十哲の一人で、又西國三十三箇國の俳諧奉行と稱された。後落柿舍を毀ち、鴨東聖護院村に家を營み、爰に妾(可南)を置いて一女を生むと傳へてゐる。凡兆と共に『猿蓑集』を撰び、又芭蕉の難波の病床では、群弟子を統制して、師翁を安らかに遷化させた。その後は「我家の俳諧に遊ぶべし。世の理窟をいふべからず」(落柿舍制札)といつて、師の遺教を守つて、世に出なかつた。寶永元年九月十日歿、年五十四。洛東、鈴聲山眞如堂に葬る。著書には、『猿蓑』・『去來抄』・『渡り鳥』・『湖東問答』・『篇突集返答』・『蓬萊島』・『旅寢論』・『伊勢紀行』などがある。　②**都**　中央政府、即ち皇居の所在地のことで、當時は京都をさす。　②**古郷**　郷里、郷國。こゝは芭蕉にとつてのことで、伊賀をさす。　③**今やう**　當世風。　④**道祖神の云々**　道祖神は道路を護り、また行旅の道中を守る神。道端に、多くは道の岐れ目とか、曲り角などに、石を建てゝ、そのおもてに道祖神と刻んであつたりする。クナド(勿來處)の神、フナト(勿經處)の神、サヘ又はサイ(塞)の神、峠(手向)の神とも呼び、八衢彥八衢姫を祀り、俗には猿田彥命を祀つたものといふ。支那では、道神とも祖神とも呼ぶ。後世には、このサイ(塞)の神がサイ(幸)の神、即ち陰陽神と混同されて、男女の仲らひを護る神とも附會されるやうになつた。「はや胸中をさはがし」とは、その神が早くも芭蕉の胸を騷がしてゐるといふことで『奥の細道』に「道祖神のまねきにあひ」とあるのと同樣の使用法に據つたもの。旅に出たくてたまらぬといふ位の意。　④**先師**　亡き師。芭蕉のこと。　⑤**慈鎭和尚の詞**　慈鎭は天台の座主、初名道快、次に慈圓と曰ふ。關白藤原忠通の子。嘉祿元年九月二十四日入寂。著書に『愚管抄』、及び和歌を收錄した『拾玉集』などがある。中世の歌人として、その名は普く、『兼載雜談』に慈鎭・西行は歌よみ、その他の人は歌つくりであると、定家が批評した由など傳へられてゐる。和尚の訓方は、禪宗ではヲシヤウ、天台宗ではクワシヤウであるが、普通の僧侶に對してならば、芭蕉自身も禪宗であるしするから、ヲシヤウと訓む

べきであるが、こゝは特にクワシヤウと訓んでおく。その詞とは、『拾玉集』中の歌に「この春は伊勢に知る人おとづれて便うれしき花柑子かな」とあるのを指す。　**○清淨**　セイジヤウ、又、シヤウジヤウ。きよくて、けがれのないこと。又、邪念私心のないこと。

参考　この「蓬萊に聞ばや」の句の出典は『炭俵』、なほ『伊達衣』『篇突』『皮籠摺』『泊船集』『陸奥衢』『卯花山』『宇陀法師』『木葉漬』『伊勢便』『俳諧寂栞』等にも見えてゐる。但し、『木葉漬』には「元祿七甲戌春歳旦」と前書がある。

この句の制作年代に關しては、『篇突』には、「いづれの春にやおぼえず」と前書があるが、『木葉漬』の前書に徴し、又『ふたつの文』所載の用和宛の書翰などから、元祿七年の作と考へられる。序でに、その書翰の全文を擧げれば次の如くである。

口上

先刻は爲二御慶一御出早々忝候。御無事にて御越年目出度存候。此方もそく才にて、又此春にもうつり申候。さては歳旦之ほ句、あまりよろしくも無レ之候へ共、御尋にまかせ申入候。

蓬萊に聞ばや伊勢の初便

右之句にて御ざ候。さてよろしくも無レ之候。貴丈ほ句御書置候、歸り見申候。おどろき申候。何事も

永日〳〵。以上。

正八日　　　　　　　　ばせを

用和丈

元祿七年といへば、その五月十一日には、江戸に留ること二箇年餘にして、芭蕉は最後の行脚に旅立ち、同年十月十二日、浪花の客舍で歿したのであるから、この句は、芭蕉にとつて、歳旦の吟詠としては、最後の年のものである。

この「蓬萊に聞ばや」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、まづ『去來文』には、

翁の當歳旦に

蓬萊に聞ばや伊勢のはつ便

慈鎭和尙の、いせにしる人おとづれてうれしきの此いせの便りの出所、蓬萊にて先、初の一字、翁の魂奇妙と被レ存候。

『十論爲辨抄』には、

初便は、作者の趣意は、はかりがたけれど、ほのかに名人の句法ありて、蓬萊の五もじには人の及ばぬ所あり。（略）此句は花柑子の歌にすがりて、いせの初便と結びたれば、誰しも元日にと置べきを、蓬萊の共あたりに書通の姿をよせたらん。例の意を破れども姿を破らずといふ句法なり。風雅に姿の大事を

しらねば、意を破る事あたはず。

『梟日記』には、

金くるゝ小町が手より花の春

蓬萊にきかばや伊勢のはつたより

此歳旦ふたつ出して、句ぬししらぬ先の評をきかむといふ。西華坊曰、花の春の句は、二十年皆をりて俳諧をまぎらかしたる句也。初便の句の好悪はいふべからず。蓬萊の五もじ、よのつねならず、といふに、人々なをあざむきて、歳旦に蓬萊といふ五文字何かかたからん。西華坊曰、人は元日とをくべし。蓬萊にあらざれば、この句に形容なしとおもへる、是人の及まじき工夫なり。かゝる風情と風姿をしらんに、俳諧にわたくしなき事、さる事なるべし。

『俳諧或問』には、

蓬萊に聞ばや伊勢の初たより

此句は誰しも元日にと置べきを、蓬萊の其あたりに書通の姿を寄せたるよし。按ずるに、元日にと置けば書をうつらず。蓬萊にと有るより、根松藪柑子の姿までも明らかならん。されど蕉翁の曰、景氣の句世間容易にする、以の外の事なり。大事の物なり。連歌に、景曲の句初心眞似よきゆゑ、深くいましめり。俳諧は連歌程はいまず。惣別景氣の句は皆古し。一句の曲にして難あるゆゑ、强ていましめ置きたるなり。

『俳諧寂栞』には、

去來夜話曰、俳諧は物を憐む事を要領とす。物を憐むとは草木の霜にあひ、鳥獸の寒暑に苦しむ也。されば道に臥したる乞兒にむかひて、きたなしとおもふ念おこらば、一句にむすぶ事あたはじ。不便と思ふこゝろは、則ち風雅の一句なり。さりやとて句ごとに、感情をのみ好むとにはあらず。例のよく萬物に應じて哀樂ともに歎ずべし。詩に咨嗟咏歎あり、和歌に餘情あり、俳諧わづかに十七言、まして歎ずる事を先にすべし。且云ひ忘るまじきは、風姿風情也。俗にくだらず、雅俗に遊ぶべし。

蓬 萊 に 聞 ば や 伊 勢 の は つ 便

元 日 や 何 に た と へ ん 朝 ぼ ら け 　忠知

日 の 春 を さ す が に 鶴 の 歩 み 哉 　其角

かくの如く、祝言のやうにちから入て歎ずべし。

と見え、また『幻住庵俳諧有也無也關』には、

響

蓬 萊 に 聞 ば や 伊 勢 の 初 便 り

傳云、年の初めのめでたきに、叉髭長き伊勢海老と顯はさんよりは、上に蓬萊と置き、下に伊勢の初便りとつゞりて、海老の姿、玄妙に分明也。是響也。

とある。

次に、この章で問題になつてゐるのは、古歌を踏襲することの可否、及びその方法論である。それに關しては、なほ古説が頗る多く、例へば『花實集』には、

其角曰、古事・古歌を取るには一段すり上て作すべし。たとへば、蛤よりは石花を賣れかし、といふ西行の歌を取て、

石花よりは海苔をば老の賣りもせで

と先師の作あり。本哥は同じ生物を賣るとも、石花を賣、石花は看經の二字に叶ふといふを、先師は生物を賣らんより海苔を賣れ、海苔は法(のり)にかなふと、一段すり上て作り給ふ也。老の字、力あり。大概のごとし。

と說き『篇突』には、

古事・古歌のとりやうの事、むかし・中ごろ・當世のかはりあるべし。むかしの古事を用ひたるは、直にして作意なし。中比は無理を云て、大にはたらき、大きに笑へり。今やうは古事・古歌を共まゝたて置、少もからず、已が作意をならべて盡す。此さかひをしらぬ人は、多く中古の作意に落る。よく工夫すべし。

名將の橋のそり見る扇かな

と云句せし人あり。此句、其名將の作にして、句主の手柄は少もなし。

と論ぜられ『宇陀法師』には、

古事・古實・古物語・古歌等の詞をとりて發句する事、上手のみにかぎらず。さまでなき作者もよく取廻してする人もある也。又上手に不得手も多し。一様に心得べからず。取様品々有り。

と述べられ、『旅寐論』には、

すべて古事・古歌を取には朧に取法あり、そのまゝ立置てもとる法あり。さまざまとる法ありといへども、皆前をすりあげて作す。

とあつて、前掲の「名將の」の句等を出してゐる。更に、この問題を詳述したものには、次の『三冊子』の說がある。

師の句をあげて、そのより所をいさゝか顯す。

何の木の花とはしらず匂ひかな

此句は本歌也。西行、何事のおはしますかはしらねどもかたじけなさの涙こぼるゝ、とあるを俤にして云出せる句なるべし。

有明の三十日にちかし もちの音

此句は兼好、有とだに人にしられぬ身のほどやみそかにちかき有明の月、とある本歌を餘情にしての作なるべし。

明の月 高水に星も旅寢や岩のうへ

此句は小町が、石の上に旅寢をすればいとさむし苔の衣を我にかさなん、と云心を取ての句なるべし。

ほとゝぎすなくや五尺のあやめぐさ

此句は、ほとゝぎすなくや五月のあやめ草、といふ歌（註。【古今和歌集】に「郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀をするかな　讀人しらず」とある。）の詞を取ての句なるべし。

花のうへこぐとよみ給ひける古きさくらも、いまだ蚶満寺のしりへに殘りて、影浪を浸せる夕ばへ、いと涼しければ

夕ばれやさくらに涼む浪の華

此句は古歌（註。西行の歌。）を前書にして、其心を見せる作なるべし。

本歌を用る事、新式に云、新古今已來の作者を用べからずと也。八代集は古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、是也。後土御門依勅新勅撰、續後撰二代を加へて、十代集を本歌に取る。又、堀川兩度の作者迄の歌は、十代の外の集たりとも、たとひ集にいらぬ歌也とも、作者の吟味有之かと云也。又、新式にいはく、人のあまねくしらざる歌をば、付合に是を好むべからず。事により證歌には引用ゆべしと也。

本歌と證歌と差別あり。本歌取といふは、古歌の詞を取合て付るをいふ。證歌とは聊か違ひ有り。或は一句餘情、又、名所續合たる物を付るをいふ也。證歌はいづれの集にても可有事也。

また、その方法論としては、『青根が峯』に、

古歌の詞をかりて句にしたる事あり。しかれどもかつて其歌をしたごゝろにふまへて、仕たるにはあらず。自然に此詞あるゆへ、きり入たる斗なり。下心ありてとり合たるなど聞かれんは、めいわくなる事成るべし。予が句に、

初 雪 や 拂 ひ も あ へ ず か い つ ぶ り

此句、はらひもあへず霜や置らん、のこゝろ（註。〔後撰和歌集〕に「夜を寒みね覺てきけばをしぞ鳴く拂もあへず霜やおくらん 讀人しらず」とある。）すこしもなし。たゞ拂ひもあへずなり。はつ雪に鳰鳥、よきとり合もの也。中の七文字、明けて置きがたし。一句成就のため、かりにいれたる詞つゞきなり。この詞なくては、もちゆる事なし。

とある。而して、この論は更に押進めてゆけば、發句は取合せて作るものであるか否かといふ點まで、論及せらるべきであらう。また『去來抄』中にも、

先師曰、發句は物をとり合すれば出來る物也。夫をよく取合するを上手といひ、あしきを下手といふなり。

許六曰、發句は取合て作する時は、句多く出來るものなり。初學の輩これをおもふべし。功者に及では取合せ不取合せの論にはあらず。

といふ一章が「修行教」の中に見えてゐるが、その時になほ詳述することとして、こゝには、その他の代表的な說二三を、次に紹介して置くに止める。まづ『旅寐論』には、

先師の曰、發句は取合する物也。二つとり合て、能取合するを上手といへりと、許六の說にみえたり。

しからば蕉門の教、一物の上にて發句はなきものに侍るや。
答曰、これ又先師一かたの教也。膳所の俳諧、初め此旨を聞て、爰になづむもの多し。我洒堂と常に爭ふ。その後、洒堂、武府にまかりけるに、先師告て曰、汝が發句みな物二つ三つをとり組てのみ句をなす。發句は唯、金をうち延べたるやうに作すべしと教玉へり。歸京の後、我に語りて前非を悔む。すべて先師の門人に示し給ふを一方に聞くべからず。人々の吟情・口質によりてさま〴〵有り。

と見え『宇陀法師』には、

師說云、物別發句は取合物と知るべし。題の中より出る事は、よき事はたま〳〵にて、皆ふるしと申されける。此胸よく請繼て、江東の俳諧は常に取合第一とす。同門の中にも、江東は道具過ぎたりと難ずる人も有るよし。先師の句、十に七八は必ず取合にて道具也。難ずる人取合樣を慥にしらざる故に此難有り。道具でする事得物ならば、幾度も道具でよき句せらるべし。不得手の格にて惡しき句して何の益かあらん。たとへば徒鑓づかひに、十文字を得つかはぬと難じたると似たり。

とあり、又『青根が峯』には、「自得發明辨」の條下に、

師の云、發句は畢竟、取合せ物と思ひ侍るべし。二つ取合てよし。とりあはすを上手と云也といへり。難有教也。これ程よき教あるに、とり合する人稀也。師は上手にて、其儘とりはやし給ふ。予はとりはやす詞はよくしりたり。案じ侍る時は、如何にもよくとりはやし侍る也。是、取はやす詞をしりたる故也。平句猶しか也。炭俵・別座敷の俳諧、專ら新しみといふは、此取はやす詞の事也。此詞を知らぬ人

は、遺經の俳諧にて通じがたからん。予此頃梅が香の取合に、淺黃椀とり合もの也と案じ出して、中の七文字色々に置どもすはらず。

梅が香や精進なますにあさぎわん　是にてもなし

梅が香やすへ並べたる淺黃椀　是にてもなし

梅が香や何所ともなしに淺黃椀　これにてもなし

など色々において見れども、道具、取合物よくて、發句にならざるは、是中へ入べき言葉、慥に天地の間にある故也。かれこれと尋る中に、

梅が香や客の鼻には淺黃椀

とすゑて、此春の梅の句となせり。發句は取合ものといひけるは、たとへば日月の光りに、水晶をもつて影を移す時は、天火天水を得るごとし。發句せんと思ふとも、案じずしては出づべからず。日月斗を案じたるとも、天火天水を得る事有るべからず。外より水晶を求めて、よくとりはやす故に、天水を得たるが如し。水晶ありとも、よくとりはやす事をしらずば、發句に成就しがたし。

木がくれて茶摘みも聞やほとゝぎす

是時鳥に茶つみ、季と季とのとり合といへども、木がくれてと、とりはやし給ふ故に名句となれり。

と述べられてある。

又「蓬萊に聞ばや」の句は言ふ迄もなく、「歲旦の句であるが、『篇突』にはこの句等を掲げて、歲旦の句の

作法を次の如く說いてゐる。

當時、歲旦格式しれる人稀也。次第に師說もうとく成行社（こそ）、いと口惜しけれ。只、初春の季を入るまでにて、曾て歲旦にならぬ句のみ多し。歲旦の字意をよく工夫し侍らば、仕損じは有るまじ。歲旦の句二つ三つしるし出すやからも有り。又、歲旦帳に、子の日・二日・三日など題して出す人もあり。師說、如何きゝ置侍るや覺束なし。遠國の歲旦などまぜて出すも、遠慮あり度き事か。

なほ「理屈」といふことに就いて、『續五論』には、次の如き記述がある。

いにしへの俳諧は風情ありて風姿なし。それも風情のみならば慈鎭・西行の歌のまことにもかなひ侍らんに、風情わづかに動きぬれば理となり、その理きはまりて後を屈といふ。

さて、慈鎭の歌は『拾玉和歌集』所收の、

このたびは伊勢に知る人音づれて便りうれしき花柑子かな

の詠をさすことは前述した如くである。『句選年考』や『七部集大鏡』にはこの形で傳へられてゐるが、『桃靑翁句彙』等には「このほどは云々」「たより色ある云々」とも誤つてある。又、慈鎭のこの歌にすがつた附合として、貞德の『牛飼』に、

花柑子をぞ宮笥（みやげ）にはとる

しる人がいつしか伊勢へ參られて

とあるのが知られてゐる。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○蓬萊に云々。

拾玉和歌集に、此度は伊勢の知る人おとづれて便りうれしき花柑子かな、慈鎭和尚の詠也。支考曰、蓬萊に對して狀通の姿を寄せたり。按ずるに、蓬萊の傍に、狀通の有りと見る事覺つかなし。聞ばやとねがひたるのみなるべし。

と見えてゐる。

二　からさきの松は花より朧にて　芭蕉 ①

或人にて留りの難あらんやと云其角答曰にては哉にかよふゆゑ哉留 ②
の發句ににて留の第三を嫌ふ哉といへは句切迫れはにてとは侍ると ③
なり呂丸曰にて留の事は其角か解あり又是は第三の句なりいかに發 ④
句とはなしたまふや去來曰是は卽興感偶にて發句なる事疑なし第三 ⑤
は句案に渡るもし句案にわたらは第三等にくたらん先師重て曰其角 ⑥

去來か辨皆理窟なり我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと　⑦ ⑧

校異

久①からさきー辛崎。　②或人ー伏見の作者。にて留りーにて留。難あらんやと云ー難有。其角答曰ー其角曰。にては哉にーにては哉に。かよふゆゑーかよふこの故。哉留の發句ー哉とめのほ句。　③にて留ーにて留。哉ー哉。句切迫れはー句切迫なれは。にてとはーにてとは。侍るとなりー侍ると也。　④にて留ーにて留。解ありー解有。是はー此は。句なりー句也。いかにーいかて。發句とはーほ句とは。　⑤たまふやー玉ふや。發句なる事ーほ句たる事。疑なしーうたかひなし。　⑥わたらはー渡らは。第三等ー第二等。其角去來ー去來。　⑦理窟なりー理屈なり。面白かりしーおもしろかりし。のみなりとーのみト也。

帝①からさきー辛崎。朧ーおほろ。芭蕉ーはせを。　②或人ー伏見の作者。にて留りーにて留。難あらんやと云ー難あり。其角答曰ー其角曰。にては哉にーにては哉に。かよふゆゑーかよふ此故に。　③にて留ーにて留。哉ー哉。句切迫れはー句切迫くなれは。にてとはーにてとは。侍るとなりー侍ると也。　④にて留ーにて留。是はー此は。句なりー句也。いかにーいかて。發句とはーほくとは。　⑤たまふやー玉ふや。發句なる事ー發句たる事。疑なしー疑ひなし。　⑥もしー若。わたらはー渡らは。第三等ー第二等。くたらんーくた覽。先師重て曰ー先師重ねて曰。　⑦皆ーみな。理窟なりー理屈也。面白かりしーおもしろかりし。のみなりとーのみとなり。

落①からさきー唐崎。　②或人ー伏見の作者。にて留りーにて留。難あらんやと云ー難あり。其角答曰ー其角曰。にては哉に

ーにては哉に。かよふゆゑー通ふ是故に。　③にて留ーにて留。哉ー哉。句切迫れはー句切過れは。にてとはーにてとは。侍るとなりー侍ることとなり。　④にて留ーにて留。いかにーいかて。　⑤たまふやー給ふや。發句なる事ー發句たゝこと。疑なしー疑ひなし。　⑥渡るーわたる。もしー若し。わたらはー至らは。くたらんー下らん。先師重て曰ー先師曰。其角去來ー其來。　⑦理窟なりー理屈なり。たゝー只。のみなりとーのみとなり。

【靑】①からさきーから崎。花ーはな。朧ーおほろ。芭蕉ーはせを。此ノ句ノ頭ニ「㊀雜談集」トアル。　②或人ー伏見の作者。にて留りーにて留。難あらんやと云ー難あり。其角答曰ー其角曰。にては哉にーにてはかなに。かよふゆゑーかよふこの故に。③にて留ーにて留。哉ー哉。句切迫れはー句迫（せハ）しくなれは。にてとはーにてとは。侍るとなりー侍るなり。　④にて留ーにて留。解ありー解有。　⑤たまふやー給ふや。發句なる事ー發句たる事。疑なしーうたかひなし。　⑥渡るーわたる。もしー若。第三等ー第二等。其角去來ー其去。　⑦皆ーみな。理窟なりー理屈也。面白かりしーおもしろかりし。のみなりとーのみと也。

【贄】①からさきー辛崎。朧ーおほろ。芭蕉ーはせを。此ノ句ノ頭ニ「㊀雜談集」トアル。　②或人ー伏見の作者。にて留りーにて留。難あらんやと云ー難あり。其角答曰ー其角曰。にては哉にーにては哉に。かよふゆゑーかよふ此故に。　③發句にー發句。にて留ーにて留。哉ー哉。句切迫れはー句返しなれは。にてとはーにてとは。侍るとなりー侍る也。　④にて留ーにて留。解ありー解有。　⑤たまふやー給ふや。發句なる事ー發句たる事。　⑥もしー若。わたらはー渡らは。第三等ー第二等。其角去來ー其去。　⑦理窟なりー理屈なり。面白かりしーおもしろかりし。のみなりとーのみと也此說再吟スルニ初テ發句ト第三トノ境ヲ思ヒアタリケリ。

【巽】③侍るとなりー侍ると也。　④句なりー句也。　⑤たまふやー給ふや。　⑦理窟なりー理屈也。のみなりとーのみ也と。

訓読

からさきの松は花より朧にて　　芭蕉

或人、にて留りの難あらんやと云ふ。其角答へて曰はく、にては哉にかよふゆゑ、哉留の發句に、にて留の第三を嫌ふ。哉といへば句切迫れば、にてとは侍るとなり。呂丸曰はく、にて留の事は其角が解あり。又是は第三の句なり。いかに發句とはなしたまふや。去來曰はく、是は即興感偶にて、發句なる事疑ひなし。第三は句案に渡る。もし句案にわたらば、第三等にくだらん。先師重ねて曰はく、其角・去來が辯、皆理窟なり。我はたゞ、花より松の朧にて面白かりしのみなりと。

口譯

「からさきの松は花より朧にて　芭蕉」――「この句は『朧にて』と、所謂『にて留め』となつてゐるのが、瑕なのではありますまいか。」と、或る人が云ひました。其角はそれに答へて「『にて』は『かな』に通じるため、連句では『かな留め』の發句に『にて留め』の第三を附けることを嫌ひます。然し、この句の場合は『朧かな』としたのでは、句切が迫るので、詠嘆の心持をふつくりと殘すために『朧にて』と置かれたのです。」と、申しました。呂丸が之を聞いて「『にて留め』の事は、なるほど其角が解かれた通りです。然しそれならば、この句は連句の第三の形といふことになりませう。それを何故發句となされたのでせうか。」と、尋ねました。わたくしはそ

れに答へて、「この句は卽景の感興を詠はれたもので、疑ひもなく發句であります。連句の第三ならば、もつと作意が殘つてゐる筈です。單に『にて留め』だからと云うて、連句の第三と定めることは出來ますまい。もし內容から見て、それらしい作意が窺はれる時に、始めて連句の第三とすべきでございませう。」と、申しました。かうした議論をお聞きになつてから、更に師翁の仰せには、「其角や去來の辨明は、いづれも理窟です。わたくしは、そんな理窟ではなしに、たゞ花よりも松が朧にて面白かつたばかりです。」とのことでございました。

語釋

① **からさき**　唐崎、又、韓崎・辛崎等とも書く。近江大津の北、坂本村の大字。琵琶湖に臨み、「唐崎の松」と呼ばれる老松は、近江八景の一に數へられたが、近年舊樹は枯れてしまつた。尙「唐崎の松」に就いては、馬琴の『羇旅漫筆』に次の如く見えてゐる。「から崎の松は、北より南にさす枝凡三十間ばかり。東より西にいたり二十間餘。みきは三かゝへにあまり、木の丈け高からず。まん丸に茂生す。是亦天下の名木。實に一奇觀といふべし。傳に云、から崎の松かれたりしを、明智光秀植かへたりし時、わが外にたれかうへけん一つ松こゝろしてふけ志賀のうら風。その後これも枯れしかば、嘯子またうへらる。これも又かれて、今の松は大坂加番の諸侯の某氏うへられし所なりといふ。松のめぐりの岸に石垣をしていと嚴重なり。近年松枝しだいに垂茂するを以て石垣をつき出すこと度々なりといふ。是みな公儀御入用にて修理し給ふ。松の前西に辛崎明神の社あり、小社なり。或人の云、前の說こと〴〵く非なり。から崎の松は已に四百年におよぶか、そのこと叡山の記錄にありといふ。いかさま木だちのさま百年來のものにはあらず。傳記なを考ふべし。」　① **朧**　春の夜のほのかな薄曇り。　② **難**　批難すべき所。瑕。　⑶ **其角**　寬文元年、江戸堀江町に生る。父は竹下氏、母の姓を冐して榎本氏と呼ぶ。通稱は源助、源藏、八十八、

又は平助といふ。草刈三越に醫を學び、服部寛齋に儒學を受け、佐々木玄龍に書道を學び、英一蝶に畫を問ひ、鎌倉圓覺寺の大顚和尚に禪を修した。俳諧は、『五元集』に「延寶のはじめ桃青門に入しより」とあるが、十四五歳のころ芭蕉の許に入門したらしい。初號を螺子と呼び、螺舍、文合庵、雷柱子、狂雷堂、狂而堂、六藏庵　善哉庵なども號した。後易文に「晉子其角こ」とあるのに由つて、晉子其角と名告り、姓を寶井と稱し、米元章の硯を得て、寶晉齋と號した。蕉門随一の高弟として、聲望は俳門を壓し、專ら俳諧を以て生業とした。西鶴でさへ、『大矢數』の俳諧の後見を乞うた程で、貞門檀林の俳人にまで畏敬された。師の歿後は自ら一派をなし、江戸座と唱へた。『鳥山彥』に「元祿の末に、晉子其角、洒落俳諧といふ付合の一體を起す」とあるのがこれである。寶永四年二月三十日歿、年四十七。芝二本榎上行寺に葬る。著書には『虚栗』・『續虚栗』・『田舍句合』・『蠧集』・『新山家』・『花摘』・『いつを昔』・『雜談集』・『萩の露』・『枯尾花』・『句兄弟』・『若葉合』・『裏若葉』・『錦繡緞』・『三上吟』・『焦尾琴』・『誰が家』・『新二百韻』・『類柑子』・『新三百韻』・『五元集』などがある。　③**第三**　連句の用語。發句から第三句目の附句をいふ。即ち、發句（一句目）・脇（二句目）・第三（三句目）となる。　③**句切**　一句の切目。　④**呂丸**　出羽羽黑の鄉士である。圖師氏（又は圖司氏）、佐吉と稱し、一に露丸、凋柏堂の號がある。芭蕉の『奧の細道』の行脚の時に、蕉門に入つた。後江戸に師を訪ひ、『三日月日記』を與へられ、喜んで上洛したが、病を得て元祿六年二月二日に歿した。『炭俵』入集の句に「かなしさの胸に折れこむ枯野哉」と見えてゐる。　④**解**　解釋。說明。　⑤**即興**　折にふれ物に感じて、即時に生ずるおもしろみ。　⑤**感偶**　ふと思ひ浮んだ感想。偶感。　⑥**句案**　句を考へること。句案にわたるとは　即吟ではなくて、いろ〳〵と作意を加へたことをいふ。　⑦**辨**　わきまへること。辨明。　⑥**理窟**　理はことわり。すぢみち。窟はいはや。あなぐら。理窟は理の集る所の義。又こぢつけの理由といふ意。『俳諧寂栞』には「理屈の事」の條下に、「ふかぬ日は歸帆の遲き柳かな」「柴ならば腰を懸けんに柊らり」の二句を擧げて、「是も情より發句を案ずる故なり。なぜと言葉のかゝるは皆理屈な

り。理屈をはなれて萬象をおもひ、無レ邪の良友とすべし」と說いてある。

參考

この句の出典は『曠野』、外に『陸奥衛』『泊船集』『甲子吟行』『明和版野晒紀行』『孤松』『曉山集』『雜談集』等にも見えてゐる。但し、『甲子吟行』には「湖水の眺望」と前書があり、『明和版野晒紀行』『雜談集』には「大津尙白亭にて」と前書がある。更に『孤松』『曉山集』には、

唐崎の松は花より朧かな

と見えてゐる。

この句の制作年代に關しては、大津尙白亭に芭蕉が逗留した時とも考へられ、又尙白が『孤松』を貞享四年に梓行して、彼自身同書の序中に、「いでや同志の見るに便せんとおもふに、ひとり唐崎の松の幽にして、しかも明なる所、物の標題ともならんかし云々」と記してゐるに從へば、『孤松』は芭蕉が尙白亭に杖を留めた記念の集であるとも考へられるのである。少くともこの句の下五の「朧かな」が初案の形であらうかとも思はれるのである。

然るに、又一方から、「尙白亭にて」說の反證と見なされるものもないではない。大體、『甲子吟行』によれば、これは貞享二年の春、伏見西岸寺に任口上人を尋ね、それから大津に出る山路で、「やまぢきて何やらゆかしすみれ草」と吟じ、次に「湖水の眺望」卽ち唐崎を遠望して、この句を作つたといふ事になつてゐて、特に「尙白亭にて」とは見えてゐないのであるが、『芙蓉文集』所收の芭蕉の書翰に、

貴墨辱拜見、御無事之由珍重奉レ存候。其元滯留の内、得二閑語一候而珍希申候。
一、愚句其元に而之句、

　辛崎の松は花より朧にて

と御覺可レ被レ下候。

　山路來て何やらゆかしすみれ草

其外五三句も候へども、重而書付可レ申候。（略）以上。

　五月十二日　　　　　　　　　　　　芭蕉桃青

　千那貴僧

と見えてゐる。千那宛の書翰に「其元にての句」とあるからには、この句は芭蕉が大津から堅田に行き、本福寺に千那を訪うての作としなければならぬ。且つ、千梅の『鎌倉海道』には、この句に對して千那の脇、

　山はさくらを絞る春雨

を掲げて、これが千那亭での作であることを力說してゐる。

所で『去來文』によれば、その一節に、

右之御句どもの內に、切字なき句多く見え申候。先切字を發句にいれ候子細を得心仕候而、其上にて切字なくてもくるしからざる句を、一々存候へばよろしく候。おなじくば、切字いれ候へば、ほ句たしかになり申候。切字いれ候て一句のすがた下品になり候句なれば、切字をぬき申候事御座候。二つどりに

は、いれたるが能候。たとへば、

辛崎の松は花よりおぼろにて

此句、切字なき事をくるしみ候て、他書の集に一二書て、

辛崎の松は花より朧かな

とつかまつり候。此かなの字にて一品の姿下り申候。ばせを此哉を存られず事は候はねども、朧にてと申たる句の融遠なることを愛せられ、如レ此に候。切字なくて不レ叶ほ句には、是非〳〵切字を加へ申べく候へども、切字なくてくるしからず句勢ゆゑ如レ此に候。

とあつて、簡單に「朧かな」は「切字なき事をくるしみ候て」撰者が加筆した僞作と決定してゐる。然し、かうした見方は、『孤松』の刊年が貞享四年（句の作られたのは貞享二年）であるといふ點から云へば、幾分は顧慮すべき說かも知れないが、それが蕉門の先達たる尙白に對しての言葉としては、そのまゝ受入れることは出來ないやうに思はれる。

私自身は、私かに『孤松』の句が初案であらうと考へてゐる。卽ち、當時、尙白は大津に住み、千那は堅田に住んでゐたのであるが、『甲子吟行』に於ける道程の順路を見ると、貞享二年の春、芭蕉は伏見を經て、大津、次に堅田と步いてゐる。換言すれば、伏見の任口亭、大津の尙白亭、堅田の千那亭といふ順序で杖を休めたと考へられる。そして、尙白亭にあつて、先づ「朧かな」の句を吟じ、次に其處を立出でて、千那亭を訪うては、「朧にて」と自ら改めて發表し、千那もそれに和して脇を付けたのであらう。かく考へる事が、最も妥當な解決であ

らうと信ずる。

なほ、貞享二年といへば、芭蕉は四十二歳のことである。

この「からさきの」の句は、芭蕉の句の中でも、最も人口に膾炙したものの一で、『はいかい袋』には、この句に關聯して、

ばせを百廻法事、四天王寺の坂下遊行寺にて、雪中庵上坂あり、不二庵ともに三ケ日のはいかい執行。寛政五年十月十二日。

この道のしぐれこの地にふる世哉　完來

なをみちかれずこの塚の冬　大江丸

あさ嵐馬上の残夢うち覺て　桃居

連衆三十餘輩。

江戸くらまへより、ばせを翁の肖像に讃をのぞみ來りける。隨齋成美畫。

神依人敬增威。人依神德添運。

とは、かまくら貞永之式目

十二日この祭祀又古人なし

あはづ寺にて

から崎の松は花よりもけふはしぐれにて

等の記載もあり、又、蕪村は『橋立の秋』に、

辛崎の朧いくつぞ與謝の海

の如き作も殘してゐる。但し、一方に於ては、この句を單に渇仰せずに、例へば、子規が『芭蕉雜談』中に述べた次の如き意見もある。併せて、味ふべきであらう。

芭蕉は法度の外に出でゝ自在に變化するを好みしかば、此句も「朧にて」と口に浮びしまゝ改めざりしものにして深意あるに非ず。何故に「にて」と浮びしやといふに、句解大成に「後鳥羽院の御製に、

から崎の松のみどりも朧にて花よりつゞく春のあけぼの

此歌の俤によれるにや」云々とあり。此歌の句調は芭蕉の口に馴れて、覺えず斯くは言ひ出だせしものならん。さすれば此句は此歌を飜案せしものなれども、飜案の拙なるは却て剽竊より甚しき者あり。況して古歌なしとするも此句の拙は奈何ともし難きをや。此等の句は芭蕉の爲に抹殺し去るを可とす。

さて、この句に就いて論及してゐる書は、古來頗る多いが、その中から、代表的なものを次に列擧すれば、まづ『雜談集』には、

伏見にて、一夜誹諧もよほされけるに、かたはらより芭蕉翁の名句、いづれにてや侍る、と尋出られけり。折ふしの機嫌にては、大津尙白亭にて、

辛崎の松は花より朧にて

と申されるこそ、一句の首尾、言外の意味、あふみの人もいまだ見のこしたる成べし。其けしき、こゝにもきら〳〵とうつろひ侍るやと申たれば、又かたはらより、中古の頑作にふけりて、是非の境に本意をおぼはれし人さし出て、其句、誠に誹諧の骨髄得たれども、慥なる切字なし。すべて名人の格的にはさやうの姿をも、發句とゆるし申にやと不審しける。答へに、哉どまりの發句に、にてどまりの第三を嫌へるによりてしるべきか。おぼろ哉と申句なるべきを、句に句なしとて、かくは云下し申されたる成べし。朧にてと居られて、哉よりも猶徹したるひゞきの侍る。是、句中の句、他に的當なかるべしと。此論を再び翁に申述侍れば、一句の問答に於ては然るべし。但し、予が方寸の上に分別なし。いはゞ、さゞ波やまのゝ入江に駒とめてひらの高根のはなをみる哉。只、眼前なるはと申されけり。

『葛の松原』には、

發句はなるべきと、なるまじきを見る事、第一の工夫なるべし。

辛崎の松は花よりおぼろにて

此句、錦をきてよる行人のごとし。好惡はその人ぞしり給ふらめ。たま〳〵起定轉合の四格をしれる人も、第三のとまりは、なに故に文字のさだまるといふ事をしらねば、一生を返魂の烟の中にかげらふ。かなしむべき風雅の罪人ならむ。此句、花の字なからましかばしらず。

『廿五ケ條解』には、

辛崎の松は花より朧にて

此發句の落着をしれば、發句と、第三と、平句との差別を知るなり。發句は一句の中に曲節といふものあり。此句に花は曲にして、松の朧とは節也。曲節の二つは、よのつねの謡・浄瑠璃にも知るべし。

辛崎の松は春の夜朧にて

是は第三のさまなり。此平句より重き所は、松の朧といふ節なり。

辛崎の松を春の夜見渡して

是はたゞ春のけしきのみ。曲もなく亦節もなきものなり。

此發句を世間に止るとまらぬと云ふ沙汰あれども、夫は初心の論なり。されど、朧かなと有べきを、朧にて、といふ事は、かなは決定の辭にて、花より松が面白いと決定すれば、傍題の褒貶のがれがたし。歌にも嫌ふ事なり。さゞ波やまのゝ入江に駒とめて比良の高根の花を見るかな、と詠たる、其花より辛崎の松の朧にて、只おもしろからんと、不決定の中の決定なり。或はにて止りの事は、

三日月は正月ばかり誠にて

此にてのこゝろに知るべし。月は月々の三日月あれども、正月ばかり誠に三日月にてあらんと、決定の情をのこしたるなり。さるから、にて留の事は、哉留の發句の第三には子細ある事をも知るべし。口傳に、其角雜談集の事あり。

此發句は湖南の春望にして、其ころとまらぬと他門に論ありしを、其角が雜談集に云、伏見にて一夜は

いかい催しけるに、傍より芭蕉翁の名句あれにてや侍ると尋出でけるに、折ふしの機嫌にては、大津尙白亭にて、辛崎の――と申されけるこそ、一句の首尾、言外の意味、あふみの人も未見の殘したる成べし。其氣色こゝにもきら／＼とうちうつろひ侍るにやと申ければ、又かたはらより中古の頑作にふけりて、是非の境に本意を覆(おほは)れし人さし出て、其句誠に俳諧の骨髓は得たれども、たしかなる切字なし。すべて名人の格的は、さやうのすがたをも發句と免し申にやと、不審しける答に、や留りの發句にて、第三にて留をきらふるによりてしらるべきか。おぼろかなと申べき句なるを、句に句なしとて、かく云下し申されたる成べし。おぼろにてと居りて、哉よりなほ徹したるひゞきの侍る。是句中の句、他に的當なかるべしと。此論を再び翁に申述侍れば、一句の問答においてしかるべし。但し予が方寸の上において、分別なし。いはゞ、さゞなみや眞野の入江に駒とめて平の高根の花を見るかな、只眼前なるはと申されけると云々。これ比良の高根の花を見しよりも、辛崎の松はおもしろしと興じて、心を返して哉とは決せず、にてと少疑へり。にてとは未決の決辭なり。哉と落着しては、花をいひおとし偏題(へんだい)のそしりありとぞ。唯てにはのとまりとまらぬ沙汰よりも、曲節あるものは發句なり。此句中曲節を知べし。花よりは曲にして、朧の松とは節也。可レ笑。

第三の節とは、春の夜朧と優長にいひて、松のおぼろとかぎりたるが節なり。平句はのび／＼と云流したるのみ、無曲無節なり。されど此三法は、發句は曲節の二つ、第三は一節か一曲か、平句の曲節地は又地中より出たる曲節地なるべし。そも發句の曲節は、其作者の器量ほどに生じて無量也。脇は我力を

出さず、その發句の曲節の位ほどに定て仕立るなり。第三一曲一節も發句の聲調をとして、其曲節より出すものなり。しかれば第三の曲節地は發句の曲節の聲調より作り、平句の曲節地は、此亦一等をとしての曲節地なるべし。やゝもすれば平句に發句らしく、第三らしきも有り。おもふべき事とぞ。

『俳諧古今抄』には、

辛崎の松は花より朧にて

此句は五絶の一章にして、芭蕉門の祕授なるが、是はまさしく哉の治定を恐れて、にてと心を返されけむ。しからば心詞の殘る所は、下の五もじの句絶にして、是を下段の切とやいはむ。然れどもこれらの沙汰は、例の故翁の遺訓を察して、全く滅後の再撰なれば、まして當時の衆評を窺はざらんや。かならず口斧ををしむべからず。第二に中の切といふは、春の夜の憐れも鳴きあかしぬる猫の戀も、やむ時は何々として、月朦朧と來鵬が寒食の詩の閑情をふくみ、いざ宵の月はやす〳〵と山の端を出はなれて、そこにたなびきたる雲にいざよふとは、賈島が詩の風姿を寫せり。いづれも中間に心詞を添ふべき也。第三に挨拶切といふは、自問自答の格ながら、或は世を旅にとは一句にことわり、或は人に我はとは二句の間にことわる也。或は三句の錯綜もあるべし。句情は別に註するに及ばず。但しいふ小田の代かくとは、苗代の土をやはらげんとて、牛に耰といふ物をかけて、行きもどりに土を搔きならす故にとぞ。惣じて今いふ三切は、心の切の別名と知るべきなり。

『俳諧寂栞』には、

辛崎の松は花より朧にて

去來曰、即興感偶にして發句たる事疑なし。第三は句作にわたる、若句作にわたらば第三に落入べし。其角曰、近江國にて此句を人の論ぜし時、にては哉に徹するのひゞきある故に、哉留の發句に、にて留の第三を嫌ふと是にて知るべしと云ければ、祖翁の曰、一句の論においては然るべし。我方寸のうへに分別なし。

さゞ波やまのゝ入江に駒とめてひらの高根に花をみるかな

此歌を吟じ給ひ、眼前なるはと申されたり。

『俳諧一串抄』には、

湖水眺望

辛崎の松は花より朧にて

此句殊に人口にあり。或はにてはは哉に通ふなどいへるも、畢竟切字たきになやめる說なり。哉と留てよき句ならば、翁何の子細ありてか哉と留ざらん。若哉とせば、只松一方の賞翫となるが故なり。まさに端書ありて、湖水惣體へかゝる句なれば、やはりにて留にて、にてはにしての約なれば、辛崎の松は花より朧にしてといふ句なり。總て、はし書ある句は、はし書を俳諧にする格なり。句意は、此水郷の春色、遠近かけてあかぬ所なくうらゝかなり。其上辛崎の松は花よりも朧にして、といひ残し、此にしての流しにて、聽人の心を端書の湖水上へ引出したるなり。花は長等山に名ありて此所にあづからねど、

當季の春に取入て名譽の松一株に匂はせ、松の煙に朧をもたせて、水波の春態を思はせたり。もつとも絶妙の句なり。此絶妙みなにての流しより出たるなり。

『俳諧耳底記』には、

唐崎の松は花より朧にて。此にては哉にかよふと共角は申たり。又大廻し成といふ說も有。皆違へり。野坡或時翁へ此句の意を問ければ、さゞ波やまのゝ入江に駒とめて比良の高根に雪を見るかな、といふ歌の心なり。眼前廿餘里の湖水の眺望、十九てにはの句なりと申されしよし。餘意の事其時口授ありて、野坡は知れり。庵主は定て此句の俳神を聞置べし。重ねて問て知らるべし。何もしらずして、了管にて翁の句を說事有まじとて、去來は決て翁の句を說ずとかや。

『也哉抄』には、

大津尙白亭にて

唐崎の松は花より朧にて　ばせを

是誠に幽艷なる句也。おなじ浦邊の眺望、よきほどに隔たりて、春の日の打霞みたるには、面白くや見えつらん。此句をほむる人の云は、是なんへ朧哉と云べきを、にてといひしが最妙也といへり。此說はにてとかなは意のかよふぞと思ひあやまれるなれば論なし。こは朧にてあな面白の詞をあましたる上手のしわざ也。されど月を朧とは常にいへば、月より何が朧也と云べし、花を朧とは常にいはねば、松は花より朧也といはん事、耳だゝしくおぼゆるまゝに、たまたま蕉門の人にあへば、此事を問もとむる

に、しかる故ありとこたふる人なし。因ておもふに、是は續古今集、後鳥羽院の御製歌に、よしの山櫻にかゝる夕がすみ花も朧の色はありけり、是櫻に夕霞をかけたればこそ、花も朧の色に打曇りたるはとことわらせ給へば、言語はとゝのひませる也けり。此句をたすけていはんには、此御製に打まかせてかくいへる也とことわるべし。

『俳諧古今抄』の「再撰貞享式」には、

辛崎の松は花より朧にて。

大廻し 行春をあふみの人とをしみける。

されば此一章は例の湖南の遺稿にありて、辛崎の一章は我門の祕授につたへて、白馬の廿五條にも曲節地の三段となせり。祕する所は、此發句の朧にてといふ詞を、朧かなと決定すれば花に褒貶段の難ある故に、花よりも松は朧にて、面白からうと、心を返さば、下段の切は勿論にて、奚を大まはしともいふべきにや。返す／＼も推量の沙汰なり。次に行春の一章も、かの木曾寺の偶作にて、此句も例の心を返すに、をしみけりと決定しては、平句の難も遁れがたければ、をしみける故に何々としてと、下段より心をめぐらせば、句外の意味はしるべき也。こゝに此句の稱する所は、行くを逢ふ身と鎖詞の法ながら連歌の艶詞にならひたるは、かへりて俳諧の曲節といふべし。さりながら、此格は常蛇の法にも心かよひて、普通の人はおそるべき名人業ともいふべきにや。さるは白馬の文章訓にも、常蛇の法を許するとて、良暹法師の歌をひきて、さびしさに宿をたち出で詠むればいづこもおなじ秋の夕暮、とは今いふ起

語と結語とに、常山の蛇の働きありて、頭より尾に詞をはこび、尾より頭に心を廻らす。此法は文章のみならず、發句もたゞありにいひ捨て、和歌は三十一字の果より、俳諧は十七字の終りより、あとへ心をめぐらす時は、和歌の優情に劣るべき事かは。されど、未練の輩は、唯いひすてのまぎれもあらんとぞ。まさにおそるべきは、これらの句法ならん。さて玄妙の二字といふは、言語不到の名目ながら、故翁の一語の捨てがたければ、摸象の嘲りをかへり見ず、これらの證句を擧ぐべきにや。

等、殆んど枚擧の遑もないが、これ等をなほ曲説附會して、殊更に祕傳とか口傳とか稱した說が多く、それ等に對して、殊に『俳諧不猫蛇』に、越人は支考を難詰して、

松は花より朧にての句を、朧の傳受など初心を迷はするよし。汝等誰に傳受したるぞ。芭蕉になき事は予が能知る所なり。かゝる事どもに、初心の者どもに堅めとて血をしぼらするよし。去迚は何共言語を絕する邪曲者共也。

といひ、又露川を叱責して、

聞けば、翁の花より朧にての句を朧の大祕事と口訣し、(略)あらぬ事ども作り、初心の人々に血判して堅め傳受し、利貪るよし、去迚は淺間舗事也。

と述べてさへゐる。

次に、この章で問題になつてゐるのは、發句と連句の第三との差別といふことである。それに關しては、前揭の諸說でも觸れてあるが、なほ次の『俳諧古今抄』の「新製東花式」中「趣向一つに句作三つの事」の項に、最

も詳しく論及されてある。

中古は連誹の發句も附句も、趣向と句作との差別なければ、教ふる人も其埒あきらかならず。學ぶ者も其詞にまどふ。此故に我門には、趣向を定むるに執中の法ありて、趣向を先にして其體を定め、打越より二三句の變を見あはせ、句作を後にして其用を窺ひ、前句の姿情をとゝなへむとす。是よし發句と附句とにさしむかふ初念の掟なり。さるは白馬の類説にありて、曲・節・地の三樣也。

發句曲　辛崎の松は花より朧にて

第三節　辛崎の松は春の夜朧にて

平句地　辛崎の松を春の夜見渡して

此發句は湖南の春望にして、白馬に一條の秘訓也。ある時木曾寺の夜話に、故翁は晋子が雜談集を評して、彼が辛崎の松の論談を見たれば、にてと哉との通用をあげて、留まる留まらぬの證文となせれど、さるは訴狀の返答書にして、理非決斷の公事に似たらん。是は、さゞ波に駒とめて比良の高ねの花を見しよりも、辛崎の松は朧にて面白からんかと、心を返して哉とは決せず、にてと疑へり。たとへばこれらの類説に、三日月は正月ばかり誠にてとは、未決の中に決辭ならずや。花よりも松をと決する時は、和歌にも偏題とていむなるよし。高ねの花はかの畫圖より出で、辛崎の松はその和歌より出たれば、たとひ留らず切れぬとても、曲節ある物は發句としるべしとて、此のいふ三樣は口評ありし也。しかれば發句はかくのごとく、附句はまして、萬樣ならめど、趣向は例の只一つにして、句作は曲節地の三樣よ

り、或ひは眞艸行といひ、或ひは不易流行といひ名目は千姿萬容なるべし。其比かある人の別墅にあそびて、へ淺茅が宿の盆に繪簾、といふ脇に、第三は但とて聞きくらべしに、おの〳〵繪の字の働きなければ、例の趣向は藪入にさだめ、句作は萩の模様あらんかとて、

曲　藪入の子に大名の萩咲いて

節　藪入の子に隣りから萩咲いて

地　藪入の馳走に門の萩咲いて

かく三様の句を作りて、一座の衆評をうかゞふに、おほくは隣りの萩をと稱し、ひとりふたりは、大名の萩もといへれど、此日は一座の俳諧なれば、奇言新語を好むべきにあらずとて、第三は門の萩に定まりぬ。さて其會の夜話におよびて、我れかく萩の三様を案ぜしに、へ藪入の馳走に萩も起されて、と作らば、前の二句にはまさりて聞ゆべけれど、起の字の働きは、地と曲とにまぎれて、奇怪を敎ふるに似たらんかと、門の萩にて聞合せたるに、例の一座にとる人なし。なぞや夜に日に耳目をかざらむとす。附句は前句の姿情を失はず、たとひ目にたち耳にひゞかずとも、つねの人にしてつねの言ならんは、俗談平話をとゝなふといへる、白馬の遺訓にもそむかざらん。まさにしるべし、俳諧の世法なる、人には褻晴の用意ありて、褻にも美服を着かざれば、晴には心をあたゝむる節なし。繻子・綸子は櫃にたしなみて、つねは木綿のさびにあそぶべしといふに、興ずる人も感ずる人も侍りき。

試みに『俳諧七部集』中の連句の第三の作例に徴するに、所謂「第三ぶり」の「て留め」を原則とし、

有明の主人に酒屋つくらせて。　荷兮（『冬の日』木枯の卷）
山霞む月一時に館立て。　雨桐（『春の日』伊勢參の卷）
のどけしや早き泊に荷を解て。　昌碧（『曠野』員外遠淺の卷）
旅人の虱かき行春暮て。　曲水（『ひさご』花見の卷）
股引の朝からぬるゝ川こえて。　凡兆（『猿蓑』鳶の羽の卷）
家普譜を春のてすきにとり付て。　野坡（『炭俵』梅が香の卷）
初荷とる馬士もこのみの羽織きて。　馬莧（『續猿蓑』八九間の卷）

以上の如くであるが、その外に「に」「にて」「らん」「もなし」「けり」「なれや」などの留め方もある。「にて留」の第三の例は『俳諧七部集』中には、次の一例（『曠野』所收の荷兮・野水の兩吟歌仙）がある。

ほとゝぎす待ぬ心の折もあり　荷兮（發句）
　雨のわか葉にたてぬ戸の口　野水（脇）
引捨し車は琵琶のかたぎにて。　同（第三）

また「かな留」の發句に初まる連句は『俳諧七部集』中には、「冬の日」卷頭の「狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉」を立句とする歌仙を初めとして、合せて十二卷あるが、その第三は、いづれも「にて留」を嫌つて居る。

又、『宇陀法師』に、

哉留り、五つの習ひの事。一には落着哉、二には願哉、三には浮たる哉、四には沈む哉、五には現在哉。

此現在哉、上五七の內、現在のし文字ありては留らず。

　　遠山遠し花ゆへ曇る霞哉

遠しのし文字現在にて、二重切とまらず。

　　同　あかねさし出ても曇る春日哉

此し文字現在なれど、さし出るとつゞく故留る也。大祕事也。猶口傳。

と見え、『去來抄』の「同門評」中にも、

牡年曰、發句と附句の境はいかに。去來曰、七情萬景こゝろに留まる處に發句あり。附句は常なり、たとへば鶯の梅にとまりて啼といふは發句にならず。鶯の身を逆に鳴くといふは發句也。牡年曰、心に留むる所は、皆發句なるべきか。去來曰、此うち發句になると成らぬとあり。たとへば、

　　つき出すや樋のつまりのひきがへる　好春

此句を、先師の古池の蛙と同じやうにおもへるとなん、事めづらしく等類なし、さぞ心にもとゞまり興もあらん。されど發句にはなしがたし。

の如き記載が見えてゐる。

結局、去來が「第三は句案にわたる、もし句案にわたらば第三等にくだらん。」と呂丸に對して答へたのは、發句と附句との區別論であつて、輕卒には取扱へぬことは云ふまでもないが、この去來の說は、換言すれば、呂丸が單に形式のみから、發句と附句とを差別しようとしたのに反對して、單に形式のみでなく、內容の點からも見

なければ、それは差別できない事であると明言したもので、區別論の根本的規律なのである。

次に「唐崎の」の句の、にて留が問題とされてゐるが、發句の切字に關しては、更に『三册子』に、

切字の事、師のいはく、むかしより用ひ來る文字ども用ふべし。連俳の書に委くある事也。切字なくてはほ句の姿にあらず、付句の體也。切字を加へても、付句の姿ある句あり。誠に切たる句にあらず。又切字なくても切る句有。其分別切字の第一也。その位は自然としらざればしりがたし。猶、口傳あり。師常に道を大切にして示されし也。あこくその心はしらず梅の花、と云句をして、切字を入る事を案じられし傍にありて、此句は切字なくて切るやうに侍ると云ば、切る也、されども切字はたしかに入たるよし、初心の人の道のまどひにしてあしし。つねにつゝしむべし。ましてさせる事もなき句は、句を思ひやむとも常にたしなむべし、と示されし也。

手爾葉留の發句の事、けり、や等の云結たるは、つねにもすべし。覽、て、に、その外いひ殘たる留りは、一代二三句は過分の事成べし。けり留りは至て詞強し。かりそめにいひ出すにあらず。ふりつみし高根のみゆきとけにけり、といふも至てつよくいひはなして、その響に應じて、淸瀧川の鳴りあがる水のしら浪といひかけて、けしきを顯す也。覽とはねべき所を、やといひ捨るもあり。也といふべきを覽といひて、はゞを取る事なども古歌などに多し。皆句作の所なるべしと師の教也。

とあり『宇陀法師』には、

切字なしの發句の習ひ、近年傳授請ぬ人、才覺分別にてみだりにいひちらせる、散々の事也。能傳授仕

たる人に急度習ふてすべし。

と見えてゐる。

次に、「唐崎の」の如き名所を、一句の中に詠出することに關しては、『葛の松原』に、

鎌　倉　を　生　て　出　け　む　初　鰹

五　月　雨　に　か　く　れ　ぬ　物　や　勢　多　の　は　し

梅　若　菜　鞠　子　の　宿　の　と　ろ　ゝ　汁

詩歌に名所を用る事たやすからじ。かまくらの初鰹は、支考が東より歸けるとき、かゝる事ありとて見せ申されしを、生て出るといふに鎌倉の五文字、又、その外あるべくとも承はらずと申たれば、られ敷きゝ侍るとて、阿叟もにくみ申されしが、みづからも徼幸にいひなしぬらむ。つら〳〵おもへば、生死のさかひを以て出入せむに、かまくら・六波羅の外、殊に有べからず。しばらく風雅にあそぶ人も、いきて鎌くらを出し鰹の、いまは武江の薄じほとなりけるよと、世の觀相にのみ眼をとゞむる事、此句ばかりにもかぎるまじ。五月雨の增ぞまさぬぞといへる處、もろこしには五湖あり、倭には一二にも過べからず。しからば、勢多といへるものは、古今の摸楷ともなるべし。むかしより文章には結前、生後の詞といへる事は、今の若菜のはたらける物ならむか。天心をこゝになやまさんとにはあらねど、句をつくるの法、おほむね角のごとし。さるを未練の人は、始より深からしめんとして、果は一應の理もきこえずなりぬ。一生をこゝにあやまらざれや。

とあり、『花實集』に、

其角曰、凡、讃・名所の發句は、その所の發句と見ゆるやうに作すべし。西行の讃を定家の書にも書、明石のほ句を松島にも用ひ侍らんは拙き事なるべし。

と見え、『旅寢論』には、

讃類・名所等の句はその場をうしなはざるを肝要とす。(略)西行の賛を文覺の繪に書、明石の發句を松島にも用ひ侍らんは淺ましかるべし。句の善惡は第二の事也となり。

との記載がある。

更にこの章の中に「即興感偶」といふことがあるが、これに關しては『去來抄』の「同門評」中に、

許六曰、發句は題の曲輪を飛出でゝ作るべし。廓のうちにはなきもの也。自然曲輪の中に在るは天然にして稀也。去來曰、發句は曲輪の內になきものにあらず、殊に即興感偶する物は多くは內にあり。然ども、常に案ずるに、內はすくなく多くは古人の糟粕なり。千里にかけ出て吟ずる時は、句おほきのみならず、第一等類をのがる。初學の最思べき處也。功なるに及んでは、又內外の論にあらず。風國が俳諧句每曲輪の內なり。予此事を示せば、〽雷に德利さげて通りけり、と云ふを、〽德利さげて行きかゝり、と直す。〽名月に皆さかやきを剃りにけり、といふを、〽さかやきを皆そりたてゝ駒迎、と直しぬ。

とあり、又これは文字に小異同はあるが、『花實集』にも見えてゐる。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○唐崎の云々。
雜談集、葛の松原にゆづりてしるさず。
とあるのみであるが、『俳諧或問』によれば、
曉山集には、蛙飛込むの吟を山吹とし、唐崎の句を朧かなと出し侍るなど、守武流にては金玉といふと
も、蕉翁の意に叶ふべきや知らず。
と見えてゐる。

三　行春をあふみの人とをしみける　芭蕉　①

先師曰尙白か難に近江は丹波にも行春は行年にもなるへしといへり　②
汝いかゝ聞侍るや去來曰尙白か難あたらす湖水朦朧として春ををし　③
むに便有へし殊に今日のうへに侍ると申き先師曰しかり古人も此國　④
に春を愛するとをさ〳〵都におとらす去來此一言こゝろに徹す行年　⑤
近江に居たまはゝいかてか此感のましまさん行春丹波にゐまさはも　⑥
とより此情うかふまし風光の人を感動せしむる事眞なるかなと申先　⑦

師曰汝や去來ともに風雅をかたるへきものなりとよろこひ給へりし⑧か⑨

［校異］

久①あふみ―近江。をしみける―おしみけり。芭蕉―はせを。②行年―行歳。③をしむ―おしむ。④うへに―上に。こゝろに―心に。行年―行歳。⑤愛すると―愛する事。をさ〳〵―おさ〳〵。おとらす―おとらさる物有。去來―去來曰。こゝろ侍ると申き―侍ると申。⑥居たまはゝ―ゐ玉はゝハ。此感の―此感。もとより―本ゟ。⑦眞なるかな―眞成哉。⑧汝や去來―汝去來。ともに―共に。ものなりと―もの也と。よろこひ給へりしか―殊更に悦玉ひけり。

帝①あふみ―近江。をしみける―おしみけり。芭蕉―はせを。②丹波―なに波。なるへし―ふるへし。③難あらす―難あらす。をしむ―惜む。④便有へし―たよりあるへし。うへに―上に。侍ると申き―侍ると申。⑤愛すると―愛する事。をさ〳〵―多く。おとらす―おとらさるものを。こゝろに―心に。徹す―微す。行年―行年を。⑥居たまはゝ―居玉はゝ。此感の―此式。丹波―なには。ゐまさは―いまさは。もとより―本より。⑦感動―感働。眞なるかな―眞なる哉。⑧汝や去來―汝は。ともに―倶に。かたるへき―語るへき。ものなりと―ものと。よろこひ給へりしか―殊更に悦ひ玉ひけり。

落①あふみ―近江。をしみける―惜みけり。②なるへし―ふるへし。いへり―云へり。③あたらす―常らす。をしむ―惜む。便有へし―便あるへし。④うへに―上に。侍ると申き―侍ると申す。しかり―然り。古人も此國に―此國に。⑤愛すると―愛ること。おとらす―劣らさる物を。こゝろに―心に。行年―行春。⑥居たまはゝ―居給はすは。いかてか―いか

て。此感の―此感。ゐまさは―ゐ給はゝ。もとより―いかて。⑦うかふまし―浮ふへき。せしむる事―せしむると。と申―と申す。⑧汝や去來ともに―汝は倶に。かたるへき―語るへき。ものなりと―者なりと。よろこひ給へりしか―殊更に歡ひ給ひけり。

青①あふみ―近江。をしみける―おしみける。(イリ)芭蕉―はせを。此ノ句ノ頭ニ「㊂同集」トアル。②丹波―難波。③聞侍る―きゝ侍る。あたらす―非なり。春ををしむ―はるをおしむ。④便有へし―たよりあるへし。うへに―上に。侍ると申き―侍ると申。古人も此國に―古人もこの國に。⑤愛すると―愛する事。をさ〳〵―多く。都に―みやこに。おとらす―おとらさるものを。こゝろに―心に。行年―ゆくとしを。⑥居たまはゝ―居給はゝ。此感の―此感。行春―ゆく春。丹波―難波。ゐまさは―居まさは。⑦此情―この情。⑧汝や去來―汝。ともに―倶に。ものなりと―ものと。よろこひ給へりしか―ことさらに悦ひたまひけり。

贄①あふみ―近江。をしみける―おしみけり。芭蕉―はせを。此ノ句ノ頭ニ「㊂雜談集」トアル。②丹波―難波。③あたらす―非なり。をしむ―おしむ。④便有へし―たよりあるへし。殊に―殊更に。うへに―上に。侍ると申き―侍ると申。⑤愛すると―愛する事。をさ〳〵―おほく。おとらす―おとらさるものを。こゝろに―心に。行年―ゆくとしを。⑥居たまはゝ―居給はゝ。此感の―此感。行春―ゆくはる。丹波―難波。ゐまさは―居まさは。⑦此情―この情。うかふまし―うかまし。眞なるかな―眞なる哉。⑧汝や去來―汝は。ともに―倶に。ものなりと―者也と。よろこひ給へりしか―殊更に悦ひ給ひけり。

架③をしむ―惜む。④便有へし―便あるへし。古人も此國に―古人もこの國に。⑤愛すると―愛する事。⑥此一言―この一言。此感の―この感の。ゐまさは―ゐ給はゝ。⑦此情―この情。眞なるかな―眞なる哉。⑧ものなりと―もの

也と。

訓讀

行く春をあふみの人とをしみける　芭蕉

先師曰はく、尚白が難に、近江は丹波にも、行く春は行く年にもなるべしといへり。汝いかゞ聞侍るや。去來曰はく、尚白が難あたらず。湖水濛朧として春ををしむに便り有るべし。殊に今日のうへに侍ると申しき。先師曰はく、しかり、古人も此の國に春を愛すること、をさ〳〵都におとらず。去來、此の一言こゝろに徹す。行く年近江に居たまはば、いかでかこの感のましまさん、行く春丹波にゐまさば、もとより此の情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事、眞なるかなと申す。先師曰はく、汝や去來、ともに風雅をかたるべきものなりと、よろこび給へりしか。

口譯

「行く春をあふみの人とをしみける　芭蕉」——師翁の仰せには「尚白がこの句を批難して『近江』は『丹波』とも置き換へられさうですし、又『行く春』は『行く年』にも動きさうですと言うたが、お前はどう考へますか。」との事でございましたので、わたくしはそれにお答へして「尚白の批難は間違うてをります。琵琶湖の水の、あはれ深く朧ろなさまは、まことに、行く春を惜むに適つてをります。殊に、たゞ今の旅人としての御境涯に、ぴ

つたりとした御作でございます。」と、申しました。すると、師翁は、「さうです。昔の人も、花の都の京にも殆んどおとらぬ程、この近江の國の春を愛惜したものです。」と、申されました。わたくしは、この師翁の御言葉が、胸に泌みて感ぜられました。それで、「もし同じ近江にしても、年の暮においでになられたら、どうしてかうした感慨がお湧きになりませう。又もし同じ行く春の頃としても、丹波においでになられたとすれば、言ふまでもなくこんな情趣はお浮びになりますまい。風景が人を感動させます事には、僞りはございません。」と、申しました。師翁は、「去來よ、お前はよく風雅を解してゐる。」と仰せられて、お喜びになつて下さいました。

語釋

①**行春**　春の過行くことで、暮春にいふ。　①**あふみ**　舊東山道の一國で、今の滋賀縣に當る。修して江州といひ、古くは淡海と書いた。琵琶湖があるからの名で、遠江の遠淡海（とほつあはうみ）に對して、近淡海（ちかつあはうみ）とも書いた。近江は蕉門の勢力のあつた國で、粟津に丈草、膳所に正秀・洒堂・曲翠・昌房・游刀・野徑・探志・里東・怒誰・及肩・裾道・遲望・萬里女・素龗女、堅田に千那・角上、大津に尙白・木節・智月尼・乙州・錦江女、彥根及びその附近に許六・李由・木導・汶村・朱廸・毛紈・程己・吾仲等の名を數へることが出來る。

②**尙白**　伊勢朝熊の人である。江左氏、名は三益、幼名虎助、木翁・芳齋・老贅子などの諸號がある。近江大津に住んで、名醫の聞え高く、京極家の扶持を受けた。初め貞室（一説不卜）に學んだが、一度芭蕉に接してからは、その風格を慕つて蕉門となつた。そして許六その他をすゝめて蕉門に入らせ、蕉門の故老を以て許されてゐた。享保七年七月十九日歿、年七十三。同地妙光山本長寺なる先塋の傍に葬る。　著書には『夏衣』・『孤松』・『忘梅』などがある。　②**丹波**　山陰道の一國、古くは旦波と書き、今の丹後をも含めてゐた。今は京都府と兵庫縣とにまたがつてゐる。　②**行年**　年の暮れゆくこと。年の暮。　③**膳**

朧 おぼろなさま。 ④**便** よるべ。便宜。都合のよいこと。 ④**うへ** 身の上。境遇。境涯、今日のうへに侍るとはたゞ今の御境涯、即ち、その當時、旅を栖(すみか)とした芭蕉は、しばらく湖畔（粟津）に滯在してゐたが、そこで實際に近江の人と共に湖水を望んで春を惜しまれたのであつて、その時の境涯の實感の作であるといふ意。 ⑤**をさ〳〵** おほかた。殆んど。 ⑤**徹す** つきとほす。つらぬく。 ⑦**風光** けしき。風景。 ⑧**風雅** みやび。風流。ともに風雅を云々は、一緒に風雅を語すことの出來る者であるとの意。言換へれば、お前も亦よく風雅を理解してゐるといふこと。 ⑧**しか** 過去の助動詞「き」の第三變化形。

[參考]

この「行春を」の句の出典は『猿蓑』、なほ『篇突』『陸奥衛』『泊船集』『蝶姿』等にも見えてゐる。但し、『猿蓑』には、

望二湖水一惜レ春

行春を近江の人とおしみける　芭蕉

とあり、『篇突』『陸奥衛』等はこれと同じく、『泊船集』には、この前書がない。また『蝶姿』には、

行春をあふみの人とおしみけり　芭蕉

と見えてゐる。

この句の制作年代は、『猿蓑』を根據として、元祿四年と推定される。元祿四年は、芭蕉四十八歳、その春、正

秀宛の書翰（『芙蓉文集』所収）の一節に、

粟津草庵之事、先は御深切の至忝奉ㇾ存候。兎角拙者浮雲無住の境界大望故、如ㇾ此漂泊いたし候間、其心に叶ひ候様に御取持奉ㇾ賴候。

とある如く、芭蕉は粟津の無名庵等で、悠々たる日を送つてゐたのである。

この「行春を」の句に就いて、論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、『花實集』には、

去來曰、

行春を近江の人とをしみける　芭蕉

先師此句を語て曰、尙白が難に、近江は難波にも、行春は行歲にもふるべしといへり。汝いかゞ聞侍るや。去來曰、尙白が難當らず。湖水朦朧として春を惜むにたよりあるべし。殊に今日の上に侍ると申。先師曰、しかり、古人も此國に春を愛する事、おほく都におとらざるものを。去來此一言心に徹し、行としを近江に居給はゞいかでか此感ましまさん、行春難波にゐまさばもとより此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事眞なる哉と申。先師曰、汝は俱に風雅を語るべきものと、殊さらに悅び給へり。

『蕉門俳諧語錄』には、

行春をあふみの人とをしみける

此句を尙白が難に、あふみは難波にも、行春は行年にも成べしといへり。先師曰、汝いかゞ聞侍るや。予曰、湖水朦朧として春をゝしむにたより有べし。殊に今日の上に侍るといふ。先師曰、しかり、古人

も此國に春を愛する事多く都にをとらざるものを。予曰、此一言心に徹す。行とし近江に居給はゞ、いかでこの感ましまさん。行春難波に居まさば、本より此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事誠なる哉と申。先師曰、汝は風雅を語べき者なりと、殊更に悦び給ひき。

『梟日記』には、

去來曰、春もなをむかしなるが、先師湖南におはして〽行春を近江の人とおしみける、といふを、大津の白が評に、行年をあふみの人といはんも、行春を丹波の人といはむも、おなじ事に侍れば、一句ふりたりとおぼえ侍と申き。去來曰、汝はいかにと仰られしを、曰、倘白が言よからず。近江の人とおしみ給ふは、湖水朦朧たるをりふしのすみかなればならし。暮春もし丹波におはさば、本よりこの趣向うかぶまじ。歳暮又近江におはさば、此感なかるべし。風流はをのづからその場にあるものをと申たれば、去來汝は共に風雅をかたるもの也と、殊に感賞にあへりけるが、その場といふ事をしるべき事なり。

と見えてゐる。

次に、この章で問題になつてゐるのは、句作には物の本情を捉へる事が必須の要件であるといふことであるが、これに關しては『去來抄』の「修業教」中に、

去來曰、俳諧は新意を専らにすといへども、物の本情を違ていふものにあらず。若其事をうち返していふには、品あり。たとへば感レ時花濺レ涙、惜レ別鳥驚レ心。或は、櫻花ちらばちらなん散らずとてふるさと人の來ても見なくに、といへるたぐひなり。感レ時、惜レ別、大宮人の見ざる、是等一首の眼なり。

と記し、また、

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事也。この習へといふ所をおのがまゝにとりて、終に習はざる也。習へと云は、物に入てその微の顯て情感ずる也。句となる所也。たとへ物あらはに云出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物と我二つになりて其情誠にいたらず、私意のなす作意也。

とも見えてゐる。たゞ、春を惜むといふ事と、近江といふ地名との間には、暗々裡に一句の句情を醸成してゐるといふことを知ればよいであらう。なほ『蕪村句集』の中に、

春惜しむ宿やあふみの置火燵　蕪村

などの作が見出されるのも、同じく春を惜むといふ事と、近江といふ地名とを取材としてゐる點に於て、この際一應の關心が拂はれてもよろしからうと思ふ。

次に、この「春の暮」といふ事は、言ふ迄もなく、春の末のことであるが、これに對して、「秋の暮」といふのは、秋の末ではなく、秋の夕暮のことである。『栞草』等にも、

秋の夕暮といふべきを、文字の數も少き句なれば、略して秋の暮といふ也。

と見えてゐるが、この事に關して『篇突』には「春の暮秋の暮の辯」中の一節に、

行春を近江の人とおしみける。　翁

此道や行人なしに秋のくれ　同

春のくれに對して、秋の暮を暮秋と心得たる作者多し。秋の暮は古來秋の夕間暮と云事にて、中秋の部には入たり。

と規定してある。

次に『七部集大鏡』に於ける「行く春を」の句の註釋を次に援引して置く。

先註に曰、尙白が難に、近江は丹波にも、行春は行年にもなるべしといへり。汝はいかゞ聞侍るや。去來曰、尙白が難あたらず。湖水朦朧として、春を惜むに便りあるべし。先師曰、古人も此國の春を愛する事、おさ〳〵都にもおとらず。愚考、尙白もさすがの達人、さやうな愚痴をいふものにもあらず。かやうなる蕘言を誰かうけひかむや。春にあふみとは打付也。夫木集に、東路もくるゝけふをばをしむなりいづくへかへる春にかあるらむ。此ほか春行歌に、皆東方をさしてよめるは、古今にすくなからず。秋入そむる肥後の隈本、能登の七尾の冬は住うき、皆是其方角にたよるは、小兒もしれる事なるを、是等は無用の說と謂つべし。一書に、澹齋云、けりけるの事、先達の說を擧られたれども、和歌にても連歌にても、上にぞといふ抱字なくては、必しも置ず。此句はきはめてけりなるべし。けると留たればとて上へかへり、けりと留たればとて返らぬといふ事は、いまだ見る處なし。言流しにて、此句は別て面白くおもはるれと云々。一書に、上にぞとおさへねばけるといはれず。此句は人とぞをしみけるのぞを除たる句なり。愚考、ぞとおさへてけると留るは、長〳〵しき和歌のあつかひなり。俳諧は十七文字又は十四文字などにてもけると留て、ぞは殘して聞が、手早きてにはの法なり。行春を丹波の人・若狹の

人ともをしまず、幸なるかな、東方に緣ある近江の人とをしみけるぞやと、言外に感歎の意を含むは、是片歌の手がら也。先にもいふ、豆腐を鳶にとられけるぞと驚きたる、手早きてにをはなり。さればこそ近世詩歌の方より、俳諧師は文盲なりと、うしろゆびをさゝるゝ社尤なれ。三十一文字と十七文字と押ならべての姿情全く聞ゆるは、皆是餘情と言外の意味とをふくむがゆへなり。こそとおさへずしてけれと留、ぞとおさへずしてけると留、やといはずしてらむと留るの類、いち／＼擧ぐるにいとまあらず。和歌のうへにさへ、おさへ抱へなくしてよめるも粗あるを、まして況や僅十七文字の一句においてをや。又云、人とぞをしみけりとは全體意がちがふなり。信濃守とぞ申ける、かくいふ時の詞にて別意なり。此句は近江の人と倶にをしむ意なれば、混ずべからず。夫近年に成にけりといふべきをと成にけりとするは、言語道斷の癖案なり。と成にけりは、萬に一つのてにはなり。との字の遣ひかた五義、

止　　聟が來て娘の世とは成にけり　信濃守とぞまうしける

與　　近江の人とをしみける

兼　　作例なし

和　　不屆な隣と中の惡うなり

代　　花とさしたる草の一瓶

又きるものを砧にうてと一つぬぎ。是はとてといふ略なり。亦雖是は濁るとの字なれば、明らけしとの字義あらまし。かくの如し。西上人の、吉野山花のさかりになりにけりやまのはごとにかゝる白雲、と

いふを、古歌取にて、狂歌題林に、吉原も花のさかりとなりにけりとよみしは、淺間しからずや。又俳諧には秋もはやうら菊勝となりにけり。右のふたつ、いづれもに成にけりといふてにをはなり。此外にもかゝるあやまり又すくなからず。にはものゝ變ずるてにはなり。とは物の終るてにはなり。譬ば團十郎が景淸に成た、菊之丞が仙女と名をかへた、餘は準らへてしるべし。

なほ『芭蕉句選年考』には、この「行春を」の句の解に諸說を擧げてゐるが、その末尾の一節には、說叢又曰く、澹齋云ける留の事先達の說を擧げられたれども、和歌にても連歌にても、けるければ上にぞけるこそけれと云抱字なくては必しもおかず。是は極めてけりなるべし。それにて隨分よくとまり、殊に句意も高く聞ゆべし。ると留めたればとて上へ反り、りと留めたればとて反らぬと云ふ事、未だ見る所なし。いひ流しにて此身は別て面白く思はるれ。此句大廻しの體には非ず、けりと云流しの體にて面白しと云へり。予按ずるに、さもこそあれ、思ふに近江の人とこそ惜みけると云ふ心にて、こそは句中にこめて置きたるかと思はれ侍る。左聞けば又けるも可然か。最初はけりにて後に支考など評議してけるに成りたるも知る可からず。道ばたのむくげと云ふは最初の五文字なるを、支考などが道のべと直せし類あまた有れば、此句のけるも其たぐひにやも知る可からず。大廻しの事、げにも此句は廻らぬと予も思ひぬ。是はたゞ、心をふくめて心切ともすべき也。先達の意推して知り難し。

按ずるに、猿蓑にをしみけると慥かに有り。古今抄、又泊船集、むつ千鳥、篇突等、ける也、去來抄にけりと有り、然れども去來抄は寫本故慥ならず。ましてけるけりの論は去來抄には云はず、只一字の書

損にやも知らず。さればたしかに用ふ可き集にけるとあれば、けると定め置く可きにや。澹齋が言の如く拘字の論は芭蕉の句には勿論、いか程もかゝへ字有る可きを、拘字なくて作れるあまた有り。支考と澹齋いづれかまさる、齋に荷擔しがたし。又說叢にこそと入りてけると聞く可き趣を云へる、こそとあればけれと云ふ事童子も知りたる事也。說叢書損にやと思へば、二所までこそと出せり。是は近江の人とぞをしみけるとぞの字を入れて聞く可しと書きも侍る可きか。しかれども、テニハは歌の傳なれば、其道を知らず、其家にあらずして是を論ずるを、よき人聞き侍らば嘸や笑はん。

とあつて、この箇所の漣々の頭註には、

行春の注てにをは、けりけるの論甚つたなし。大廻し抔笑ふにたへたり。又てにをはは歌の傳授なれば其道を知らず、其家に非ずして是を論ずるを、よき人聞侍らば嘸や笑はんとは論ずるに堪たり。俳諧にてにをはなくば、歌にもてにをははあるまじ。

○近江の人とをしみける、此ける、里諺ヲシンダコトデアルと云事なり。

○けりとあらば近江の人とをしんだコトヂヤといふ事なり。是ほどの心かはりあり。各の論カタハライタキコトなり。をのてにをは○里諺ヂヤノニ。たとへば、琴はひくべき物につくりたる物なれば、琴をひくとはいふべからず。されども物思ひにてもありてなぐさめんとて、心の外にひくならば琴をひくとつかふ所なりと云々。「行春をあふみの人とをしみける」此結びにてよろしからん。

とある。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○行春を。

行歳には湖水氷て比叡おろしさへ吹て冷じかるべし。春を待の心ありとも、歳をおしむ感は起るまじくや。行春の難波の浦は、満干の浪の姿に風のさそひ侍らば、夏にこそ見所あるべけれ、湖水の霞わたりたる春を惜む事切なるべし。近江を人の逢ふ身と秀句にのみ心とまりて、本情をうしなふ輩には、共に風雅を語るべからず。

と見えてゐる。

四　此木戸や鎖のさゝれて冬の月　　其角　①

猿蓑撰の時に此句書おくり冬の月霜の月置わつらひ侍るよし聞ゆ衆　②
議冬の月による先師曰其角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の　③
月に定め入集させられけるはしめは文字つまりて柴戸とよめたり然　④
るに出板の後大津より先師の文に柴の戸にあらす此木戸なりかゝる　⑤
秀逸は一句も大切なりたとへ出板におよふともいそき改むへしとな　⑥

り凡兆曰柴の戸此木戸させる勝劣なし去來曰此月を柴の戸に寄て見⑦れは尋常の氣色なり是を城門にうつして見れは其風情あはれに物凄⑧き事はかりなし實も其角か冬霜にわつらへるもとはりなり⑨

校異

久①鎖—錠。　②猿簑撰の時に—猿みの撰の時に。置わつらひ—置煩ひ。聞ゆ—きこゆ。　③衆議冬の月による先師曰其角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月に定め入集させられけるはしめは文字つまりて柴戸とよめたり然るに出板の後—然るに初は文字つまりて柴戸（シバノ）と讀たり先師曰角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬月と入集せり其後。　⑤大津より—大津ゟ。柴の戸—柴戸。此木戸なり—此木戸也。　⑥大切なり—大切なれは。およふ—及ふ。となり—と也。　⑦柴の戸此木戸—柴戸此木戸。寄て見れは—寄て見侍れは。　⑧氣色なり—氣色也。うつして見れは—うつして見侍れは。物凄き事はかりなし—物すこくいふはかりなし。　⑨實も其角か冬霜に—其角か冬霜に。わつらへるも—煩ひけるも。とはりなり—ことはり也。

帝①此木戸—柴戸。鎖—錠。　②猿簑撰の時に—猿簑撰の時。此句書おくり—此句を書送り下を。霜の月—霜の月と。置わつらひ—置煩ひ。　③衆議冬の月による先師曰其角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月に定め入集させられけるはしめは文字つまりて柴戸とよめたり然るに出板の後—然るに初は文字つまりて 柴の戸と讀たり先師曰角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月に定め入集せり其後。　⑤此木戸なり—此木戸也。　⑥大切なり—大切なれは。たとへ—譬へ。およふ—及ふ。いそき—急き。となり—と也。　⑧うつして見れは—うつして見侍れは。物凄き事はかりなし—物凄くいふはかりなし。

⑨實も其角か冬霜に—角冬霜に。わつらへるも—煩ひけるも。とはりなり—ことはり也。

落②猿簔撰の時に—猿蓑の時。此句書おくり—此句を書贈り下を。霜の月—霜の月と。置わつらひ—置煩らひ。③衆議冬の月による先師曰其角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月に定め入集させられけるはしめは文字つまりて柴戸とよめたり然るに出板の後—然るに初は文字つまりて柴の戸と讀みたり先師曰角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月に定め入集せり其後。⑤かゝる—斯る。⑥大切なり—大切なれは。たとへ—たとひ。出板—出版。およふ—及ふ。いそき—急き。⑦させる勝劣なし—勝劣なし。寄て見れは—寄せて見れは。⑧氣色なり—景色なり。城門—城の門。うつして見れは—移して見侍れば。其風情あはれに—其風情憐れに。⑨物凄き事はかりなし—物凄く云ふはかりなし。實も其角か冬霜に—角か冬霜に。わつらへるも—煩ひたるも。とはりなり—理りなり。

青①鎖—錠。此ノ句ノ頭ニ「㊃猿簔」トアル。②猿簔撰の時に此句書おくり冬の月—此ノ十五字ナシ。霜の月—霜の月と。置わつらひ—置煩ひ。聞ゆ—きこゆ。③衆議冬の月による先師曰其角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月に定め入集させられけるはしめは文字つまりて柴戸とよめたり然るに出板の後—然るに初は文字つまりて柴の戸と讀たり先師曰角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月に定め入集せりその後。⑤大津より—大津よりの。此木戸なり—この木戸や也。⑥大切なり—大切なれは。たとへ—たとひ。およふ—及ふ。いそき—急き。⑦柴の戸此木戸—此木戸柴の戸。此月を—この月を。柴の戸に寄て—しはの戸によせて。⑧うつして見れは—うつして見侍れは。其風情あはれに—その風情あはれに。物凄き事はかりなし—もの凄くいふはかりなし。⑨實も其角か冬霜に—角か冬霜に。わつらへるも—煩ひけるも。とはりなり—理りなり。

贅①鎖—錠。此ノ句ノ頭ニ「㊃猿蓑」トアル。②猿簔撰の時に—猿簔撰のとき。此句書おくり—此句を書送れり下を。霜の月

一霜の月と。置わつらひ一置煩ひ。聞ゆ一きこゆ。　③衆議冬の月による先師曰其角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月に定め入集させられけるはしめは文字つまりて柴戸とよめたり然るに出板の後一然るに初は文字つまりて 柴の戸と讀たり先師曰角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月に定め入集せり其後。　⑤此木戸なり一この木戸やなり。　⑥大切なり一太切なれは。たとへ一たとひ。およふ一及ふ。いそき一急き。改むへし一改へし。となり一と也。　⑦柴の戸此木戸一此木戸柴の戸。させる勝劣なし一させる勝劣なしといふ。此月を一この月を。寄て見れは一よせて見れは。　⑧うつして見れは一うつして見侍れは。其風情あはれに一其風情のあはれに。　⑨物凄き事はかりなし一物凄くいふはかりなし。實も其角か冬霜に一角冬霜に。わつらへるも一煩ひけるも。とはりなり一理りなり。

【架】⑤先師の文一先師のふみ。　⑥大切なり一大切也。となり一と也。　⑦柴の戸此木戸一柴戸此木戸。寄て見れは一寄せて見れは。　⑧氣色なり一氣色也。　⑨實も其角か冬霜に一實にも其角か冬霜に。わつらへるも一煩へるも。とはりなり一理なり。

訓讀

此の木戸や鎖のさゝれて冬の月　　其角

猿蓑撰の時に、此の句書きおくり、冬の月・霜の月、置きわづらひ侍るよし聞ゆ。衆議、冬の月による。先師曰はく、其角が冬・霜に煩ふべき句にもあらずとて、冬の月に定め、入集させられける。はじめは文字つまりて、柴の戸とよめたり。然るに出板の後、大津より先師の文に、柴の戸にあらず、此の木戸なり。かゝる秀逸は一句も大切なり。たとへ出板におよぶとも、いそぎ改むべしとなり。凡兆曰はく、柴の戸・此の木戸、させる勝劣なし。

去來曰はく、此の月を柴の戸に寄せて見れば尋常の氣色なり、是を城門にうつして見れば、其の風情あはれに物凄き事はかりなし。實にも、其角が冬・霜にわづらへるもことわりなり。

口譯

「此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角」――わたくしどもが『猿蓑』を編纂しました時に、其角がこの句を書いてよこしまして、「下の五文字に『冬の月』と『霜の月』と、どちらを置いたらよいかと、思ひ惱んでをります。」とありました。衆議は、「冬の月」がよいとの意見でした。師翁も「この句ならば『冬の月』がよいことは論のない所です。其角ほどの者が、『冬』と『霜』とを、置きわづらふやうな句ではありません。」と、申されまして、「冬の月」と定め、集中にお加へになりました。はじめ出板された時、見ると「此」の字と「木」の字とがつまつて、「此木戸」が「柴戸」と讀めました。ところが、大津から師翁の下されたお手紙には、「この句は『柴戸』ではなく『此木戸』です。こんな秀れた句は、一句でも大切なことです。たとへ出板の後であつても、急いで改めなさい」との事でございました。凡兆は、「この句は『柴の戸』でも『此木戸』でも、さほどの勝り劣りはないやうに思ひます。」と、申しました。そこで、わたくしは答へて、「この月を『柴の戸』といふ小さな景の上に仰いだのでは、たゞの平凡な景色に過ぎません。ところが、これを『木戸』卽ち、城構への木戸とでも考へられるやうな、大きな景の上にうつして見た時は、この上もなくあはれに、ものすごくなります。全く其角が『冬』と『霜』とを置きわづらうたのも、そのものすごさを出さうと苦心したからで、もつともな事です。」と、申しました。

語釋

①鎖　開閉のしまりをする金具。錠は俗字。　②猿蓑　京寺町二條上ル丁、井筒屋庄兵衛の手によつて、元祿四年七月に出板された蕉門の俳書。乾坤二巻から成る。撰者は去來・凡兆の兩人であるが芭蕉の意見も加はつてゐる。内容は發句約四百二十章連句四巻、いづれも蕉門俳諧の最高峯を示すものである。俳諧七部集の一。　②衆議　多くの人の意見。こゝでは猿蓑の撰にたづさはつた人々の意見。　④入集　集中に入れること。　⑤出板　書物を印刷して出すこと。　⑤大津　近江國、琵琶湖の南西岸、長良山の麓にあり、附近には三井寺、滋賀大津宮址等の名所がある。大津にゐた蕉門俳人としては、尚白・木節・智月・乙州・錦江女等がある。　⑥秀逸　すぐれてゐること。こゝでは名句といふ意。　⑥一句　十七文字全體を指すのが普通であるが、またその中の五文字或は七文字を指す場合もある。こゝでは「此木戸や」といふ上の五文字のこと。　⑦凡兆　加賀金澤の人である。野澤氏（或は宮城氏・宮部氏）、初め加生と號し、別に春花園の號がある。京に出て東洞院に寓して醫を營んでゐた。蕉門屈指の作者で、『猿蓑』撰集の功の一半は、實に彼に歸すべきである。曰人の説に、「罪ある人にしたしみ、其の連累を受く」といふ。種文の『猿舞師』に「讀人しらず」として、「猪の首のつよさよ年の暮」の句があるが、これは獄中の作と傳へられる。年を越えて宥されて後、妻羽紅と共に大阪に住んだが、恥ぢて世を避けた。それからの句には、先の異彩は全く見えない。歿年は土芳の『蓑虫庵集』正徳四年午の秋の條に「はつ秋の比難波の老尼羽紅にかへして申侍る。凡兆子の事さて〳〵殘念無申斗候。事過て候へども、承候まゝなつかしさ申入候。此秋や夢とうつゝのふたり住」とあり、又『野坡吟草』に「凡兆阿圭子を悼、行春や知らば斷べき琴の糸」、又『風俗文選犬註解』に「凡兆追善、西東どのかげろふに法の糸　許六」等とあるにより、正徳四年春頃と推定される。　⑦させる　さほどの。　⑦勝劣　まさりおとり。　⑤尋常　普通。平凡。　⑧氣

色 景色に同じ。　⑧**風情** おもむき。あぢはひ。　⑨**はかりなし** 想像も及ばない。　⑨**ことはり** ことわり。道理。もつともなこと。

参考

この「此木戸や」の句の出典は『猿蓑』である。なほ『五元集』『俳諧寂栞』等にも見えてゐる。但し、『猿蓑』原本にはこの上五は、「この木戸や」と改められ、原板を埋木して訂正した痕跡が残つてゐる。

この「此木戸や」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、まづ、『蕉門俳諧語錄』には、

此木戸や錠のさゝれて冬の月　　　其角

猿簑撰の時、此句を贈り、下を冬の月・霜の月とをきわづらひ侍るよし聞ゆ。然るに始は文字つまりて柴の戸と讀たり。先師曰、角が冬・霜に煩ふべき句にも非ずとて、冬の月に定め入集せり。其後先師大津よりの文に、柴の戸に非ず、此木戸なり、かゝる秀逸は一句も大切なれば、たとひ出板に及ぶとも、急ぎ改べしとなり。凡兆曰、柴の戸・此木戸させる勝劣なし。予曰、この月を柴の戸に寄てみれば尋常の景色なり。是を城門にうつして見侍る時は、其風情哀に物凄くいふ斗なき有樣なり。角が冬・霜にわづらひけるも理りなり。

『誹諧白雄夜話』には、

此木戸や鎖のさゝれて冬の月

其角が句也。集成ぬのはじめ、柴の戸やと書たるを、蕉翁、ふかくなげき給ひしよし。すべて上手の句は、たび〳〵うち吟じ味ひても、猶餘情の淺深辨へがたし。我よりおとりたる人の句は、吟ずるよりはやく聞ゆるといへども、短冊したゝめさし出したる時、吟ずるやいなよしよしなどいふは無禮なるべし。兩三遍も打吟じ、善惡さたし侍れば、句ぬしも滿足たるべし。

とある。

次に、この章の中に「大津より先師の文に」とあるが、芭蕉は元祿三年四月幻住庵に入り、四年の春は義仲寺で迎へ、同四月十八日落柿舍に入り、五月四日まで滯在してゐる。『猿蓑』は略々この一年間の苦心の撰集である。それから芭蕉は、その出板を待たずに落柿舍を出て、大津あたりの門人の許に逗留してゐた。

ひら〳〵と擧ぐる扇や雲の峯　　芭蕉

といふ作（『桃舐』所収）は、この年の夏、大津の丹埜亭での吟であるといふ。

なほ「此木戸や」の句意に關しては『七部集大鏡』に、

去來抄に曰、冬の月・霜の月置煩ひ侍るよし、先師冬の月に定玉ひしなり。初は柴戸とよめたり。出板の後大津より先師の文に、柴の戸にあらず、此木戸なり、かゝる秀逸は一句も大切なり、假令、出板に及ぶとも改むべきよしなり。護物曰、平家物語に、福原の都より德大寺左大將實定卿、舊都の月見むとて上り玉ひて、惣門をたゝかせらるれば、內より女の聲にて、誰そや、蓬生の露打はらふ人もなき所に

と答ければ、是は福原より大將殿の御のぼり候と申す。左候は、惣門は鑰のさゝれてさふらふぞ、東の小門より入らせ玉へとまうす。

愚考、秀逸は一句も大切なりと、よき句は何にくらべても都合せるにや。高蟾が詩に、重門深鎖禁鐘後月漏驪山宮樹秋の俤にも叶へり。

と見え、『晋子發句撮解』には、

平家物語五、月見に、惣門はぢやうのさゝれて候ぞ、東の小門より入らせたまへと申しければと。又百萬が道灌山にて〽此道や繩のはられて蟲の聲、晋子を擬し來る。

とあり、『俳懺悔』にも、

キ角が、〽此木戸や錠のさゝれて冬の月、平家ものがたりのうちに、此木戸は錠のさゝれて候ぞ、こなたへ、下略。

とあるが、かく『平家物語』の中の「惣門は鑰のさゝれて候ぞ」といふ文句から、其角がこの句を思ひ附いたと考へることは、固より一案として尊重されてよいと思ふ。が、「冬の月、霜の月、置きわづらふ云々」といふ點をなほ忖度することが許されるならば、彼の上杉謙信が、遊佐彈正を七尾城に圍んだ時の作として、人口に膾炙してゐる「霜は軍營に滿ちて秋氣淸し。數行の過雁月三更」といふ詩句などに、何か通ふものがありさうにも考へられる。

それは兎も角として、この章から知り得ることは、一つは、豪放な作者として、或は、言ひ捨ての句の多かつ

たやうに傳へられる共角が、一句を作るに際して、細心の注意を拂ひ、幾度も推敲してゐる事である。次には、『猿蓑』の撰には、芭蕉も關與し、而も大いに之に力を盡してゐることである。『花屋日記』によれば、『猿蓑』の草稿が完成した時、芭蕉は無名庵に於て、始めて此の集を披講する際には、わざ〳〵鳥羽の文臺を、江戸深川の芭蕉庵から取寄せたといふ。この文臺は、細川玄旨法印から、紹巴、貞室、季吟と傳はり、當時芭蕉が愛藏してゐたものである。この事は、『花屋日記』といふ書があまり信頼出來ない爲に、その眞僞のほどは判然としないが、尠くとも、さうした說までもあるほど、芭蕉はこの『猿蓑』には力を入れてゐたのである。

なほ、餘說に亘るが、『はいかい袋』には、

雷堂云、人に句を聞するには、かり初にも物にかきつけて見すべしと嵐雪の詞なり。さなくては大事の句の眼字、自他をもきゝちがへられ、集などに、あたら句を誤る也。ばせを翁のキ角が柴の戸・この木戸など正し申されしやうに、俳かいに深切はあるまじければ也。

との記載がある。また『正風俳諧直旨傳』には「此木戸」を「柴の戸」と誤つて出しながら、次の如く論述してある。

柴 の 戸 や 錠 の さ ゝ れ て 冬 の 月

鳶 の 羽 も か い つ く ろ ひ ぬ 初 時 雨

いさゝかも題によせたる詞はべらず。此境上もなき大切の場なり。心に力なくては、旨と仕がたき所なり。所以ある時の發句に五音連聲といふ事あり。相通をもて五七五の句續をくさるなり。心詞正しく廻

りたらば、いかで聯聲に及ばん。是によりて、强て詞をまげ、相通をなさんとせば、句神をうしなひ、牛の角をためんとするに、ひとしかるべし。いかで天地鬼神の感應を得ん。又其相通にてくさる句を、親句といふものと心得たるも有り。誤なり。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○此木戸や云々。

風雅は小柴垣片折戸に月見るとのみおもふ輩は、干戈の中には心いそがはしくて、赤壁の烏鵲、衣川の綻も、吟ずる事あたはじ。造次顚沛にもよくすとかや。近くは是を心の落つきといふ。落つく時は、其業を成就す。ばせをは柴の戸の隱者たり、其角はばせをと其形位たがふといへども、共に風雅の神を知れる者也。さるによつて、此城門に感を起して、ばせをも是を賞す。其角冬霜に置煩ひしは、冬といふときは其木戸の只にきら〳〵したる所にして、霜は其笠木關貫に白く置る曉方の姿あれば、只に冬といはんよりは、今一等姿を見せんとなるべし。しかるを、ばせをの冬として霜の姿をとらざるは、城門の月にて、めづらしく見付たる姿あり、さるを霜といふ時は、風色の一つ增して、却而物凄き情の薄き句に成侍る。是句に曲節を不好して、彼、鹽鯛の齒ぐきも寒し梅の花、とも作るは、尋常の人にして、魚の棚と云流したる所、ばせをの心見るべし。

と見えてゐる。

五　うらやましおもひきる時猫の戀　越人

先師伊賀より此句を書贈て曰心に俗情あるもの一たひ口に不出とい①
ふ事なしかれか風雅是に至りて本情をあらはせりとなり是より先に②
越人名四方に高く人のもてはやす發句多ししかれとも爰に至りては③
しめて本性を顯すとなり④⑤

校異

久①おもひきる時—おもひ切時。　②伊賀より—伊賀ゟ。此句を書贈て曰—此句を書贈りて曰く。俗情あるもの—風雅有もの。一たひ—一度。不出といふ事なし—いてすと云事なし。　③風雅—風流。是に至りて—此にいたりて。本情—本性。となり—と也。是より先に—此より前。　④發句多し—ほ句おほし。爰に至りて—此に至りて。はしめて—初て。　⑤顯すとなり—顯すとはの給ひけり。

高①うらやまし—羨し。おもひきる時—思ひきる時。　②此句を書贈て曰—此句を書贈りて曰。俗情あるもの—風雅有もの。一たひ—一度。不出といふ事なし—出すといふとなし。　③かれ—彼。風雅—風流。是に至りて—此上に至りて。本情—本性。あらはせり—顯せり。となり—と也。是より先に—是より前は。　④はしめて—初て。　⑤顯すとなり—顯すとは宣ひけり。

落①うらやまし—羨まし。おもひきる時—思ひきる時。　②此句を書贈て曰—書を送りて曰。俗情あるもの—風雅あるもの。

不出といふ事なし—出すといふことなし。　③かれ—彼れ。風雅—風流。是に至りて—爰に至りて。あらはせり—顯はせり。是より先に—是より前。　④越人名—越人か名。しかれとも—然れとも。爰に至りて—爰に至り。はしめて—初めて。　⑤本性—本情。顯すとなり—露すとは宣ひけり。

【靑】①おもひきる時—思ひきる時。此ノ句ノ頭ニ「㊄猿みの」トアル。　②此句を書贈て曰—此句を書送りて曰。俗情あるもの—風雅有もの。不出といふ事なし—出すといふ事なし。　③風雅—風流。是に至りて—こゝにいたりて。あらはせり—顯はせり。是より先に—是より前も。　④しかれとも—然れとも。　⑤顯すとなり—あらはすとはの給ひけり。

【贊】①おもひきる時—おもひ切時。此ノ句ノ頭ニ「㊄猿蓑」トアル。　②此句を書贈て曰—此句を書送りて曰。俗情あるもの—風雅あるもの。一たひ—一度。不出といふ事なし—出すといふ事なし。　③風雅—風流。是に至りて—爰に至りて。あらはせり—顯はせり。となり—と也。是より先に—是より前も。　④越人名—越人か名。しかれとも—然共。　⑤顯すとなり—あらはすとはの給ひける。

【梁】①うらやまし—羨まし。　③となり—と也。　④しかれとも—しかれ共。

訓讀

うらやましおもひきる時猫の戀　越人

先師、伊賀より此の句を書贈りて曰はく、心に俗情あるもの、一たび口に出でずといふ事なし。かれが風雅、是に至りて本情をあらはせりとなり。是より先に、越人、名四方に高く、人のもてはやす發句多し。しかれども、爰に至りて、はじめて本性を顯すとなり。

口譯

「うらやましおもひきる時猫の戀　越人」——伊賀から下された師翁のお便りに、この越人の句をお書きなされて、それに添へて、「心に俗情のある者は、いくら隱してゐても、一度はきつと口に出してしまふものです。越人の風雅は、この句に至つて、遂に本心をあらはしてしまひました。」との仰せでございました。このお便りの意味は、越人は貞享三年に出板された『春の日』に、始めてその名が見えて以來、蕉門の大勢の作者の中でも、上手の一人として、既にその名は全國に高く評判され、人々の賞讃する發句も少くありません。けれども、この「うらやまし」といふやうな句を作つて、心の底には、かうした俗情を持つてゐたといふ事を、たうとうあらはしてしまひました、といふ意なのでございます。

語釋

①猫の戀　春の季題である。「猫の妻戀」・「猫交る」・「戀猫」・「浮かれ猫」・「たはれ猫」・「妹がりゆく猫」・「猫の思ひ」・「猫の妻」などともいふ。　①越人　越後の人である。越智氏、名は十藏、眉山子と號し、十哲の一人である。『鵲尾冠』に「私は越路の者に候間名も越人と申候。壯年に及ぶ比より故郷を出で流浪仕り云々」とある。名古屋に來て杜國の扶助を受け、儒を小出洞齋に學び、蕉門に歸した。芭蕉の歿後、支考の跋扈を怒つて論難し、直言を以て同門に畏怖された。歿年は不明であるが、享保十四年刊の『猫の耳』に「むかしあらの集に唐の美人の情をほくにせし事侍りぬ。今年七十有餘にて、おもひいづるまゝ、老てわかやぐ

にはあらねども」といふ戀句の詞書があり、又享保十五年の同人の歳旦帖に、「爰に無類の獨夫古稀を過ぎ云々」とあるから、享保十五年頃迄は生存してゐたことが推定される。著書には『鵲尾冠』・『不猫蛇』・『庭竈』・『猫耳集』・『甲辰歳旦帖』などがある。別に、越人を佐分利氏とし、元祿十五年歿とし、下大夫に任ぜられて、芦夕と號した云々の説は、熊本の田川鳳朗が自己の俳統を高くせんがために流布した虚説で、信ぜられない事である。②**伊賀**　東海道の西端にある國で、修して伊州又賀州ともいひ、今は三重縣に屬してゐる山國である。芭蕉の生國であり、度々芭蕉も訪れてゐるので門弟も多く、土芳を始め、猿雖・苔蘇・半殘・車來・卓袋・荻子等、伊賀蕉門三十一人衆と呼ばれた人々があつた。②**贈て**　送り與へての意。②**俗情**　俗なことろ。野卑なふぜい。風雅の反對。②**不出**　これは返り點を間につけて、「不レ出」即ち「出でず」と訓む。②**一たび口に出でずといふ事なし**　一度は口に出ないといふ事はない。即ち、一度は口に出る。なほ言換へれば、これは、言ふまいと思つていくら注意してゐても、一度はきつと口に出してしまふといふ意。③**本情**　本心。④**もてはやす**　取り立てゝほめる。ほめそやす。賞讃する。⑤**本性**　本來の性質。心の底。本性を顯すとは、今まで隱してゐた心の底が暴露して、すつかり本心を人にみられてしまふといふこと。

参　考

この「うらやまし」の句の出典は『猿蓑』である。なほ『去來文』『枇杷園隨筆』等にも見えてゐる。但し、『枇杷園隨筆』には、

思ひきる時うらやまし猫の戀

と傳へ、又、洒竹文庫藏の『去來抄評』には、この章の欄外に、「ある書にうらやまじ、とあると聞く」と見えて

ゐる。

この「うらやまし」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、先づ前述の『去來文』には、

又、越人も定家卿の猪（本ノマヽ）の戀のうたによりて、

うらやましおもひ切る時猫の戀

おもひ切時をうらやませるは、越人の秀作と被レ存候。只ほ句も色々樣々の姿御座候へども、猿みの集に翁の句御座候。可レ被レ遊ニ御覽一候。夫を一躰に心をとり候へば、却てほく仕がたく候。只跡はかなく、さらりと仕候を第一と可レ被レ遊候。句の姿はいかやうになりと被ニ仰出一可レ被レ成ニ御覽一候。

『枇杷園隨筆』には、

越人よりも狀こし候よし、一段の御事に御座候。此方へもとゞき候。發句有レ之候。

思ひきる時うらやまし猫の戀

と申越しよろしく候。

愚句

不性さや抱起さるゝ春の雨

又、こゝもと門人の句に、

庭興

梅が香や砂利敷流す谷の奥
今おもふ所に聊叶候へば、書付進候。
二月廿二日　　　　　　　　　　　　　　　　芭蕉
珍夕様

とあつて、これには「右眞蹟、三河都築和樂にあり」と追書がしてある。そして何れにしても「秀作と被ν存候」又は「よろしく候」「一段の御事に御座候」等の評言が見えるのみで、「かれが風雅、是に至りて本情をあらはせり」といふ叱責の口調は見えない。この越人の發句と同じく「うらやまし」といふ五文字を用ひた作に、

うらやまし浮世の北の山ざくら　　　　　芭蕉

といふ發句があるが、(『北の山』所収)、この二つを比較すれば、單に「うらやまし」といふ用語法のみから考察しても、越人の作は句品の點では劣つてゐる。然し、越人の句と雖も、凡庸な作家には試みることの出來ぬほどの手腕を、認めることは出來ようと思ふ。まして、これは芭蕉が眞劍な態度で編撰に關與した『猿蓑』入集の一句である。『去來抄』に記されてゐる本文は、寧ろ酷評と言ふべきではなからうか。それに、さほどの惡句ならば、何故、芭蕉・去來がこれを採錄して『猿蓑』の中に加へたのであらう。この際異本に「俗情」を「風雅」と傳へてあるのは、最も考慮すべき點であらうと思ふ。

なほ『誹諧世說』には「越人舊懷の句を吟ずる說」と題して、

尾張の越人は、蕉翁の下葉にふるき門人なりし。ある年、翁の行脚を供し侍るべきなど、やくしける事

ありしに、後にはいつしか初發心の志もさめ、わかき女など出入る事も侍りしを、翁は其終りあらざる事を憐み給へるにや、其後の行脚には、越人亭にも足もとゞめ給はず。それよりして、いつとなく、むつびもうとくなり給ひしを、越人後に悔いて、

うら山しき思ひきる時猫の戀　越人

かくはかこちけるとぞ。翁も此慚愧をよみし給ひ、後の撰集に、此句をも加入有しとぞ。實や、色は君子の戒むる所なれど、又玉の巵（さかづき）のそこなき風情もうるさし。此兩端をたゝいて、そのほどよきを知るこそ、誠に風流の人とはいふべかめれ。

と見えてゐるが、資料として信憑することは出來ないかも知れないが、興味のある記載である。

次に『七部集大鏡』には、この句に就いて次の如く說いてゐる。

去來抄曰、翁の曰、心に俗情あるものひとたび口に出ずといふ事なし。かれが風雅是に至りて本情をあらはせり。是より先に越人が名四方に高く、人のもてはやす句多し。しかれども爰にいたりて、始めて、本情をあらはすとなり。愚評、猿蓑は祖翁の精撰にして、七部の內にても花實全うして、序文さへ自筆に書給ひて、吟味を盡し給ひたる集なるに、かゝる惡評の句を入給ふべき謂なし。去來抄の論いかゞ、覺束なし。殊に此句本歌は、定家卿の「うらやまし世をも忍はずのら猫の妻ごひさそふ春の夕暮」祖翁越人を嘲り給はゞ、則定家卿をあざけり給ふにあたるなり。いや定家卿のは妻ごひなりと陳ずるか。是則摸寫變態の句法にして、始と終とを變じたるばかりにて、意味にふたつの譯はなし。見む人去來抄の

劵言にまよふ事なかれ。翁曰もあてにはならず。只その句情の本體をよく見ぬいてからの用捨たり。假令ば他の句を譽るにも、用心してほめよ、難ずるには倘々のこと也。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○うら山し云々。

人有て此句を見る時は、越人は女色の凡惱止まずと譏るべし。其譏る人は、けふ風雅をいへども、心の凡情をあらはしいはず。さとり顏にて生涯をいつはる輩多し。さるを思ひきられぬを、ありのまゝにいひ出侍るは、まことに本情をあらはしたる所にして、此うら山しとおもひ、我に我が恥たるおもひをのべ侍るは、菩提せうくわの道を得るの端たる事を知るべし。

と見えてゐる。

六　こからしに二日の月の吹ちるか　荷兮　①

凩の地にも落さぬしくれ哉　去來　②

去來曰二日の月といひ吹ちると働たるあたり予か句にはるか勝れたり　③

りと覺ゆ先師曰荷兮か句は二日の月といふものにて作せり其名目を　④

除けはさせるとなし汝か句は何をもて作したりとも見えす全躰の好 ⑤
句なりたゝ地まてとかきりたる迄の字いやしとて直し給ひぬ ⑥

校異

久①こからしに—凩に。吹ちる—ふきちる。　②落さぬ—おとさぬ。　③吹ちる—と吹ちるかと。はるか—遥か。勝れたり—勝れり。　④荷兮—兮。いふもの—いふ物。　⑤除けは—のそけは。させるとなし—させる事なし。何をもて—何を以て。作したりとも—作したるとも。全躰—全体。　⑥好句なり—好句也。地まて—地迄。直し給ひぬ—直したまひけり初は地迄おとさぬ也。

帝①こからしに—凩に。　②しくれ哉—時雨哉。　③吹ちる—吹散る。働たる—働きたる。はるか—遥。勝れたり—勝れり。　④荷兮—兮。　⑤させるとなし—させる事なし。何をもて—何を以て。作したりとも—作したるとも。見えす—見へす。　⑥好句なり—好句也。たゝ—唯。地まて—地迄。かきりたる—限りたる。直し給ひぬ—直し玉へり初は地迄おとさぬ也。

落①こからしに—凩に。吹ちる—吹きちる。　②しくれ哉—時雨かな。　③といひ—と云ひ。吹ちる—吹散る。働たる—働きたる。はるか—遥かに。勝れたり—勝れり。　④荷兮—兮。いふもの—云ふ物。　⑤除けは—のけては。させるとなし—させることなし。何をもて—何を以て。作したりとも—作したるとも。　⑥好句なり—好き句なり。たゝ—只。地まて—地まて。かきりたる—限りたる。いやしとて—賤しとし。直し給ひぬ—直し給へり初は凩の地迄落さぬなり。

青①此ノ句ノ頭ニ「因」トアル。　②凩の—木からしの。しくれ哉—時雨哉。　③はるか—遥に。勝れたり—勝れり。　④

荷兮—兮。　⑤させるとなし—させることなく。何をもて—なにを以て。見えす—見へす。　⑥たゝ—只。地まて—地迄。かきりたる—限りたる。迄の字—までの字。直し給ひぬ—直し給へり初は地まて落さぬなり。

[贄]①こからしに—木からしに。此ノ句ノ頭ニ「(大)猿蓑」トアル。　②凩の—木からしの。しくれ哉—時雨哉。　③はるか—遙に。勝れたり—勝れり。　④荷兮—兮。　⑤させるとなし—させることなし。何をもて—何を以て。作したりとも—作りたるとも。見えす—見へす。　⑥たゝ—只。地まて—地迄。かきりたる—限りたる。迄の字—までの字。直し給ひぬ—直し給へり初はは地まて落さぬなり。

[架]①こからしに—こからしの。吹ちる—吹きちる。　③吹ちる—吹きちる。働たる—働きたる。　⑤させるとなし—させることなし。　⑥かきりたる—りきりたる。

訓讀

こがらしに二日の月の吹きちるか　荷兮

凩の地にも落さぬしぐれ哉　去來

去來曰はく、二日の月といひ、吹きちると働きたるあたり、予が句にはるか勝れたりと覺ゆ。先師曰はく、荷兮が句は二日の月といふものにて作せり。其の名目を除けば、させることなし。汝が句は何をもて作したりとも見えず、全體の好句なり。たゞ地までとかぎりたる迄の字いやしとて、直し給ひぬ。

口譯

「こがらしに二日の月の吹きちるか　荷兮」「凩の地にも落さぬしぐれ哉　去來」――この二句を較べて、わたくしは次のやうに申しました。「荷兮の句は、淋しい二日月を點出して、それが『凩に吹きちるか』と働かせたところなど、わたくしの『凩の地まで落さぬしぐれ哉』といふ句よりも、餘程立派な出來であらうかと思ひます。」さうしますと、師翁の仰せには、「荷兮の句は、二日月といふものを主として作つた句です。それが適切な見附けどころであつたから、一應成功したのですが、その二日月といふものを取りのぞけば、その他のところは、さほどの苦心もして居らず、取りたてゝ賞めるほどの句ではありません。お前の句は、さういふ點から言へば、何を主として作つたとも見えない、たゞ全體として良く出來た句です。けれども中の七文字に『地まで落さぬ』と、特に『まで』と限つたのは品がありません。」と申されまして、「地にも落さぬ」と直して下さいました。

語釋

①**こがらし**　凩。木枯。淋しく冬の空を鳴らして吹き過ぎる疾い風。但し、『三冊子』には「初冬の風を木枯といふ」と限定してある。凩といふ字は、木と風とを合せて作つた字。　①**荷兮**　尾張熱田の藩士である。山本氏、武右衞門と稱し、橿木堂・撫贅庵と號し、「木枯の荷兮」と稱せられ、又「蓬左の荷兮」とも言はれた。享保元年歿、享年不詳。著書には『冬の日』・『春の日』・『曠野』・『晝寢の種』・『橋守集』・『青葛葉』・『鳥おどし』・『奥細道拾遺』などがある。許六は後年の『橋守集』で師風を嘲つた爲に、芭蕉の勘氣を蒙つたと貶したが、越人は『猪早太』にその虚妄な事を辯じてゐる。一雪の『晴小袖』に「尾州山本氏加慶」とあるのは同人であらうか。又竹人の『芭蕉翁全傳』には、森田八郎右衞門とあるが、信じ難く思ふ。　②**しぐれ**　時雨。且つ降り

且つ晴るゝ冬の冷たい小雨。　④**名目**　物事の稱。名。名稱。こゝでは「二日の月」を指す。　⑤**除けば**　取りのぞけば。省きすてれば。　⑥**好句**　佳句。このましい句。　⑥**いやし**　劣つてゐる。品がないこと。

参考

荷兮の「こがらしに」の句の出典は『曠野』、なほ『いつを昔』『眞木柱』『花見車』『ねなし草』『筆陀稿本』『溫故集』『桃の實』『俳諧寂栞』等にも見えてゐる。次に去來の「凩の」の句の出典は『いつを昔』、なほ『去來發句集』『俳諧錦繡緞』『桃の杖』『青根が峯』等にも見えてゐる。但し、『いつを昔』『俳諧錦繡緞』には、

　臨川寺

凩の地迄落さぬしぐれかな　去來

とある。

この荷兮の句に就いては、『其角十七條』の「不易流行の事」の條に、

凩に二日の月の吹散るか

萬世不易、日々の流行を知るべし。尤表裏の變化と新古の差別あり。

と見え、又去來の句に就いては、『葛の松原』に、

木枯の地まで落さぬ時雨哉　去來

尾の荷兮が、木がらしに二日の月のふきちるか、と申侍るは、今の時雨にはつのりけむ物をと、みづか

ら恥申されしを、阿叟は、さもおぼえず、他は二日の月に心をとゞめたれば、時雨は古今に變ぜざる姿ならむ。されど、迄といへる文字は未練の叮嚀なれば、唯、地にも落さぬと有べきよし、いつやら申され侍りしとかや。

と論及されてある。なほこの句は『風俗文選』の「去來が誄」(これは、「維、寶永元甲申のとし秋九月、落柿舍の去來卒す。嗚呼悲しいかな」といふに始り、「今我辭を作て彼を痛む。此次、必我番にあたらむも、又哀なるべし。あゝ悲哉や。」といふに終る全文切々たる哀傷の辭を以て綴られた去來の評傳である)の中の一節に、

あら野の時、正風體のまなこをひらきて、

湖の水まさりけり五月雨

とかや。猿蓑の選を蒙りて、不易流行の巻をわかち、後猿の新風にのぞみても、終に幽玄の細みをわすれず。

木がらしの地にも落さぬ時雨かな

ほとゝぎす啼や雲雀の十文字

とは申しけり。又いづれの仲秋にや、

岩はなやこゝにもひとり月の客

と吟じて、先師の耳を驚かし、月賞翫の第一、古今の秀逸にはきはまりたり。すべて、一代、秀逸は一兩句もてる人さへ稀なるべし。此おのこは、已に數句に及べり。

とあり、『青根が峯』の「同門評判」の一節には、

水うみの水増りけり五月雨

凩の地にも落さぬ時雨かな

杜宇鳴や雲雀の十文字

など言へる一代の秀逸の句いくらもあり。師の句たりともなか／＼上に立がたし。一人もうらやまぬものはなし。

等とも記されてある。

次に、この章で問題になつてゐるのは、句の等類に闘してである。但し、これに就いては、同じく『去來抄』中なほ「清瀧や」の句（八）、「面櫃や」の句（一〇）、「月雪や」の句（一六）等の場合にも觸れて居り、又「同門評」の部にも次の如く見えてゐる。

桐の木の凩にかまはぬ落葉哉　凡兆

其角曰、是先師の樫の木の等類なり。兆曰、しからず、詞つゞきの似たるのみにて、こゝろ大にかはれり。去來曰、等類とはいひ難し、同巣の句なり。同巣を以て作せば、予が凩の地にも落さぬ時雨かなといふ巣をかりて、瀧川の底へふりぬく霰哉と言出て、いさゝか手柄なし。されど兄より生れ勝らんは、又各別なり。

門口や牛王めくれて初しぐれ　作者不知

去來曰此句彥根より見せられたるに、其角が弱法師の門札の句と等類と評す。予、甚誤なり。其頃は少し似たる事もけば〳〵しく嫌ひ除て、一句の惣體をしらず。門といひ札といふにて、はや等類の評をなせり、いと淺間し。

牽　牛　花　の　裏　を　見　せ　け　り　風　の　秋　　許　六

一說、此句先師の葛の葉の面見せけりと等類なりと。許六曰、等類にあらず、見せけりとは詞のむすびまで也。趣向かはれり。去來曰、等類とはいひがたし、同巢の句なるべし。たとへば和歌には、花さかぬ常盤の山の鶯はおのれ啼てや春を知らん、と云に、紅葉せぬ常盤の山の小男鹿はおのれなきてや秋をしるらむ、とよみても等類にはならずとよ。俳諧には遠慮あるべき事也。

而して、これ等の結論とも言ふべきものが『去來抄』の「修行敎」の中に、

去來曰、蕉門に同巢同竈と云ふ事あり。是は前吟の鑄形に入りて作する句也。たとへば竿が長くて物につかへるといふ句を、刀の鐺が障子にさはる、或は枝がみじかくて地にとゞかぬと吟じかゆる也。同竈の句は手がらなし。されど兄より生れましたらんは又手柄なり。

と見えてゐる。

『去來抄』以外の書にも、等類を論じだものは頗る多いが、その中から代表的なものを次に列擧すれば、『三册子』には、

等類の事おろそかにすべからず。師のいはく、他の句より先、我が句に我が句、等類する事をしらぬも

の也。よく思ひ別て味ふべし。若、わが句に障る他の句ある時は、必わが句を引べし。趣向に表と裏とあり。句にもよるべしとは云ながら、大様のがして等類になさず取べし。ふるき連歌に、

思はぬ方にちらす玉章

と云前句に、

山風や枝なき花を送るらん

と有。この句、山風の枝なき花を送るこそ、全ちりたる體、前句同意の連歌と沙汰しけるよし有。又いはく、

都をば霞とともに出しかど秋風ぞふく白河のせき

都にはまだ青葉にて見しかどももみぢちりしく白川の關

此哥の事、師のいはく、いにしへより色をわかちたる作意によりて等類のがれたると云來る也。さもあるべし。今師の思ふ所、後のうた、卯月比都を出て十月に及び白川に至り、紅葉のちり敷たるを見て、前の能因法師の哥を思ひ出し、彌々その哥の妙所を感徳したりと云心より詠る哥なるべし。是等にて等類よくのがるゝと云り。

『篇突』には、

一こゑの江に横たふやほとゝぎす　翁

時鳥聲横たふや水の上　同

右兩句、甲乙自已にも分がたくや、沾徳が判にて水の上に極ると云事を廣めり。此事子細あるべし。慥に江に横たふの方勝れり。李由・許六が方へも、其をり此事申贈られたり。其返答にも、一聲の方すぐれたりとは申遣し侍る。案ずるに後代、沾徳が判にて極たると云事を、殘し給ふ故成べし。門人に對して句を定めたまふ事、いくばくかあらむ、終に其判者の沙汰なし。勿論其極まらぬ句を、廣め給へる事もなし。古兩句共に並べ給へるは、自已にも一聲の方勝れりとおもへる成べし。(略)古哥に、

日も暮ぬ人もかへりぬ山里は峯の嵐の音斗して　基俊朝臣

日くるればあふ人もなし正木ちる峯のあらしの音斗して　俊頼朝臣

此兩首いくばくの相違なし。時の人俊頼の哥勝れりといへ共、定家卿の判に、俊頼の歌は正木ちると云處いろえにて、俗のこのむ所、是新古今時代の費也とて、基俊の哥すぐれたるには極まれり。兩句の上を見るに、水の上と云詞、正木ちると云にかよひ侍れば、江に横たふの方慥に勝れり。

許六が朝顏の句を、ある人にかたりければ、亡師の葛のおもてに作例たるべしといへり。つく〴〵おもふに、少しもくるしからじ。されば師の句は、葛のうらと云古歌を返して、初て、

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜

とは言はれたり。是おのづから制也。葛のうらと云事、古今、制はなし。朝顏の句は、葛のうらに對して、新みをいひたる句也。古人、葛より外にうらといへる事なし。まぢかき鼻の先に朝顏の有事をしらぬと嘲りたる句ならん。此句韻塞に加入せしか共、此事書む爲出し侍る。惣じて等類のがれの事は、

都をば霞と共に立しかど秋風ぞ吹しらかはの關　能因法師

都をば青葉と共に出しかど紅葉ちりしく白川の關　源　頼政

右兩首、心・詞少もかはらずして、等類にあらずとは、定家卿の判也。産み所の各別成事をきゝ分て、しかも作者の手柄也とて、褒美したまふとは師說に聞けり。

『青根が峯』には、

等類をのがれる事、師說、

都をば霞とともにいでしかど秋風ぞふくしらかはの關　能因

都をば青葉とともに出しかど紅葉散りしくしら川の關　頼政

此二首心詞少しもかはらねども、定家卿の判に云、頼政が哥は、能因が哥を本歌として、心詞少しもかはらねども、是等類にあらず。頼政が哥は色を詠みたる哥也。これ産所の各別なる事を、先達能く聞分給ひて、其わかちをたて給ふは難有き判也。加樣の先達ありてこそ、俳諧も面白く侍れ。或とき、予が句に、

朝顏のうらを見せけり風の秋

といふ句せしが、をりふし丈艸へかたりければ、此句翁のおもて見せけり、の葛の句の作例たるべしといはれけり。予つく〴〵とおもふに、此句少しもくるしからず。翁の句は葛のうらと云古哥の詞をかへし、初めて葛のおもてとはいはれたり。是おのづから制也。葛のうらと云ふ事、終に哥誹諧制はなし。

予が句は葛のうらに對して、新しみをいひたる句也。古人葛より外はうらを見ぬといひけれども、葛より鼻の先に頭頸の有ける事をしらずと、嘲りたる句也。曾て翁の句に類する事なし。能因・頼政の哥は、意詞少もかはらねども、等類に落ずといへり。（略）

あら浪や佐渡に横たふ天の川

時鳥こゑ横たふやみづの上

兩句の横たふも、差なきに似たりといへども、愚あんずるに、あら海の横たふは、佐渡・越後さしむかいたる事をいはん爲也。橋をかけべしなどの俗語も、思ひ出られ侍る。ほとゝぎすの聲横たふは、もつぱら水光接ㇾ天、白露横ㇾ江のちから也。是似たる詞にて、出所大きに相違せり。此ほとゝぎすの句出ける時、予もあづまの方に居合せて、その折の文通に、

ほとゝぎす聲横たふや水の上

一聲の江に横たふやほとゝぎす

右兩句、沾徳が判に寄て、水の上の句にきはめ侍ると言ひて、色紙送られたり。今に予が所持するもの也。予翁へこの返事に、徳といふ者一生眞んの俳諧なし。かれが判覺束なし。予は只江に横たふの方まされりと返事せし也。案するに、水の上の句幽玄には聞へ侍れども、水の上はいらぬ詞なり。聲よこたふや水の上、と一言も淺さすいひつめて、しかも水の上といふへたる事を、沾徳はよろこべり。これ俗のよろこぶ所なり。江に横たふや、といふ處に、いろ〳〵のこゝろをふくめたる事をしらず。中〳〵俗

の耳には落がたし。師名人たるによつて一人の意に決し給はず、人にいはせて論をきはめ給ふ人也。予などにも言はせて、極め給ふ、毎々これ有。其外諸門人いづれも右の通也。他門の人にも言はせて、句をきはめ給ふ事度々あり。しかれども外の句は判者の沙汰なし。此句にかぎりて、沾徳が判を乞ふと、旁々ひろめ給ふ。是子細のなき事にはあるまじ。沾徳が判に極めたるといふ事を後代までいはむ爲、とかくはしるし給ふと見えたり。兩句、甲乙はいづれともわきがたかりけれども、すき・不數寄を論ずる時は、予は江に横たふのかた勝れたりと覺え侍る。いひつめずして、心のあらはれ侍る事をこめる故也。此事奥にくはしく記す。哥にも、

日も暮ぬ人も歸りぬ山ざとは峯のあらしの音ばかりして　基俊卿

日暮るればあふ人もなし正木散る峯のあらしの音ばかりして　俊頼卿

此兩首はいくばくの相違もなし。まして下句は同じ詞也。人々俊頼の哥をまされりといふとも、定家卿の判に云く、俊頼の哥は、正木散るといふ所、いろへにして俗のよろこぶ處也。是いらぬ詞也。新古今時代の貲と宣ひ、基俊の哥まされりときはむるといへり。兩句の上を見るに、水の上といへることは、正木ちると言ふにかよひ侍るとおもへば、江によこたふのかたをすき侍る也。

又、『俳諧寂栞』には、

換骨の事。

物いへば唇寒しあきの風

唇や蓼喰しあとの秋の風　許六

師弟おしならべて、唇の秋風、是にて換骨を知るべし。

朱簾暮捲西山雨

朱簾午捲西山雨

又、

鹽鯛の齒ぐきもさむし魚の店

聲かれて猿の齒白し峰の月　其角

其角曰、此後反轉して猫の齒白しとも、海人の齒いやしともあれ、發句の一體備りたらんには、等類の難ゆめ〳〵有べからず。一句の骨を得てあまき味ひを好べからず。

『玉池雜藻』には、

賴政立春の歌に、珍らしき春にいつしかうちとけてまづものいふは雪の下水。又貞室が句に、戀の叶はざる人にかはりて、打解ぬ雪や深谷の底ごゝろ。又加賀の希因が句に、梅さけばゆきにも聲や谷の水。愚も先年、打とけよ花なる春に去年の雪。此句いづれも同根より出れど、等類は遁れつべし。

と見えてゐる。

併し、等類とは結局は一句の着想・內容又は叙法が、ある程度まで類似したものを言ふのであるが、その程度は所詮各自の主觀に委ぬべきものであらう。嘗て其角は『句兄弟』を著はして、

これは〳〵とばかり花の吉野山　貞室
これは〳〵とばかりちるも櫻かな　晋子

又これより青葉一見となりにけり　素堂
又これより木屋一見となりにけり　晋子

鯛は花は見ぬ里もありけふの月　西鶴
鯛は花は江戸に生れてけふの月　晋子

等の三十九番の句合をなし、「聊かの迯道を工夫して、等類の難をのがれぬべし」と記してゐるが、等類といふ見地から言へば許し難いものであらう。但しこの書に於ける其角の意圖は、或は是等が等類でないといふことを主張したのではなく、蓋し自己の作品と並べて古人先達の句を賞揚しつゝ、換骨奪胎の技巧に於ける己の鋭い才智を見せ、且つ當時等類に關する論爭の囂しいのに對して、婉曲ながら撰者としての立場を辯護したものである。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○木がらしに云々。

月細く其形も木の葉に似て、西に見え初てはやくも落るを、風にちるのかとうたがひ見たる所、是比喩也。去來が句は、又、雨の地に落ぬといふ事はなけれど、木枯しの吹日にはら〳〵と少しばかり降事あり、地の濡るにもあらず、雨を横ざまに吹拂ひたる其さま、地にも落さぬと見るべきの風情ならん。是比喩ならざるをまされりとする事知るべし。

と見えてゐる。

七　春風にこかすな雛の駕籠の衆　荻子 ①

先師此句を評して曰伊賀の作者あたなる處を作して尤なつかしとな ②
り丈艸曰伊賀のあたなるを先師はしらす顔なれとそのあたなるは先 ③
師のあたならすや ④

校異

久①駕籠―かご。荻子―此ノ二字ナシ。　②となり―と也。　③伊賀―いか。しらす顔―しらすかほ。そのあたなるは―其あたなるは。「しらすかほなれと云々」ノ部分ニ、次ノ如ク傍註ガ附サレテアル。「あたならするゆへなり。」　④あたならすや―あたならする也。

帝①駕籠―駕。荻子―此ノ二字ナシ。　②あたなる處―化なる所。尤なつかし―本懷し。となり―と也。　③しらす顔―知らすかほ。そのあたなるは―其化なるは。　④あたならすや―あたならすや（イる）。

落①駕籠―轎。荻子―此ノ二字ナシ。　②あたなる處―仇なる所。尤なつかし―尤もなつかし。　③あたなるを―仇なるを。しらす顔―知らす顏。そのあたなるは―其の仇なるは。　④あたならすや―仇ならするなり。

青①此ノ句ノ頭ニ「㊆」トアル。　②先師此句を評して曰ー先師曰この句を評して。あたなる處ー仇なる所。　③あたなるをー仇なるを。そのあたなるはーその仇なるは。　④あたならすやーあたならするなり。

贄①此ノ句ノ頭ニ「㊆」トアル。　②先師此句を評して曰ー先師曰この句を評して。あたなる處ー仇なる所。となりーと也。③丈艸ー丈草。あたなるをー仇なるを。しらす顔ー知らす顔。そのあたなるはーその仇なるは。　④あたならすやーあたならするなり。

架②先師此句を評して曰ー先師此句を評していはく。尤なつかしー尤もなつかし。となりーと也。

訓読

春風にこかすな雛の駕籠の衆　狄子

先師此の句を評して曰はく、伊賀の作者、あだなる處を作して、尤もなつかしとなり。丈草曰はく、伊賀のあだなるを、先師はしらず顔なれど、そのあだなるは、先師のあだならずや。

口譯

「春風にこかすな雛の駕籠の衆　狄子」——師翁は、この狄子の句の批評をなさつて、「伊賀の人達は華やかな句を作るので、わたくしには、とりわけなつかしく思はれます。」と仰せられました。このお言葉をうかゞつて、丈草は次のやうに申しました。「伊賀の人達の作風の華やかなのを、師翁は今迄は御存知なくて、初めてお氣がお附きになられたやうに仰せられますが、その華やかな作風は、とりもなほさず、師翁の作風の感化ではございませ

んか。」

語釈

①**春風**　春吹く風。『三册子』に「東風、春風也。東風開レ凍と書文有。夏は南風、秋は西風、冬は北風と漢に用る也。和にさのみその沙汰なし。されども、この心遣ひはあるべきか。」とある。　①**こかす**　倒すの俚語。ころがす。　①**な**　勿。動詞の下に附いて、その動作を禁じ止めるに用ゐる語。　①**雛**　ひひな。ひいな。雛祭に飾る人形。又は、雛の節句をもいふ。

①**雛の駕籠**　雛人形の駕籠と解し、たとへば、積翠園の『去來抄評』中の意見のやうに、「雛人形のちいさき駕をかつぎたるを風吹かばたをるべし。夫をたをれぬようにと棚に置たらん云々」と見ることも出來る。併し別に雛の駕籠は雛の使とも言つて、元祿の頃二月下旬から節句前日までの吉日を撰び、雛人形を乘物に載せ、白酒の樽・雛道具などを釣臺に載せて、親戚に贈る風習があつた。その駕籠は鋲打で蒔繪をほどこし、朱の房をつけたりした。此處では後の意であらう。なほ『枇杷園句集』に士朗の「ひなの駕花のかげよりみえそめぬ」といふ句があるが、これなども雛の使の一情景と見るべきであらう。　①**衆**　一群の人々を指していふ語。駕籠の衆とは、駕籠をかついでゐる人々、又は駕籠に添うてゐる人々のこと。　①**荻子**　伊賀上野の藩士。蕉門の俳人。辻氏。（但し、芭蕉の終焉記である『枯尾華』に悼句を寄せてゐるが、それには「津子荻子」と見えてゐる）名は景方、又は景督、通稱を五平次（又甚六）といつた。享保十四年十月十日歿。享年不詳。伊賀上野の佛性山超誓寺に葬る。

②**あだ**　假初なこと。はかないこと。實のないこと。こゝでは、寧ろ華やかなことの意。　③**丈草**　尾張犬山の人である。内藤氏。幼名を林之助、後、林右衛門といひ、佛幻庵・懶窩・弘句庵の號がある。藩主成瀬家に仕へて代々重臣であつた。貞享元年、二十五歳の時、家を異母弟に讓り、指頭を斷つて世を遁れ、熊野山の玉堂和尚に參した。後、洛の史邦亭で芭蕉に見え、篤

實を以て同門に推され、世に十哲の一人と數へられ、蕉門の迦葉と稱せられた。師歿して後は、近江粟津の龍ヶ岡に庵を結び、三年の喪に服して、その佛幻庵裡に一字一石の法華經に、ひたすら師翁の供養を行つた。寶永元年二月二十四日歿、年四十三。龍ヶ岡東林に葬る。著書には『丈草句集』・『ねころび草』などがある。③**しらず顏** 知らぬ顏。又は知らない樣子。

〔參考〕

この「春風に」の句の出典は『猿蓑』である。但し『蕉門誹諧語錄』には、

伊賀の連衆は、かくの如くあだなる所を作りてなつかし。

春風にこかする雛の駕の衆　　半殘

とあるが、此處に作者名を半殘とあるのは明かに誤謬である。

この章では「伊賀の連衆のあだなる所」といふ事が問題にされてゐるが、伊賀は芭蕉の鄕國であつた關係から蕉門の人々が多く、世に伊賀蕉門三十一人衆などの稱呼もある。但しこの稱呼は其角の『枯尾華』に追悼句を寄せてゐる「伊賀連衆」の數から想到して、後人が勝手に命名したものであるらしい。而も、杜撰なことには、その『枯尾華』所收の伊賀俳人の數も實際は三十二人である。たゞ、さうした稱呼も不自然には聞えないほど、伊賀には蕉門俳人が多かつたといふ事は言ひ得る。では、所謂當代の「伊賀の連衆」とは如何なる人々であつたかを紹介する爲、『枯尾華』を次に引用しておかう。（これは斷るまでもなく、孰れも芭蕉の追悼句である）

三七日伊賀連衆追悼句

時雨るゝやおくへもゆかず筆なやみ　いが　玄虎
鶯の子鳴にくゞる樒かな　山岸　車來
聞て泣聲もとゞかぬ枯野哉　淺井　風睡
寒菊やすゝぐ佛の膳の端　山田　雪芝
夢みたか啼て飛ゆく浮ね鴨　杉野　配力
六疊に見殘されたり冬の月　岡本　苔蘇
塵塚や泪の帋に霜の華　神部や　祐甫
火燵から床のかげ繪を泪かな　京や　一鷲
なき跡や時雨てたつる古障子　佐治　洞木
手向には何をかれたる菊畠　西澤　魚日
彿や足もさゝれぬ置火燵　明覺寺　尾頭
冬桃のなき人しらぬ歎哉　山岸　陽和
山茶花の散煩はぬうき世哉　木や　我峯
借シ着つる夜半もありけり丸頭巾　大坂や　万乎
かろき身の果や木葉の吹どまり　猿　雖
芭蕉〳〵枯葉に袖のしぐれ哉　小川　風麥

帋衣の小しぼに浮むなみだ哉　植田示蜂
一生を旅の仕舞の時雨かな　井づゝや爲醉
茶のからの霜や泪のその一ッ　濱　式之
何事もなみだに成ぬ冬の菴　中尾槐市
菊かれて側に小松も凋れけり　小童長年
たよりなや風もかく迄枯柳　津子狹子
枯草に顔入て鳴男鹿かな　原田乍木
笠を泣時雨なつかし北南　井づゝや望舉
そのまゝに降を手向るしぐれ哉　宇多津
聞とりて鳥も嘆くか山寒し　大久保仙杖
歎く手の香もふるふや水仙花　松本氷固
水鳥の遠きわかれや湖の果　内神九節

なにはへの飛脚、粟津よりかへりて、亡師の遺書まいれり。

夢なれや活たる文字の村衢　いが半殘
手向せん茶の木花咲袖の下　西嶋百蔵
限あるうわさばかりや散紅葉　溝　水

はら〱と泪かれ野の薄かな　來川　烏栗

この外に伊賀蕉門としては、『三冊子』の著者として、或は伊賀蕉門の統首として土芳が居り、また藤堂家の蟬吟・探丸の父子をも數へなければならぬ。更に、杜若・良品・梢風女・園風・卓袋・一桐・澤雉・買山・利雪・順琢・一唊・木白・石口・長眉・石椎・甫文・蛙弓・裾道等、殆んど枚擧の遑もないほどである。上は城主から下は賤山かつに至るまで、一國を擧げて芭蕉に心醉してゐたらしいから、芭蕉が「なつかしく」思つたことも、當然であつたらうと想像される。

許六は『靑根が峯』の「同門評判」の一節に、伊賀の蕉門作者を評して、

伊賀の連中は、師の故鄕ゆへに、手筋はずいぶんよし。しかれども、一人切ていでゝ上洛するほどの大將の器(うつは)有る人なし。たとへば、天鼓がつゞみのごとし。近年、諸集にいづる伊賀の俳かいを見るに、打つ人に應じて鳴(なる)がごとし。支考が打つときは、大方王伯が打てるがごとし。南都の者の打つ時は、道場の太鼓にはおとれり。翁在世の時は、天鼓がいでゝ直に打つが如し。

と記してゐる。芭蕉にとつては、伊賀の俳人は單にその鄕國を同じくしてゐるといふ理由からだけでも「なつかしく」思へたに相違ない。まして、伊賀の俳人達は所謂「あだ」といふ、共通の作風を有してゐたが、これは芭蕉にとつては特に感慨深く感じられたのであらう。

「そのあだなるは、先師のあだならずや」は、「伊賀の俳人が『あだ』であるから、同じ伊賀の出の芭蕉も『あだ』である」といふ樣にも取れさうであるが、これはやはり「伊賀の俳人の『あだ』は、芭蕉の『あだ』が殘つたの

である」の意に解した方が穩當であらうと思ふ。閑寂な作風を好んだ芭蕉にも一面には、

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花　（曠　野）

眉掃を面影にして紅粉の花　（猿　蓑）

等の所謂「あだ」といふ作風も殘されてゐたのである。

こゝに「あだ」といふことを、今は華やかなことと解したが、これには更に『猿蓑』の「あだに懼るべき幻術なり」、『雜談集』の「其昔風といへる時の、正章・重頼・立圃・宗因、一句とてもあだなる句はなし」、又、『誹諧耳底記』の「東へ鳴けば東の鳥、西へ飛べば西の鳥、風雅もあだにおかしけれども」等の場合もある。その場合に從つて、解釋も相違すべきことは言ふ迄もない。又『旅寢論』には、

口惜かな、先師世にいまさば皆必一變して新風流行せん。既に迁化在て六年、いまだ新風を起し來る人なし。たま〳〵變風に似たるものあれば、近代の古人の糟粕也。ひとり伊賀の連衆、此日あだなる句の風あり。尤なつかしき姿也。おもふに是先師の教なるべし。先師の句にあだなる姿は多く侍らずといへども、先師在世の內より此姿伊賀にあり。迁化のとし、關東より道すじ尾張に立寄給ひけるに、門人當時の風を窺ひければ、たゞ子共のする事に心をつけよと宣ひけると聞り。又その前、先師深川をいで玉ふとき、野坡別に望んで、來る春の歲旦はいかに仕侍らんと尋ね申けるに、猶今の風然るべし。五六年も經なば一變して、いよ〳〵風躰輕く移り行んと敎へ給ひけるとなん。

と見えてゐるが、これに依れば「あだ」は「幼げなこと」の意に解することも出來さうである。所で、『去來抄』

の「同門評」中には、

起きざまにまそつと長し鹿の足　杜若

乾鮭と鳴〳〵行くや油づゝ　雪也

鶯の鳴て見たればなかれたか　作者しらず

去來曰、伊賀の連衆にあだなる風あり、是則先師の一體也。遷化の後ます〳〵多し。斯くのごとくの類なり。其愚なるには及びがたし。支考曰、伊賀の句はさせることなきもあれど、いやみなし。伊賀の連衆は上手なり。

と見え、『花實集』には、

其角曰、

鶯の啼て見たれば啼れた歟

起ざまに眞そつとながし鹿の聲　杜若

如レ斯伊賀の連衆に仇（あだ）なる風あり。是先師の一體なり。遷化の後、ます〳〵多し。右の類ひ也。その無智なるには及びがたし。支考曰、伊賀の句、或はさしてもなき句はあれども、いやみなるは一句もなし。伊賀の連衆は上手也。

とあり、『俳諧一葉集』の「遺語の部」中には、

春風にこかすな雛の駕籠の衆　伊賀狄子

翁、此句を評して曰、伊賀の作者あだなる處を作して、尤なつかしと也。丈草云、伊賀のあだなるを師はしらずがほなれども、其あだなるは、師のあだならずやとなん。

起ざまに眞そつと長し鹿の足　伊賀杜若

黄鳥の啼て見たれば鳴れたか　同作者しらず

うぐひすの舌にのせてや花の露　同半殘

となつて傳へられてある。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○春風に云々。

仇なるとはいかなる所をさしていふにや知らずといへども、をしていはゞ、花鳥風月に對して、其風流をいひ出るは實にして、雛人形のちいさき駕かつぎたるを、風吹かばたをるべし、夫をたをれぬよふにと棚に置たらん時に、此句を口ずさみたるは、世にいふ仇口なるべし。伊賀はばせをの舊里にして、連中も甚親しければ、ばせをの變風をおくそこなくをしゆるゆへなるべし。

と見えてゐる。

八　淸瀧や波に塵なき夏の月　芭蕉　①

先師難波の病床に予をめして曰此頃薗女か方にて〽しら菊の目に立 ②
て見る塵もなしと作す句に似たれは清瀧の句を案しかへたりはしめ ③
の草稿野明か方に有へし取て破るへしとなり然とももはや集にもれ出 ④
侍れは捨るに及はす名人の句に心を用ゐたまふ事しらるへし ⑤

校異

久①塵—ちり。芭蕉—はせを。　②めして曰—召て曰。此頃—頃日。薗女—園女。〽—此ノ爪印ナシ。目に立て—目にたて丶。　③句に似たれは—過し比の清瀧の句に似たれは。案しかへたり—案しかえたり。はしめの—初の。　④野明か方に—野明かかたに。破るへしとなり—やふるへしと也。集に—集〻に。　⑤捨るに—すつるに。用ゐたまふ—用ひ玉ふ。

帝①波—浪。芭蕉—はせを。　②難波の病床に—難波病床に。めして曰—召て曰。此頃—頃日。薗女—園女。〽—此ノ爪印ナシ。しら菊—白菊。　③句に似たれは—過し頃の句に似れは。案しかへたり—案し替たり。はしめの—初の。　④有へし—あるらん。破るへしとなり—やかるへしと也。集に—集〻に。　⑤捨るに—捨に。用ゐたまふ—用ひ玉ふ。

落①波—浪。　②めして曰—召て曰。此頃—頃日。薗女—園女。〽—此ノ爪印ナシ。しら菊—白菊。目に立て—目にたて丶。　③句に似たれは—過し頃の句に似たれは。はしめの—初の。　④有へし—有ん。然とも—然共。はや—早や。集に—集々に。もれ—漏れ。　⑤捨るに—棄るに。用ゐたまふ—用ひ給ふ。しらるへし—知るへし。

青①波—浪。芭蕉—はせを。此ノ句ノ頭ニ「㈥笈日記」トアル。　②めして曰—召て曰。此頃—頃日。薗女—園女。方にて—

かたにて。へ ー此ノ爪印ナシ。しら菊ー白菊。 ③句に似たれはー過し頃の句に似たれは。はしめのー初。 ④野明か方にー野明か方にや。有へしーあらん。破るへしとなりーやふるへし。然ともー然れとも。集にー集々に。 ⑤及はすー及すと也。用ゐたまふー用玉ふ。

贅①波ー浪。芭蕉ーはせを。此ノ句ノ頭ニ「㈥笈日記」トアル。 ②めして曰ー召て曰。此頃ー頃日。薗女ー園女。へ ー此ノ爪印ナシ。しら菊ー白菊。 ③句に似たれはー過しころの句に似たれは。案しかへたりー案思ひかへたり。はしめのー初の。 ④野明か方にー野明(マヽ)か方にや。有へしーあらん。破るへしとなりーやふるへしとなり。然ともーしかれとも。集にー集〳〵に。 ⑤出侍れはー出るは。及はすー及すと也。句にー句〳〵。用ゐたまふー用玉ふ。しらるへしーしるへし。

架②めして曰ーめしていはく。 ④となりーと也。然ともー然れとも。 ⑤出侍れはー出て侍れは。捨るにー捨つるに。用ゐたまふー用ゐる。

訓読

清瀧や波に塵なき夏の月　　芭蕉

先師、難波の病床に予をめして曰はく、此の頃、薗女が方にて「白菊の目に立てて見る塵もなし」と作す句に似たれば、清瀧の句を案じかへたり。はじめの草稿、野明が方に有るべし。取りて破るべしとなり。然れども、はや集にも出侍れば捨つるに及ばず。名人の句に心を用ゐたまふ事しらるべし。

口語

「清瀧や波に塵なき夏の月　芭蕉」――師翁が大阪で御病氣になられてから後のことです。その病床に、わたくしをお呼びになつて、仰せになりますには、「この頃、園女の家で『白菊の目に立てて見る塵もなし』といふ句を作りましたが、曾て作つた『清瀧や波に塵なき夏の月』といふ句は、この白菊の句と、想が似通うて居りますから、清瀧の句を作りかへて、『清瀧や波に散り込む青松葉』と改めました。初めの『波に塵なき夏の月』となつてゐる草稿が、たしか野明の許（もと）にあつた筈ですから、破り捨てて下さい。」とのことでございました。けれども、この句は既に『其便（そのたより）』を初めとして、諸書に出てしまつて居りますから、今更らそれを捨てようにも、間に合ひませぬ。この一つの事柄からも、師翁ほどの名人でさへ、どれほど一句に苦心をお拂ひになるかといふことを、知り得ると存じます。

語釈

①**清瀧**　京都の北西にある淸瀧川のことで、保津川の一小支流である。其の峽谷に高尾・槇尾（まきのを）・栂尾（とがのを）等の勝地がある。　②**難波**　今の大阪地方の舊稱で、浪速・浪華とも書く。新羅征伐後船舶難波に輻湊したので、難波津、又難波大津ともいふ。大阪にゐた蕉門俳士には、舍羅・諷竹・車庸・芙雀・一有・園女・芦角（諸撰集に或は京、或は大坂と肩書してある）等がある。難波の病床とは、元祿七年九月晦日に、芭蕉が大阪で急病に罹り、南久太郎町の花屋仁左衞門といふ者の裏座數を借り受けて、臥せつてゐた時の事を指すのである。　②**園女**　伊勢松坂の人、渡會（奏姓）師貞の女『菊の塵』に父師貞の句が收められてある。）で、山田の斯波一有の妻となる。初め杉本美津女（望一門）に師事し、元祿二年芭蕉の敎示に接した。同五年、一有と共に大阪に出

て、夫婦で前句附の點者などをしてゐたが、夫の歿後よく貞操を守り、薙髮して智鏡尼と號した。後年江戸に下り深川に住み、眼科を業とし、俳諧は其角に師事した。享保十一年四月二十日歿、年六十三。深川靈岸寺開山堂に葬る。撰者に『菊の塵』・『鶴の杖』等がある。　④**草稿**　原稿。したがき。　④**野明**　京都の郊外、嵯峨の人である。初めは鳳仭と號して、常牧の門に遊んでゐたが、後に蕉門に歸した。芭蕉に「その名の仭を厭ふべし」と注意されて、野明と改めたといふ。『續猿蓑』に、「平押（ひらおし）に五反田くもる時雨かな」の一句が收められてある。姓、歿年不詳。　④**集**　撰集の意。俳句を集めた書のこと。　⑤**心を用ゐたまふ事**　御苦心をなさること。

【參考】

この「清瀧や」の句の出典は『其便』・『陸奥衛』である。但し、『其便』には、

嵯峨に籠りて

清瀧や浪に塵なき夏の月　　芭蕉

とあり、『陸奥衛』には、この前書が「嵯峨に籠りし比」と見え、「六月や峯に雲置あらし山」の句の次に並記されてある。又、この「清瀧や」の句と關聯した句に、『笈日記』には、

大井川浪に塵なし夏の月　　芭蕉

の句、及び、

清瀧や波にちり込む青松葉　　芭蕉

があるが、これは『翁草』には、

清瀧眺望

清　瀧　や　波　に　散　込　ム　青　松　葉　　芭　蕉

とあり、この句は更に『泊船集』にも見えてゐる。又、『俳諧栅さがし』には以上の二句の外に、

清　　瀧

清　瀧　の　水　汲　よ　せ　て　と　こ　ろ　て　ん

清　瀧　の　波　に　あ　ら　ふ　や　夏　の　月

の二句が見えるが、この中「心太」の句は『笈日記』には、

野　明　亭

清　瀧　の　水　汲　よ　せ　て　と　こ　ろ　て　ん　　芭　蕉

とあり、『泊船集』には、

清　瀧　の　水　く　ま　せ　て　や　と　こ　ろ　て　ん　　芭　蕉

清瀧の水くませてやところてんとありしは、野明に引さきすてさせたまふ。笈日記に、水くみよせてといふは、あやまりなるよし。

と見えてゐる。又次の「波にあらふや」の句は、『俳諧一串抄』『芭蕉句解参考』等にも見えてゐる。

次に「白菊の」の句は『木がらし』『笈日記』『菊の塵』『泊船集』『後れ馳』『春と秋』『得々庵記』等の諸書に

見え、殊に『菊の塵』には此の句を立句として、園女亭で興行した次の如き歌仙一巻が揭げられてある。

白菊の目に立て見る塵もなし　芭蕉
紅葉に水をながす朝月　園女
冷〳〵と鯛の片身を折まげて　諷竹
何にもせずに年は暮行　渭川
小襖に左右の銘は煠びたり　支考
みやこをちつて國〳〵の旅　惟然
あらたまる秤に銀をためてみる　洒堂
袖ふさぐより親の名代　舍羅
垣越にちよつと盥の禮いふて　何中
普請のうちは小屋で火を燒ばせを
歸らぬにきはまる娵のさめすまし　その女
酒買てのむ早稻のすり初　諷竹
はれ〴〵と月の出かゝる杉の森　渭川
夜詰ひけたる町宿の秋　支考
とれたやら濱から通る肴籠　惟然

彼岸のぬくさ是でかたまる　酒堂
青芝はことにもえたつ奈良の花　ばせを
出がはり時の一歩たしなむ　何中
通ひ路も横にならねばはいられず　諷竹
しどろになをす奥の空櫃　渭川
あさ〱と色うつくしき重の葉　酒堂
雪のかへしの北になる風　その女
柴賣の隣の小ども連だゝせ　支考
淸藏口に夜のしらむ也　惟然
上下の橋の落たる川の音　何中
うへ田の中を鴻ののさつく　ばせを
小がまへに不斷をかるく打なぐり　その女
嶋の仕出しのはやる帶機　酒堂
月かげも寒く師走の夜の長さ　諷竹
杖一本を道のわきざし　何中
野鴉のそれにも袖のぬらされて　ばせを

ぜのちからに浪ほしおる　　　　　　　　　團川

餅ちぎる鍋のあかりの賑かさ　　　　　　支考

敷かぬ畳の積でかさなる　　　　　　　　その女

田の水の注連に流るゝ花盛　　　　　　　西堂

卯のさし木みどりのび行　　　　　　　　惟然

曾集の發句は人口に膾炙された句であればある程、諸書によつてその傳へを異にするのが例であるが、この「清瀧や」の句の如きもその一例といふべきであらう。

この「清瀧や」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、「旅寝論」には、

清瀧や波にちりなき夏の月　　　　先師

先師、此句は清瀧の初の吟也。師易置し給ふ刻、我を呼て、此日その女かたにて、

白菊の目に立て見る塵もなし

と云句を作すれば、清瀧の句を吟じかへたり。わすれず書とゞめ野明か方に殘し置、草稿は破り捨べしとて。

清瀧や波にちりこむ青松葉

此句をかたり給ふ。是らはあながち語るべきほどの事には侍らねども、名人の心を用ひ給ふ事、見るべし。されば、浪にちりなきの句は、外に沙汰すべき句にも侍らぬを、師の句といへば門人あらそひ出し

て、集〳〵に見へ侍る。誠に師の本意を破るも淺間し。

『青根が峯』には、

清　瀧　や　波　に　塵　な　き　夏　の　月　　翁

白　菊　や　目　に　た　て　ゝ　見　る　塵　も　な　し　　同

右兩句、塵なきといふ事、後にむづかしとて、波に散込む青松葉、とは案じかへられたりと聞ゆ。退て案じ見るに、此塵、志の趣ける所同じさまなり。故にあんじかへられたるとは見えたり。西行上人も、清瀧川の水のしら波、とはつよくよみたまふ也。波に散込む青松葉と、涼しく師の言ひ給ふつよみ、西行の哥（註。『新古今和歌集』に「ふりつみし高嶺のみ雪とけにけりきよたき川の水のしら浪」とある。）におとれりとえ見ず。

然るに、この「清瀧や波に散り込む青松葉」は「大井川浪に塵なし夏の月」の改案であるといふ、もう一つの說が存在する。卽ち、『三冊子』に、

清　瀧　や　浪　に　ち　り　込　靑　松　葉

此はじめは、大井川浪にちりなし夏の月、と有。その女が方にての白菊のちりにまぎらはしとて、なしかへられ侍る也。

と土芳は記し、また『笈日記』に、

九日。服用の後、支考にむきて、此事は去來にもかたりをきけるが、此度嵯峨にてし侍る大井川のほつ句おぼえ侍る歟と申されしを、あと答へて、

大井川浪に塵なし夏の月

と吟じ申ければ、その句、園女が白菊の塵にまぎらはし。是もなき跡の妄執とおもへば、なしかへ侍るとて、

清瀧や波にちり込む青松葉　翁

と支考は述べてゐる。

たとへ「清瀧や」の句ではなくて「大井川」の句であるにもせよ、これらの句と「白菊の」の句とが同案の爲に、前の方を取消さうと、それも既に危篤の病床にありながら、弟子に命じた芭蕉の心持は、私共が大いに味つてみるべき點であらう。句の表面からのみ見れば、この兩句の類似は、單に「塵なし」といふ語だけであるにも拘らず、芭蕉にとつては死よりも重大であつたといふ事は、考へても尊いことである。

『芭蕉翁反古文』の「九月二十六日」の條には、

廿六日。園女亭也。山海の珍味をもて饗應す。婦人ながら禮をたゞし敬屈の法を守る、貞潔閑雅の婦人なり。實は伊勢松坂の人とぞ。風雅は何某に學びたりといふ事をしらず。岡西惟中が備前より浪華にのぼりし時、惟中が妻となる。其時より風雅の名ます〱高し。惟中が死後、江戸にくだりて、其角が門人となる。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁

紅葉に水を流す朝月　園女

歌仙一卷袖草子にあり。連衆九人、哥仙あり。別記。惟然記。

とあり（註。「惟中が妻となる云々」この說は誤傳である。）、飛んで「十月六日」の條には、

六日。天氣陰晴きはまらず。朝の食、入麪三箸。前夜終宵寐入たまはず。暫く睡眠したまふ御目ざめより、去來をちかくめして、先の頃、野明が方に殘し置侍りし、大井川に吟行せし句、

大堰川波にちりなし夏の月　翁

此句、あまり景色過たれど、大井川の夏氣しき、いひかなへたりとおもひゐたりしが、清瀧にて、

清瀧や波にちりこむ靑松葉　翁

と作りし、事柄は變りたれど、同巢なりと人のいはんもいかゞなれば、大ゐ川の句は捨はべらんと汝に申たり。しかるに、頃日園女に招れて、

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁

と吟じたり。是又同案に似て句の道筋おなじ。それ故、前の二句を一向に捨はべりて、白菊の句を殘しおき侍らんとおもふ也。汝が意いかん。去來泪をうかべ、名匠のかく名を惜み、道を重じたまふ有がたさよ。纔句一章に、さまで千辛萬苦したまふ御病腦の中の御骨折、風雅の深情こそ尊とけれ。眼あるもの、何者か、此句を同案・同巢と見るべき。恐ながら此句を同案・同巢などゝ申ものは無眼人と申ものなり。其ゆゑは此句々、景情別々備りて、句意を見る時は、三句ともに別なり。かるがゆゑに、我は句の意を目に見て、句の姿を見ず。靑苔日ニ厚シテ自ラ無シレ塵。これはこれ、隱者の高儀をほめたる語。今は園女が

いまだ若くして、陌上桑の調（みさほ）あるをほめたまひたる吟なり。意も妙なり、語も妙なり、世上此句を見るもの、園が清節をしらん。波に塵なしの語は、左太仲が、必（シモ）非二絲（ト）與一竹（ニハ）、山水有二清音一といへる絶唱もおもはれ、園が二夫にまみえざる貞潔と、大井・清瀧の絶景と、二句の間相たがつて、感じてもあまりありと申せしかば、師も機嫌よくおはしけり。去來記。

と見えてゐる。

なほ『はいかい袋』には次の如き記載がある。

古翁、むかし終焉のちかき比ならむ。かのその女が家にあそびて、しらぎくの目にたてゝ見るちりもなし、と詠じ玉ひし其墨痕や、なにはに終のかたみとなりてけるを、さらにそのゝちの行衛をしらず。されば、心有限はしたひ、ひそかにおしみあへりけるに、ちか比はからず大江老人の手に入しこそ、誠に風雅のあつきがいたす所か。しかも支考のおく書まで添ひて、實も無雙の珍寶と稱すべし。こゝにおゐてもちぬしの叟、ばせを翁の百廻忌をかねて、其しら菊の會をまうけ、この圓成精舍に終日の法會を催さるとて、各ちからうまいりて拜覽するに、紙上うるはしくて、すみいろ猶かはかぬ如し。吾聞く、公の殘菊の宴も故有て、このかんな月に行るゝ例とかや承る。今此會のおのづから其時にあへりけるよと、人々さゞめきあひぬ。

しのぶるやいやしらぎくのむかし文　　不二菴　桃居

支考おく書

此一章は先師浪花におはして、その女が招請にこれを申されし句也。さるは甲戌の秋長月末の事なるべし。これを生前の筆のなごりとおもへば、ことさらになつかしく、今この事をこゝにかきつけたるなり。

元祿ひのとうしの年　　東花坊

一軸のうらに、

早稻の香の高詠をのこし玉ふ有磯なる右吉亭にひめ置し事、とし有。誠にこの一軸、そのかみのやの推敲ありしは、その女が佳會の後成べし。

寛政子晩春　　闌更

寛政五年癸丑十月廿七日興行、百廻忌後宴於大江隣江戸衆と

六吟哥仙行

しらぎくの後しらぎくのちりもなし　　完來
仰げばいまもそらにあさ月　　大江丸
たび衣露の岡のべ杖曳て　　哥白
外にひゞくのはたがこだまぞも　　午心
まちかひのうぐひす聲はやせながら　　馬肝
冬のひなたのあさかげり行　　完來

張わたすしゐしあやなき古絹に　大江丸
うしろ姿は十九のぞき尼　哥白
燒香に忘れぬ奇楠も身だしなみ　午心
紀の山二日さとにやう〱　馬肝
挽すてゝ松の木臼の下淸水　完來
三たびゆめ見る陵のあと　大江丸
くすり喰餘寒の床に月は入　哥白
みな札提て進上の花　午心
すがた鏡も讓る觀世が春舞臺　馬肝
ゆあみする間にかゆるたぶさき　完來
名のつかぬ雨うち過る山のたわ　大江丸
蜀魂飛てさひきひと聲　哥白
ひらけたる自問自答の高笑ヒ　午心
きぬ引裂ておもひたつ戀　馬肝
かぶろ皆寐よとの鐘の大恩寺　完來
雪けちらかす歲末の供　大江丸

湯豆腐の湯に腸をそゝぐらむ　完來

津で目のさめし太々のゆめ　午心

シヤタラの糸のほつれの物うさに　大江丸

筆うち震ふ丹精の聲　哥白

成佛の召やふたゝび泣ぬ也　馬肝

夜の眞葛のうらしろきつゆ　完來

風さはぐ心に滿つる月もみつ　午心

身はうつせみの笠島の神　大江丸

盗人のかへした古き片鐙　哥白

わらうつ槌も重きしわ腕　馬肝

さいばらのにしの御寺とうたひつゝ　完來

日は午にめぐる七曲の山　午心

しらぎくのめうかう炷む花の座よ　不二

もゝとせしたふ蝶とりのあと　執筆

右

しら菊の一軸傳來の由緒

一軸は元祿七年九月廿七日、會の一順にて杉はら紙のきれなり。連衆は、

芭蕉　支考　惟中　蘭女　諷竹　涉川　何中　惟然　舍羅　洒堂　十人。

其折のかたみなればと、後に支考かたおく書を望遣しながら、惟中は死し、蘭女も江戸へ下りて死したれば、其まゝ支考が手より有磯の人にあたへぬとおもはるれ。この人と闌更とは一門なりしほどに、常はこの所へ行て、此一軸をもよく見おぼへたりしが、いかにして越前へはつたはり、又浪花へもどり玉ひしにやと、半化もふしぎに申されける。これもと越前よりは、澤田むめ三といへる人のもとへ來たりしが、浪花に有べきものとて、むめみつ、もとめてさしをきしが、此人は狂哥のすき人、我らははいかいの好ものなればと、夫〳〵のものにかへて我らにつたへ侍りしが、むめみつも寛政十とせの春むなしくなり被申、ばせを堂のあるじもおなじ夏身まかり申さる。かさね〳〵のかたみのしなにこそあれと、こゝに斷しるしぬ。

ある人の云、去ぬる比遊行寺のうちにうづもれ有し位牌をもたづね出し、寸馬のぬしと二人して、花やがうらのあとをもあらはし、八十年たえてなかりし處にて、はいかいの法會をつとめ、遊行寺に安置せし木像、ひと度は江戸にありしをも尊み守りて、上がたへのぼせ申されし事抔、神靈もうれしくや覺しけむ、この一軸のこなたへ來ませるものならむと被申けるにぞ。いか様、故ある事にもやあらんかしと、かたへの人も申されき。

又ある人、此一軸の入しはこのふたに、

たぐひ有とたれかはいむ末匂ふあきよりのちのしらぎくの花

これは是、寛文の帝の御製にして、細川家の奇楠の御銘なり。次手おもしろければとて、したゝめ申されし。

其外遊行寺法要之式百員のはいかい、又雪中・完來、義仲寺にての獨吟抔は、雨庵の一集あるべけつかうなれば略」爰。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○清瀧や云々。

笈日記に、ばせをの物語をのせて曰、此事は去來にも語置けるが、此度嵯峨にてし侍る大井川の發句覺侍るかと申されしを、あと答て、大井川浪に塵なし夏の月、と吟じ申ければ、其句園女が白菊の塵にまぎらはし、是もなき跡の妄執とおもへば、なしかへ侍るとて、清瀧や浪にちり込靑松葉と見へたり。予按ずるに大井川の句よりあしからんには、なしかへたりとはいはじ。まされる所有ればなるべし。されば、今句を作らば、此所に眼を付べき手本たるべし。

と見えてゐる。

九　凉しさの野山にみつる念佛哉　去　來　①

是は善光寺如來の洛陽眞如堂に遷座在し時の吟也はしめの冠はひい ②
やりとゝ置たり先師曰かゝる句は全躰おとなしく仕立るものなり五 ③
文字しかへてよしとて風薫と改め給ふ後猿簑の撰場には再改て今の ①
冠にそせさせける ⑤

校異

【久】①涼しさの―すゝしさの。　②是は―此は。在し時―有し日。吟也―吟にて。はしめ―初。　③ひいやりとゝ置たり―ひいやりと也。全躰―全体。ものなり―もの也。　④しかへてよし―しかるへからす。風薫―風薫る。改め給ふ―改め玉ふ。後猿簑の撰場には―後猿撰の時。再改て今の―再ひ今の。　⑤冠にそせさせける―冠に直して入句まし〳〵けり。

【荷】②如來の―如來。遷座―迁坐。在し時―ありし時。吟也―吟にて。はしめ―初。　③ひいやりとゝ置たり―ひいやりと也。ものなり―もの也。　④しかへてよし―然へからす。風薫―風薫る。改め給ふ―改め。後猿簑の撰場には―後猿簑撰の時。再改て今の―再ひ今の。　⑤冠にそせさせける―冠に直して入句まし〳〵たり。

【落】①みつる―滿る。念佛哉―念佛かな。　②如來の―如來。遷座―遷坐。在し時―有し時。吟也―吟にて。はしめ―初。　③ひいやりとゝ置たり―ひいやりとなり。かゝる―斯る。仕立る―作す。　④しかへてよし―然るへからす。風薫―風薫る。後猿簑の撰場には―後猿蓑撰の時。再改て今の―再ひ今の。　⑤冠にそせさせける―冠に直して入句まし〳〵けり。

【青】①涼しさの―すゝしくも（イさの）。念佛哉―念佛かな。此ノ句ノ頭ニ「㊈ソクサルミノ」トアル。　②如來の―如來。遷座―迁座。

在し時―有し時。吟也―吟なり。はしめ―初。　③ひいやりとゝ置たり―ひいやりとなり。ものなり―もの也。　④しかへてよしとて―然るへからすとて。風薰―風薰る。改め給ふ―改め。後猿簑の撰場には―後猿簑撰のとき。再改て今の―再吟の。　⑤冠にそせさせける―冠に直して入句ましく〳〵たり。

【賛】①涼しさの―涼しくも。念佛哉―念佛かな。此ノ句ノ頭ニ「㊈續猿」トアル。　②如來の―如來。遷座―迁座。在し時―ありし時。吟也―吟なり。はしめ―初。　③ひいやりとゝ置たり―ひいやりとなり。仕立る―仕置る。ものなり―物也。　④しかへてよし―しかるへからす。風薰―風薰る。改め給ふ―改め。後猿簑の撰場には―後猿蓑の時。再改て今の―再吟の。　⑤冠にそせさせける―冠に直して入句ましく〳〵たり。

【栞】②遷座―迁座。吟也―吟なり。　③ひいやりとゝ置たり―ひいやりとと置たり。ものなり―もの也。　④風薰―風薰る。再改て今の―再改めて今の。

【訓讀】

涼しさの野山にみつる念佛哉　去來

是は善光寺如來の、洛陽眞如堂に、遷座在しし時の吟也。はじめの冠は、ひいやりと置きたり。先師曰はく、かゝる句は、全體おとなしく仕立つるものなり。五文字しかへてよしとて、風薰ると改め給ふ。後猿蓑の撰場には、再び改めて、今の冠にぞせさせける。

【口譯】

「涼しさの野山にみつる念佛哉　去來」――この句は善光寺如來の出開帳が、京都の眞如堂で行はれました時、わたくしの作りました句であります。初めは、上の五文字を「ひいやりと」と置きました。ところが、この「ひいやりと野山にみつる念佛かな」といふ句を、師翁が御覽になりまして「かやうな句は、奇を衒つた言ひ方をしないで、全體を穩かに作らなければいけません。上の五文字の『ひいやりと』を、もつと穩かに作り變へれば、よくなりませう。」と、申されました。そして、それを「風薫る」と、改めて下さいました。後に、『續猿蓑』の句をお撰びなさいました時には、この「風薫る」といふ五文字を、また改めて、「涼しさの」と、今のやうに直して下さいました。

語釋

①**念佛**　ねんぶつ。專心佛を念じて名號を唱へること。　②**善光寺**　信州長野の北隅大峯山の麓にある。三國傳來の阿彌陀佛を安置する寺で、天台・淨土兩宗並立である。本尊は欽明天皇の朝百濟から我國に傳はり、蘇我稻目、後、尾輿等がこれを向原寺に安置したが、疫癘流行のため物部氏によつて難波堀江に投棄されたのを、推古天皇の十年、信濃の人本多善光なる者が、これを同國伊奈郡麻績里に安置し、皇極天皇元年、更に今の地に移したものであると傳へてゐる。　②**洛陽**　支那河南省の都市で、周が此の地に都を定めて以來屢々京師となり、唐・五代の頃までは繁盛の都城であつた。このことから轉じて、洛陽といへば都のことを指す樣になつた。此處では勿論京都のことである。　②**眞如堂**　京都市上京區淨土町にある眞正極樂寺の通稱である。正曆三年圓融天皇の中宮東三條院詮子の離宮を寺としたもので、天台宗、戒算の草創である。文明九年京都一條に移り、同十年足利義政舊地に堂宇を營んだ。今の堂宇は寶永二年の再建に係るといふ。　②**遷座**　座を他へ遷し奉ること。普通は、

この言葉は、神または天子に對して用ひるが、こゝでは佛に對して用ひてある。こゝに、善光寺如來が、眞如堂に遷座したといふのは、言ふまでもなく出開帳（でかいちやう）の場合である。　②吟　吟詠。發句と同じ。　②冠　發句の場合は、上の五文字を指す。　③仕立る　作り上げる。こしらへる。　④風薫る　季夏の晴れた日、東南から吹く強くない風で、薫風ともいふ。　④後猿簑　『續猿簑』のこと。『俳懺悔』に、大江丸が山本羅川の七周忌の手向の句に「はや七部のち猿みのにしぐれけり」との用例も見えてゐる。『續猿簑』は元祿十一年、即ち芭蕉歿後五年を經て、京都の井筒屋庄兵衛の手によつて梓行された蕉門の俳書。俳諧七部集の一である。半紙本の上下二册に、發句約五百二十章、連句五卷が收められてある。本書の撰者については、古來とかくの說がある。　④撰場　撰び定める時の場所をいふ。撰句をする所の意。

〔參考〕

この「涼しさの」の句の出典は『續猿簑』、なほ『去來發句集』等にも見えてゐる。但し、『續猿簑』には、

洛東の眞如堂にして、善光寺如來開帳の時

涼しくも野山にみつる念佛哉　　去來

とあり、『去來發句集』には、この前書が「洛東眞如堂にて善光寺如來開帳の時」となつてゐる。なほ、『俳諧或問』には、

涼しくも野山にみつる念佛かな　　去來

初の冠有、ひいやりとなり。先師曰、かゝる句は全躰おとなしく仕立る物なり。五文字然るべからずとて風薫ると改め、後猿みのゝ時再吟の冠に直して入句ましく〳〵たりと見えたり。後猿みのは則猿簑成べ

し。此續猿みのに出たり。去來・風國・許六・支考が說を以て、是をとるべし。後人の說用ひがたし。又其續猿簑の內にても取捨有る事は、續猿みのに不限、世々の集に取捨有る事勿論なり。

とある。こゝに『後猿簑』を明かに『續猿簑』に改めてゐるのは正しいが、例へば『七部集大鏡』の如く、

古書に曰、初の冠はひいやりとゝ置けるを、先師曰、かゝる句は、全体おとなしく仕立るものなりと有て、風薰ると改め玉ふ。後に猿蓑撰集の時に、又あらためて、凉しさのとせさせ玉ふと云々。

と、『後猿簑』を「後に猿蓑集云々」と改めて記したのは誤謬である。

さて、この項の記述によつて、この『後猿簑』、卽ち『續猿簑』の撰には、『猿蓑』の時と同じ樣に、芭蕉はよほど關係してゐることを知り得たのであるが、一方に於て、『續猿簑』は支考が僞撰したといふ說（芭蕉が手がけた書のやうに裝つて、實は支考が編撰したものであるといふ說）が行はれてゐる。『續猿簑』の支考僞撰說を唱へ初めたのは、越人の『不猫蛇』に於ける所論などが、先蹤をなすものらしいが、それ以來、多くの人々によつて、この一事は支考を攻擊する第一の眼目とされた。その所論に從へば、成るほど『續猿簑』には、支考の勢力が集中に目立ち過ぎる。例へば、上卷の卷頭には、支考の「今宵賦」と題する文が揭げられ、下卷秋の部の、芭蕉の名月の句の後には、「支考評」が收められてゐたりするのは、甚だしい異例と言ふべき點に相違ない。その他、支考僞撰說を唱へる人々の論據は、非常に多く、こゝにはその一々を紹介してゐる遑はないから、その中の代表的な議論と思はれる『芭蕉葉ぶね』の所說を次に引いて置かう。

續猿簑集を贋作といふ事、是あながちに贋書といふにはあらず。翁、編央にして難波へ下り、寂し給ふ

ゆゑに首尾をも遂給はず。草稿伊賀の無名庵にありしを、支考行て編續したり。尤己れが名のもれたるを悔て、哥仙のうち、他の名をおのれが名にもりかへ、或は名月二句の評ならびに今宵の賦などこしらへ入たり。良夜には支考は伊勢にありて、廿日の日伊賀へは來れり。翁死後の編繼なれば、良夜にも居合たるやうにして、已が勝手にしたる也。さればこそ、猿蓑にもれたる霜の松露哉、といふ句の巻は、續猿簑の集名に於る發句故、第一番に編置給ひしを、猥に繰下げなどしたる故、此句何の譯やらしれぬ句と成たり。さりながら、俳諧は翁の俳諧に相違なく、こと〴〵く斧正ありて、自筆の中清書ならびに斧正の草稿ともに秘存せり。俳諧をも味ひ見よ。支考が手に及ぶ力にあらず。付肌もかれが筋ならず。將、門人達の句は、翁死後の編繼なれば、滅後の句も何ごゝろなく入足したりと見ゆ。こゝに支考ひとつ不屆のはかりごと有り。此集おのれが名を顯し、翁のこゝろざしを追なしたりとせば、論なかるべきを、翁の手にてさせねばおのれ威光なきにより、唯翁の草稿の儘をうつしたる躰にて、本書は己もらひとり、うつしを翁の姉聟山岸半殘にあたへ置、時を經て井筒屋庄兵衛へ含めて、何ぞ翁の遺書はなきやと伊賀を捜させ、くだんの草稿にさがし當らせ、庄兵衛が奥書を加えさせて梓にのぼさせ、おのれは飛退て、しらぬ貌にて居たりとぞ。しかれども其事誰かれしりたる人も在ながら、去來などは篤實にて口を閉、其外の輩もひそ〳〵言のみなりしが、越人ひとり大にからかふたりと聞ゆ。是、越人、支考不和の一つなり。

然し、この鶯笠の說にも、なほ不審が隨所にあるので、決してこれが眞相だと言ふ譯ではない。たゞ、『續猿簑』

には、たとへ支考の手が如何に入つてゐようとも、芭蕉自身が全然關係がなかつたものではない事を、知り得る手がかりの一つとして、この『去來抄』の記述なども、一顧に値するものといふべきである。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

〇涼しくも云々。

念佛の聲聞たるは、心のすむかたなるべし。さるを、ひいやりとと置時は、五文字輕々しくて信おこらず。改たる事知るべし。續猿みの集には、五文字涼しくもと有り。爰に風薫るとせるは、傳寫のあやまりか。

と見えてゐる。

一〇　面樴やあかしのとまり郭公　荷兮　①

猿簑撰の時去來曰此句は先師の野を横に馬牽むけよと同前なり入集　②
すへからす先師曰明石の時鳥といへるもよし去來曰明石のほとゝき　③
すはしらす一句たゝ馬と舟とかへ侍るのみ句主の手柄なし先師曰句　④
の働において一歩もうこかす明石をとりえにいれは入なんとなり　⑤

終にいらす ⑥

校異

[久]①面檝や―面梶よ。あかしのとまり―明石のとまり。郭公―時鳥。荷兮―野水。②猿簑―猿みの。横に―よこに。牽むけよ―引むけよ。と同前なり―と同前也。③去來曰明石―來曰明石。ほとゝきす―時鳥。④かへ侍る―かえ侍る。⑤おいて―おゐて。うこかす―動かす。とりえに―とり柄に。いれは入なんとなり―入れは入なん撰者の心なるへしと也。⑥終にいらす―終に是をのそき侍る。

[商]①面檝や―おも楫よ。あかしのとまり―明石のとまり。荷兮―野水。②牽むけよ―引むけよ。③先師曰明石―先師の曰明石。時鳥―郭公。ほとゝきす―時鳥。④一句たゝ―一句唯。舟―船。かへ侍る―替り侍る。⑤おいて―おゐて。うこかす―働かす。とりえに―取ものにして。いれは入なんとなり―入は入れなん撰者の心なるへしと也。⑥終にいらす―終に是も除き侍る。

[露]①面檝や―表楫よ。あかしのとまり―明石の泊り。荷兮―野水。②猿簑―猿蓑。牽むけよ―引向けよ。③いへる―云へる。去來曰明石―來曰明石。ほとゝきす―時鳥。④しらす―知らす。一句たゝ―一句は只。⑤おいて―於て。うこかす―動かす。とりえに―とり物にして。いれは入なんとなり―入れは入れなん撰者の心なるへしとなり。⑥終にいらす―終に是を除き侍る。

[青]①面檝や―おも楫よ。あかしのとまり―明石の泊り。郭公―ほとゝきす。荷兮―野水。此ノ句ノ頭ニ「⊕」トアル。②猿簑―猿みの集。此句―この句。牽むけよ―引むけよ。と同前なり―同前也。③先師曰明石―先師曰あかし。去來曰明石―去來

曰あかし。　④かへ侍る—替り侍る。手柄—手から。　⑤働—はたらき。おいては—おひては。うこかす—働かす。とりえに—取ものにして。いれは入なんとなり—いれはいれなん撰者の心なるへしとなり。　⑥終にいらす—終に是も除き侍る。

【贄】①面樴や—おも梶よ。あかしのとまり—明石の泊り。郭公—ほとゝきす。荷兮—野水。此ノ句ノ頭ニ「⊕」トアル。　②猿簑—猿蓑の。此句—この句。牽むけよ—引むけよ。　③すへからす—すへからすと。先師曰明石—先師曰あかし。去來曰明石—去來曰あかし。　④一句たゝ—一句唯。かへ侍る—替り侍る。先師曰—先師の曰。　⑤働—はたらき。おいては—おひては。うこかす—働かす。とりえに—取ものにして。いれは入なんとなり—入れは入たん撰者の心なるへしとたり。　⑥終にいらす—終に是を除き侍る。

【架】②此句—この句。牽むけよ—引むけよ。　⑤働—働き。いれは入なんとなり終にいらす—いれは入なん。

【訓読】

面樴やあかしのとまり郭公　荷兮

猿蓑撰の時、去來曰はく、此の句は、先師の、野を横に馬牽きむけよ、と同前なり、入集すべからず。先師曰はく、明石の時鳥といへるもよし。去來曰はく、明石のほとゝぎすはしらず、一句、たゞ馬と舟とかへ侍るのみ。句主の手柄なし。先師曰はく、句の働きにおいては一歩もうごかず。明石をとりえに、いれば入れなんとなり。終にいらず。

口譯

「面楫やあかしのとまり郭公　荷兮」――『猿蓑』の撰をいたしました時に、この荷兮の句を見まして、わたくしはかう申しました。「この句は、師翁が奥の細道の行脚の折、那須野の原での御句『野を横に馬牽きむけよほとゝぎす』と、同類の句です。『猿蓑』の中に加へることは出來ません。」すると、師翁は、「わたくしは、曾て須磨に遊んだ時に、『須磨のあまの矢先に鳴くかほとゝぎす』と『須磨の時鳥』を句としたことがありますが、この荷兮の句は、『明石の時鳥』を詠んだものです。『須磨の時鳥』といふ趣向を得た時にも、自分では喜びを感じたものですが、その意味で、この『明石の時鳥』も、たゞこれだけで、一脈の詩趣を感ずることが出來ませう。」と、仰せになりました。けれども、わたくしは更に、「お話をうかゞひまして、『明石の時鳥』も結構に思はれてまゐりました。けれども、この句は、師翁の『野を横に』の御句と同案で、たゞ馬と舟とを取りかへたに過ぎません。作者としての手柄が少しもない句でございます。」と、申しました。師翁は、またお答へ下さいまして、「いかにも、この句は、作者の手腕が、句の上に一向働いてをりません。たゞ、前にも言ひましたやうに、『明石の時鳥』といふ趣きを所得として、集中に加へるならば、加へてもよろしいでせう。」との仰せでございました。かうして、なほいろ〳〵詮議いたしましたが、たうとう、この句は『猿蓑』には入集いたしませんでした。

語釋

①**面楫**　面舵。船の舳を右へ向けようとする時、船柄を左舷に操ることをいふ。反對に左へ向けようとする時を取舵といふ。

轉じては、船の右舷を面舵・左舷を取舵とも稱するが、こゝでは、やはり元の意に解した方がよい。　①明石　播磨海岸の東端に位し、明石海峽を隔てゝ淡路島に對する。附近の海岸は所謂明石の浦で、舞子・須磨と共に白砂青松の名勝地として古來名高い。　①**とまり**　船の泊るところ。湊の意。　①**郭公**　時鳥・子規・不如歸等とも書く。夏の季題。　②**野を横に馬牽むけよ云々**　「野を横に馬牽むけよ郭公」は芭蕉の句。　②**同前**　同レ前と返點をつけて、前に同じと訓むのがもとの形。即ち前のものと同じの意。　④**句主**　句の持主の意。その句の作者のこと。　④**句の働においては云々**　その句の叙法が、いかに洗練されてゐるか、といふ點では、作者の手腕が一向に活躍してゐない。言ひ換へれば、作者の手腕が、句の上に一向働いてゐないといふ意。　⑤**とりえ**　取得。とりどころ。長所。　⑥**いれば入なん**　入れるなら入れてもよろしからう。

【參考】

この「面檝や」の句の出典は『曠野後集』、なほ『眞木柱』『芭蕉盥』等にも見えてゐる。但し、『曠野後集』には、

面　檝　や　あ　か　し　の　泊　り　郭　公　　荷　兮

とあり、『芭蕉盥』には、

面　檝　よ　あ　か　し　の　泊　り　郭　公　　荷　兮

と見えてゐる。異本に、作者名を野水としたのは、明かに誤謬である。

この「面檝や」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、『旅寐論』には、

面　楫　よ　あ　か　し　の　泊　り　ほ　と　ゝ　ぎ　す　　野　水

先師の馬引むけよ郭公、と等類のよし、先師と凡兆の論有り。先師の曰、野水が句は、明石の時鳥を吟ず、等類を遁るべし。去來いかゞ思ひ侍るや。答て申けるは、明石の郭公と云る分にて、和哥に詠ずる所とひとし。俳諧ににらみたる場は、面楫よととがめたる船中の眺望にあり。是又師の引向たる馬に蹴出されたり。たとひ等類を遁れ侍るとも野水が手柄ははべる間敷か。先師曰、勿論也。手柄にゐては聊見え侍らず。

又、これと殆んど同文ではあるが、『青根が峯』には、

面　楫　よ　明　石　の　と　ま　り　ほ　と　と　ぎ　す　　野　　水

此句を先師の馬引むけよ時鳥、と等類のよし、先師と凡兆と論有。先師云、野水が句は、明石の時鳥を吟ず、等類のがるべし。去來如何思ひ侍るや。答て申けるは、明石の時鳥といへる分にて、和歌に詠る所とひとし。是を俳諧に白眼たる場は、面楫よと乞たる船中の眺望にあり。是又、師の引むけたる馬にけをされたり。譬、等類を遁侍るとも、野水が手柄侍るまじきか。先師の云、勿論なり。手柄においては、聊見え侍らず。

とあり、『蕉門誹諧語錄』には、『去來抄』とこれら二書とを交ぜ合せたやうになつて、次の如く記載されてある。

面　楫　よ　明　石　の　と　ま　り　郭　公　　野　　水

此句は、師の野を横に馬牽向よと同じ。先師曰、野水が句は明石の郭公を吟ず。等類遁るべし。答曰、明石の子規と云へる分にては、和歌に詠ずる所とひとし。一句たゞ馬と舟とかはり侍るのみ。是を誹諧

にらみたる場は、面梶よと乞たる船中の眺望に有。是また師の牽向たる馬に蹴出されたり。句主の手柄なし。先師曰、句のはたらきに於ては、一歩もはたらかず。明石を取物にして、入れば入なん、撰者のこゝろなるべしとなり。終に除き侍る。

さて、芭蕉の「野を横に」の句の出典は、『奥の細道』『猿蓑』、なほ『篇突』『泊船集』等にも出で、又『勧進牒』には「奈須のゝはらにて」、『陸奥衛』には「行旅」と前書して収められてある。『奥の細道』によれば、これは殺生石へ行く途中の吟詠で、この句の前には、

是より殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ、短冊得させよと乞。やさしき事を望侍るものかなと。

といふ文章があつて、馬の口付（くちつき）の男の懇望に應じた卽吟である。

なほ、口譯の中に、芭蕉の言葉を聊か敷衍して、引用した「須磨のあま」の句の出典は『笈の小文』で、元祿元年の夏の制作である。

最後に、積率園の『去來抄評』には、

○おもかぢよ云々。

新古今集に、二聲と聞ずば出し時鳥いくよあかしの泊なれども、とあり。されば、ばせをの馬を船にかへ、一句のうへは、此歌をとれる、已がはたらきはあらず。

と見えてゐる。因みに、こゝに引用の歌は、『新古今和歌集』には、

海邊郭公といふ事をよみ侍りける
ふた聲ときかずばいでじ郭公いくよあかしの泊なりとも　　按察使公通
と出てゐる。

二　君か春蚊帳は萠黄に極りぬ　　越人　①

先師曰發句は落つかされは眞の發句にあらす越人か發句既落着たり　②
と見ゆれは又おもみ出來れり此句蚊帳は萠黄に極たるにてたれり月　③
影朝朗なと置て蚊帳の發句となすへし其上かはらぬ色を君か代にか　④
けて歳旦となし侍故心重く句奇麗ならす　⑤

校異

久①蚊帳—蚊屋。萠黄—もよき。　②先師曰—先師語レ予曰。發句は—ほ句は。落つかされは—おちつかされは。眞の發句—眞のほ句。越人か發句—越人かほ句。既—已に。落着たり—落付たり。　③出來れり—出來たり。蚊帳—蚊屋。萠黄—もよき。
④なと置て—なと〻置て。蚊帳の發句—蚊屋のほ句。其上—其上に。君か代にかけて—君か代に引かけて。　⑤なし侍故—なし侍るゆへ。心重く—心おもく。奇麗—きれい。ならす—ならす汝か句も已に落付處におゐてきつかはすそこに尻をすゆへか

らすと也。

【奇】(1)蚊帳ー蚊屋。、 ②先師曰ー先師予に語て曰。落つかされはーおちつかされは。眞の發句ー眞の句。越人か發句ー越人か句。既ー已に。落着たりー落付たり。 ③出來れりー出きたれり。此句蚊帳は萠黄に極たるにてたれりー此ノ十六字ナシ。 ④蚊帳の發句ーかやの發句。かはらぬ色ー替らぬ色。君か代にかけてー君か代に引かけて。 ⑤なし侍故ーなし侍るゆへ。心重くー心おもく。奇麗ー寄麗。ならすーならす汝か句も已におち付所におゐては氣遣はずそこに尻をすゆへからすと也。

【落】①蚊帳ー蟈。極りぬー極まりぬ。 ②先師曰ー先師予に語て曰。眞の發句ー眞の句。あらすー非す。越人か發句ー越人か句。既ー已に。落着たりー落付たり。 ③おもみー重み。蚊帳ー蟈。極たるー極まりたる。たれりー足れり。 ④朝朗なとー朝朗なとゝ。蚊帳ー蟈。其上ー其上に。かはらぬ色ー變らぬ色。君か代にかけてー君か代に引かけて。 ⑤心重くー心重くて。ならすーならす汝か句も已に落付所に於て氣遣はすそこに尻を据ゆへからすとなり。

【青】(1)蚊帳ー蚊屋。此ノ句ノ頭ニ「㊁」トアル。 ②先師曰ー先師予に語て曰。眞の發句ー眞の句。越人か發句ー越人か句。既ー已に。落着たりー落付たり。 ③蚊帳ー蟈。極たるー極りたる。 ④朝朗なとー朗々なと。蚊帳ー蚊屋。かはらぬ色ー替らぬ色。君か代にかけてー君か代に引掛て。 ⑤なし侍故ーなし侍る故。心重くー心おもく。奇麗ー寄麗。ならすーならす汝か句を已に落付所におゐては氣遣すそこに尻を居へからすと也。

【贄】①蚊帳ー蚊屋。此ノ句ノ頭ニ「㊁」トアル。 ②先師曰ー先師予に語て曰。眞の發句ー眞の句。越人か發句ー越人か句。既ー已に。落着たりー落付たり。 ③見ゆれはー見ゆれと。蚊帳ー蟈(カヤ)。極たるー極りたる。 ④蚊帳ー蚊屋。其上ーそのうへ。君か代にかけてー君か代に引掛て。 ⑤なし侍故ーなし侍る故。心重くー心おもく。ならすーならす汝か句も已に落付所におゐては氣遣すそこに尻を居へからすと也。

〔註〕(2)越人か發句―越人の發句。既―既に。落着たり―落着きたり。

訓讀

君が春蚊帳は萠黄に極りぬ　越人

先師曰はく、發句は落ちつかざれば、眞の發句にあらず。越人が發句、既に落着きたりと見ゆれば、又おもみ出來れり。此の句、蚊帳は萠黄に極りたるにてたれり。月影・朝朗など置きて、蚊帳の發句となすべし。其の上、かはらぬ色を君が代にかけて、歳旦となし侍る故、心重く、句綺麗ならず。

口譯

「君が春蚊帳は萠黄に極りぬ　越人」――この越人の句を御覽になりまして、師翁は次のやうに申されました。

「發句は、趣向も敍法も、しつかりと纒つて、動きのないものとならなければ、本當の發句とは言へません。越人のこの發句を見ますと、さうした點では、巧みに出來てゐて申分ありませんが、また、句が硬く重苦しくなつてゐるのは、缺點と言はなければなりません。一體この句は、『蚊帳は萠黄に極りぬ』だけで充分なのです。上の五文字には、『月あかり』とか『朝ぼらけ』などのやうな輕い意味のものを置いて、蚊帳の發句にした方が好いと思ひます。それを『君が春』と置いて、君が代の榮えの色は、蚊帳の色が萠黄と極つてゐるやうに、變らないものであるといふやうに、意味を係けて、新年の句とした爲めに、重苦しくなつて、句に清新な藝術味がなくなつ

てしまうたのです。」

語釋

①**君が春**　歳旦の祝詞。君が代といふほどの意。　①**蚊帳**　夏の夜寢床に釣つて、蚊をふせぐ帳。夏の季題。　①**萠黄**　萠葱卽ち萠え出る葱の色をいふ。綠色のこと。淺葱（淺黄）はそれよりも薄い色をいふ。　②**落つかざれば云々**　技法も趣向も、どつしりと纏まつて、句に深味又は厚味といふものが出來て、動きのないやうに作られたものでなければ、本當の發句、卽ち佳い句とは言へない、といふ意。次に「落着たり云々」とあるのも同樣の意。　③**おもみ**　觀念に囚はれて、句が硬く重苦しくなること。次に「心重く」とあるのも同樣の意。　③**月影**　月光のこと。月影と訓んでもよいが、それではそのまゝ上五には使用できないから、「月影や」「月の影」などとしなければなるまい。それでは原文が不十分となるから、原文を活かして、こゝでは「月あかり」と訓むことにする。　④**朝朗**　夜明けの空の薄く明るんだこと。　④**かはらぬ色を云々**　當今では白地や繪模樣の蚊帳などがあるけれども、その昔は、蚊帳といへば萠黄色に極つてゐたものである。そこで、蚊帳の色が綠と極つてゐるやうに、君が代の榮えの色も變らぬと、兩方とも變らないところに、意味をかけてといふ意。　④**かけて**　かけあはせて。言ひ換へれば、かけ言葉として。かけ言葉は兩方の意味を兼ねる言葉のこと。　⑤**歳旦**　元旦の異名。然し俳諧の用語としては、歳旦句といふ意に用ひる場合もある。歳旦句とは、歳旦開（正月吉日を撰んで、俳諧の師が、門人達から新年の句を集めて、それを披露すること。その句を集めたものが歳旦帖である）の爲めに、特に作つた句をいふ。然しこゝでは、單に、新年の句といふ位に解してよろしい。

参考

この「君が春」の句の出典は『去來抄』以外には未だ寓目せぬ。

この「君が春」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、『蕉門誹諧語録』には、

君 が 春 蚊 帳 は 萌 黄 に 極 り ぬ　　越　人

越人が句、已に落付たると見ゆれば、また重み出來たり。月影・朝朗などゝ置て、蚊帳の發句となすべし。その上かはらぬ色を君が代に引かけて、歳旦となし侍る故、心おもく、句奇麗ならず。

懷紙發句はかろきをよしとす。時にもよるべきながら、其角曰、趣向にかゝはる人はすべて發句成がたし。風景をしる人思ひ出多し。

去來曰、蕉門の發句は、一字不通の田夫、十歳以下の小兒も、時によりて好句有。却て他門の功者といへる人は、覺束なし。他流は其流の功者ならでは、其流の好句は成がたし。第一案じ處に違ひありとみゆ。蕉門は氣情ともに其ある處を吟ず。他流は心中に巧るゝ事見えたり。たとはゞ、

蓬 萊 に 夜 は う す も の き せ つ べ し

鴨 川 や 二 度 目 の 網 に 鮎 ひ と つ

みなこれ細工せらるゝなり。

『蕉門俳諧直指傳』には、

又曰、發句は落つかざればホ句にあらず。

君が春蚊屋はもへ黄に極りぬ

越人が句すでに落つきたりと見えしが、又此重み出來たり。月影・朝ぼらけなどゝ置て、蚊帳の句とすべし。かはらぬ色を君が代にかけて、歳旦となし侍るゆゑ、心重く句奇麗ならず。

とある。又、『俳諧一葉集』の遺語の部に引用してあるものは、前掲の久原文庫本以下の諸異本と同様に、本文の末尾、「心重く句奇麗ならず」に續いて、次の如く見えてゐる。

汝が句も、既に、落着處においては氣ずかはず。そこに尻を居べからずと也。

これだけの文句があれば、趣旨は更に明瞭になると思ふ。

なほ『芭蕉葉ぶね』には、次の如き記載がある。

女郎花の文字になづみて草枕に一夜契たしといふ、是重みの趣向なり。更にいやみ也。猶、越人が萌黄の蟵の句、翁の論のごとし。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○君が春云々。

詩歌共に緣語掛合あり。されば他門の句皆是也。さるをこのまざる可レ察。

と見えてゐる。

三　振舞や下座に直る去年の雛　去來

此句は予おもふ處ありて作す五文字古烏帽子紙衣等はいひ過たり景 ①
物は下心徹せすあさましや口をしやの類ひははかなしと今の冠を置 ②
て窺ひければ先師曰五文字に心をこめておかは信徳か人の世やなる ③
へし十分ならすとも振舞にて堪忍有へしと也 ④ ⑤

校異

【久】①直る―なをる。　②ありて―有て。烏帽子―ゑほし。紙衣―紙きぬ。いひ過たり―謂過たり。　③類ひ―類。　④人の世やなるへし―人の世や成へし。

【帝】①下座―下坐。直る―なをるか。　②予おもふ處―予か思ふ所。烏帽子―ゑほし。　③徹せす―徹せす。あさましや―浅ましや。口をしや―口おしや。類ひ―類。　④窺ひ―伺ひ。人の世やなるへし―人の世やに成て。　⑤有へし―あるへし。

【落】①振舞―振迴。　②予おもふ處―予思ふ處。ありて―有て。五文字―五もし。烏帽子―ゑほし。いひ過たり―謂過たり。　③あさましや―浅ましや。類ひ―類。はかなし―さかなし。　④窺ひけれは―伺ひけれは。心をこめておかは―心を籠て置かは。　⑤振舞―振迴。と也―となり。

【青】①下座―下坐。直る―なをる。此ノ句ノ頭ニ「㊂」トアル。　②此句―この句。予おもふ處―予か思ふ所。ありて―有て。烏帽子―ゑほし。紙衣―紙子。いひ過たり―云過たり。　③口をしや―口おしや。類ひ―類。今の―いまの。　④窺ひけれ

はーうかゝひけれは。心をこめておかはー心をこめておける。（イかは） ⑤振舞ー振廻。有へしーあるへし。と也ーとなり。

賛 ①此ノ句ノ頭ニ「⑬」トアル。 ②予おもふ處ー予かおもふ所。ありてー有て。古烏帽子ー古ゑほし。いひ過たりー云過たり。 ③口をしやー口おしや。類ひー類。今の冠ーいまの冠を。 ④窺ひけれはー伺けれは。心をこめておかはー心をこめておける。信徳かー信徳は。 ⑤有へしーすへし。と也ーとなり。

異 ②古烏帽子ー古烏帽。 ③景物はー景物。類ひー類。 ⑤有へしーあるへし。

訓読

振舞や下座に直る去年の雛　去來

此の句は、予おもふ處ありて作す。五文字、古烏帽子・紙衣等は、いひ過ぎたり。景物は下心徹せず。あさましや・口をしやの類ははかなしと、今の冠を置きて窺ひければ、先師曰はく、五文字に心をこめておかば、信徳が人の世やなるべし。十分ならずとも、振舞にて堪忍有るべしと也。

口譯

「振舞や下座に直る去年の雛　去來」――此の句は、わたくしの身に引きくらべて、感ずるところがありましたので作つた句でございます。初めは上の五文字を、どう置いたらよろしからうと、さまゞ\に考へ迷うたのでございました。「古烏帽子」又は「紙衣」などと置いても見ましたが、それらでは言過ぎて、餘情が缺けてしまひま

すし、それに「古烏帽子」や「紙衣」のやうな、雛の道具を持つてまゐりましたのでは、わたくしが表現しようと思ひました眞意を、うまく表はすことが出來ません。次に「あさましや」又は「口をしや」などと置いても見たのですが、それらでは却つて弱々しく響くばかりで、句にうまみが無いやうに存じます。それで結局、今の「振舞や」といふ五文字を冠せることに致しました。そして、師翁の御考へをお伺ひいたしましたところ、師翁の仰せには「上の五文字に、お前の考へてゐるやうなことを、强ひて表現しようとすれば、信徳ごのみの「人の世や」といふやうな觀念的な詞を冠せなくてはなりますまい。けれど、さうまでしては句が重苦しくなつてしまふでせう。「振舞や」は、これで十分とは申されませんが、まあ〳〵この位なら許せるところでせう。」と、申されました。

語釋

①**振舞**　ふるまふこと。行狀。動作。別に饗應・馳走といふやうな意もあるが、この句の場合は、新らしい雛よりも下座に坐つてゐる古雛の身の處し方、といふやうな意に解すべきであらう。　①**下座**　下位の席。雛段でいふならば、内裏雛から遠い方の席、卽ち下の方の段のこと。　①**直る**　直居るの約か。正しく坐ること。　①**去年の雛**　去年はコゾと訓む。(昨日はキソ)但し、この場合の去年は、嚴格に昨年を意味するのではなく、單に昔のといふ意である。つまり、去年の雛は古雛といふ位に解したい。　②**烏帽子**　紙で作つてその上を漆で塗り固めた冠。位階に從つて形と塗とに差別がある。例へば、立烏帽子・折烏帽子・揉烏帽子等。昔は紙でなく、黑い絹で作つたといふ。　②**紙衣**　此處では雛に着せてある紙でつくつた着物の意。「紙衣」の訓は、久原文庫本に「紙きぬ」とあり、靑抜自筆本には「紙子」とあつて、定かでないが、「古烏帽子」と同じく五文字に、カミゴロモと訓んでよいと思ふ。　②**景物**　けしき。そへもの。こゝでは雛人形の道具をいふ。　③**下心徹せず**　下心

は心がまへ、心の中にあらかじめ考へてゐる眞意。徹せずは、それを突通すことが出來ない、卽ち、よく表はせないとの意。

④**窺ふ** ひそかに見る。のぞく。但しこの場合は、「伺ふ」といふ文字を使用すべきところを、原本で間違つてゐるのであらう。伺ふならば、問ふの敬語で、お尋ねするといふこと。 ④**信德** 京都の人である。伊藤氏、助左衞門と稱し、梨柿園・竹杖子・宗甫の號がある。幼時、貞德に從ひ、德の一字を許されて、信德と號した。次に、梅盛を師としたが、更に令德に就いて、檀林の徒と往來し、新風に走つた。後、芭蕉等と交り、遂に蕉門となつた。芭蕉が江戶から書を寄せて、洛の風體を問うた時、「一雨の日や門提げて行く杜若」の句を以て、これに答へたといふ。元祿十一年十月十三日歿。年六十六。著書には『雜談』・『京三吟』・『七百五十韻』・『江戶三吟』・『六百五十韻』・『白重』・『五の戲言』・『浮世姿』・『胡蝶判官』などがある。 ⑤**堪忍** たへしのぶこと。こらへること。

参 考

この「振舞や」の句の出典は『猿蓑』、なほ『去來發句集』等にも見えてゐる。但し、『猿蓑』には「直る」が「なをる」となつてゐる。

「此句は予おもふ處ありて作す」といふのを、口譯の中には試みに「此の句は、わたくしの身に引きくらべて、感ずるところがありましたので云々」としてみた。が、兎も角も「見て」作つた句ではなく、特に「考へて」作つた句であると、去來自身が言うてゐる意味を推量すれば、古雛の振舞に托して、暗には、蕉門の多士濟々たる中に、自分如きは古雛にも相當すべきものであるとの意を、織り込まうとしたものであらうかも知れぬ。卽ち、蕉門の古老として、同門の人々から尊敬されてゐる去來自身の心境を、かうした句によつて、表現してみたいと

いふ處に、この句の意圖があつたとも、想像し得るのである。少くとも、さういふ風にこの文を解釋した方が、芭蕉のそれに對する批評の言葉も、より明らかになると思ふ。

次に、信德に就いては、許六の『歴代滑稽傳』中に、

洛の信德は、古風より談林に移し、其後正風躰の比まで長生して、俳諧を好めり。

京三吟　白蓮花盧山の小法師が筆なりけり

江戸三吟　物の名の蛸や故郷のいかのぼり

附句　梓の弓に唐錦をうつ

抑秋澁紙おろしたてまつり

千種の色や新左衛門判

又　臺子釜瀧の響をしかけたり

にしめを引て歸る賢人

とも見えてゐる如く、信德は、古風（貞德の主唱になる俳風）、談林（宗因の主唱になる俳風）、正風體（芭蕉一派の俳風、即ち蕉風）と、次第に轉向した作者である。故に、蕉門の人々と交るやうになつてからも、未だに、古風・談林の調子が仲々拔けきらなかつた。故に「信德が人の世やなるべし」といふやうな言葉が使用されたのであらう。序でに、信德の古風・談林・蕉風の各時代に於ける作品を、次に擧げて參考としよう。

先づ、貞室が、貞門諸家の發句を輯錄した『玉海集』中に、信德の句は、

大淀のうら盆なれや伊勢をどり　　信徳

その他、合せて四句入集してゐる。これらが信徳の古風時代の作品といひ得る。次に、信徳自身が編纂した『七百五十韻』には、巻頭句として、

江戸櫻志賀の都はあれにけり　　信徳

が掲げられてある。これらは信徳の談林時代の作品といふべきであらう。最後に、蕉風となつてからの作品としては、適當なものが尠いが、荷兮の編撰になる『曠野』の中に、次の一句が見えてゐる。

薄曇りけだかく花の林かな　　信徳

さて「人の世や」と置いた信徳の句を探してはみたが、これは遺憾ながら未だ囑目することができなかつた。然し、其角の『雜談集』中の一節に、

趣向にかゝはる人は、すべて發句成がたし、風景をしる人、思出多し。此比、信徳が文に、此方などは例の發句下手にて、一句もえ申さずと卑下ながらに

名月よ今宵生るゝ子もあらん　　信徳

いざよひの空や人の世中といへる觀念か。是は今年就中腸先斷と、白氏の年を悲しみける心にもかなひて、信徳が老の誠なるべし。

と見えてゐて、こゝに「いざよひの空や人の世中といへる觀念」と記されてあるが、或は、かゝる言葉が當時の常用語であつた爲めに、この邊から「信徳が人の世やなるべし」といふ言葉が生じたのかも知れぬと推察せられ

るのである。なほ次の積翠園の評語を參看せられたい。

即ち、積翠園の『去來抄評』には、

○振舞。

信德五文字を置かば、人の世やと置べし。夫は浮世の盛衰榮枯をおもへる所にして、誰も見よ滿れはやがてかく月のいざよひの空や人の世の中、といへる哥をとりて、句作するなるべし。夫等の五文字は、理詰に落入て、振舞やの平話に、只其姿をいふにはおとり侍るならん。芭蕉の一流、皆榮枯の觀なりといへども、言葉にそれをあらはしていふは理詰にして、他門の風なり。常の事を常の詞にていひて、餘情に、無情迅速の心有る、是今のはいかいなるべし。

と見えてゐる。

三

田のへりの豆つたひ行螢かな　万乎　①

もとは先師の斧正ありし凡兆か句なり猿蓑撰の時凡兆曰此句見る處　②

なし除へし去來曰へり豆をつたひ行螢の光闇夜の景色風姿ありとい　③

ふ凡兆ゆるさす先師曰兆もし捨は我拾はむ幸伊賀の連中の句に是に　④

似たるあり夫を直し此句となさんとて終に万乎か句と成けり　⑤

校異

久①万乎―此ノ二字ナシ。　②もとは―元トは。斧正ありし―斧正有し。句なり―句也。猿簑―猿みの。凡兆曰―兆曰。③除へし―のそくへし。つたひ行―傳ひ行。螢の光―螢光。風姿ありといふ―風姿ありと乞ふ。④凡兆ゆるさす―兆ゆるさす。拾はむ―ひろはむ。伊賀の連中の句に―いかの句に。是に似たるあり―似たる有。⑤夫を―其を。万乎―此ノ二字ナシ。

帝①つたひ行―つたい行。螢かな―螢哉。万乎―此ノ二字ナシ。　②もとは―此句初は。斧正ありし―斧正たりし。句なり―句也。撰の時―撰のとき。見る處―見る所。　③除へし―除くへし。つたひ行―傳ひ行。風姿ありといふ―風姿ありと乞。④凡兆ゆるさす―兆ゆるさす。拾はむ―拾はん。伊賀の連中の句に―伊賀の句に。是に似たるあり―似たるあり。　⑤夫を―其を。万乎―此ノ二字ナク、空間ニ「本ノマ、」ト傍註ガ附シテアル。

落①つたひ行―つたひ行く。万乎―此ノ二字ナシ。　②もとは―此句初は。斧正ありし―斧正有し。猿簑―猿蓑。凡兆曰―兆曰。　③除へし―除くへし。へり豆―へゝりの豆。つたひ行―傳ひ行く。螢の光―螢光。風姿ありといふ―風姿ありと乞ふに。④凡兆ゆるさす―兆許さす。兆もし捨は―兆もし此句を捨は。拾はむ―拾はん。幸―幸ひ。伊賀の連中の句に―伊賀の句に。是に似たるあり―似たる有り。　⑤直し―直して。

青①此ノ句ノ頭ニ「(去)サルミノ」トアル。　②もとは―この句初は。猿簑―猿みの。撰の時―撰のとき。見る處―見る所。③除へし―除くへし。へり豆を―田のへりの豆。つたひ行―つたひゆく。闇夜の景色―闇の夜の景色。風姿ありといふ―風姿ありといふ。　④凡兆―兆。拾はむ―拾はん。是に似たるあり―是に似たるあり。　⑤夫を―其を。直し―直して。此句―こ

の句。成けり—なりけり。

【語】①此ノ句ノ頭ニ「(三)猿蓑」トアル。　②もとは—此句初は。撰の時—撰のとき。見る處—見る所。　③へり豆を—田のへりの豆を。螢の光—ほたるの光。闇夜の景色—闇の夜の氣色。風姿ありといふ—ありと也。　④凡兆—兆。兆もし捨は—兆若捨は。我拾はむ—捨はん。是に似たるあり—似たるあり。　⑤直し—直して。此句—この句。成けり—なりけり。

【參】②句なり—句也。猿簔—猿蓑。　③除へし—除くへし。　④兆もし捨は—兆もし捨ては。

【訓讀】

田のへりの豆つたひ行く螢かな　万乎

もとは先師の斧正ありし凡兆が句なり。猿蓑撰の時、凡兆曰はく、此の句見る處なし。除くべし。去來曰はく、へり豆をつたひ行く螢の光、闇夜の景色、風姿ありといふ。凡兆ゆるさず。先師曰はく、兆もし捨てば、我拾はむ。幸、伊賀の連中の句に、是に似たるあり。夫を直し此の句となさんとて、終に万乎が句と成りけり。

【口譯】

「田のへりの豆つたひ行く螢かな　万乎」——この句は、もとは、師翁がかう直して下さつた、凡兆の作でございました。後に、わたくしどもが『猿蓑』を撰びました時に、凡兆が「この句は、格別佳い作でもございませんから『猿蓑』の中には入れますまい。」と申しますので、わたくしは、それに答へて「田のへりの豆を傳うて行く螢の光、その闇夜の中の一情景には、言ふに言はれぬ風情があります。『猿蓑』に入集したいものです。」と、申し

ました。けれども、凡兆はわたくしの言葉に賛成してはくれませんでした。師翁は、これをお聞きになられて、「もし、凡兆がこの句を捨てるのなら、わたくしが拾ひませう。丁度さいはひ、伊賀の人達の句の中に、この句に似たものがあります。その句を直して、この句と致しませう。」と、仰せられて、終に万乎（ばんこ）の句となつて、『猿蓑』に入集されることになりました。

語釋

①へり 緣。ふち。 **①螢** 夏の季題。 **①万乎** 伊賀上野の人である。通稱を大坂屋次郎太夫と稱した。剃髮して證厭坊といふ。享保九年八月十五日歿、伊賀蕉門三十一人衆の一人。 **②斧正** 斧を入れて正しくする。筆を加へる。手を入れる。なほす。 **②見る處** みどころ。よしと認めるところ。 **③風姿** すがた。風韻。趣きのある景色。 **④兆** 凡兆の略。

參考

この「田のへりの」の句の出典は『猿蓑』である。但し、『猿蓑』には、

田の畝の豆つたひ行螢かな　　万乎

と見えてゐるが、「田のへり」よりも「田の畝」の方が明らかであると思ふ。

なほこの句に就いては、『花實集』に次の如き記載がある。

又、

田のへりの豆つたひ行螢かな

此句始は先師の斧正ありし凡兆が句也。猿蓑撰の時凡兆曰、此句見る所なし、除くべし。去來曰、へり豆をつたひ行螢の光、闇夜の景色風姿あり。凡兆許さず。先師曰、兆もし捨ば我拾はん、幸伊賀の句に似たるあり、それを直し此句となさんとて、終に萬字が句となりけり。

積翠園の『去來抄評』には、

○田のへりの云々。

猿みのに、田の畝のと五文字あり。凡兆見る所なしといふ事、いまだ去來に不及所あり。さればこそ、ばせをも是を拾んといふ。拾ふからは、今とるべきの句たる事あきらけし。

と見えてゐる。

一四　大としをおもへは年の敵かな　凡兆

①もとの五文字戀すてふと置て予か句也信徳曰戀さくらと置へし花は②騷人の思ふ事切なり去來曰物には相應あり古人花を愛して明るを待③くるゝををしみ人を恨山野に行迷へともいまた身命のさたにおよは④

す櫻と置かは却而年のかたき哉といへる處あさまになりなむ信徳な⑤
ほこゝろえす重て先師に語る先師曰そこらは信徳か知ところにあら⑥
すとなり其後凡兆大年をと冠す先師曰誠此一日千年のかたきなりい⑦
しくも置たるもの哉と大笑し給けり⑧

校異

久①大とし—大歳。年の敵かな—としの敵哉。 ②もとの五文字—元の五文字は。信徳曰—去來曰このほ句有季なし信徳曰。戀さくら—戀櫻。 ③思ふ事—おもふ事。切なり—切也。 ④をしみ—おしみ。人を恨—人をうらみ。行迷へとも—行迷ひ侍れと。さたにおよはす—さたに及はす。 ⑤置かは—おかは。かたき哉—敵哉。なりなむ—成なん。なほ—猶。 ⑥こゝろえす—心得す。知ところ—しる處。 ⑦となり—と也。大年—大歳。誠此一日—誠に是の一日。千年のかたきなり—千年の敵なり。 ⑧置たるもの哉—置たる物かな。大笑し給けり—大笑し玉ひけり。

帝①大とし—大歳。年の敵かな—としのかたき哉。 ②もとの五文字—元の五文字。信徳曰—去來曰此發句當季なし信徳曰。戀さくら—戀櫻。 ③思ふ事—おもふ事。切なり—切也。明るを待—明日を待。 ④くるゝを—暮日を。をしみ—惜み。人を恨—人を恨み。行迷へとも—惑ひ侍れと。さたにおよはす—沙汰に及す。 ⑤置かは—置は。かたき哉—敵哉。といへる處—といへる所。あさまに—淺間に。なりなむ—なりなん。なほ—尙。 ⑥こゝろえす—心得す。重て—重ねて。先師に語る—先師に語るに。知ところ—知る所。 ⑦となり—と也。大年—大歳。をと冠す—を冠。千年のかたきなり—千軍の敵也。

⑧置たるもの哉｜置たる哉。大笑し給けり｜大笑し玉ひけり。

[落]①大とし｜大年。②もとの五文字｜元の五文字。句也｜句なり。信徳曰｜去來曰此發句季なし信徳曰。戀さくら｜戀櫻。置へし｜置くへし。③思ふ事｜思ふこと。明るを待｜明くるを待ち。④くるゝを｜暮るゝを。をしみ｜惜み。人を恨｜人を恨み。迷へとも｜迷ひ侍れと。いまた｜未た。さたにおよはす｜沙汰に及はす。⑤却而｜却て。かたき哉｜敵かな。といへる處｜と云へる所。あさまに｜淺間に。なりなむ｜成りなん。なほ｜猶。⑥こゝろえす｜心得す。重て｜重ねて。知ところ｜知る處。あらす｜非す。⑦をと冠す｜を冠す。誠此一日｜誠に是一日。千年のかたきなり｜千年の敵なり。⑧置たるもの哉｜置きたる物かな。大笑し給けり｜大笑し給ひけり。

[青]①大とし｜大歳。此ノ句ノ頭ニ「(西)」トアル。②もとの五文字｜元の五文字。信徳曰｜去來曰是ほ句に季なし信徳曰。戀さくら｜戀櫻。③相應あり｜相應有。明るを待｜明日を待。④くるゝを｜暮を。をしみ｜おしみ。行迷へとも｜惑ひ侍れと。さたにおよはす｜沙汰に及はす。⑤置かは｜置は。かたき哉｜敵哉。といへる處｜といへる所。あさまに｜淺間に。なりなむ｜なりなん。なほ｜猶。⑥こゝろえす｜心得す。重て｜重ねて。知ところ｜知る所。⑦となり｜と也。をと冠す｜を冠とす。誠此一日｜寔に此一日。千年のかたきなり｜千軍の敵なり。⑧置たるもの哉｜おきたる物かな。大笑し給けり｜大笑し給ひけり。

[贄]①大とし｜大歳。此ノ句ノ頭ニ「(西)」トアル。②もとの五文字｜元の五文字。句也｜句なり。信徳曰｜去來曰是ホ句に季なし信徳曰。戀さくら｜戀櫻。③思ふ事｜おもふ事。相應あり｜相應有。④くるゝを｜暮を。をしみ｜おしみ。人を恨｜人を恨み。行迷へとも｜惑ひ侍れと。さたにおよはす｜さたに及はす。⑤置かは｜置は。年のかたき哉｜年の敵。といへる處｜といへる所。あさまに｜淺間に。なりなむ｜似なん。なほ｜猶。⑥こゝろえす｜心得す。知ところ｜知る所。⑦大

年をと冠す—大年を冠とす。誠—寔に。千年のかたきなり—千軍の敵なり。⑧置たるもの哉—おきたる物かな。大笑し給けり—大笑し給ひけり。

栞 ③切なり—切也。明るを待—明くるをまち。④くるゝを—暮るゝを。人を恨—人を恨み。⑤といへる處—とはいへる處。⑥こゝろえず—こころえず。知ところ—知るところ。

訓讀

大としをおもへば年の敵かな　凡兆

もとの五文字、戀すてふと置きて、予が句也。信徳曰はく、戀さくらと置くべし。花は騷人の思ふ事切なり。去來曰はく、物には相應あり。古人花を愛して、明くるを待ち、くるゝををしみ、人を恨み、山野に行迷へども、いまだ身命のさたにおよばず。櫻と置かば、却つて年のかたき哉といへる處あさまになりなむ。信徳なほこゝろえず。重ねて先師に語る。先師曰はく、そこらは信徳が知るところにあらずとなり。其の後、凡兆、大年をと冠す。先師曰はく、誠に此の一日千年のかたきなり。いしくも置きたるもの哉と、大笑し給ひけり。

口譯

「大としをおもへば年の敵かな　凡兆」——この句は、もとは上の五文字を「戀すてふ」と置いて、わたくしの句でございました。それを見まして、信徳が、「この上五には『戀櫻』と置いたらいかゞでせう。花は詩人にとつ

て、この上もなく待ちわびられるものですから。」と、申しました。わたくしは、それに答へて、次のやうに申しました。「物にはそれにふさはしいだけの程度といふものがあります。なるほど昔から、人々は櫻の花を愛して、冬の過ぎるのを待ち、春の行くのを惜しみ、又は、花に思ひを寄せて人を恨み、山野に花をたづねて行迷ひなどしましたが、まだ、その花のために、命を棄てたりなどした話は、聞及びません。上に『櫻』といふ文字を現はしますと、『戀櫻思へば』とまでは、それでもよろしいでせうが、さて次の『年の敵かな』と續きますと、やはり櫻の花のために壽命が縮まるといふ意が、大層露骨(ろこつ)に表現されてしまひまして、かへつて輕薄な句となると思ひます。」けれども、信德は、なほ合點致しませんでしたので、更に、師翁にお尋ね申しました。すると師翁は、「そこらのけじめは、信德などには諒解できないところでせう。」と、仰せられました。その後、凡兆がこの句の『戀すてふ』を改めて、『大年を』と置きました。師翁は、「全く大晦日の一日が過ぎることは、千年の悔を感じるものです。『大年を』とは、手際よく置いたものですねえ。」と、御愉快さうに仰せられました。

語釋

①**大年**　大晦日のこと。　②**戀すてふ**　戀をするといふことはの意。　②**戀櫻**　戀だの櫻だのはの意。　③**騷人**　詩人。
③**切なり**　烈(はげ)しい。痛切。　③**相應**　ふさはしいこと。相應ありは、ふさはしい程度があるの意。　④**身命のさた**　沙汰は評判・噂・話等に解して、命をすてたといふ噂との意。　⑤**あさま**　輕薄なこと。　⑦**いしくも**　巧みにも。美(い)しは古語。

この「大としを」の句の出典は『去來抄』以外には未だ寓目せぬ。

「明るを待、くるゝををしみ」は、一日の中の「夜の明けるのを待ち、日の暮れるのを惜み」と解すべきが普通であるが、こゝでは「年の敵かな」にはそぐはないので、一年として「冬の明けるのを待ち、春の暮れるのを惜み」と口譯には試みておいたが、これは尙熟慮を要すべきところである。

又、この凡兆の句には、未だ出典が發見出來ないが、思ふに「戀すてふ」といふ句も餘り感心は出來ないが、さればといつて「大年を」と改めても「年」といふ字が重出したりして、やはりさほどの名句とも思へないのである。故に、この章の最後に「いしくも置きたるもの哉と、大笑し給ひけり」は、もつと諧謔味を含ませて「そんなことの方が、まあ〳〵ましだらうよと、大笑ひなさつた」と解した方が妥當かも知れない。

『旅寐論』中に、「歲旦無季の格とて、許六二句あげて示さる、無季の句と申す事侍るや」といふ問に、去來は次の如く答へてゐる。

答曰、先師もたま〳〵無季の句有レ之、然どもいまだ押出して是を作り給はず、或時のたまふは、神祇・釋教・賀・哀傷・無常・述懷・離別・戀・旅・名所等の句は、無季の格有りたきもの也。是を興行せんと思ひ侍れども、暫くおもふ所ありと云々。無季の句といへるは、落馬の即興に、

歩行ならば杖つき坂を落馬哉　翁

何となく芝吹く風もあはれ也　杉風

此の句は、先師の旅行を送りての吟なり。

戀をしておもへばとしの敵かな　去來

これらの句なり。表裏ともに季を見る所なし。此の句のみにかぎらず、折〳〵の吟あり。

即ち、こゝには「戀をして」といふ上五になつて收められてある。

なほ『篇突』の「歳暮の格」の項には、

年の暮と云は、一とせの暮行上にかゝり、大とし・除夜は、只、一晝夜の上にて大切成日也。よく工夫すべし。

とある。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○大歳を云々。

花にめで月にかなしむは、風雅のうへの本情也。さるを、樫の木の花にかまはぬ姿かな、と樫の木を稱し、雲折〳〵人を休むる月見かな、と雲のかゝるを却て稱し侍る心よりして見れば、信德が櫻と置たるは、よのつねの句意にして、蕉門一派の意地にはあらず。さればとて、此の句只五文字の相違せるを稱して、誠に不易の句とはいふべからず。只一興一笑なるべし。

と見えてゐる。

一五　賽銭も用意顔なり花の森　去来 ①

先師曰花の森とは聞なれす名處なるにや古人も森の花とこそ申侍れ ②

詞を細工してかゝる拙き事云へからすと也 ③

校異

久①賽錢—散錢。用意顔なり—用意かほ也。花の森—はなの森。　②聞なれす—聞きなれす。こそ—社。　③云へからすと也—いふへからすと也。

高①賽錢—散錢。用意顔なり—用意かほなり。　②聞なれす—聞馴す。名處—名所。こそ—社。申侍れ—申候(ヒ)侍れ。　③拙き事—拙なき事。云へからすと也—いふへからすと也。

落①賽錢—散錢。　②聞なれす—聞馴れす。名處なるにや—名所なるや。　③かゝる—斯る。拙き事—拙きこと。云へからすと也—云ふへからすとなり。

青①賽錢—散錢(賽カ)。花の森—花の杜(森カ)。此ノ句ノ頭ニ「(去)」トアル。　②聞なれす—聞馴れす。名處なるにや—名所なるや。　③云へからすと也—いふへからすとなり。

贄①賽錢—散錢。此ノ句ノ頭ニ「(去)」トアル。　②名處なるにや—名所なるや。申侍れ—申侍れは。

架③云へからすと也—いふへからすと也。

〔訓讀〕

賽錢も用意顏なり花の森　去來

先師曰はく、花の森とは聞きなれず。名處なるにや。古人も森の花とこそ申し侍れ。詞を細工して、かゝる拙き事云ふべからずと也。

〔口譯〕

「賽錢も用意顏なり花の森　去來」——師翁の仰せに、「この句の下の五文字に『花の森』とありますけれども、これはあまり聞かない詞です。名所のやうにも聞えますが、お前の作意はやはり花のある森といふことなのでせう。それならば、昔の人も『森の花』といふ詞を用ゐて居ります。詞の上に小細工を施して、このやうな、まづい言ひ廻しをしてはなりません。」と、申されました。

〔語釋〕

①**賽錢**　神佛の報賽に奉る錢。②**名處**　名所、名蹟。景色がよかつたり、由緒があつたりして、格段に名立たる地。③**細工して**　つくつて。③**拙き事**　まづいこと。

〔參考〕

この「賽錢も」の句の出典は『去來發句集』である。但し、同書には、

散錢も用意顏なり森の花

と見えてゐて、小異同が發見される。なほ、この句集は、後年蝶夢の手によつて編纂されたものであるが、この句の前には、

南都の般若寺にて

散こもる花や般若の帋の間

又、後には、

花雪とちらすや錢の間の山

の兩句が見える。これらの句と關聯して、「賽錢も」の句も同じく京都以外の土地での吟詠であらうかとも想像されるが、『俳諧所名集』には、「山城」の部中に、

花山（はなやま）　しか谷ひがし南北兩所也。

と見えてゐるが、或はかやうな所での作であらうかも知れぬ。なほこの句に使用されてゐる「散錢」とは、「ばら錢」の意もあるが、賽錢と解してよろしからう。

さて、この芭蕉の意見を再誦する時、『曠野』所收の、

薄ぐもり氣高き花の林かな　信德

といふ句を思ひ浮べることが出來る。「花の森」を不熟な成語として排した芭蕉であるからには、用ゐ方に多少の

相違はあつても、この「花の林」といふ詞も、あまりよい詞とは思つてゐなかつたであらう事が推察される。又『去來抄』中に、芭蕉の言葉として、「そこらは信德が知るところにあらず」といふやうな口吻が傳へられてゐる事を、思ひ合せれば、更に興味深きものがあらう。

なほ、『三册子』には、

生前折〳〵のたはむれに、俳諧いまだ俵口をとかずとも云出られし事度々也。高くこゝろをさとりて俗に歸るべしとの敎なり。常に風雅の誠をせめさとりて、今なす處俳諧に歸るべしと云る也。常風雅にいるものは、思ふ心の色、物となりて句姿定るものなれば、取物自然にして子細なし。心のいろうるはしからざれば外に詞をたくむ。是則常に誠を勤ざるの心の俗也。

又、『行脚の掟』中の一節には、

一、山川舊跡したしく尋ね入べからず。私の名をつくることなかれ。

ともあり、又『枇杷園隨筆』に依れば、芭蕉が吉野から惣七宛に送つた書翰の中に、瀧・塚・峠・坂・山等の名を擧げた後に、

名もしらぬ山は書付にもらし申候。

と記してゐる。

因みに、名所と定められてゐる森の名前には、先づ連歌の時代には、『奥義抄』に依れば、

杜

いはせのもり（かみなびの）　いくりのもり（いもがいへに）　いはたのもり（やましろの）　うきたのもり　さくさはのもり　うなてのもり（まとりすむ）

と規定され、俳諧の時代に到ればこれよりもいくらか増加して、たとへば『俳諧所名集』に依れば、以上の外に、

神無の杜（山城）　藤の杜（山城）　大荒木の森（山城）　柞の森（山城）　雨の杜（山城）　柏木の森（大和）　山邊の杜（大和）　河田の杜（河内）　信田の森（和泉）　依羅の杜（攝津）　廣田の杜（攝津）　磐手の杜（攝津）　神南の杜（攝津）　生田の杜（攝津）　風の杜（伊賀）　戀の杜（伊賀）　哀其森（伊賀）　月讀の杜（伊勢）　阿波手の森（尾張）　木枯の杜（駿河）　古々井の杜（伊豆）　鷺の森（武藏）　長者が森（武藏）　大我井の杜（武藏）　八幡しらずの杜（上總）　老曾の森（近江）　青柳の森（近江）　卯坂の杜（越中）　鷺の杜（安藝）　雨の森（日向）　風の杜（大隅）

等を散見する。（註。積翠園の【去來抄評】は、この章に關する記載を缺く。）

一六　月雪や鉢たゝき名は甚之亟　越　人　①

去來曰此頃伊丹の句にへ彌兵衛とはしれと憐や鉢たゝきと云あり越　②
人か句入集いかゝ侍らむ先師曰月雪といへるあたり一句働見えてし　③

かも風姿ありたゝしれと憐やといひくたせるとは各別也されとも鉢 ④
敲の俗体をもて趣向を立俗名をかさり侍れは尤遠慮有へし又重て折 ⑤
もあらむとなり ⑥

校異

久②去來曰—猿みの撰に去來曰。此頃—この比。へ—此ノ爪印ナシ。鉢たゝき—鉢扣。と云あり—と云有。 ③越人か句—越人か句。侍らむ—侍らん。 ④風姿あり—風姿有。たゝ—たゝに。されとも—されと共に。 ⑤鉢敲—鉢扣。もて—以て。重て—重ての。 ⑥あらむとなり—有なんと也。

斎①鉢たゝき—鉢叩。 ②去來曰—猿簑撰の時。此頃—此ころ。へ—此ノ爪印ナシ。しれと憐や—知れと憐や。鉢たゝき—鉢扣。と云あり—といふあり。 ③侍らむ—侍らん。働—働き。見えて—見へて。 ④風姿あり—風姿有。たゝ—たゝに。されとも—されと。 ⑤鉢敲—鉢たゝき。俗体—俗躰。もて—以て。俗名をかさり侍れは—俗名をもつて句かさり侍れは。有へし—あるへし。重て—かさねては。 ⑥あらむとなり—ありなんと也。

露②去來曰—猿蓑撰の時去來曰。へ—此ノ爪印ナシ。しれと憐や—知れと哀れや。鉢たゝき—鉢敲。と云あり—と云ふ句あり。 ③侍らむ—侍らん。いへるあたり—云ふあたり。働—働き。しかも—然も。 ④たゝ—徒に。しれと憐や—知れと憐れや。いひくたせる—云下せる。各別也—各別なり。されとも—されと。 ⑤もて—以て。趣向を立—趣向を立て。俗名をかさり侍れは—俗名を以て句を飾り侍れは。尤遠慮—遠慮。重て—重ねて。 ⑥あらむとなり—有なんとなり。

【青】①此ノ句ノ頭ニ「（去）」トアル。　②去來曰―猿みの撰の時。此頃―頃日。へ―此ノ爪印ナシ。しれと憐や―しれとあはれや。③侍らむ―侍らん。働―働き。見えて―見へて。④たゝ―たゝに。しれと憐や―しれと哀れや。各別也―格別なり。されとも―されと。⑤鉢敲―鉢たゝき。俗体をもて―俗躰を以ての。俗名をかさり侍れは―俗名を以て句を飾り侍れは。有へし―あるへし。又―また。重て―重ては。⑥あらむとなり―ありなんとなり。

【贄】①此ノ句ノ頭ニ「（去）」トアル。②去來曰―猿簑撰の時。此頃―頃日。へ―此ノ爪印ナシ。しれと憐や―しれとおはれや。③働―働き。④たゝ―たゝに。しれと憐や―しれと哀れや。各別也―格別なり。されとも―されと。⑤鉢敲―鉢たゝき。俗体をもて―俗躰を以て。俗名をかさり侍れは―俗名を以て句を飾り侍れは。又―また。重て―重ては。⑥あらむとなり―ありなんと也。

【架】②云あり―云ふあり。⑤趣向を立―趣向を立て。有へし―あるへし。重て―重ねて。

【訓読】

月雪や鉢たゝき名は甚之丞　越人

去來曰はく、此の頃伊丹の句に、彌兵衛とはしれど憐や鉢たゝき、と云ふあり。越人が句、入集いかゞ侍らむ。先師曰はく、月雪といへるあたり、一句働き見えて、しかも風姿あり。たゞ、しれど憐や、といひくだせるとは各々別也。されども、鉢敲の俗體をもて趣向を立て、俗名をかざり侍れば、尤も遠慮有るべし。又重ねて折もあらむとなり。

口譯

「月雪や鉢たゝき名は甚之丞　越人」――わたくしは、この越人の句に就きまして、「この頃、伊丹の人の作に、『彌兵衛とはしれどあはれや鉢たゝき』といふ句がございます。等類の句と評されるおそれもあるかと存じますから、いま『猿蓑』に、この越人の句を入れますことは、差控へたいと思ひますが、いかゞでございませう。」と申しました。すると、師翁の仰せには、「この越人の句は決して凡作ではありません。殊に、『月雪や』といふ五文字を上に置いたあたりは、一句となるまでの苦心のほども見えますし、それだけ、また句に風情もあります。このところを、その伊丹の人の句では、たゞあつさり『しれどあはれや』と敍してありますが、それとこれとは、各々別の趣です。けれども、兩句とも、鉢たゝきが俗人であることを句の材料とし、而も、その俗名を句中に詠入れてゐる點は、全く似通つてゐますから、いま越人の句を『猿蓑』に入れることは、當然差控へなければなりますまい。いづれ、そのうちにまた發表する機會もあるでせう。」とのことでございました。

語釋

①月雪や　月や雪やの意。これと似た用法の句に、芭蕉の「月雪とのさばりけらし年の暮」（續虛栗）、去來の「月雪のためにもしたし門の松」（曠野）、又は平砂の「月雪や隣りの座には釋迦如來」（續奇人談）などがある。　①鉢たゝき　空也忌（十一月十三日）から四十八夜の間、空也宗の僧（多く有髮妻帶、常には茶筌を製して賣る）、京の町々を巡つて念佛和讃を唱へ、鉦を打ち、竹杖を以て瓢を叩き、米錢を受くるには瓢を以てする。かくて日沒から曉に至るまで修行して歩くこと。又、その人を鉢たゝきと呼ぶ。　②伊丹　攝津國川邊郡にあり、古來有名な伊丹酒の產地であつた。元祿前後此の地に伊丹風といふ俳風が起

り表現の磊落と思想の新奇とを特徴とし、殊に口語を自由に用ゐた。この派の人々には鬼貫を始め、鬼動・鷺助・底神・月尋・蟻道・青人・後村・百丸等が主な人々である。 ⑤**俗體** 僧體又は僧形（そうぎやう）に對する語。僧ならぬ平人の體（すがた）。 ⑤**趣向を立** 句のしくみとすること。 ⑤**俗名** 法名（ほふみやう）に對する語。在俗の名。俗稱・通稱に同じ。 ⑤**折もあらむ** よい機會もあるだらう。

参考

この「月雪や」の句の出典は『去來抄』以外には未だ寓目せぬ。或は「重ねて折もあらむ」といふやうた、發表の機會がなかつたのかも知れぬ。

但し『風俗文選』の中に、去來の「鉢扣の辭」があり、こゝには、「月雪や鉢たゝき名は」が、「鉢扣月雪に名は」となつて出てゐる。（註。〔風俗文選、大註解〕には「月雪や鉢叩き名は甚之丞、越人」とある。）それを參考のため次に掲げる。

師走も二十四日。冬もかぎりなれば、鉢たゝき聞かむと、例の翁のわたりましける。こよひは風はげしく、雨そぼふりて、とみにも來らねば、いかに待佗び給ひなむといぶかりおもひて、

箒こそ眞似ても見せむ鉢扣

と灰吹の竹うちならしける。其聲妙也。火宅を出でよとほのめかしぬれど、猶あはれなるふしぶしの似るべくもあらず。かれが修行は瓢簞をならし、鉦打ちたゝき、二人三人つれてもうたひ、かけ合ひても諷ふ。其唱哥は空也の作也。かくて寒の中と、春秋の彼岸は、晝夜をわかず。都の外、七所の三昧をめぐりぬ。無緣の手向のたふとければ、かの湖春も、わが家はづかしとはいへり。常は杖のさきに茶筌を

さし、大路小路に出て、商ふ業かはりぬれど、さま同じければ、たゝかぬ時も鉢扣とぞ曲翠は申されける。あるひはさかやきをすり、或は四方にからげ、法師ならぬすがたの衣引きかけたれど、それも墨染にはあらず。おほくは、萠黄に鷹の羽打ちちがへたる紋をつけて着たれば、月雪に名は甚之丞と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬、ことごとくね覺はやらじと吟じけるも、ひとり聞にやたへざりけむ。打とけて寢たらむは、かへり聞むも口をしかるべし。明して社との給ひける。横雲の影より、からびたる聲して出來れり。げに老ぼれ足よはきものは、友どちにもあゆみおくれて、ひとり今にやなりぬらんと、翁の、へ長嘯の墓もめぐるか鉢たゝきと、聞え給ひけるは、此あかつきの事にてぞ侍りける。

と見え、錦江の『風俗文選通釋』には、この條下に次の如き說が見える。

米やらぬ我家恥かし鉢扣　　湖春

おもしろやたゝかぬ時も鉢たゝき　　曲翠

鉢扣月雪に名は甚之丞　　越人

悉く寢覺はやらじ鉢扣　　其角

諸子の句斯くの如し。舊說に、鉢扣は其のむかし、彌兵衛、甚之丞といふ兄弟のものあり、行ひしと云云。

次に、「彌兵衛とはしれど哀れや鉢扣」の句は、『俳諧古選』には、作者名を素堂とし「しれど哀れや」を「聞けど哀れや」として揭げてあるが（註。左註に「一作蟻道」とある。）、この句の作者は素堂ではなくて、伊丹の蟻道である。それは、

億麿が編んだ蟻道の追善集『鉢扣』中に、

彌兵衛とはしる茶筌賣、あはだつ雲のこなた、阿彌陀が峯を一として、舟岡そこそこに、至るは七墓なり。夜聲しらけて、一瓢鳴り、あはれの數も聞くにやあらん。

或は、

彌兵衛鉢扣の詠は、人のくちに有ること久し。おほよそ感はその物にあらずして、聞く人見る人の情にあり。名鈎利鎖の人も其法にはよるべし。此のしりても哀れといへるはたそ、在岡の蟻道たるべし。

などとあり、且つ、この序文の一節に素堂が、

攝州伊丹の住、蟻道子、すぎにし五月中の三日に世をはやふすときくは實か。其人を見ずといへども、茂へいぞとしりつゝ哀鉢扣といへる句を耳にとゞろきて、半面をしる人のごとし。今聞けば、五文字彌兵衛なるよし、され共東武にて人のよろこびしは、茂へいにて侍れば、いまさら改むるに忍びず。

と記してゐるので明瞭であらう。但し、この「茂兵衛」說を固執するのも、さて如何なものであらうか。其角の『句兄弟』には、既に、

彌兵衛とはしれどあはれや鉢敲　蟻道

と出てゐる。又、鉢叩の俗名としては、彌兵衛と甚之丞とが最も名を知られてゐたといふ傍證の一としては、『はいかい袋』に、

彌兵衛が子つれて出けり甚之丞　大江丸

の一句が見えてゐる程である。

この「月雪や」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、『旅寐論』には、

月　雪　や　鉢　た　ゝ　き　名　は　甚　之　丞　　越　人

此句、猿蓑集の草稿に撰び入侍りけるを、伊丹の集に、彌平とはしれど哀れや鉢たゝき、といふ句見當りて、入集いかゞ侍らんと伺ひけるに、先師曰、そのこゝろざす所かはりあり。然ども句において紛はし。遠慮有べしと下知し給へり。

『蕉門誹諧語錄』に、

同じ時、

月　雪　や　鉢　敲　名　は　甚　之　丞　　越　人

此頃伊丹の句に、

彌　兵　衛　と　は　し　れ　ど　あ　は　れ　や　鉢　叩

といふ句あり。越人が句入集いかゞ侍らん。先師曰、月雪といへるあたり、一句働き見えてしかもすがたあり。しれどあはれやと言下せるとは格別なり。されど、鉢敲の俗躰を立て俗名を以て句かざり侍れば、尤遠慮有べし。

とある。而してこゝには明かに『猿蓑』の撰の時の事であると認めてある。試みに『猿蓑』中の鉢叩の句を求むれば、

鉢たゝき憐は顔に似ぬものか　乙州

一月は我に米かせはちたゝき　丈草

の二句が收あられてある。越人の句は、この時の候補句であつたと考ふべきであらう。

積翠園の『去來抄評』には、

○月雪や云々。

冬の月の冴わたりたると、雪の夜の寒きと、風流に見るべきは、甚之丞の名にあり。月の凄く、雪の寒きは、鉢たゝきの佗しき其意味働あり。鉢たゝきを彌兵衛とは知れどあはれやとは、情に落入て、其風流をつくせる所薄かるべし。

と見え、なほ『篗すり古義』には、「彌兵衛とは」の句を說いた後に、「甚之丞の鉢叩をくれたりなど云說は、誰も知たる事也」。と記してある。

一七　きられたる夢はまとか蚤の跡　其角　①

去來曰其角は實に作者にて侍るはつかに蚤のくひつきたる事誰かか　②

くはいひ盡さん先師曰しかりかれは定家の卿なりさしてもなき事を　③

と〱しくいひつらね侍るときこえし評詳なるにゝたり　④

校異

久①きられたるー切れたる。夢はーゆめは。蚤の跡ーのみのあと。　②實にー誠に。はつかにーわつかに。蚤のくひつきたる事ーのみの喰つきたる事。誰かーたれか。　③いひ盡さんー謂つくさん。定家の卿なりー定家の卿也。　④と〱しくーこと〱しく。きこえしーきこへし。評詳なるにゝたりー評詳に似たり。

帝①きられたるー切られたる。まとかー誠か。　②實にー誠に。はつかにー僅に。蚤のくひつきたる事ー蚤の喰付たる事を。③しかりー然り。かれはー彼は。定家の卿なりー定家の卿也。　④と〱しくーと〱敷く。侍るとー侍と。評詳なるにゝたりー許淵に似たり。

落①きられたるー斷られたる。夢はー夢か。まとかー誠歟。　②其角はー其角。實にー誠に。はつかにー僅に。蚤のくひつきたる事ー蚤の喰付たることを。　③かくはー斯くは。いひ盡さんー云盡さん。しかりー然り。かれはー彼は。定家の卿なりー定家卿なり。　④と〱しくー事々しく。いひつらねー云連ね。きこえしー聞えし。評詳なるにゝたりー評判に似たり。

青①きられたるー切れたる。まとかー誠か。蚤の跡ー蚤のあと。此ノ句ノ頭ニ「(古)」トアル。　②實にー誠に。はつかにーわつかに。蚤のくひつきたる事ー蚤の喰付たることを。　③かくはーかく。いひ盡さんー言盡さん。かれはー彼は。定家の卿なりー定家卿なり。さしてもなきーさらてもなき。　④と〱しくーこと〱敷。いひつらねー云つらね。きこえしー聞へし。評詳なるにゝたりー評詳なるに似たり。

贄①きられたるー切られたる。まとかー誠か。蚤の跡ー蚤のあと。此ノ句ノ頭ニ「(古)」トアル。　②實にー誠に。はつかにー

わつかに。蚤のくひつきたる事―蚤の喰付たる事を。　③かくは―かく。いひ盡さん―云盡さん。かれは―彼は。定家の卿なり―定家卿也。さしてもなき―さらてもなき。　④と〱しく―と〱敷。いひつらね―云つらね。きこえし―聞へし。評詳なるに〻たり―評詳なるに似たり。

〔異〕④と〱しく―こと〱しく。

訓読

きられたる夢はまことか蚤の跡　其角

去來曰はく、其角は實に作者にて侍る。わづかに蚤のくひつきたる事、誰かかくはいひ盡さん。先師曰はく、しかり。かれは定家の卿なり。さしてもなき事を、こと〲しくいひつらね侍るときこえし評、詳かなるにたり。

口訳

「きられたる夢はまことか蚤の跡　其角」――この其角の句を見まして、わたくしは、「さて〱其角は技巧がうまいものですね。たゞ蚤にくはれたといふだけの事を、其角より外の人では、これだけの句には詠みつくせますまい。」と、申しました。師翁は、わたくしの言葉をお聞きになつて、「お前の言ふ通りです。全く其角は定家卿とも言ふべきで、それほどでもない事を、大袈裟に表現した句を作りますね。」と、仰せになりました。このお言葉は、其角の作風を評して、よく言ひ盡されたものと思はれます。

語釈

②作者　技巧のたくみな人。こゝでは作る人といふ意を更に轉じて解する。　②はつかに　僅かに。　③定家　藤原定家は俊成の子。歌道の達人として、又『新古今和歌集』『新撰和歌集』、或は『百人一首』等の撰者として頗る有名である。安貞元年正二位に叙せられ、世に京極中納言と稱せられた。草堂を嵯峨の小倉山に設けてゐたことも亦著名で、故にかの『百人一首』は『小倉百人一首』とまで呼ばれてゐる程である。仁治二年八月二十日薨。年八十。詠集を『拾穗愚草』といひ、日錄を『明月記』といふ。　③卿　けい。公卿。詳しくいへば、公は攝政・關白・左大臣・右大臣をいひ、卿は大納言・中納言・三位以上の殿上人、及び參議に限り四位までをいふ。　③さしてもなき事　それほどでもない事。　④ことごとしく　事故あるらしく。たいさうらしく。大袈裟に。　④詳なるににたり　詳しいに似てゐる。卽ち、言ひ盡したに近いといふほどの意。

參考

この「きられたる」の句の出典は『華摘集』・『五元集』である。但し、『華摘集』には「怖夢を見て」といふ前書があり、『五元集』には、「いきげさに、ずでんどうと、うちはなされたるが、さめて後」といふ前書が附せられてある。

なほ、この章は『花實集』には、次の如くなつてゐる。

きられたる夢は誠か蚤の跡　其角

去來曰、其角は誠に作者にて侍る。纔に蚤の喰付きたる事を、誰か斯くは言盡さん。先師曰、然り、定

家卿也。さしてもなき事を、こと〴〵しくいひつらね侍ると聞えし、許淵に似たり。

其角曰、凡そ發句をこゝろがけるに、その品あるべし。時により興に乘じて、めづらしき趣の句得たりとも、外に鏡とすべき好句なければ、一句は一句能句にして、それをさして能句持とはいふべからず。唯、多き中にも好ましきは、花・時鳥・月・雪なるべし。是等は風物の基源にして、人々常に心にかくる故か數多く聞え侍れども、却てさし出たる句も見えず、甚だ稀也。それが中に勝れたる句いひ出でんは誠に面白かるべし。或は鶯・霞・柳・梅・さくら・歸鴈・春雨・蛙・おぼろ月・雛・行春、或は更衣・牡丹・杜若・初がつほ・鵜・ほたる・涼・夏の月・清水・蟬・暑、或は立秋・七夕・秋かぜ・砧・蟲・鹿・夜寒・鴈・菊・紅葉・露・九月盡、或は時雨・霜・千鳥・枯柳・冬の月・かれ野・火桶・紙衣・頭巾・木がらし・冬籠等なるべし。是等に能句侍らば、實に誹諧の句持成るべけん。たとへば、雀蛤となる、或は櫻魚・峯入の類にて、いかに好句あればとて、姿情の限ある事なれば、いひ課せて何程の手柄あるべき。されど、あながち、せざれとにはあらず。撰集の時などには、好みてもなを模樣に入句すべき事也。是は只常に心懸くべき趣を申侍る也。

こゝに、『其角曰』以下は、其角の作句態度が窺ひ得て、頗る興味がある言であらうと思ふ。

又、『三冊子』には、

師の曰、其角は同席に連るに、一座の興にいる句をいひ出て、人々いつとても感ず。師は一座その事なし。後に人のいへる句はある事も有と也。さあるべき事也。云く、座によりて一座の人にとれて句をそこなふ事あり。門人常に心得べし。其角は生質としてこゝに居らずと也。

又いはく、一とせ對面の始いひ出られ侍るは、俳諧能過たり。碁ならば二三目跡へ戻してすべしと示されし也。面白き教也。

功者に病あり。師の詞にも、俳諧は三尺の童にさせよ、初心の句こそたのもしけれなど〻、たび〳〵云ひ出られしも、皆功者の病を示されし也。實に入に氣を養ふところすあり、氣先をころせば、句氣にのらず、先師も俳諧は氣にのせてすべしと有。相槌あしく拍子をそこなふともいへり。氣をそこなひところす事也。又ある時は我が氣をだまして句をしたるよしともいへり。みな氣をすかし生て養の教也。門人功者にはまりて、たゞ能句せんと私意を立て、分別門に口を閉て案じ草臥る也。おのが習氣をしらず、心のおろかなる所也。

師のいはく、或人の句は艶をいはんとするに依て、句艶にあらず、艶は艶いふにあらず。又、或人の句はしほりなし、じほらんずるが故にしほりなし。又、或人の句は作に過て心の直を失ふ也。心の作はよし、詞の作好べからずと也。

『葛の松原』には、

晋子も鐵炮といふ名のいひ難しとて、千々にこゝろはくだきける也。おなじ集（註。其角の【雜談集】にある所説をいふ。）に、品かはるといふ戀の論は、微細のところ、かくぞ心をとゞめけむ。殊勝の心ざし、いとうらやまし。晋子が語路おほむね酒盃に渡れり、といふ人あるに、宋の泊宅編には、白氏が二千八百言、飲酒の詩九百首なりと答へ侍るといへど、晋子が性、人にまぎれねば、樂天が飲酒はなをかぎり有りとて、用の事かた

づけ侍りぬ。

『青根が峯』には、

角や今我今日の流行におくるゝとも、行すへまたそこばくの風流をば、なしいだしきたらんも、知るべからず。

晋子がすく所は、曾てこの趣にあらず。俳諧は伊達風流にして、作意の働き面白き物と、すき出たる違ひなり。故に晋子と許子と符合せざるといへり。はじめて眼をひらき、一言に寄て筋骨に石針するごとし。又問ふ、師と晋子と、師弟はいづれの所を教へ習ひ得たりといはむ。答て曰、師の風閑寂を好んで細し。晋子が風伊達を好んでふとし。此細き所師の流なり、爰に符合すといへり。これをかんず。

晋子其角が器きはめてよし。人のとりはやするも、生得、活景をおもてに上手をあらはせしゆへに、諸人の耳目を驚す。不易・流行ともに得たり。百年先の事をおもんぱかり、行過たる句あり、中以下の盲誹はこれらをとらず。愚なる人の耳とをきが故なり。我筋かたのごとく得たりと言へども、未熟の人を導くたよりには遠し。故にかへつてせまき所あり。たとへば掘りぬき井を見るがごとし。水脈まではほりぬきたりといへども、五湖の廣きをしらざるに似たり。

等の記載が見える。芭蕉の指導下にありながら、其角が師風とは相違した獨自な作風を持つてゐたことは、これらに依つても容易に推察することが出來る。なほ『誹諧耳底記』には、いさゝか興味本位の說ではあるが、次の如く傳へてある。

明星やさくら定めぬ山かつら

と囀りて、翁の耳を驚かすといへども、此如猿がごとく、常に酒にふけりてたはひなく、風雅は生得曲を好む癖あるゆへ、是を戒めて、

物いへば唇寒し秋の風

と吟ぜられたり。いつの酔の紛れにや、

聲かれて猿の歯白し峰の月

と鳴しを聞て、又汝が病起りたり、珍らしき事をいはんとて、遠くもとめてけやけし。句は唯足もとにありとて、

鹽鯛の歯ぐきも寒し魚の店

と作りて、ほそみといふ事をしらす。

秋の雲尾上の杉をはなれたり

などいひしほそみは、正風の丸ぬけにて、蕉門第一の作者なれども、曲を好む病つのりて、翁のなきがらを笠に隠して、後正風を亂し、流行の水を濁す。

次に、「其角は定家卿なり云々」に就いて、少しく言添へるならば、新古今集時代が、技巧的に或は修辭的に、最も進歩した時代であるとは言ひ得ると思ふ。固より萬葉集時代にあつても、既に内容形式とも、めでたく姿整うてはゐるが、未だ紀記の歌謠時代の名殘があつて、どこか謠うて耳に聴く歌といふ感じがある。それが、やが

て、作つて目に讀むものとしての存在を確立したのは、新古今集時代であると言へると思ふ。技巧のみの極致といふことは、純粹な文學批判からすれば、それだけで充分でないことは勿論ではあるが、兎も角、かうした時代にまで推移してゆくといふ事は、和歌の發達史から見れば當然の變遷であつたかも知れない。さて、この新古今集時代を代表する歌人の一人に定家がある。殊に、定家は、恐らく後人の僞作であらうが「難題十首」等の傳へもある程、技巧のうまい歌人と見ることが常識となつてゐる。然し、芭蕉が何故「其角は定家卿なり」といふやうな言葉を用ゐたかといふ點を、もう少し忖度すれば、この新古今集時代の代表歌人として、他に西行がゐることにも注意しなければならぬ。芭蕉は西行の作風に心醉してゐたが、西行を鑑賞することは、必然的にそれと同時代の定家をも研究する必要に迫られたに違ひないのである。そして、西行を好めば好むほど、定家を所謂「さしてもなき事を、こと〲しくいひつらね侍る」といふ風に感じたに相違ないと思ふ。

積翠園の『去來抄評』には、

○切られたる云々。

定家卿の、家隆は歌よみ也、我は歌作り也と、のたまひけるとかや。

と見えてゐるが、これは『青根が峯』に、許六が、

定家卿の論に曰、家隆は歌よみ、我は歌作り、寂蓮は逸物也といへり。

などとあるのを引用したものであらう。

又、『芭蕉葉ぶね』には、

きられたる夢は誠か蚤の跡　　其角

是作の重み也。趣向は誠に輕し。誠かとかゝへて、跡と坐語を押付たるにて重み出來たり。

と記してある。

六　をとゝ日はあの山越つ花さかり　　去來

是は猿蓑二三年前の吟なり先師曰此句いま聞人有まし一兩年を侍へしとなり其後杜國か徒とよし野行脚し給ひける道よりの文に或はよし野を花の山といひ或はこれは〳〵とはかりと聞えしに魂を奪れ又は其角か櫻さためぬといひしに氣色をとられてよし野に發句もなかりきたゝをとゝひはあの山越へつと日ゝ吟し行侍るとなり其後此句をかたり人もうけとりけりいま一兩年はやかるへしとはいかてか知給ひけん予は却て夢にもしらさる事ともなり

【久】①をとゝ日—おとゝひ。越つ—こえつ。花さかり—花盛。②是は—此は。猿簔—さるみの。吟なり—吟也。此句—この句。一兩年を待へし—一兩年を待つへし。③となり—と也。其後—その後。よし野行脚—吉野行脚。給ひ—たまひ。よし野を—吉野を。④これは〱—是は〱。奪れ—奪はれ。⑤よし野に—吉野に。發句—ほ句。⑥たゝ—只。をとゝひは—一昨日は。越へつ—こえつ。行侍るとなり—行侍るのと也。其後—その後。⑦此句をかたり人も—此ほ句をかたり人も。いま一兩年—今一兩年。知給ひけん—しり給ひけん。⑧予は却て夢にも—予は却てゆめにも。事ともなり—事なりけり。

【帝】①をとゝ日—おとゝひ。花さかり—花盛り。②吟なり—吟也。いま聞人—今聞人。有まし—あるまし。③となり—と也。よし野行脚—吉野行脚。給ひ—玉ひ。道よりの文—道より文。よし野を—吉野を。④花の山といひ—花とのみいひ。これは〱—是は〱。聞えしに—聞しに。奪れ—奪はれ。⑤櫻さためぬ—櫻さためよ。よし野に—吉野に。⑥をとゝひは—おとゝひは。越へつ—越つ。日ゝ吟し—おとなしく吟し。⑦此句をかたり人も—此發句を人も。いま一兩年—今一兩年。いかてか—いかて。⑧知給ひけん—知玉ひけん。予は却て夢にも—予は夢にも。しらさる事ともなり—知らさる事成けり。

【落】①をとゝ日—をとゝひ。越つ—越えつ。花さかり—花盛。②猿簔—猿蓑。いま聞人—聞く人。一兩年を待へし—一兩年も待つへし。③杜國か徒と—杜國と。よし野行脚—吉野行脚。よし野を—吉野を。④花の山といひ—花の山と云ひ。これは〱—是は〱。奪れ—奪はれ。⑤櫻さためぬ—櫻定めよ。いひしに—云ひしに。とられて—取られ。よし野に—吉野に。⑥たゝ—只。越へつ—越つ。日ゝ吟し行侍る—云はまほしく吟し行き侍る。此句—此發句。⑦此句をかたり人も—此發句を人も。うけとりけり—受取けり。いま一兩年—今一兩年。はやかるへし—早かるへし。⑧予は却て夢にも—予は夢にも。しらさる事ともなり—知らさることとなり。

【甫】①をとゝ日—おとゝひ。花さかり—はな盛。此ノ句ノ頭ニ「(丙)」トアル。②猿簔—さるみの。いま聞人—今聞人。③

よし野行脚―芳野行脚。よし野を―吉野を。　④花の山といひ―花の（イこのみ）と云。これは〳〵―是は〳〵。と聞えしに―聞しに。奪れ―奪はれ。又―また。　⑤櫻さためぬ―さくらさためぬ。いひしに―云しに。　⑥をとゝひは―一昨日は。越へつ―こへつ。日ゝ吟し―吟行。となり―と也。其後―その後。　⑦此句をかたり人も―此の發句を人も。うけとりけり―受取けり。いま一兩年―一兩年。はやかるへし―早かるへし。いかてか―いかて。知給ひけん―しり玉ひけん。　⑧予は却て夢にも―予は夢にも。しらさる事ともなり―しらさりける事なり。

贇①をとゝ日―おとゝひ。花さかり―花盛。此ノ句ノ頭ニ「(去)」トアル。　②いま聞人―今聞人。　③よし野行脚―吉野行脚。給ひ―玉ひ。よし野を―吉野を。　④花の山といひ―花野といひ。これは〳〵―是は〳〵。と聞えしに―と聞しに。奪れ―奪はれ。又は―または。　⑤櫻さためぬ―さくらさためよ。　⑥をとゝひは―一昨日は。越へつ―越えつ。日ゝ吟し―吟行。となり―と也。其後―その後。　⑦此句をかたり人も―この發句を人も。うけとりけり―受取けり。いま一兩年―一兩年。はやかるへし―早かるへし。いかてか―いかて。知給ひけん―しり給ひけん。　⑧予は却て夢にも―予は夢にも。しらさる事ともなり―しらさりける事なり。

架①越つ―越えつ。　②いま聞人―いま聞く人。有まし―有るまし。待へし―待つへし。　④奪れ―奪はれ。　⑥越へつ―越えつ。　⑧しらさる事ともなり―しらさることとなり。

訓讀

をとゝ日はあの山越えつ花ざかり　去來

是は猿蓑に二三年前の吟なり。先師曰はく、此の句いま聞く人有るまじ。一兩年を待つべしとなり。其の後、杜國

が徒と、よし野行脚し給ひける道よりの文に、或はよし野を花の山といひ、或はこれは〳〵とばかりと聞えしに、魂を奪はれ、又は其角が櫻さだめぬといひしに、氣色をとられて、よし野に發句もなかりき。たゞ、をとゝひはあの山越えつと、日々吟じ行侍るとなり。其の後、此の句を語り、人もうけとりけり。いま一兩年はやかるべしとは、いかでか知給ひけん。予は却つて夢にもしらざる事どもなり。

口譯

「をとゝ日はあの山越えつ花ざかり　去來」――この句は、元祿元年の師翁の芳野紀行よりも少し前、言換へますと、『猿蓑』の編が成つた元祿三年からは、なほ二三年も前に、わたくしの作りました句でございます。この句が出來ました折、早速、師翁に御覽に入れましたところ、「これは佳い句です。けれども、今はこの句に感心する人はありますまい。一二年の後になつて、必ず評判になるでせう。」と、仰せになりましたので、人々にはこの句を打明けないで置きました。それから後、師翁は杜國を伴はれ、「よし野にて櫻見せうぞ檜笠」を門出の吟として、伊賀から、遙々と吉野山の花をたづねて行脚をなさいました。この紀行が、所謂芳野紀行でございますが、この行脚の途中から、わたくしに賜はりましたお便りの中に、「吉野山の花を、ぜひ一句にしたいと思うたのですが、かの評判の良經の歌『昔たれかゝる櫻の花をうゑて吉野を春の山となしけむ』や、貞室の句『これは〳〵とばかり花の吉野山』などに、心をうばはれ、又、其角の句『明星や櫻さだめぬ山かつら』などに、美しい景色は既に言ひつくされて、遂に吉野では發句一つ作ることが出來ませんでした。そして、毎日たゞ『をとゝひはあの山越

えつ花ざかり』と、お前が曾て作つた句を口ずさみました。」と、ございました。このお便りを頂きまして後、漸くわたくしにも、この句に自信を持つことが出來まして、人々にこの句を打明けましたところ、聞く者は皆よい句だと感心してくれました。然し、前に、師翁が「一二年の後になつて、必ず評判になるでせう」と、仰せられたのは、どうしてお判りになつたのでありましたらう。わたくしなどには、なか〳〵夢にも想ひつかれぬことでございます。

語釈

①**越つ** 「越えつ」と書くべきである。『去來發句集』などには、明らかに「あの山こえつ」となつてゐて疑ひもないが、「越つ」では「越しつ」とも訓み得る。文法的に言へば不完全たるを免れない。 ②**聞人** きゝて。こゝでは感服して聞く人の意。
③**杜國** 尾張名古屋の人である。坪井氏、通稱は平兵衛といひ、野仁（二人行脚）、萬菊丸、又は岩菊丸（卯辰紀行）と號した。越人は、『鵲尾冠』に「其角・杜國は一双の作者」と讃めてゐる。家は富んでゐて、藩の米切手を扱つてゐる內、罪に坐して追放され、三河の保美の里に隱れてゐた。貞享四年十一月、芭蕉その閑居を訪ひ、翌五年吉野紀行に伴ひ、戯れに萬菊丸と呼んだ。謫居後の號を野仁、又は野人といふ。その歿年に就いては、元祿三年二月廿日、同年五月五日。或は五月廿六日と、諸說があるが、三河國福江町隣江山潮音寺の墓碑には元祿三庚午二月廿日とあり、又『曠野後集』には「杜國がいらこにしばらく住ひしてほどなく身まかりけるに、蛛のいのはかなや春の細簾、荷兮」の句があるにより二月廿日說を正しいとすべきであらう。享年不明。 ③**杜國が徒** 「徒」は「輩」の意とすれば、その一類の者の總稱になつて、「仲間」といふほどの意となり、杜國の仲間と解さねばならなくなる。然し、こゝでは「徒」には幾分輕んじた意はあつても、さほど意味のある詞と見ない方が、妥當であら

う。芳野紀行は、芭蕉・杜國の二人連れで、他に同伴者はゐなかつたやうである。　③**よし野**　大和國吉野郡吉野山のことで、古來櫻花の名所として著はれ、又吉野朝の遺跡を以て名高い。一目千本・奥の千本などと稱して、花時美觀を極める。　③**行脚**　諸國を歴めぐつて佛道を修行すること。轉じて徒歩で遊歴することにもいふ。芭蕉が杜國と共に芳野行脚をしたのは、元祿元年のことで、その紀行文が、『笈の小文』一名、『芳野紀行』である。　④**花の山といひ云々**　良經の「昔たれかゝる櫻のたねをうゑて吉野を春の山となしけむ」の歌をさす。　④**これは〳〵とばかり云々**　貞室の「これは〳〵とばかりの花の吉野山」の句をさす。　⑤**其角が櫻さだめぬ云々**　其角の「明星や櫻さだめぬ山かつら」の句をさす。　⑦**うけとりけり**　納得したの意。よい句だと思つてくれた。

〔參考〕

この「をとゝ日は」の句の出典は『華摘集』、なほ『去來發句集』『葛の松原』『旅寢論』等にも見えてゐる。但し、『華摘集』には「をとゝ日は」が「一昨は」とあり、『去來發句集』には『越つ』が「こえつ」となつて収められてある。

この「をとゝ日は」の句に就いて論及してゐる書の中、代表的なものを次に列擧すれば、『花實集』には、

去來曰、

おとゝひはあの山越つ花ざかり

此句、猿蓑の二三年前の吟也。先師曰、此句今聞人あるまじ。一兩年を待べしと也。其後、杜國が徒とよし野行脚し給ひける道よりの文に、或は吉野を花とのみいひ、或は是は〳〵と計り聞しに魂を奪れ、

又は其角が櫻さだめよといひしに景色をとられて、吉野に發句もなかりき。たゞ、一昨日はあの山越つと、をなじく吟じ侍るとなり。其後、此ほ句を人もうけとりけり。一兩年はやかるべしとは、いかで知給ひけん。予は夢にもしらざる事也けり。

『旅寐論』には、

許六のいへる如く未來の句を嫌ひ侍らんは、初心の最上たるべし。今許六、爰を揚て論ぜらるゝに不ㇾ及都て疑ふべし。去來・許六と誹諧を論ずるうち、未來の風の事を記せり。無事にや有らん。然ども、許六風體を取違て可ㇾ作ものに非ず、句々に新味を探して、いまだ人の行ざる場をふむ事、人々の覺悟也。一句〳〵あたらしみは申に不ㇾ足。一とせ先師、

一昨日はあの山越へつ花ざかり　去來

と云句を作したる時、此句今は取人も有まじ。猶二三年も早かるべしと也。其後吉野行脚の歸に立より給ひて、日々汝が、あの山こへつ花盛、の句を吟行し侍りぬと語玉ふ。又深川に發句ども棒ける中に、世上に未無情の句一句もみへず、汝手柄たるべしと。如ㇾ此未來の句を賞し給ふは、自他の上に聞侍れども、未來の句をとがめ給ふ事終に不ㇾ聞。又未來の句を起し來らん事は、其人にあらずば、かなふ間敷事也。もし强て是を起し來らば、定て其風あしからん。口惜かな、先師世にいまさば、皆必一變して新風流行せん。既に迁化在て六年、いまだ新風を起し來る人なし。

『葛の松原』には、

おとゝひはあの山越へつ花ざかり　去來

此句、三四年もはやかるべしと、阿叟も申され侍しよし、今は四とせばかりにもなりぬらむ。なつかしき君子もあれや吁。

『誹諧或問』には、

貞享三四の頃か、

おとゝひはあの山越へつ花ざかり　去來

此句三四年もはやかるべしと、芭蕉申されたるとかや。されば此躰元祿に有べきを、胸中にたくはへられしが、されどその頃蕉翁のみおもしろく思はれ、よし野の花にも吟行せられしかど、世にとらざればかく申されたる成べし。

と見えてゐる。

又、几董の『新雜談集』には、

おのれ俳諧はえたり顏に、しかも道に深からぬ人の集など見侍るに、まづ作者の名を見て、後に句の好惡を論じ侍る。かゝる未練の爲業はあらじかし。名利に惑ひ、是非のわきまへなき人といふべし。

これは〳〵とばかり花のよし野山　貞室

明星やさくら定めぬ山かつら　其角

をとゝひはあの山越えつ花盛　去來

西上人の栞に迷ひ、彼の貞室がこれは〳〵と打ちなぐりたる、又は晋子が櫻定めぬといひしに景色をとられ、吉野に句なし。たゞ、をとゝひはあの山越えつと、おなじく吟行し侍るとは、芭蕉翁の雜談也。

とある。

次に、芭蕉の芳野紀行中、關係の深いところだけを『笈の小文』から引用してみる。

彌生半ば過ぐる程、そゞろにうき立つ心の花の我を道引く枝折となりて、よしのゝ花におもひ立たんとするに、かのいらこ崎にてちぎり置きし人の、いせにて出でむかひ、ともに旅寐のあはれをも見、且つは我爲に童子となりて、道の便りにもならんと、自ら万菊丸と名をいふ、まことにわらべらしき名のさま、いと興有り。いでや門出のたはぶれ事せんと、笠のうちに落書す。

乾坤無住同行二人

よ し 野 に て 櫻 見 せ ふ ぞ 檜 木 笠

よ し 野 に て 我 も 見 せ ふ ぞ 檜 木 笠　　万 菊 丸

旅の具多きは道ざはりなりと、物皆拂ひ捨てたれども、夜の料にと、かみこ壹つ、合羽やうの物、硯、筆、かみ、藥等、晝笥なんど物に包みて、後に背負ひたれば、いとゞすねよはく力なき身の、跡ざまにひかふるやうにて、道猶すゝまず。たゞ物うき事のみ多し。

草 臥 て 宿 か る 比 や 藤 の 花

初 瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

葛城山

猶みたし花に明行神の顔

三輪　多武峯　臍峠（多武峰ヨリ龍門へ越道也）

雲雀より空にやすらふ峠哉

瀧（マヽ）門

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみに語らんかゝる瀧の花

西河

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音

布留の瀧は布留の宮より二十五丁山の奥也。

布引の瀧（津國幾田の川上に有）　箕面の瀧（大和）　勝尾寺へ越る道に有。

櫻

櫻がりきとくや日々に五里六里

日は花に暮てさびしやあすならふ

扇にて酒くむかげやちる櫻

苔清水

春雨のこしたにつたふ清水哉

よしのゝ花に三日とゞまりて、曙、黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは攝政公のながめにうばはれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室が是は〳〵と打ちなぐりたるに、われいはん言葉もなくて、いたずらに口をとぢたる、いと口をし。おもひ立ちたる風流いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり。

以上で、杜國を万菊丸と呼びながら、伊賀から初瀬・葛城を經て吉野に到つた道程が明らかである。そして、苔清水に着く前には、櫻の題を得て三句ものしてゐながら、目的地たる吉野に來ては、更に一句も得られなかつたことなどは、これを芭蕉自身の手記から發見して、一層味ひ深いものに思はれる。さて、こゝに「攝政公のながめ」とは、前述の如く藤原良經、卽ち後京極攝政、前太政大臣の「昔たれかゝる櫻の花を」の歌を指すので、この歌は『新勅撰和歌集』には、

家に花の五十首の歌よませ侍りける時

昔たれかゝる櫻のたねをうゑて吉野を春の山となしけむ　後京極攝政前太政大臣

と見えてゐる。こゝに「櫻のたねを」は一本に「櫻の花を」とあり、且つ下の句の「吉野を春の」は「吉野を花の」とも傳へられてゐる。また、「或はよし野を花の山といひ云々」(『新雜談集』によれば、「西上人の栞に迷ひ

云々）とあるのは、『新古今和歌集』に見える西行の歌、

よしの山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねむ

を指すのである。

次に「これは〳〵とばかり」の句は『一本草』にも出てゐる句であるが、蕉門でも比較的重視され、『曠野』にも入集し、其角は『句兄弟』に於て、「誹諧の須彌山なるべし」といひ、殊に支考は『俳諧十論』に於て、

中古の誹諧師はおほくは、名のみ書捨しに、ひとり貞室を稱せり。其句は今の世に讃すべし。

是は〳〵とばかり花のよしの山

いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥

誠や、此二句の姿情を得て、今の俳諧の根ざしといへる、爰に風雅の私なからんには、爰に新舊の差別を信ずべし。

等と稱讃してゐる。後年の蕉風と比較すれば、殆んど取るに足らぬ俗情の句であるにも拘らず、此處に芭蕉は此の句を引合に出して、「われいはん言葉もなくて、いたづらに口をとぢたる、いと口をし」と感服してゐるのは、注意すべきである。なほ「其角が櫻さだめぬ」とは「明星や」の句を指すことは、前述の通りであるが、『蕉翁消息集』には、次の如き書翰が掲げられてある。

明星やさくらさだめぬ山かつら

と云ひし句、山中の美景にけをされ、古き哥どもの信を感ぜし敍、明星の山かつらに明殘るけしき、此

句のうらやましく覺え候也。

ばせを

其角様

この其角の句の出典は『五元集』で、同書には「芳野山ぶみして」と前書がある。
なほ此の書翰に就いては、白露の『誹論』に、

其角生得酒を好み、日夜酒を樂しみ居られけるを、芭蕉翁其角に向ひ、酒は百藥の長といへど、いたつて大酒を好むときは、肺氣を破る。利休がいへる、一杯の酒は人酒をのむ、二盃の酒は酒々をのむ、三盃の酒は酒人をのむといへるごとく、酒をのむ事長ずれば、終に我身を酒に呑るゝなり、と禁じ給ひけるより、酒を斷居けるに、芭蕉翁大和行脚して芳野山にのぼり、曙のさくらを詠め、古詩古歌などを思ひ出し、夫より古人の連歌誹發句を吟じ出し、貞室がこれは〳〵といへる發句の玄妙なる事を感じ、その次手に、

明星やさくらさだめぬ山かつら　　其角

此句を思ひ出て、去年其角が吉野にてせし發句にて、其節はさのみ至て秀逸とも思はざりしが、今爰に眺望して佳境に入たるを感じ、是其角の酒を好める德なるべしと、禁斷せし酒を免じ、自今はもとの如く呑給へと、芳野より武江へ状を送られしと也。

と見えてゐる。

次に「いま聞人あるまじ、一兩年を待つべし」といふこと、卽ち、未來になつて評價の定まるといふやうな場合も、稀にはあり得るかも知れぬ。『篇突』には、

未來の句をするといへば、未練のものは斗方もなき様におぼえ侍れ共、眼前にしれたり。たとへば花の句所望せし時、一句案じて當前に出す。又、一句のぞむ時、最前の案じ所をかえて、奥を尋ねて一句とり出すべし。又所望する時、ひたもの奥を尋て出さん。是未來の句、眼前に知れたり。世上の人、奥を尋ぬる事をしらざる故に、未來の句曾て見えず。上手のすり上て、案じたる骨折をしらざる事無念也。されば上手の句は、今日とらずといへ共、四五年も過侍れば、世に用ひらるゝ事、是奥を尋て案じたる故也。世間の人も、日月の上りかはるにしたがひ、我しらずに少は流行する故に、前々とらざる句共、面白く成もの也。上手は又其時、五年も十年もさきへ流行して、終に下手の居る所に遊ばず。故に一生追つく事かたかるべし。

とあり『青根が峯』には、

未來の句を案ずるといふは、五年も七年も先の句を案ずる也。未練の者は斗方もなき事の様に思ひ侍れども、眼前にしれたる事也。たとへば花と云題にて發句所望せし時、案じて一句出る。又一句望む時、最前案じたる所は最早述がたければ、それよりおくを尋る。是未來の句眼前にしれたり。

と記されてある。

又、芭蕉は「吉野に發句もなかりき」とあるが、これに就いては『三冊子』に、

師のいはく、絶景にむかふ時は、うばはれて、不叶、物を見て取所を心に留めて不消、書寫して靜に句すべし。うばはれぬ心得もある事也。そのおもふ所しきりにして、猶かなはざる時は書うつす也。あぐむべからずと也。師、松島にて句なし。大切の事也。

と述べられてある。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○おとゝひは云々。

新勅撰に、むかし誰かゝる櫻の花をうへて芳野を春の山となしけん、攝政良經。是は〱とばかり花のよしの山、貞室。明星や櫻さだめぬ山かづら、其角。世にばせを一風を建たる如くいへども、世をためんとするにはあらず。其道を好む事の深ければ、人〱に先達て心のうつり行事はやし。元祿に至りても、他門は貞享の風調にして變ぜず。其うつり行事はやきがゆへに、ばせをを先達とす。心先だつゆへに、一兩年はやき事を知るなるべし。

と見えてゐる。

一九　病鴈の夜寒に落て旅寐かな　①

海士の家は小海老にましるいとゝ哉　②

猿蓑撰の時此うち一句入集すへしとなり凡兆曰病鴈はさるヿなれと ③
小海老にましるいとゝは句のかけりヿあたらしく誠に秀逸なりとい ①
ふ去來曰小海老の句はめつらしといへと其物を案したる時は予か口 ⑤
にもいてん病鴈は格高く趣かすかにしていかてか爰を案しつけんと ⑥
論し終に兩句ともに乞て入集す其後先師曰病鴈を小海老なとゝ同し ⑦
ヿくに論しけるやと笑ひ給ひけり ⑧

校異

久①夜寒―よさむ。旅寐かな―旅ね哉。此ノ句ノ下ニ「はせを」トアル。②海士の家―あまのや。此ノ句ノ下ニ「同」トアル。③猿蓑―さるみの。此うち―此内。となり―と也。凡兆曰―凡兆は。さるヿ―さる事。④ましる―雑る。いとゝは―いととは。ヿあたらしく―事あたらしき。秀逸なりといふ―秀逸也と乞。⑤去來曰―去來は。めつらし―珍し。案したる時―案しとる時。⑧同しヿくに―同しヿく。論しけるやと―論しけりと。給ひけり―玉ひけり。

高①落て―おりて。旅寐かな―旅寐哉。此ノ句ノ下ニ「芭蕉」トアル。②海士の家―白水郎の屋。小海老―小鰕。いとゝ哉―いとゝかな。此ノ句ノ下ニ「はせを」トアル。③此うち―此内。となり―と也。さるヿ―さる事。④ヿあたらしく―事あたらしき。秀逸なりといふ―秀逸なりと乞。⑤小海老―小鰕。めつらし―珍らし。いへと―いへとも。其物―其もの。案したる時―案し侍る時。⑥いてん―出ん。かすかに―幽に。⑦兩句ともに―兩句とも。小海老―小鰕。⑧同しヿ

くに―同し如くに。論しけるやと―論しけりと。給ひけり―玉ひけり。

【落】①鴈―雁。落て―落ちて。此ノ句ノ下ニ「芭蕉」トアル。　②海士の家―海士の屋。ましる―交る。いとゝ哉―いとゝかな。此ノ句ノ下ニ「同」トアル。　③猿簑―猿蓑。此うち―此内。鴈―雁。さるを―さる事。なれと―なれとも。　④小海老―小鰕。ましる―交る。句のかけり―句の翔り。とあたらしく―事新しき。秀逸なりといふ―秀逸なりと乞ふ。　⑤去來曰―去來は。小海老―小鰕。めつらし―奇らし。いへと―雖も。　⑥いてん―出ん。鴈―雁。かすかに―幽に。案しつけん―案し付ん。⑦兩句ともに―兩句共に。鴈―雁。　⑧同しとくに―同し事そと。論しけるやと―論しけりと。給ひけり―給ふ。

【青】①落て―おちて。旅寐かな―旅寐哉。此ノ句ノ頭ニ「(丸)」トアル。此ノ句ノ下ニ「はせを」トアル。　②海士の家―白水郎の家。小海老―小蝦。此ノ句ノ下ニ「おなしく」トアル。　③猿簑―猿みの。撰の時―撰のとき。此うち―此内。さるを―さること。　④とあたらしく―事あたらし。秀逸なりといふ―秀逸なりと云。　⑤小海老―蝦。めつらし―珍らし。いへと―いへとも。其物―その物。案したる時―案したるとき。　⑥いてん―出ん。かすかに―幽に。案しつけん―案し思ひつけん。⑦乞て―とて。其後―其のち。小海老―小蝦。　⑧同しとくに―おなし如くに。論しけるやと―論しけりと。笑ひ―わらひ。

【贄】①落て―おりて。旅寐かな―旅寐哉。此ノ句ノ頭ニ「(丸)」トアル。此ノ句ノ下ニ「はせを」トアル。　②海士の家―白水郎の屋。小海老―小蝦。此ノ句ノ下ニ「同しく」トアル。　③此うち―此内。　④とあたらしく―事あたらし。秀逸なりといふ―秀逸なりと云。　⑤小海老―蝦。めつらし―珍らし。いへと―いへとも。案したる時―案し採る時。　⑥いてん―出ん。かすかに―幽に。案しつけん―案し思ひつけん。　⑦兩句ともに―兩句共にとて。小海老―小蝦。　⑧同しとくに―おなしことに。論しけるやと―論しけりと。

【架】③となり―と也。　⑧給ひけり―たまひけり。

訓讀

病雁の夜寒に落ちて旅寐かな
海士の家は小海老にまじるいとゞ哉

猿蓑撰の時、此のうち一句入集すべしとなり。凡兆曰はく、病雁はさることなれど、小海老にまじるいとゞは、句のかけり、ことあたらしく、誠に秀逸なり、といふ。去來曰はく、小海老の句はめづらしといへど、其の物を案じたる時は、予が口にもいでん。病雁は格高く、趣かすかにして、いかでか爰を案じつけん、と論じ、終に、兩句ともに乞うて、入集す。其の後、先師曰はく、病雁を小海老などと、同じごとくに論じけるや、と笑ひ給ひけり。

口譯

「病雁の夜寒に落ちて旅寐かな」「海士の家は小海老にまじるいとゞ哉」――『猿蓑』の撰をいたします時、師翁は凡兆とわたくしとに向はれて、「この二句の中から、どちらか一句を選んで、集中に入れたいと思ふが、お前がたは、どちらの句の方がよいと思ひますか。」と、仰せになりました。先づ凡兆がそれにお答へして、「『病雁の夜寒に落ちて旅寐かな』の御句も、もとより御立派な御作と存じますが、『海士の家は小海老にまじるいとゞ哉』の御句は、句のはたらきに新しみがありまして、實に結構な出來榮えと思ひます。どうか『小海老』の御句を御入

れ下さいませ。」と、申しました。然し、わたくしは、この凡兆の考へに贊成することが出來ませんでした。それで、「いかにも『小海老』の御句は、取材も平凡ではありませんが、もし、その情景を目の前にして句を考へたならばわたくしなどでも作れさうな氣がいたします。それに反して『病雁』の御句は、一句の格調も實に高雅であり、また句風も宏に穩和でございます。もし、同じ旅中の夜寒に、たま〳〵雁の聲をきくことがありましても、とても、わたくしなどでは、かやうに詠出いたすことは出來ぬと存じます。これは是非とも『病雁』の御句を御入れ頂きたうございます。」と、言ひ張りまして、互に讓りませんでした。たうとう、凡兆とわたくしと二人でお願ひしまして『猿蓑』には、兩句とも入れて頂きました。その後、師翁はわたくしに、「あの時はお前と凡兆とが大層論じ合つたけれど、一體『病雁』の句を『小海老』の句などと、同じ位の作と思つてゐたらしいね。」と、お笑ひになりました。

語釋

①**病鴈**　病氣になつた雁。雁は秋の季題。　①**夜寒**　秋になつて夜はやゝ寒さを覺えるをいふ。『御傘』に「秋也。夜さむき・寒き夜・よをさむみ・夜のさむき、皆冬也。」とある。　①**旅寢**　旅路に寢ること。　②**海士**　海に漁りするを業とする人。

②**いとゞ**　屋内の、殊に竈の附近によく現はれる蟲ゆゑ、竈馬の字を當てたりもする。又背面が鰕の如く曲つてゐる爲め、俗には、えびこほろぎとも云ふ。秋の季題。　④**句のかけり**　句のはたらきといふ意。

「病鴈の」の句の出典は『猿蓑』、なほ『枯尾花』『泊船集』『横平樂』等にも見えてゐる。但し、『猿蓑』には、

堅田にて

病鴈の夜さむに落て旅ね哉　　芭蕉

とあり、『枯尾花』には、

病〻鴈のかた田におりて旅ね哉　　芭蕉

と見え、且つ『横平樂』には、芭蕉の眞蹟の短冊によつたものであるが、それには、句は『猿蓑』と同様であるが、前書が「かたゞにふしなやみて」となつてゐる。次に「海士の家は」の句の出典も『猿蓑』、なほ『泊船集』等にも見えてゐる。但し、『猿蓑』では前の「病鴈の」の句の次に並記されてある爲め、前書は附されてないが、『泊船集』ではこの兩句を離して收め、

堅田にて

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉　　芭蕉

と見えてゐる。

「いとゞ」と「こほろぎ」とは、古來混同されて、誤つた句も多く殘つてゐる。この兩者の第一の相違は、「いとゞ」は鳴かず、「こほろぎ」は鳴くことである。芭蕉の「海士の家は」の句は、その點でも正しき「いとゞ」が詠まれてゐるわけであるが、例へば、次の如く、

いとゞ鳴く猫の竈に眠るかな　鬼　貫（句　選）

磯際の波に鳴き入るいとゞ哉　惟　然（韻　塞）

啼やいとゞ鹽に埃の溜るまで　越　人（猿　蓑）

精出すや月の名殘を啼くいとゞ　正　秀（菊の香）

玉簪草の傍に經よむいとゞ哉　可　南　女（續猿蓑）

即ち「いとゞ」が鳴くやうに詠まれてある。これらは昔の歳時記類にも「暮秋の深夜聲高くすめり」等說かれてある以上は（例へば『篗纑輪』の所說など）誤られ勝なのは、無理もないことであらう。但し、この場合「いとゞ」が地方によつては「こほろぎ」の方言であつたかも知れないし、又時代によつては「こほろぎ」の別名であつたかも知れないといふ事は、當然考慮に入れておく必要があらうと思ふ。

なほ「病鴈の」の句に就いては、芭蕉の書翰のうちに次の如きものも殘つてゐる。（菊本氏所藏）

昨夜堅田より致二歸帆一候。愈御無爲ニ御連中相替事無二御座一候哉。拙者散候風引候而蜑の苫屋に旅寢を佗て風流さまぐ〳〵の事共ニ御座候。

病雁の夜寒に落て旅寐哉

と申候。京短尺屋へ御狀被レ遣可レ被レ下候。明日上京致候間、拙者見合能候はゞ、もとめ候而人々にわけ可レ申候。千那・尙白方にも大分入り申候。以上。

九月廿六日　木曾塚より

芭　蕉

茶や與次兵衛様

人々御中

又『旅寐論』には、

淋敷ものに淋しき物をむすび、めでたきものに淋しからぬ物を結び、目出度物にめでたからぬものを結び、一句をよく首尾したるは作者の働也。古人も作の跡の見得ざるを以て、上品の沙汰有。猶先師の病鴈の夜寒に落て、といへる句のたぐひならん。

とある。

因みに『七部集大鏡』には「病鴈の」の句に就いては、

病　鴈　の　夜　寒　に　落　て　旅　寐　哉

愚考、白氏長慶集曰、困病々夫憐病鶴、精神不損翅翎傷。是病雁の作例也。

と述べられてある。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○病厂の云々。

枯尾花には、堅田にをりて旅寐かな、とあり。或人曰、江州堅田本福寺院主李由がいたはりに、病床の吟なりと。まことや不レ知。白雲に羽うちかはし飛べき厂の、今は病みて下り居るもめづらしく、草に鳴

べき虫のいかきやうのものに飛さま珍らしきをくらべんには、小蝦の方勝るべし。霜にはかなき虫はながらへ、世にはめでたき蝦は却て虫よりも命うしなひ侍る、其哀なる心有りといへども、病厂の哀猶ふかし。其哀を心の置所とする事かたし。

と見え、なほ、この上欄には、

白氏長慶集

病中對病鶴

困病病夫憐病鶴。　精神不損翅翎傷。
未堪再擧摩宵漢。　只合相隨覓稻粱。
但作悲吟和嘹唳。　難將俗貌對昂藏。
唯應一事宜爲伴。　我髮君毛俱似霜。

と註記されてある。

二〇　岩鼻やこゝにもひとり月の客　去來　①

去來曰洒堂は此句を月の猿とすへしと申侍れと予は客の字勝りなん　②
と申先師曰猿とは何事そ汝此句をいかにおもひて作せるや去來曰明　③

月に山野を吟歩し侍るに岩頭亦一人の騒客を見付たると申先師曰是にもひとり月の客と已と名乘出たらんこそいくはくの風流ならめたゝ自稱の句となすへし此句は我も珍重して笈の小文に書入けるとなん予か趣向は一等くたり侍りけり先師の意をもて見れは少し狂者の感も有にや笈の小文集は先師自撰の集なり名を聞ていまた書を見す草稿半にて遷化ましく〳〵ける昔時申けるは予か發句幾句か入集なし給へるやと窺ふ先師曰我門人笈の小文に入句三句持たるもの希ならん汝過分のことをいへりと也

校異

久②去來曰―先師上洛の時去來曰。 月の猿とすへしと申侍れと―月の猿と申侍れと。 客の字勝りなん―客勝なん。 ③と申―と申いかゝ侍るや。 ④山野を吟歩し―山野吟歩し。 岩頭亦一人―岩頭又一人。 見付たると申―見付たりと申。 是にも―こゝにも。 ⑤名乘出たらん―名乘出らん。 いくはく―幾はく。 風流ならめ―風流ならん。 ⑦となん―となん退て考ふるに自稱の句となしけれは狂者の樣もうかみてはしめの句にまされる事十倍せり誠に作者そのこゝろをしらさりけり。 一等くたり侍りけり―猶二三等もくたり侍りけん。 意をもて―意を以て。 少し狂者―少狂者。 ⑧有にや―有にや去來曰。 集なり―集也。

聞てーきゝて。　⑨草稿ー定て草稿。遷化ー迁化。ましく＼けるーましく＼けり。昔時ー此時。㡬句ーほ句。入集なし給へるやー御集に入侍るや。　⑩我門人ー我か門人。もの希ならんーものはまれならん。　⑪とをいへりと也ー事をいへりと也。

宗①岩鼻ー山鼻。こゝにー爰に。　②去來曰ー先師上洛の時去來曰。月の猿とすへしと申侍れとー月の猿と申侍れと。客の字勝りなんー客勝れなん。　③と申ーと申如何侍るや。おもひてー思ひて。明月ー名月。岩頭亦一人ー岩頭に又一人。見付たると申ー見届けたると申。是にもー爰にも。　④山野を吟歩しー乘して山野吟歩らんー名のり出ん。いくはくー㡬はく。風流ならめー風流ならん。　⑤ひとりー獨。已ーおのれ。名乘出た二三等もくたり侍りなん。意をもてー意を以て。　⑥書入けるー書入ぬる。　⑦一等くたり侍りけりー尙始の句向にまされる事十倍せり殊に作者其心をしらさりけり去來曰。　⑧有にやーあるにや退て考ふるに自稱の句となしてみれは狂者もうかみて⑨遷化ー迁化。ましく＼けるーましく＼けり。昔時ー此時。㡬句ー何句。入集なし給へるやー御集に入侍るや。　⑩窺ふー伺ふ。笈の小文にー笈の小文集に。もの希ならんーものは稀ならん。　⑪とをいへりと也ー事をいへると也。

落①ひとりー一人。　②去來曰ー先師上洛の時去來曰。客の字勝りなんー客勝れり。　③と申ーと申す如何侍るや。おもひてー思ふて。　④山野を吟歩しー乘し山野を吟歩し。岩頭亦一人ー岩頭に又一人。見付たると申ー見付たりと申。是にもー爰にも。　⑤ひとりー一人。已ーおのれ。いくはくー㡬許。たゝー只。　⑥書入けるー書入れぬ。　⑦一等くたり侍りけりー猶二三等も下り侍りなん。意をもてー心を以て。　⑧有にやー有にや退て考るに自稱の句となし見れは狂者の狡も浮みて初の句面に勝ること十倍せり誠に作者其心を知らさるなり去來曰。集なりー書なり。いまたー未た。　⑨ましく＼けるーましく＼けり。昔時ー此時。入集なし給へるやー御集に入侍るや。　⑩窺ふー伺ふ。もの希ならんー者は稀ならん。　⑪とをいへりと也ー事を云へりとなり。

書①こゝに—爰に。ひとり—獨。此ノ句ノ頭ニ一⊞トアリ、又欄外ニハ元禄四年三月日記山野に逍遙して岩はなや爰にも月の客ひとり—トアル。 ②去來曰—先師上洛の時去來曰。月の猿とすへしと申侍れと—月の猿と申侍れと、客の字勝りなん—客勝なん。 ③と申—と申いかゝ侍るや。猿—さる。此句—この句。いかに—いかゝ。 ④山野を吟歩し—乘して山野を吟歩し。岩頭亦一人—岩頭に又一人。見付たると申—見届たると申。是にも—爰にも。 ⑤已—おのれ。名乘出たらん—名のり出ん。風流ならめ—風流ならん。 ⑥書入ける—書入ぬ。 ⑦一等くたり侍りけり—なを二三等もくたり侍りなん。意をもて—意をもつて。 ⑧有にや—あるにや退て考るに自稱(ジシヤウ)の句となしみれは狂者のやうもうかみてはしめの句にまされる事十倍せり誠に作者其心を知さりけり去來曰。先師自撰—先師の自撰。 ⑨遷化—迁化。ましく〳〵ける—ましく〳〵けり。昔時—此時。幾句—何句。入集なし給へるや—御集に入侍るや。 ⑩窺ふ—伺ふ。我門人—我か門人。笈の小文に—笈小文集に。もの希ならん—ものは稀ならん。 ⑪とをいへりと也—事をいへるとなり。

書①こゝに—爰に。ひとり—獨。此ノ句ノ頭ニ「⊞元祿四年三月日記山野ニ逍遙シテ岩鼻ヤ爰ニモ月ノ客ヒトリ」トアル。 ②去來曰—先師上洛のとき去來曰。洒堂—洒堂。月の猿とすへしと申侍れと—月の猿と申侍れと。客の字勝りなん—予は客勝なん。 ③と申—と申いかゝ侍るや。猿—さる。いかに—いかゝ。 ④山野を吟歩し—乘して山野を吟歩し。岩頭亦一人—岩頭に又一人。見付たると申—見届たると申。是にも—爰にも。 ⑤已—おのれ。名乘出たらん—名のり出ん。風流ならめ—風流ならん。 ⑥書入ける—書入ぬる。 ⑦一等くたり侍りけり—猶二三等もくたり侍なん。意をもて—意を以て。 ⑧有にや—有にや退て考るに自稱の句となし見れは狂者の樣もうかみてはしめの句にまされる事十倍せり誠に作者其心を知さりけり去來曰。先師自撰—先師の自撰。 ⑨遷化—迁化。ましく〳〵ける—ましく〳〵けり。昔時—此時。幾句—何句。入集なし給へるや—御集に入侍るや。 ⑩窺ふ—伺ふ。笈の小文に—笈小文集に。もの希ならん—者は稀ならん。 ⑪とをいへりと也—

事をいへると也。

〔架〕④岩頭亦一人―岩頭また一人。見付たると申―見付けたると申。⑤名乗出たらん―名のり出てたらん。⑥書入ける―書入れける。⑧有にや―あるにや。

〔訓読〕

岩鼻やこゝにもひとり月の客　去來

去來曰はく、洒堂は此の句を月の猿とすべしと申し侍れど、予は客の字勝りなんと申す。先師曰はく、猿とは何事ぞ。汝此の句をいかにおもひて作せるや。去來曰はく、明月の山野を吟歩し侍るに、岩頭亦一人の騒客を見付けたると申す。先師曰はく、是にもひとり月の客と、己と名乘り出でたらんこそ、いくばくの風流ならめ。たゞ自稱の句となすべし。此の句は、我も珍重して、笈の小文に書入れけるとなん。予が趣向は、一等くだり侍りけり。先師の意をもて見れば、少し狂者の感も有るにや。笈の小文集は先師自撰の集なり。名を聞きて、いまだ書を見ず。草稿半ばにて、遷化ましく〱ける。昔時、申しけるは、予が發句幾句か入集なし給へるやと窺ふ。先師曰はく、我が門人、笈の小文に入句三句持ちたるもの稀ならん。汝過分のことをいへりと也。

〔口譯〕

「岩鼻やこゝにもひとり月の客　去來」――「わたくしのこの句を見て、洒堂は下五文字に『月の客』とあるのは『月の猿』とした方がよい、と評しましたが、わたくしはやはり『月の客』の方が佳いと思ひます。いかゞで

ございませう。」と、わたくしは、師翁にお尋ねいたしました。すると、師翁は「この句を『月の猿』と改めるなどとは、飛んでもないことです。一體、お前はこの句をどう考へて作つたのですか。」と仰せられましたので、わたくしは「それは、八月十五夜の月のよい晩のことでございました。わたくしは山野を歩きながら、句を考へて居りましたが、その時、とある岩の端に、もう一人、やはり句でも案じてゐるやうな人影を見附けましたので、そのまゝ『岩鼻やこゝにもひとり月の客』と、詠みましたのでございました。」と、申しました。すると、師翁の仰せには「さうでしたか。けれども『こゝにもひとり月の客』といふのは、月を賞する他の人々に對して「こゝにも一人自分が居るぞ」といふ句意に解して、始めて、幾分の風流も生じてくるわけです。どうしても、この句の『ひとり』は、自分の事としなければいけません。さう解すれば、なかなか趣のある句になります。わたくしもこの句は愛誦して『笈の小文』の中に書入れました。」とのことでございました。師翁の御言葉をお伺ひしてみますと、なるほど、わたくしの考へてゐました趣向は、一段劣つて居りました次第でございます。師翁の御意見をお伺ひしまして、始めて、この句が、元來おどけた氣持を含んでゐるといふ事が、諒解できたのでございます。さて、『笈の小文』といふ集は、師翁が御自分で、自他の佳句を御採錄になられた撰集でございます。然し、その噂だけは聞及んでをりますが、まだ實物は見たことがございません。しかも、その原稿も未完成のまゝで、お逝りになつたのでございます。但し、昔、こんな事がございました。わたくしが「いま師翁の御撰びになつておいでの『笈の小文』に、わたくしの發句は、何句入れて頂けましたのでせう。」と、御伺ひ申しましたところ、師翁は、「門人の數は多いが、その中で『笈の小文』の中に三句採錄した人は、殆んどありません。去來よ、「何句入れて

頂けたらう』などと、そんな尋ね方をするのは、分に過ぎますよ。」と仰せになつた事がございました。

語釋

①**岩鼻**　岩端（いははな）の借字。岩のはづれ。　①**月の客**　月を賞して、ながめ入つてゐる人の意。　②**洒堂**　近江膳所の人である。濱田氏、醫名を道夕といひ、洒落堂を略して、洒堂と號し、珍夕、又は珍碩の別號がある。元祿五年江戸に赴き芭蕉庵の客となつて、『深川集』を撰んだ。後、大阪に寓居して醫を業とし、晩年は膳所に住した。著書には、『深川集』の他に、俳諧七部集の一となつた『ひさご』、及び『市の庵』・『白馬集』等がある。其歿年を詳にしない。　③**明月**　名月。即ち陰暦八月十五夜の月。但し、元來の語意からいへば、「明月」は明らかな月の意であり、「名月」は名のある月、即ち十五夜或は十三夜、又は立待月、居待月といふやうな呼び名を持つてゐる月の意で、二つは異つてゐる筈であるが、後には兩方とも混同して「明月」「名月」共に八月十五夜の月といふことになつたものである。　④**吟歩**　俳句をつくりながら歩くこと。　④**岩頭**　岩のほとり。④**騒客**　騒人。詩人。又は風流人の意。「騒」は、「さわぐ」の意の他に、「愁へる」といふ意があつて、「騒客」は即ち、「愁へをいだく客」といふ意となる。而して、「愁へをいだく人」は、支那風な考へ方では「詩人」となるのである。　⑥**自稱の句**　句の中の主格が作者自身であるものをいふ。　⑥**珍重**　めづらしがつて大切にすること。　⑥**笈の小文**　芭蕉が草稿だけ作つて置いたと傳へられる書で、板本の『笈の小文』一名『芳野紀行』とは別のものである。　⑦**一等くだり侍りけり**　一段劣つて居りました。　⑦**狂者の感**　狂氣じみた滑稽な心持といふ程の意。　⑧**自撰の集**　自ら編纂した書。　⑨**遷化**　死去すること。但し、多くは僧にいふ語。　⑨**昔時**　「せきじ」とは訓まずに、「むかし」と訓む。　⑩**希**　稀。　⑪**過分**　分に過ぎる。身分不相應なこと。

この「岩鼻や」の句の出典は『笈日記』、なほ『去來發句集』『三日月日記』『浮世の北』『藁人形』『芭蕉翁』『鴨矢立』等にも見えてゐる。但し、諸書によつて、「岩鼻や」は、「岩はなや」又は「岩端や」とあり、且つ『三日月日記』には、

岩はなやこゝにも月の客ひとり　去來

とある。

この「岩鼻や」の句に就いて『蕉門誹諧語錄』には、次の如く掲げられてある。

岩端や爰にもひとり月の客　去來

洒堂は此句を月の猿と申侍れど、予は客まさりなんと云。先師曰、猿とは何事ぞ、汝この句をいかに思ひて作れりや。予曰、明月に乘じて、山野を吟歩し侍るに、一人の騷客を見付たると申。先師曰、爰にもひとり月の客、と名乘出んこそ、幾ばくの風流ならん。たゞ自稱の句となすべし。退て考ふるに、自稱の句となし見れば、狂者の感もうかみて、はじめの句にまされる事十倍せり。

次に、『笈の小文』とこゝにあるが、後に『笈の小文』といふ書名で上梓されたものは、所謂吉野紀行であつて、こゝに說くが如き撰集ではない。こゝに言ふ『笈の小文』とは、或は『續猿蓑』でも指すのではないかと想像されるが、それも明かではない。但し『俳諧問答』にも「師遷化ののち、諸門弟の句に秀逸出ざる事はいかん」と

いふに答へた形式で、次の如き文章が見えてゐる。

去來曰、この論しひて工夫をつくすべからず。師教月々にとをく、我意日々に生ず。たゞ秀逸のいでざるのみにあらず、かへつてその血脈をうしなふものあらん。ひとりこの道のみにかぎらず。又いはく、秀いつの事は、先師在世のうちといふともまれならん。また遷化ののちもなしとは言ひがたしとせん歟。しかれども今の世にあたつても、秀逸をさだむる人誰ぞや。むかし先師凡兆につげて曰、一世のうちに秀逸の句三五あらん人は誹者也。十句におよばん人は名人なり。また先師、ひと〴〵の句の奥意にかなふものあつめて、ゑらばんとしたまふ。これを笈の小文と號すとつたへたり。故あつて、予が名月の句を入集すとかたりたまへり。予曰、わが句撰にいるべき句いくばくありや。先師のいはく、なんぢ過分のことを云へり。すべて我この度の集にゑらみいれん句、五句もちたるものはまれなり。これを以ておもふに、まことに秀逸といはんは、世にまれ成るべし。およそ、先師門人の句を賞したまふや、相當の賞美あり、過分のしやう美あり。門人これにおひて、あるひはまよひを取り、みづから亢(あやま)りて、終におのれが位をしらざる人も多し。また半途より、みづからかへり見て、つゝしむ人これあり。予不敏といへども、あるひは秀逸名句、あるひはこの句我もおよばず、あるひは風雅汝等一兩士にとゞむ、これらの賞詞感文すくなしとせず。しかれども、しりぞいて、これを師の句にたゞすときは、雲泥のたがひあり。これを同門の句に合するときは群をはなれず。なをその賞の身に應ぜざる事をしれり。また秀逸のまれなる事を知れり。

また『三冊子』には、

師のいはく、わが句ども、多くの集に書誤り多し。是をみづから書本とし、門人の志を以て二三句ほどづつ書添へて、所々の歌仙一折宛、是も、いがの門人を初として、志を以て書留むべし。號を、笈の小文とせん、又小文とばかりやすべき。此號は或方にて能見侍るに、太刀とかいふ謠に此事あり。宜しき集の名と思ひ留たる也。書號によろしきものなど、常に見置べし。拙號はあさましき物也。萬に心遣ひ有る事也。

『青根が峯』には、次の如く「笈の小文庫」として記してゐる。

一代の秀逸といふにもその人によるべし。たとへば、予が爲にあらずとて捨たる句、また予よりはるかにおとりたる人の句にゆづれば、その人の爲には一代の秀逸と成るに似たり。翁の笈の小文庫に書れたる句、それは一生一代の秀逸の事なり。

又、「岩鼻や」の句に就いては、『風俗文選』の「去來が誄」の一節に、許六は、

又いづれの仲秋にや。〽岩はなやこゝにもひとり月の客、と吟じて、先師の耳を驚かし、月賞翫の第一、古今の秀逸にきはまりたり。

と記してゐる。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○岩はなや云々。

はじめの句に十倍せる事は、たとへば梅櫻などの形有物に對して、こなたは無心なるに、梅櫻より此方の情を起し侍に同じ事にして、月夜岩の上に腰かけて、其月と岩岩あるに情を起して、我も月の客也と名乘る、其心高きのみならず、先に壹人有にて、此所二人と成る、我と我月見の客也と名乘るに至りては、我一人也。爰に其淋しき所至れるは、彼ばせをの吟に、人聲や此道歸る秋の暮、といふ句と、此道や行人無しに秋の暮、といへる二句を、行人なしと獨歩したるを勝れりとせるにてもおもふべし。
と見えてゐる。

二　うつくまる藥の下のさむさ哉　丈艸

先師難波の病床に人々に夜伽の句をすゝめて曰今日より我か死後の句なり一字の相談を加ふへからすと也さま〳〵の吟とも多く侍りけれとたゝ此句のみ丈艸出來たりとのたまふかゝる時はかゝる情こそ動侍らめ興を發し景をさくるに豈いとまあらんやと此時にて思知侍る

〔校　異〕

久①薬の下―やくわんの下。　②難波の病床―難波病床。すゝめて曰―すゝめて。今日より―今日な。　③句なり―句也。多く侍りけれと―多侍りけれと。　④此句のみ―此一句のみ。のたまふ―の給ふ。　⑤動侍らめ―うこかめ。興を發し―興を催し。さくるに豈いとま―さくるいとま。あらんやと―あらしとは。思知侍る―おもひしり侍りける。

帝①薬の下―藥鑵の下。丈艸―此ノ二字ナシ。　②すゝめて曰―すゝめて。我か死後―我死期。　③句なり―句也。さま〳〵の―様〳〵の。　④たゝ―只。此句のみ―此一句のみ。のたまふ―の玉ふ。かゝる時―かゝるとき。　⑤動侍らめ―うこかめ。興を發し―興を催し。さくるに豈いとま―探るいとま。あらんやと―あらしとは。此時にて―此時にこそ。思知侍る―思ひしり侍りけり。

落①うつくまる―蹲る。薬の下―藥鑵の下。さむさ哉―寒さかな。　②すゝめて曰―勸めて。　③と也―となり。さま〳〵の―様々の。多く侍りけれと―多く侍れと。　④たゝ―只。此句のみ―此一句のみ。のたまふ―宣ふ。かゝる時―斯る時。かゝる情―斯る情。　⑤動侍らめ―浮かめ。興を發し―興を催し。さくるに豈いとま―探る暇。あらんやと―あらしと。此時にて―此時そ。思知侍る―思知り侍りける。

青①薬の下―藥種の下。さむさ哉―寒さかな。此ノ句ノ頭ニ「卅」トアル。　②人々に―人〳〵に。すゝめて曰―すゝめて。我か死後―我死後。　③と也―となり。さま〳〵の―様〳〵の。　④此句のみ―此一句のみ。のたまふ―の給ふ。　⑤動侍らめ―うこかめ。興を發し―興を催し。さくるに豈いとま―探るいとま。あらんやと―あらしとは。此時にて―此時にこそ。思知侍る―おもひしり侍りけり。

贊①薬―藥鑵。さむさ哉―寒かな。丈艸―丈草。此ノ句ノ頭ニ「卅」トアル。　②すゝめて曰―すゝめて。我か死後―我死後。

③さま〳〵の—様〳〵の。多く侍りけれと—多く侍けれと。　④此句のみ—此一句のみ。丈艸—丈草。のたまふ—の玉ふ。かゝる時—かゝるとき。　⑤動侍らめ—うごかめ。興を發し—興を催し。さくるに豈いとま—探るいとま。あらんやと—あらしとは。此時にて—此時にこそ。思知侍る—思ひ知り侍りけり。

架①さむさ哉—さむさかな。　③さま〳〵の—さま〳〵も。　④出來たり—たり。　⑤動侍らめ—動き侍らめ。思知侍る—思ひ知侍る。

訓讀

うづくまる藥の下のさむさ哉　　丈草

先師難波の病床に、人々に夜伽の句をすゝめて曰はく、今日より我が死後の句なり。一字の相談を加ふべからずと也。さま〴〵の吟ども多く侍りけれど、たゞ此の句のみ、丈草出來たり、とのたまふ。かゝる時はかゝる情こそ動き侍らめ。興を發し景をさぐるに、豈にいとまあらんやと、此の時にて思ひ知侍る。

口譯

「うづくまる藥の下のさむさ哉　丈草」——師翁が、大阪の客舍で、病にお倒れになられた時、その事を聞傳へて、大勢の門人達が馳せ集りました。その折のこと、師翁は、人々に、夜伽の句を作るやうにと仰せられて、また「自分の死後は、お前達が句を作つても、わたくしはもう一字の相談にも與るわけにゆかなくなります。今日から、その覺悟で作つて御覽なさい。」とのことでございました。各自いろ〳〵の句を澤山作りました後、師翁に

お見せいたしますと、この丈草の句だけ、「これはよく出來た」と、仰せになりました。恩師の危篤の枕頭にあるのですから、そこで句を作るやうにと命ぜられますれば、自然、悲痛の感情こそ動くべきでありませう。さりげない感興を喚び起したり、景趣を穿鑿してゐる暇はない筈です。その中で、丈草のこの發句は、たしかに傑出したものだと、**感じたわけでございます。**

【語釋】

①**うづくまる** 膝を折り腰を落してゐること。②**夜伽** 夜中に伽(とぎ)をすること。伽には、(一)夜の徒然などに、側にあつて、話の相手などをする意と、(二)人の傍に侍して、病のみとりなどをする意とがある。こゝでは言ふまでもなく第二の意と解すべきである。④**かゝる時** 「先師、難波の病床に、人々に夜伽の句をすゝめて云々」といふ時。④**かゝる情** 例へば「うづくまる藥の下の寒さ哉」といふやうな感情。⑤**興を發し** 感興をもよほす。⑤**景をさぐる** 情景を求める。

【參考】

この「うづくまる」の句の出典は『枯尾華』、なほ『丈草發句集』等にも見えてゐる。但し、『丈草發句集』には「ばせを翁の病床に侍りて」と前書がある。

『枯尾華』は其角が草した芭蕉の臨終記であるが、同書の中、この「うづくまる」の句の前後を引用すれば、次の如くである。

十一日の夕べ大阪に着て、何心なくおきなの行衞、覺束なしとばかりに尋ければ、かくなやみおはすといふに胸さはぎ、とくかけつけて病床にうかゞひより、いはんかたなき懷をのべ、力なき聲の詞をかはしたり。是年ごろの深志に通じて、住吉の神の引立給ふにやと歡喜す。わかのうらにて祈つる事は、かく有べしとも思ひよらず、嬢通の明神の物とがめなきも有がたく覺侍るに、いとゞ泪せきあげてうづくまり居るを、去來・支考がかたはらにまねくゆへに、退いて妄昧の心をやすめけり。膝をゆるめて病顏をみるに、いよ〳〵たのみなくて、知死期も定めなくしぐるゝに、

吹井より鶴を招かん時雨かな　　晋子

と祈誓してなぐさめ申けり。先頼む椎の木もあり、と聞へし幻住庵はうきよに遠し。木曾殿と塚をならべて、と有したはぶれも、後のかたり句に成ぬるぞ。其きさらぎの望月のころ、と願へるにたがはず、常にはかなき句どものあるを前表と思へば、今さらに臨終の聞えもなしとしられ侍り。露しるしなき藥をあたゝむるに、伽のものども寢もやらで、灰書に、

うづくまる藥の下の寒さ哉　　丈艸

病中のあまりすゝるや冬ごもり　　去來

引張てふとんに寒き笑ひ聲　　惟然

しかられて次の間へ出る寒さ哉　　支考

おもひ寄夜伽もしたし冬ごもり　　正秀

鬮とりて茶飯たかする夜伽哉　　木節
皆子なりみのむし寒く鳴盡す　　乙州

蓋し、これらの句がその時に出來たもので、その中で、丈草の一句が、殊に芭蕉の賞美にあづかつたのであらうと考へられる。

なほ、この事に關しては、『旅寐論』にも、

難波の病床に夜伽の句、おの〳〵吟じけるに丈草の句のみ賞し給へり。委く工夫あるべし。句は枯尾花集に見へたり。

と見えてゐる。更に『笈日記』を見るに、これには十一日の條下には、

此暮相に晉子、幸に來りて今夜の伽にくはゝりけるも、いとちぎり深き事なるべし。その夜も明るほどに木節をさとして申されけるは、吾生死も明暮にせまりぬとおぼゆれば、もとより水宿雲棲の身の、この藥かの藥とて、あさましうあがきはつべきにもあらず。たゞねがはくば、老子が藥にて最期までの脣をぬらし候半と、ふかくたのみをきて、此後は左右の人をしりぞけて、不淨を浴し、香を燒て後、安臥してものいはず。

とのみで、この夜伽の句の事には何等觸れてゐないが、『芭蕉翁反古文』――この書の成立に關しては、聊か疑問があるが――の中には、次の如く記されてある。

十一日。朝また〳〵時雨す。おもひがけなく東武の其角きたる。是は東武の誰彼同作にて參宮の序、和

州・紀州を打めぐり、泉州より浪華に打入りしが、はからずも師の勞りおはすと聞つけ、そこ此處とたづねまはり、漸にかけつけたり。直に病床にまゐりて、皮骨連立し給ひたる躰を見まゐらせて、且愁ひ且よろこぶ。師も見やりたまひたるまでにて、唯々泪ぐみたまふ。其角も言句なく、さしうつむきゐたりしを、丈艸・去來・支考其外の衆、次の間に招き、御病性の始終を物がたる。此夜、夜すがら伽しておもひよりし事ども物がたり居たりしに、亥のときごろより、師、夢のさめたるごとく、粥を望みたまふ。人々嬉しさかぎりなく、次郎兵衛取計ひて、疾く焚あげてすゝめまゐらす。中かさ椀にて快くめされけり。翊日より已來の食事なり。土鍋に殘りたるを、去來椀にうつし入ておしいたゞき、

病中のあまりすゝりて冬ごもり　　去來

去來曰、趣向を他にもとめず、有あふことを口ずさみて師を慰めまゐらせん。深く案じいらずと頓に句作りたまへ。惟然は前夜正秀と二人にて、一つ蒲團をひつぱりて被りしに、かなたへひき、こなたへひきて、終夜寐いらざりければ、はてはしら〳〵と夜明けるにぞ。其事を互に笑ひあひて、

ひつぱりて蒲團に寒きわらひ哉　　惟然

おもひよる夜伽もしたし冬籠　　正秀

一坐是をきゝて、いづれもどつと笑ひければ、師も笑ひたまへり。人々嬉しさかぎりなく、十日已來の興にぞ有ける。初しぐれなりければ、空とく晴て日影さしいりたるに、蠅のおほく日南に群りゐたるに人々黐もて蠅をさし取に、上手下手あるを見給ひて、暫く興にいりたまひけれど、大病中のことなれば

忽倦たまひ、直に寐所に入たまふ。支考は、師の發句を滅後に一集せん心願あれど、此ごろの病苦に惱みたまふに見あはせゐたりしが、今日機嫌よきに乘じて申出侍らんと、去來に申たりければ、去來はかねて師の心中を知りたりしゆゑ大にいかり、小ざかしき事を申さるゝもの哉、師は平生名聞らしきこと好み給はず。今日漸快き躰を見請はべりて、諸人嬉しとおもふ中に、御氣に逆ふことを聞せ申ては、御心を勞しめ申事奇怪なり。此後御病床ちかくより給ふな、早く其座を立たまへと、聲あらゝかに次の間に追立けり。支考も、はからずものいひ出して、諸子の聞前、面目をうしなひしが、行々惟然に打むかひ、我に句あり、そこ書給へといひて、

しかられて次の間にたつ寒かな　　支考

さすが支考なりければ、師もほの聞給ひて、おかしがり給ひけり。

鬮とりて菜飯たかする夜伽哉　　木節

皆子なりみのむし寒く鳴盡す　　乙州

うづくまる藥のもとの寒さかな　　丈草

吹井より鶴をまねかむ初しぐれ　　其角

一々惟然吟聲しければ、師、丈草が句を今一度とのぞみ給ひて、丈草出かされたり。いつ聞てもさびしをり調たり、面白し／＼と、しはがれしこゑもて譽給ひにけり。いつにかはりし機嫌の麗しきをよろこびけるに、木節一人愁をいだける躰に見えければ、其角其故をとふ。木節云、病に除中の證といへるあ

り。大病中絶食なるに、俄に食のすゝむことあるは悪症なり。死期遠きにあらずといへり。

これに由れば、『笈日記』に於いて、この日の記述が簡略になつてゐるのは、もし『芭蕉翁反古文』を幾分でも信頼できるとすれば、この日は支考が芭蕉に叱責を受けてゐる爲であつたかとも思はれるのである。

なほ、この句に就いては『誹諧世説』にも、

翁病中看病人に句を望む說。

芭蕉翁難波の病床にやみ疲れ給ふ時、看病の人々に發句を望み給ひて曰、今日よりして二三子の句は、我が死後の作なりと思ふべし。故に一字の相談を加ふまじ。皆々其心得にて考候へ、との給ひける故、人々打かたむきて、粉骨をつくしけるうち、丈草の句に、

うづくまる藥罐の下の寒さ哉　　丈草

此句ばかり出來たりと翁の稱美ありける。去來是を聞て、誠にかゝる時は山海の珍奇を求めず、只ありの所にて其誠つくべきなりと、こゝに風雅の奥義を察して、かへすぐも丈草が作をうらやみ、文にもあらわし人にも語りけるとぞ。蕉門に丈草・去來有事は、和歌に人丸・赤人あるがごとく、いづれ上下をわきがたき作者なれども、かやうに偏執なく、互にしたしみ交りたる事、道に堪能のしるし、只人のおよぶまじき風流のふるまひなるべし。

とある。

積翠園の『去來抄評』には、

○うづくまる云々。
此句の事、猶枯尾花、笈日記見合すべし。感ずるにあまりあり。
と見えてゐる。

三　下京や雪つむうへの夜の雨　　凡兆　①

此句初に冠なく先師をはしめいろ〳〵と置侍りて此冠に極め給ふ凡　②
兆あと答ていまた落着す先師曰兆汝手からに此冠を置へし若まさる　③
ものあらは我二たひ俳諧をいふへからすとなり去來曰此五文字のよ　④
きことは誰〳〵もしり侍れと是外にあるましとはいかて知侍らん此事　⑤
他門の人聞侍らは腹いたくいくつも冠置へし其よしとおかるゝ物は　⑥
又こなたにはをかしかりなんとおもひ侍る也　⑦

校異
久①雪つむうへの―雪つむ上の。夜の雨―よるの雨。　②冠なく―冠なし。極め給ふ―極め玉ふ。　③答ていまた落着す―

こたへていまた落つかす。手から—手柄。まさるもの—まさる物。　④二たひ—二度。となり—と也。　⑤よきと—よき事。誰—たれ。是外に—是の外に。いかて知侍らん—いかてかしり侍らん。　⑦又こなたには—またこなたには。をかし—おかし。

商①雪つむうへの—雪積む上の。　②冠なく—冠なし。先師をはしめ—先師を始。極め給ふ—極玉ふ。　③あと—アト。答ていまた落肴す—いまた答へて落着せす。手から—手柄。まさるもの—申さるゝ物。　④二たひ—貳度。となり—と也。　⑤よきと—よき事。是外に—此外に。あるましとは—あるましくとは。いかて知侍らん—いかてしり侍らん。　⑥腹いたく—腹痛く。いくつも—幾つも。其—その。おかるゝ—置るゝ。　⑦をかし—おかし。おもひ侍る也—思ひ侍る也。

落①雪つむうへの—雪積むの上の。　②冠なく—冠なし。先師をはしめ—先師を初め。いろ〳〵と—色々と。極め給ふ—きはめ玉ふ。　③あと—アと。答ていまた落着す—答へて未た落付かす。手から—手柄。置へし—置くへし。若—若し。まさるもの—増るもの。　④二たひ—再ひ。いふへからす—云ふへからす。よきと—能きこと。　⑤誰〳〵も—誰々も。しり侍れと—知侍れと。是外—此外。いかて知侍らん—争てか知侍らん。　⑥聞侍らは—聞傳へは。腹いたく—腹痛く。いくつも—幾つも。置へし—置かるへし。よしとおかるゝ—能しと置るゝ。　⑦又こなたには—又こなたに。おもひ侍る也—思ひ侍る。

青①此ノ句ノ頭ニ「(出)」トアル。　②此句—この句。初に—はしめに。冠なく—冠なし。いろ〳〵と—色〳〵と。極め給ふ—きはめ玉ふ。　③あと—アト。答ていまた落着す—答へといまた落着す。手から—手柄。若—もし。まさるもの—申(イたる)さるもの。此ノ欄外ニ「申たるは本書也申さるはイ本也」トアル。　④ものあらは—物あらは。我—われ。二たひ—二度。となり—と也。　⑤よきと—よき事。是外—この外。あるましとは—あるましくとは。いかて知侍らん—いかてしり侍らん。　⑥聞侍らは—きゝ侍らは。腹いたく—片腹痛く。置へし—おくへし。おかるゝ—置るゝ。　⑦をかし—おかし。おもひ侍る也—思ひ

侍るなり。

【蘭】①此ノ句ノ頭ニ「雪」トアル。 ②初に—はじめに。先師をはじめ—先師。いろ〳〵と—色〳〵と。此冠—この冠。極め給ふ—きはめ玉ふ。 ③あと—アト。答ていまた落着す—答へていまた落着す。兆汝—汝。手から—手柄。若—もし。まさるもの—申たる物。 ④二たひ—二度。となり—と也。 ⑤よきと—よき事。是外に—この外に。あるましとは—あるましくとは。いかて知侍らん—いかて知り侍らん。 ⑥聞侍らは—きゝ侍らは。腹いたく—片腹痛く。おかるゝ—置るゝ。 ⑦をかし—おかし。おもひ侍る也—思ひ侍るなり。

【奥】③答ていまた落着す—答へて落着す。此冠を置へし—この冠を置くへし。 ④となり—と也。 ⑥置へし—置くへし。 ⑦おもひ侍る也—思ひ侍る也。

訓読

下京や雪つむうへの夜の雨　凡兆

此の句、初に冠なく、先師をはじめ、いろ〳〵と置侍りて、此の冠に極め給ふ。凡兆、あと答へて、いまだ落着かず。先師曰はく、兆、汝手がらに此の冠を置くべし。若し、まさるものあらば、我、二たび俳諧をいふべからずとなり。去來曰はく、此の五文字のよきことは、誰々もしり侍れど、是の外にあるまじとは、いかで知侍らん。此の事他門の人聞侍らば、腹いたく、いくつも冠置くべし。其のよしとおかるゝ物は、又こなたには、をかしかりなんとおもひ侍る也。

口譯

「下京や雪つむうへの夜の雨　凡兆」――この凡兆の句は、初めは、下の「雪つむうへの夜の雨」といふ十二文字だけが出來て、上の五文字が案じ兼ねたのでございました。そして、師翁をはじめ、皆で、いろ〳〵の言葉を置いて考へました末に、師翁が、この「下京や」と定めて下さつたのでございます。その時、凡兆は「はい」と答へながらも、急にはその妙味を覺ることが出來ない樣子でございましたので、師翁は重ねて、「凡兆よ。お前も何とかこの初五をつけて見なさい。うまく出來たらお手柄です。もし、『下京や』よりも他に、もつと勝れた五文字があるやうならば、自分は今後二度と俳諧はしないつもりです。」と、仰せになりました。師翁の、この大きな御自信に滿ち〳〵た御言葉を伺つて、わたくしは、「この五文字の勝れてゐることは、誰にも明かに分ることでせうが、この外にはある筈がない、ある位なら二度と俳諧はせぬとまで、强く言ひ切る事がお出來になりますのは、やはり師翁なればこそと敬服いたしました。かやうなことを、もし他門の人が聞きましたならば、さぞ小癪なことに思うて、『下京や』以外にいくつも置くかも知れません。けれども、その人々が好いとして置くやうな上五文字は、又わたくしどもから見れば、必ず笑ふべきものでございませうと存じます。」と、申しました。

語釋

①**下京**　京都を上京と下京とに區劃し、下京は四條以南、加茂川と桂川とに圍まれた地域で、その北東部は略々今の市街の中心部に當るが、當時は極く寂しい地域であつた。　③**あ**　唯。呼ぶに應へる詞。　⑥**他門**　他流。蕉門以外をいふ。當時、

芭蕉を奉ずる俳人は頗るその數は多かつたが、然し他に、例へば貞門の人々、談林の人々、又は伊丹派の人々等があつたことを考へ合せなければならぬ。殊に、常識的な考へ方ではあるが、貞門の中心は京都であり、談林の中心は大阪であつて、又、文學全般の中心はこの京都大阪を包含する上方であつた當時に於いては、蕉門の勢力は、芭蕉が行脚に一生を送つた關係から、全國の各地に擡頭し、就中、江戸・尾張・伊賀・近江等には集注的な勢力を扶殖し得たけれども、未だ京都、又は大阪に於いては、貞門なり談林なりが蕉風に壓倒し盡されたとは言へぬ實情にあつた。特に作家の數に於いては、純粹の蕉門の人々は未だ他門よりも遙かに尠かつたのである。⑥**腹いたく** 片腹いたくの意。小癪な、又は笑止千萬なといふこと。異本には「片腹いたく」とある。⑦**をかしかりなん** 笑ふべきものであらうの意。

参考

この「下京や」の句の出典は『猿蓑』である。

この「下京や」の句に關する說話はかなり著名なもので、例へば、西馬の『標注七部集』などにも、『猿蓑』の

この句の上欄に、

去來抄、翁をはじめ、いろ〳〵と置侍りて、下京やに極め玉ふとあり。

と記してある。

『青根が峯』には、

五文字の居らざる句、人持來りて五文字を賴むといふ事、李由が句に、

比良より北は雪げしき

といふ句に、久しく五文字なし。予翁に尋侍る時、早速鱘舟やといふ五文字は居へ給へり。此句門人たる人しらぬはなし。この時師の云、凡兆が句に、

雪つむうへのよるの雨

といふ句に五文字頼む。情を費して、案じ出して下京やといふ五文字をすへたりと語り給ふ。同じ五文字を居へ給ふに、容易に出ると出ざるとは、いかなる子細成べしと想ひしに、愚退て發明するに、鱘舟といふ五文字は取合もの也。下京といふ五文字には、例の翁の血脈を入れられたり。二つの五文字、同じ事と思ふ人は、五文字置く事は成るまじき也。

『俳諧寂栞』には「名所をつかふ事」の條下に、

五月雨にかくれぬ物や瀬田の橋

木母寺に歌の會あり今日の月　　其角

下京や雪つむ上の夜の雨　　凡兆

かくのごとく五月雨に隱るべきものゝかくれざる瀬田を稱し、名月に歌讀むべき所を木母寺に定め、雪の上の夜の雨を下京に定める、皆名所を遣ひたる也。いさゝかも名所につかはるゝ事あるべからす。

との記載がある。

なほ此處に「此事他門の人聞侍らば云々」とあるが、蕉門と蕉門以外の人々の相違(作風上の)に就いては、『去

來抄』の「修行教」中にも、

去來曰、當時世間の作者、翁の葬の句、あるは道ばたの木槿などの句體にまよひ、あさましき句を吐出し、芭蕉流とおぼえたる族おほし。

去來曰、他門と蕉門と第一案じ處に違ひありと見ゆ。蕉門は景情ともに其有處を吟ず、他流は心中に巧まるゝと見えたり。たとへば、

御 蓬 萊 夜 は う す も の を き せ つ べ し

元 日 の 空 は 青 き に 出 舟 哉

鴨 川 や 二 度 め の 網 に 鮎 一 つ

といへる如し。禁闕に蓬萊なし、洛陽に出舟なし、鮎ひとつは少き事にや、皆是細工せらるゝなり。

去來曰、蕉門の發句は一字不通の田夫、十歲以下の小兒も時によりてよき句あり。却て他門の功者といへる人は覺束なし。他流は其流の功者ならざれば、其流のよき句はなしがたしと見えたり。

などあり、『二十五ケ條』にも、

〇はいかい二字の事。

はいかいの二字は古來に穿鑿あり、字書を引て、誹に非の音也共、あるひは史記の滑稽を引て、俳の字に定りたる共、穿鑿の理は明かなり。しかれ共、古今集より誹の字を用ひ來たりたれば、此類は古實として誤をも其通りに用る事もあるなり。尤、八雲御抄にも俳諧と誹諧の二様あり、されば我家には、はい

かいには古人なしと看破したる眼より、玄とも妙とも名は別にさだむべけれ共、言語に遊ぶといふ道理をしらば、我家には、いまよりは俳諧の二字もしかるべし。他門に對して穿鑿すべからず。

○發句蒙やうの事。

發句は屛風の畫と思ふべし。已が句を作りて目を閉、畫に準らへて見るべし。死活をのづから、あらはるゝものなり。此ゆへに、はいかいは姿を先にして、心を後にするとなり。都て、發句とても付句とても、目を閉て眼前に見るべし。心に思ひはかつてするは見ぬ事の推量なり。目に見て附ると、心に量て附ると、自門他門のさかひ、紙筆の上に盡がたし。諸集の附合を見て工夫すべし。

また『俳諧或問』にも、

東都の中にも點取にて新らしといふ事は、蕉門にて古し。蕉門にて新らしといふ事は點取にて古し。此境をわきまへず、只新らしきを作れば、俗情あらはれて、花に成行事、道に深切ならず。蕉翁の基を知るべし。

とある。

因みに、芭蕉の置いた「下京や」の五文字に關聯して、『談林十百韵』所收の百韻「くつろぐや」の巻の二表八句目短句に、

上京下京しぐれふり行　卜尺

の句があることが、考へ合せられる。

最後に積翠園の『去來抄評』には、

○下京や云々。

下京は上京に對する詞なり。上京ならんには、雪つむ上の小灯燈とも作るべし。下京に夜の雨とは、人の一人も不通淋しき所、雪の上に雨さえ降て、其感を起し侍る事深し。たとへば下諏訪やと置て、上の諏訪は小灯燈の人通に、下の諏訪の淋しきといふべけれど、夫は理詰にして全く其所を得たるにはあらず。是は王城の地の感より、京に此風色を吟ずる事の、五月雨にかくれぬ物や瀬田の橋、の吟にもおもひ合すべし。

と見えてゐる。

三　猪の寐に行かたや明の月　　去來 ①

此句を窺ふ時先師しはらく吟して兎角をのたまはす予思ひ誤は先師 ②
といへとも歸り待つ夜興引の意を知玉はすやとしか〳〵のよしを申 ③
侍れは先師曰其おもしろき所は古人もよく知れはこそ〈明ぬとて野 ④

邊より山に入るしかのあと吹送る荻の上風とはよめりける和歌優美 ⑤
のうへにさへ斯まてかけり作したるを俳諧自由のうへにたゝ尋常の ⑥
氣色を作せんは更に手柄なかるへし一句おもしろげなれは暫案しぬ ⑦
れと兎角に詮なかるへしとなり其後おもふに此句は郭公なきつるか ⑧
たといへる後德大寺の歌の同案にていよ〳〵手柄なきことを知れり ⑨

校異

久①寐に―ねに。　②しはらく―暫く。思ひ誤は―思ひ誤るは。　③歸り待つ夜興引の意を―歸り待よこ引の景を。知玉はすやと―しり玉はすやと。よしを申侍れは―よしを申。　④其おもしろき所は―そのおもしろき處は。よく知れはこそ―よく知れは。〽―此ノ爪印ナシ。明ぬとて―歸るとて。　⑤野邊―野へ。山に入るしかのあと吹送る―山へ入鹿の跡吹おくる。よめりける―よめり。和歌―和哥。　⑥うへにさへ―上にさへ。斯まて―かく迄。自由のうへに―自由の上に。　⑦更に手柄なかるへし―手柄なかるへし。おもしろげなれは―おもしろけれは。暫―暫く。　⑧兎角に―兎角。となり―と也。郭公―時鳥。なきつるかたと―鳴つるかたと。　⑨後德大寺の歌―後京極の歌。いよ〳〵―猶。なきことを知れり―なき句也。

帝①明の月―あけの月。　②窺ふ時―伺ふに。しはらく―暫。のたまはす―宣す。思ひ誤は―思ひ誤るは。　③歸り待つ夜興引の意を―歸り待夜こそ心の氣色。よしを申侍れは―よしを申。　④其おもしろき所は―おもしろき所は。よく知れはこそ―能知れは。〽―此ノ爪印ナシ。明ぬとて―歸るとて。　⑤山に入るしかのあと吹送る―山に入鹿のあと吹送る。よめりける

ーよめり。和歌ー和哥。⑥うへにさへーー上にさへ。斯まてーかくまて。たゝーー唯。⑦更に手柄なかるへしー手柄なかるへし。おもしろげなれはーおもしろけれは。⑧郭公ー時鳥。なきつるかたとー啼つる方をと。⑨後徳大寺の歌ー後京極の和哥。いよ〳〵ー彌。なきヿを知れりーなき句也。

濟①行かたー行くかた。②窺ふ時ー伺ふ時。しはらくー暫く。のたまはすー宣はす。思ひ誤はー思ひ誤れるは。③といへともーと雖も。歸り待つ夜興引の意をー歸り侍る夜興引の景色。知玉はすやとー知給はすやと。よしを申侍れはー由を申す。④其おもしろき所はー其面白き所は。よく知れはこそー能く知れはこそ。へー此ノ爪印ナシ。明ぬとてー歸るとて。⑤山に入るしかのあと吹送るー山に入る鹿の跡吹送る。よめりけるー詠めれ。⑥うへにさへー上にさへ。斯まてー斯くまて。かけりー翔り。自由のうへにー自在のうへに。たゝー只。⑦氣色ー景色。作せんはー作さんは。更に手柄なかるへしー手柄なかるへし。おもしろげなれはー面白けなれは。暫ー暫く。⑧おもふにー思ふに。郭公ー時鳥。なきつるかたとー鳴きつる方をと。⑨いへるー云へる。後徳大寺の歌ー後徳大寺の和歌。いよ〳〵ー愈々。なきヿを知れりーなき句なり。

青①行かたー行方。此ノ句ノ頭ニ「㊂」トアル。②窺ふ時ー伺ふに。思ひ誤はー思ひ誤るは。③歸り待つ夜興引の意をー歸り侍る夜興引の意を。知玉はすやとーしり給はさる也と。よしを申侍れはーよしを申。④其おもしろき所はー面白き所は。よく知れはこそーよくしれはこそ。へー此ノ爪印ナシ。⑤山に入るしかのあと吹送るー山にいる鹿の跡吹送る。よめりけるーよめり。和歌ー和哥。⑥うへにさへー上にさへ。斯まてーかくまて。自由のうへにー自由の上に。たゝー唯。⑦更に手柄なかるへしー手柄なかるへし。おもしろげなれはーおもしろけれは。暫ー暫く。⑧其後ー其のち。おもふにー思ふに。此句ーこの句。郭公ー時鳥。なきつるかたとー啼つる方をと。⑨後徳大寺の歌ー後徳大寺の和歌。いよ〳〵ー彌。なきヿを知れりーなき句也。

【贄】①行かた—行方。此ノ句ノ頭ニ「㊟芭」トアル。　②窺ふ時—伺ふに。のたまはす—定めんと。思ひ誤は—思ひ誤るは。
③歸り待つ夜興引の意を—歸り侍る夜興行の意を。知玉はすやと—知り給はさるやと。よしを申侍れは—よしを申。　④其おもしろき所は—面白き所は。よく知れはこそ—しれはこそ。へ—此ノ爪印ナシ。　⑤山に入るしかのあと吹送る—山に入鹿の跡吹送る。よめりける—よみたり。　⑥うへにさへ—上にさへ。斯まて—かくまて。自由のうへに—自由の上に。たゝ—唯。
⑦更に手柄なかるへし—手柄なかるへし。おもしろげなれは—おもしろけれは。暫—暫く。　⑧となり—と也。郭公—時鳥。なきつるかたと—啼つる方をと。　⑨後德大寺の歌—後德大寺の和歌。いよ〳〵—彌。なきとを知れり—なき句なり。

【異】③知玉はすやと—知り給はすやと。よしを申侍れは—よしを申し侍れは。　④其おもしろき所は—其おもしろきは。　⑤和歌—和哥。

【訓讀】

猪の寐に行くかたや明の月　　去來

此の句を窺ふ時、先師しばらく吟じて兎角をのたまはず。予、思ひ誤るは、先師といへども、歸り待つ夜興引の意を知給はずやと、しか〳〵のよしを申し侍れば、先師曰はく、其のおもしろき所は、古人もよく知ればこそ、「明けぬとて野邊より山に入るしかのあと吹送る荻の上風」とはよめりける。和歌優美のうへにさへ、斯くまでかけり作したるを、俳諧自由のうへに、たゞ尋常の氣色を作せんは、更に手柄なかるべし。一句おもしろげなれば、暫く案じぬれど、兎角に詮なかるべしとなり。其の後おもふに、此の句は、郭公なきつるかた、といへる後德大寺の歌の同案にて、いよ〳〵手柄なきことを知れり。

「猪の寐に行くかたや明の月　去來」――わたくしが、この句を作りました時、師翁にその御批評をお願ひ申しましたところ、師翁は善いとも惡いとも仰有つて下さいませんでした。それで、わたくしは思ひ誤つて、心の中に、夜興引で獲物待つてゐるやうなところは、師翁でさへもまだ御經驗がおありにならぬのかしら、と考へましたので「この句の表には、はつきり夜興引とは叙してありませんが、實は、これは夜興引の一情景を捉へたものでございます。」と、申し上げて、なほ、夜興引の時のおもしろい有様を、あれこれと御說明いたしました。すると、師翁の仰せには「句評を遲らせてゐたのは、句意が汲みとれなかつたからではありません。この句が夜興引の情景であることは、よく分つてゐました。そして、そのおもしろさは、昔の人も既によく氣が附いてゐたればこそ、『新古今集』には『明けぬとて野邊より山に入る鹿のあと吹送る荻の上風』といふ歌さへ見えてゐます。優美な叙法を專らとしなければならぬ和歌でさへも、その情景を捉へて、かほどまで躍動的な叙法を用ひて成功してゐるのですから、まして濶達自在な作法を許されてゐる俳諧では、それと同じやうな視野を捉へて、たゞありふれた、和歌にも及ばぬやうな景趣を詠んだのでは、何の手柄もありますまい。けれど、わたくしが暫く返事をしないでゐたのは、この句にはどこかおもしろさうな所があつたので、どうにか手を入れてあげたいと思つて、少々考へてゐた爲めでした。が、結局うまく直すことは出來ないやうです。」とのことでございました。その後、わたくし自身も、それならば何とか直してもみようと、いろ〳〵考へましたが、そのうちに、この句は、彼の有

名な「郭公鳴きつる方を眺むればたゞ有明の月ぞのこれる」といふ後徳大寺實定の歌とも同案で、いよ〳〵つまらぬ句だといふ事が分りました。

語釋

①**明の月**　明方の月。有明の月。秋の季語。　②**兎角をのたまはず**　善いとも惡いとも仰有つて下さらぬの意。　③**歸り待つ**　こゝでは猪の歸りを待つこと。即ち、猪の往來する道はきまつてゐるので、猪が終夜求食り歩いて、曉方になつて山の中の臥處に歸るところを、その途中に待伏せてゐて獲らうとする場合である。　③**夜興引**　ヨコヒキ。又ヨコウヒキとも訓む。冬夜獵師が犬を牽いて山中に分け入り、獸類を狩ること。もと畿内地方の方言。　③**しか〴〵のよし**　これこれのわけ。　⑤**明けぬとて野邊より山に云々**　この歌は『新古今集』巻四（秋）に收められてゐて、作者は、左衞門督通光。前書には「和歌所の歌合に朝草花といふことを」とある。但し、原書に正しくは「萩の下風」とあつて、これは去來抄の方の誤傳である。一體「萩の下風」「荻の上風」といふ成語はあるが、「萩の上風」といふ不熟な言葉は、尠くとも新古今あたりの歌には用ひられた筈はないのである。一首の大意は「今は夜も白みそめたので、よもすがら遊び歩いてゐた萩野から、我がすむ山へ向けて歸り入る鹿のあとを、曉の萩の下風がふいて送るよ」といふ事である。因みに、この歌は原典にも秋の部に收められてゐて、夜興引乃至は猪の、冬季であるのとは季も違ひ、且つおのづから情景も異つてゐるが、こゝに類似として芭蕉が指摘したのは、「曉になつて獸（鹿・猪）が山へ歸つて行くうしろ姿」といふ點であらう。　⑥**かけり**　翔るの變化した形。自由奔放に、又は躍動的にの意。　⑧**兎角に詮なかるべし**　どうにもかうにも仕様がないであらう。　⑧**郭公なきつるかた**「郭公鳴きつる方を眺むればたゞ有明の月ぞのこれる」の歌をさす。この歌は非常に有名であつて、これに取材をとり、又は換骨したやうな俳句だけ

でも、古來相當の數に達してゐる程である。『百人一首』の中にも收められてゐるが、原典は『千載和歌集』卷三「夏」で、前書には「曉聞二郭公一といへる心をよみ侍りける」と見えてゐる。　⑨**後德大寺**　藤原實定、右大臣公能の男。大納言に任ぜられ、正二位に叙せられ、或は内大臣に拜されたが、建久元年官を辭し、專ら詩歌の道に自ら誤んだ。翌建久二年、薙髮して名を如圓と改む。この年、五十三歲で薨ず。藏書和漢合せて萬餘と稱せられた。　⑨**同案**　同じかんがへ。同じ仕立て方。

【參考】

この「猪の」の句の出典は『去來發句集』、なほ『旅寢論』『去來文』『桃の杖』等にも見えてゐる。

この「猪の」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば『去來文』には、

先年下拙句に、

猪の寢に行かたや明の月

此氣しき面白さに自讚し、翁へ見せ申候所、我に翁暫く物をも申されず候ゆゑ、拙者心に、猪の山へかよふ氣しきしられざるやと、重ねて其風情を咄し候へば、翁申され候は、されば其氣色の面白き事は、古人も、

かへるとて野邊より山へ入る鹿のあと吹おくる萩のうはかぜ

と讀候へば、暫く俳諧の手がらなきやうに存候ゆゑ案事申候と答へ申され候。中〳〵、跡吹おくる萩の上風と讀たるけしきに合しては、明の月と申さむは、俳諧に月見たる場の、より〳〵口をしくと申され

候ゆゑ、此句をすて申候。すべて、古哥などとるには、一しほ風情も姿もせめ上て申度事に候。

とある。こゝに、引用歌を「萩の上風」と記してゐるのは、これも亦誤傳であるが、「明の月と申さむは云々」の所説は、『去來抄』に於けるものよりも、更に文意が確かになると思ふ。

次に『旅寐論』には、「古事・古歌を取様、むかし・中比・當世の品々をあげられたり。その中、當時の取様は、古事・古歌をその儘立置、少も借らず、己が作意を並て盡すといへり。然らば、いまの取様は古事・古歌を立置て、此方の作意をならぶる事に侍るや」なる問に答へた條の中に、

答曰、許六のこゝろは、古事・古歌をそのまゝ立置きては、おもしろからずと云事也。必ずそのまゝ立置くには限らず。すべて古事・古歌を取るには、朧ろに取る法あり。そのまゝ立置きてもとる法あり。さまざまとる法ありといへども、皆前をすりあげて作す。此許六が已が作意を兼て盡す所なり。されども並べてのみと心得侍らば、初心の輩は、もし誤も出來らんか。たゞ一等すりあげて作すると心得らるべし。尤も並べて云ふも、あしと云ふには非ず。若し誤出來なむといふは、

猪の寐に行かたや明の月　　去來

此句、自賛して先師に捧げけるに、歸るとて野邊より山に入る鹿の跡吹送る萩の上風、と其場の面白き事は、古人も能くしり玉ひて、跡吹送ると迄讀れたり。今、俳諧の上に、只、寐に行くかたや明の月、と作したらん分には、汝が手柄はなかるべし。

とあるが、これに由れば、「かくまでかけり作したるを」の内容が、より明かになると思ふ。

なほ『蕉門俳諧語錄』にも、

猪の寐に行かたや明の月　　去來

この句を窺ふに、先師暫く吟じて兎角を宜はず。予思ひ誤りて、師といへども、歸る鹿の氣色しりたまはずやと、しかぐ\のよしを申。先師曰、面白き所は古人もよくしればこそ、歸るとて野邊より山に入る鹿のあと吹をくる萩の上風、とは詠り。和歌優美の上にさへ、かくまで作りたるを、誹諧自由の上に、たゞ尋常の氣色作らんは手柄なかるべし。

と見えてゐる。

さてこれ等の諸說を比較すれば、この引用歌は、『去來抄』に「あけぬとて」とあるのが『去來文』『旅寐論』『蕉門誹諧語錄』等には、「かへるとて」とあり、又、前者に「荻の上風」とあるのは、後者に「萩の上風」と見えてゐる。この歌の出典は『新古今和歌集』で、それに由れば、

和歌所の歌合に朝草花といふことを

あけぬとて野邊より山にいる鹿の跡ふきおくる萩の下風　　左衛門督通光

とあつて、「あけぬとて」は『去來抄』が正しいが、「荻の上風」或は「萩の上風」は、いづれも「萩の下風」の誤である。

これを、古歌の作例に徵してみるに、「萩の下風」と用ゐた歌には、前揭のものがある位に過ぎないが、「荻の上風」と用ゐた歌には、

郁芳門院の前栽合に荻をよめる

物事に秋のけしきはしるけれどまづ身にしむは荻の上風　大藏卿行宗（千載和歌集）

百首の歌よみ侍りける時、月の歌とてよみ侍りける

常よりも身にぞしみける秋の野に月すむ夜はの荻の上風　右衛門督賴實（千載和歌集）

題しらず

秋の夜はやどかる月もつゆながら袖にふきこす荻の上風　右衛門督通具（新古今和歌集）

哀とてとふ人のなどなかるらむ物思ふやどの荻のうは風　西行法師（新古今和歌集）

題しらず

今はたゞ心のほかにきくものをしらずがほなる荻の上風　式子內親王（新古今和歌集）

野邊の露は色も無くてやこぼれつる袖より過ぐる荻の上風　前大僧正慈圓（新古今和歌集）

建長二年松尾の社の歌合に、初秋露

あら玉の今年もなかばいたづらに涙かずそふ荻のうは風　前中納言定家（續後撰和歌集）

千五百番歌合に

うらみよとなれる夕のけしきかなたのめぬ宿の荻の上風　後鳥羽院御製（續古今和歌集）

建長二年八月歌合に、月前風

すむ月の影すさまじくふくる夜にいとゞ秋なる荻の上風　入道前太政大臣（續古今和歌集）

荻風驚夢といへる心を

秋のよの露より外の夢をだに結びも果てぬ荻のうはかぜ　高階宗成（續拾遺和歌集）

千五百番歌合に

いろかはる心の秋の時しもあれ身にしむくれの荻の上風　皇太后宮大夫俊成女（新後撰和歌集）

殘暑の心を

秋淺き日影に夏はのこれども暮るゝまがきは荻の上風　前大僧正慈鎭（玉葉和歌集）

建保二年九月十三夜、月前秋風といふことを

月影の出で入る峰は松のあらし更くれば野べに荻の上風　前大僧正慈鎭（玉葉和歌集）

題しらず

わするなよけふは昔の秋までもこのゆふぐれの荻の上風　後鳥羽院御製（續千載和歌集）

江月といへる心を

ほに出づる荻の上風うちそよぎ入江夜さむにすめる月影　後二條院御製（續千載和歌集）

千五百番歌合に

さびしさに秋の哀をそへてけりあれたる宿の荻の上かぜ（イは）　二條院讃岐（續千載和歌集）

我がための音づれとだに思はゞや人待つよひの荻の上風　權律師圓世（續千載和歌集）

千五百番歌合に

秋來れば身にしむ物となりにけり昨日も聞きし荻の上風　皇太后宮大夫俊成女（續後拾遺和歌集）

寒草風と云ふ事を

霜枯の音にも冬は知られけり秋をも告げじ荻のうはかぜ　平　維貞（續後拾遺和歌集）

光明峰寺入道前攝政の家の十首の歌に、曉聞レ荻

聞きあかすなみだの露もとゞまらず老の寢覺の荻の上風　従二位家隆（新千載和歌集）

文保三年百首の歌奉りけるに

音づるゝ情ばかりを待ちえてもおのれ寂しき荻の上かぜ　後西園寺入道前太政大臣（新後拾遺和歌集）

ゆふべのみ身にしむものと思ひしを寐覺も悲し荻の上風　前中納言親賢女（新後拾遺和歌集）

題しらず

露をこそはらひも果てめうたゝねの夢をも誘ふ荻の上風　平英時朝臣（新後拾遺和歌集）

後九條前内大臣の家の歌合に

さしもやは身にもしみける秋の立つ景色計りの荻の上風　岡屋入道前攝政家民部卿（新續古今和歌集）

秋の歌の中に

今よりの長き夜さむをいかゞせむゆふつげ鳥の荻の上風　法　印　淨　辨（新續古今和歌集）

建保四年閏六月、内裏の歌合に

訪はれしは昔がたりの夕暮におもひも入れぬ荻のうは風　正三位知家（新續古今和歌集）

はしどの
秋の心ならはじとのみ思ふ宿に暫しなつげそ荻の上風　前大僧正慈鎭（新續古今和歌集）
閑居秋風といふ事を
とふ人もなき宿からの寂しさを秋ぞとつぐる荻の上風　新宣陽門院（新葉和歌集）
秋
小夜中に友呼びわたる（イかはす）雁が音にうたて吹き添ふ荻の上風　紫式部（源氏物語）
秋よ又心のほかの思かな荻のうは風みねに鳴くしか　權少將（拾遺愚草員外）
秋の夕暮
秋はなほ夕まぐれこそたゞならね荻の上風萩の下露　藤原義孝（藤原義孝集）
等の如き、多くの作例を見出すことが出來るのである。而して、これに反して、「荻の下風」或は「萩の上風」と用ゐた歌詞は殆んどなく、總ての場合に「萩の下風」又は「荻の上風」卽ち、萩の場合には下風、荻の場合には上風となつてゐる。
この事は、俳諧の作例に徵しても同樣であつて、例へば『談林十百韻』所收の百韻「くつろぐや」の卷の名殘表十二句目に、
奉加すゝむる荻の上風　志斗
とあり、『七柏集』中の蓼太・舊國・魚文の三吟歌仙の脇に、

夕ぐれ初る荻のうはかぜ　舊國

とあり、又『はいかい袋』所載の蓼太・蕪村の兩吟歌仙の第三に、

くづの葉に荻のうは風吹添へて　蕪村

とあり、又『畫網』には、貞因の「浦土の筆つ蟲まで聲そへて」の前句として（註。「柳亭記」の所載に據る。）、

寺町邊に荻の上風

などの用例を散見することが出來る。

「萩の下風」と用ゐた俳諧の作例は、未だ觸目しないが、『去來發句集』に、

臥所かや小萩にもるゝ鹿の角　去來

などは、却つて通光の「あけぬとて」の歌を換骨したもののやうに思はれる。

なほ『去來抄』の「同門評」には、

さびしさや尻から見たる鹿の形　木導

許六曰、此句はへ入鹿のあと吹送る萩の上風といへる等類也。去來曰、吹送るの歌は朝鹿の山に歸る氣色をいへり。これは鹿一體のさびしさをいへり。趣意各別なり。等類なるまじ。

等の如き記載もある。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○猪の云々。

新古今秋の上、明ぬとて野邊より山に入鹿の跡吹おくる荻の上風、此歌の糟粕たるべし。其糟粕を蕉門にはいふまじき故を、去來、爰にのべたり。さるを今の人去來抄よみながら、哥の糟粕を同作するは何ぞや。

と見えてゐる。

二四　蘿の葉の……何々とやらん跡は忘れたり尾張の人の句也 ①

此句は蘿の葉の谷風に一すち峯まて裏吹かへさるゝと云句なるよし ②
予先師に此句を語に先師曰發句は斯のとくくまく〵ていひつくす ③
ものにあらすとなり支考かたはらに聞て大に感驚しはしめて發句と ④
いふ物を知侍るとて此頃ものかたり有けり予其時も等閑に聞なしけ ⑤
るにや此事あとかたもなくうち忘侍るこそ本意なけれ ⑥

校異

久①蘿の葉の……—つたの葉……。何々とやらん跡は忘れたり—此ノ十二字ナシ。尾張の人の句也—尾張の句。②此句は—ほ句は忘れたり。蘿の葉—つたの葉。一すち—一すし。峯まて—峯迄。③語に—語る。發句は—ほ句は。斯のとく—かくの

如く。くま〳〵まて—くま〳〵迄。いひつくす—謂つくす。④ものにあらす—物にあらす。となり—と也。かたはらに—傍に。大に—大ひに。はしめて—初て。發句と—ほ句と。⑤知侍るとて—しり侍ると。此頃—この比。ものかたり有けり—物語り有けり。予—予は。其時も等閑に聞なし—其時なをさりに聞なし。⑥此事あとかたもなく—あとかたもなく。うち忘侍るこそ本意なけれ—うち忘れ侍るいと本意なし。

【帝】①蘿の葉の……何々とやらん跡は忘れたり—蔦の葉の殘らす動く秋の風。尾張の人の句也—荷兮。②此句は—此發句はわすれたり。蘿の葉—蔦の葉。一すち—一すし。峯まて—峰迄。裏吹かへさるゝ—裏ふきかへさるゝ。云句なるよし—云句成よし。③語に—語るに。斯のとく—かくのとく。いひつくす—いひ盡す。④となり—と也。かたはらに—傍に。はしめて—始て。⑤知侍るとて—知り侍ると。ものかたり有けり—物語りあり。予—予は。其時も等閑に聞なし—其時もなをさりに聞なし。⑥此事あとかたもなく—あとかたもなく。うち忘侍るこそ本意なけれ—打わすれ侍るいと本意なし。

【落】①蘿の葉の……何々とやらん跡は忘れたり—蔦の葉。尾張の人の句也—尾張の句。②此句は—此發句は忘れたり。蘿の葉—蔦の葉。一すち—一筋。裏吹かへさるゝ—裏吹返さるゝ。③語に—語るに。斯のとく—斯く。くま〳〵まて—隅々迄。いひつくす—云盡す。④ものにあらす—物に非す。かたはらに—傍に。はしめて—初めて。⑤いふ物—云ふ物。知侍るとて—知り侍るとて。ものかたり有けり—物語あり。予—予は。其時も等閑に聞なし—其時も等閑に聞成し。⑥此事あとかたもなく—此事跡形もなく。うち忘侍るこそ本意なけれ—打忘れ侍る最と本意なし。

【青】①蘿の葉の……何々とやらん跡は忘れたり—つたの葉の……何とやらん忘れたり。尾張の人の句也—尾張の句也。此ノ句ノ頭ニ「(酉)」トアル。②此句は—此發句はわすれたり。蘿の葉—蔦の葉。一すち—一すし。峯まて—峯迄。裏吹かへさるゝと—うら吹かへると。云句なるよし—いふ句成よし。③語に—語るに。斯のとく—かくの如く。いひつくす—いひ盡す。④も

のにあらす－物におらす。となり－と也。かたはらに－傍に。感驚－感動。　⑤知侍るとて－知り侍ると。此頃－頃日。もの
かたり有けり－物語あり。予－予は。其時も等閑に聞なし－其時もなをさりにきゝなし。　⑥此事あとかたもなく－あとかた
もなく。うち忘侍るこそ本意なけれ－うちわすれ侍るいと本意なし朱書入積翠君の自筆と見へたり　△花實集に都て句はいひ課せさるは未練な
りいひ過るは又病ひ也いつれも句として見る所なし或時此ころや小春を室に歸り花尺艸此句はしめ上五文字を山陰や南邊やと
置わつらふよし花小春の理に落ていひ過るの病ひ也下七五にて句意悉濟侍れはたゝこゝろなき五文字を置へき也と今のかふり
に定侍る。

贄①蘿の葉の……何々とやらん跡は忘れたり－つたの葉の……何とやらん忘れたり。尾張の人の句也－尾張の句なり。此ノ句ノ
頭ニ「茜」トアル。　②此句は－此發句はわすれたり。蘿の葉－蔦の葉。一すち－一すし。峯まで－峯迄。裏吹かへさるゝと－
裏吹かへると。云句なるよし－いふ句成よし。　③語に－語るに。斯のとく－かくのとく。いひつくす－云盡す。　④もの
にあらす－物にあらす。かたはらに－傍に。感驚－感動。　⑤いふ物－いふもの。知侍るとて－しり侍ると。此頃－頃日。も
のかたり有けり－物語あり。予－予は。其時も等閑に聞なし－其時もなをさりに聞なし。　⑥此事あとかたもなく－あとかた
もなく。うち忘侍るこそ本意なけれ－打忘れ侍るいと本意なし都て句はいひ課せさるは未練なりいひ過るは又病むなりいつれも
句として見る所なし或時〽この頃や小春を室に歸花丈艸此句初上五文字を〽山陰や〽南邊やと置わつらふよし尤小春の利に落
ていひ過るの病也下七五にて句意悉濟侍れはたゝこゝろなき五文字を置へき也と今の冠に定侍る。

架①何々とやらん－何とやらん。　②裏吹かへさるゝ－裏吹きかへさるゝ。云句なるよし－云ふ句なるよし。　③語に－語
るに。　⑤いふ物－いふもの。有けり－有りけり。聞なし－聞きなし。　⑥うち忘侍るこそ本意なけれ－うち忘れ侍るこそ
いと本意なけれ。

訓読

蘿の葉の…………………何々とやらん、跡は忘れたり。尾張の人の句也。

此の句は、蘿の葉の谷風に一すぢ峯まで裏吹きかへさるゝと云ふ句なるよし。予、先師に此の句を語るに、先師曰はく、發句は、斯くのごとく、くま〴〵まで、いひつくすものにあらずとなり。支考かたはらに聞きて、大に感驚し、はじめて發句といふ物を知り侍るとて、此の頃ものがたり有りけり。予、其の時も等閑に聞きなしけるにや。此の事あとかたもなく、うち忘れ侍るこそ、本意なけれ。

口譯

「蘿の葉の……何々とやらん。跡は忘れたり。尾張の人の句なり。」——誰でしたか、尾張の人の句でありましたが、「つたの葉の……」といふ、下の方は忘れましたけれども、ともかく、その句意は、蔦の葉が一面に茂つてゐる所へ、たま〳〵谷から吹上げる風のため、その風筋の通りに峯の方まで、葉がみな裏がへしになつて白く見えた、といふやうな句であつたと覺えてゐます。その句を、わたくしが師翁に御披露しまして、御意見を伺ひました時、師翁は「發句といふものは、かうまで隅から隅まで、言盡してしまふものではありません。」と、仰せになりました。その時は、支考もその席上に列なつてゐましたが、この師翁の御言葉を拝聴して、大いに感ずるところがあり、この頃になつて、わたくしに申しますには、「あの時の師翁のお言葉で、實は、わたくしは始めて

發句といふものを、知ることが出來たのでした。」と、述懐いたしました。然し、わたくしは、その時も、あまり注意を拂はずに聞いてゐました爲めか、この事は、すつかり忘れてゐて、肝心の、その席で問題になつた句までも思ひ出せないのは、まことに殘念なことでございます。

語釋

①**蘿蔦**（つた） 秋になつて紅葉する頃を取つて秋の季題としてある。　①**尾張** 東海道の一國、修して尾州ともいふ。今は愛知縣の管下に屬する。尾張に住んでゐた蕉門俳士には、露川・越人・荷兮・野水・杜國・旦藁・龜洞・舟泉・重五・鼠彈・傘下・長虹・夕道・素覽・左次・羽笠・一笑等がある。『俳諧七部集』中の『冬の日』・『春の日』・『曠野』等は、尾張蕉門の人達を主とした撰集である。

②**谷風** 谷間に吹く風。又、晝間山腹の空氣が熱せられて稀薄になつた時、これを補ふために谷間から吹上げる風。　③**くまぐま** 隅々（すみずみ）。　④**支考** 美濃北野の人である。これに對して、尾州犬山の人といひ（頭陀物語）、尾張に生れたと稱する（名家年表）說もある。各務氏、黄雲山大智寺の僧で、鎭藏主と呼んだ。十九歳の時下山し、還俗して伊勢山田に赴き、見龍と稱して醫を業としてゐた。元祿三年、凉菟の導きで蕉門に入つた。獅子庵・東花坊・西花坊・野盤子・蓮二坊などの別號がある。芭蕉歿後諸州を遍歴し、蔚然として一家をなし、その一派は美濃派又獅子門と稱せらる。俳論に長じ、天稟の才氣に任せて、自說を鼓吹した。「身は俳諧の小技にありて、こゝろは青雲の外にのぼる」といふ氣慨で、「正風の眞髓こゝに殘れり」と壯語した。蕉門十哲の一人である。享保十六年二月七日歿す。年六十七。故郷北野の黄雲山大智寺に葬る。撰著頗る多く、『葛の松原』・『笈日記』・『俳諧十論』・『續五論』・『十論爲辨抄』・『梟日記』・『東華集』・『西華集』・『櫻山吹』・『そこの花』・『發願文』・『削かけ』・『本朝文鑑』・『和漢文藻』・『露川責』・『三日月日記』・『阿難談』・『蓮二吟集』などがある。　④**感驚** 感じ驚く。但し、これは異本には「感動」

とあるが、一つの熟語としては、「感動」とあつた方が穩當であらう。　⑤**等閑に**　あまり注意を拂はないでの意。　⑥**あとかた**　跡形。形跡。　⑥**本意**　ホンイを略して、ホイとも訓む。まことのこゝろ。本意なしとは、殘念であるの意。

参　考

この「蘿の葉の」の句は、『去來抄』の板本には、下の十二文字が不明となつてゐるが、寫本の中、帝國圖書館本には、明かに、

蔦の葉の殘らず動く秋の風　　荷兮

となつてゐる。この句ならば出典は『曠野後集』又は『續猿蓑』である。『曠野後集』には、

蘿

蔦の葉は殘らず風の動哉　　荷兮

とあり、『續猿蓑』には、

蔦の葉や殘らず動く秋の風　　荷兮

と見えてゐる。

この「蘿の葉」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、『花實集』には、

つたの葉の　　尾張の句

其角曰、此發句は忘れたり。蔦の葉の谷風に一すぢ峯まで裏吹かへさるゝといふ句なるよし。予先師に

此句を語るに、先師曰、發句は斯のごとく、くま〴〵までいひ盡すものにあらずと也。支考傍に聞て大に感驚し、始て發句といふものを知侍ると、此頃もの語あり。予は其時も等閑に聞なしけるにや、あとかたもなく打忘れ侍る。いと本意なし。都而句はいひ課せざるは未練也。いひ過るは又病ひなり。いづれも句として見る所なし。或時、

此ごろや小春を室にかへり花　尺艸

此句はじめ上五文字を、山陰や・南邊やと置わづらふよし。尤小春の利に落て、いひ過るの病ひなり。下七五にて句意悉濟侍れば、たゞこゝろなき五文字を置べき也と、今のかぶりに定侍る。

『蕉門俳諧語錄』には、

發句はわすれたり、葛の葉の谷風に一すぢ峯まで裏吹かへすといふ句なるよし。先師曰、發句はかくの如く、くま〴〵まで云盡す物に非ずとなり。支考傍に居て大きに感驚し、初て發句と云ものを知り侍ると云り。

とある。

この章に問題にされてゐることは「發句はかくの如くくま〴〵までいひつくすものにあらず」といふ事であるが、これは蕉門の發句構成上、第一義的な作法であつて『宇陀法師』にも、

發句は言外の意味をふくむをよしとす。脇は發句に殘したる言外の意味を請て繼也。

とある如く、かくて句に餘情を持たせようとするのである。『花實集』には、

其角曰、凡、句は餘情を元とすべし。たとへば、

誰やらが姿に似たり今朝の春　翁

此句、衣通姫と歟、小町と歟、置たらばさもあらじ。誰やらと隱して、しかも、春色のうるはしきさまを、美しき人のすがたにたとへたる所、餘情限りなきをおもふべし。誠一字二字すら大切也。况五文字の違ひをや。仇に案ずまじき事也。

とあるが、こゝに「誰やらが」といふ叙法を、餘情の點で認めてゐるのは、一應は尤もな事ではあつても、それが發句の最善とは言へたくなると思ふ。この後に享保度の俳諧の墮落を見たのも、その遠因の一つは蕉門に說く餘情論の曲解にあつたとも考へ得るのであつて、又天明に至り蕪村一派が印象的な、直叙的な、凡そ餘情主義とは相反するもので、俳壇を風靡したことは、必然的な反動としても、かくあるべきところなのであつた。

次に、なほ『去來抄』の「同門評」の部には、

牽牛花の裏を見せけり風の秋　許六

葛の葉の表見せけり今朝の霜　芭蕉

の兩句に就いて、これが類句であるか否かの意見を交へてゐる章がある。これに關しては、なほ多くの言ふべきことがあつて、それらは、やがてその場合に臨んで當然書かなければならぬのであるが、たゞこゝに、これに附隨する議論の中で、本章にも少し關係のあるところを、書き添へて置かねばなるまいと思ふのである。先づ『旅寐論』の中には、

先師の葛の表を吟じ給ふ句は、古人、葛の葉のうらを云ひたるを返して、吟じたるのみに非ず。冬の朝の物靜に霜白う置わたし、葛の葉の表折れて、流石に洩れたる風情の見るべき所あるを、俳句の眼にらみ出し給へり。又證歌に引るゝ所の筋も、姿・心、同じやうに侍れども、その風情を述る所各別也。

また『雅文せうそこ』の中には、

葛の葉の表見せけり、此句は、一たび嵐雪が翁にそむきし事の、直り侍る時に、幸に書て遣はされ候句也。成程表見せたる句也。葛の葉の枯果て、うら見る昔も盡きはてたるといふ本情にして、今朝の霜の置渡したるを見れば、誠に表見せけり、うら見る秋をうちわすれて、表のけしきの面白きよ、と申す句也。先師發句の中にても算へる句なり。

とある。換言すれば「葛の葉に風が吹きつけて、葉を裏がへしにした」といふ事は、昔から、卽ち和歌の時代から、葛に對する一つの常習的な觀察として定められてあつたもので、さうした和歌から、尾張の句は作り出されて失敗し、芭蕉の句はそのまた逆を捉へて成功してゐるといふ事になるのである。そこで、それならば、昔の和歌にはどんなものが殘つてゐるかを一瞥する順序となるのであるが、先づ「葛の裏ふく風」と用ゐた古歌には、

人しれず忍びけることを文などちらすと聞きける人に遣しける

いかにせむ葛のうらふく秋風に下葉の露の隱れなき身を　相模

（新古今和歌集）

と見え、次に「葛の裏風」と用ゐた古歌には、

郁芳門院の前栽合によみ侍りける

獨寐やいとゞさびしきさを鹿の朝ふす小野の葛のうら風　藤原顯綱朝臣（新古今和歌集）

和泉式部みちさだに忘られて後程なく敦道親王にかよふと聞きて遣しける

移ろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛の裏風　赤染衛門（新古今和歌集）

つらかりし心の秋もむかしにて我身に殘るくずのうら風　院御製（新後撰和歌集）

千五百番歌合の歌

秋は猶葛のうら風うらみてもとはず朽ちにし人ぞ戀しき　後京極攝政前太政大臣（新千載和歌集）

題しらず

身を秋の末野の原の霜枯に猶吹きやまぬくずのうらかぜ　參議經宣（新後拾遺和歌集）

等が見え、更に、それに關聯して、「葛の下風」と用ゐた古歌には、

寶治元年十首の歌合に、社頭祝

神垣の葛のした風のどかにてさこそ恨のなき世なるらめ　入道右大臣（續拾遺和歌集）

いかにせむ人の心の秋の色を恨みじとてもくずのした風　前參議長成女（玉葉和歌集）

光明峯寺入道前攝政の家の卅首の歌の中に

恨みても戀ひても露ぞこぼれけるしのぶの山の葛の下風　山階入道左大臣（續後拾遺和歌集）

正治二年十月歌合に、枯野朝

野べの色は朝おく霜にむすぼゝれ恨によわる葛のした風　刑部卿宗長
（新續古今和歌集）

等を拾ふことが出來る。但し、『旅寐論』中には「證歌」といふ語さへ用ゐられてゐるのであるが、その所謂「證歌」が果してどれであるかは、管見の未だ及ばぬところである。

また「蘿の葉の」の句は、帝國圖書館本にのみは、明記されてゐるが、他の諸本には、總べて不明瞭となつてゐるのは何故であらうか。『俳かけの返事』に、「其秋、膳所の曲翠亭にて荷兮が蔦の葉の句評に付て」なる一節があり、それに答へて『猪の早太』には、

さて其秋、曲翠亭にて、荷兮が蔦の葉の句評と、一聞十知のやうに申さるゝが、假令其比翁さやうの咄ありとも、貴房の耳へは馬に心經なるべし。さだめて翁の倚白などへ物がたりの又聞ならん。

と記されてある。これらに從へば、この批評は曲水亭に於いてなされたものであらう。そして『俳かけの返事』の刊年が元祿三年であるに徵して、曲水亭での會合は、恐らくそれ以前であつたと思はれる。さて、この句の出典は『曠野後集』であり、又同書の刊年が元祿六年であることから推察すれば、この「蘿の葉の」の句は、板本に現れる前から、蕉門の人々の間に傳承されてゐたのかも知れない。然し又一方から考へれば、『猿蓑』にある、

穐風や蓮をちからに花一つ　不知讀人

といふ句が『曠野後集』には「岡崎鶴聲」と作者名が明かになつてゐる如く、どうも『曠野後集』といふ書は蕉門の人々にとかく疏外にあつかはれた撰集である。言ふまでもなく『曠野後集』の撰者は『曠野』と同じく荷兮

であるが、荷兮は晩年に至つて芭蕉に勘當されたといふ傳へさへもあるから、それらがいくらか原因して、荷兮の撰になる書は、蕉門の人々が喜ばなかつたものかとも思へる。

荷兮は尾張蕉門の先達者として、俳諧の手腕も秀ではゐたが、晩年に到つては、やゝ蕉風を離れた傾きも見える。然し、許六が『歴代滑稽傳』に、

路通・荷兮・野水・越人・木因は勘當の門人なり。

などと記してゐるのを、輕卒に信じて、芭蕉の勘當の門人であるといふ先入主から論を立てるのであれば、それは妥當を缺くと思ふ。荷兮の勘當説は、『宇陀法師』に、

名ごやの荷兮・越人、あら野に眼明たるに似たれど、瓢に底を入られ、湖南の連衆は猿蓑に闕をすへられたる事、其時慥に其風を得ずして血脉をつがぬ故也。何ぞ慥に風を得ば、自已に流行せず共、師にとりつき流行すべき事也。實は師の恩に依て名を顯し侍れば、底を入らるゝも理也。はいかいの底をぬくと言事有。ぬけぬ作者日々ふるく成行也。先師の手傳にて撰者の號を蒙りたる人、天晴作者と見えて其人何となくゆかしきに、師遷化の後に後集を出して下手の尾を出し、初心の人に嘲らるゝ。

と許六は記してゐるが、之等から出發して、即ち、元祿六年板の『曠野後集』の不備の爲めに勘當になつたといふ説と、次に『續俳家奇人談』によれば、「晩年師翁の勘氣を蒙りしは、橋守といふ書を作れるよりおこれり」とある如く、元祿十年板の『橋守集』によつて勘當されたといふ説と、この兩説がその原因として流布されてゐる。然し、その『曠野後集』説が虚説であることは、その後、元祿七年五月に、芭蕉は尾張に入つて、舊交の人々に

對した時にも(陸奥衛)、

行〱て尾州荷兮が宅に汗を入

世を旅に代かく小田の行戻り　芭蕉

とて、特に荷兮の許に足を止めて、歌仙の興行があつたことに徴しても、容易に首肯される筈である。次の『橋守集』說に至つては、之が出板されたのは、芭蕉が歿して四年後の元祿十年であるから、寧ろ滑稽な臆測に過ぎない。殊に、勘當說を言ひ立てた一人である支考が、後に、門人渡邊狂の名に托して著した『削かけの返事』の中で、「勘當とは、是は先師(支考)のわる口」とも記してゐるが、即ち、勘當說は自分の惡口であつたと自白してゐる言とも見て差支へないと思ふ。溫厚な芭蕉の性格から言つても、勘當說などは全然虛構の噂傳であるに過ぎない筈である。

但し、『青根が峯』に於ける、去來と許六との問答中に、去來は、

尾陽の荷兮一書をつくる。書中所々先師の句をあざけると聞けり。我いまだこの書を見ず。かの荷兮や先師世にます內ひたすら信仰す。一とせ故あつて、野水・凡兆と共に先師に遠ざかる。先師そのうらみをすてゝ、遷化の年東武よりみやこへ越給ふ道、名古屋にいたりてかれが柴扉をたゝきて一二日親話し給ふ。彼またこれをあがめ尊ぶ事舊日のごとし。翁遷化の時、東武の其角・嵐雪・桃隣等、東山に於て追悼の會を爲す。かれ蕉翁の門人の數に加はりて着座す。今書を作りて翁を嘲る。最も惛むべきの甚だしきもの也。かれが心操をかへりみるに、翁在す時は先師を賣りておのが浮世のたよりとし、先師歿し

たまひては、また先師を賣りて初心のともがらを、今は先師に勝りたりと欺き導かんためなるべし。其の難ずるところ、誠に笑ふ可きのみ。我これが爲に、其僻耳を切つて邪口を裂かんと欲す。

と激越な口吻を示してゐる。「我いまだこの書を見ず」といひ乍ら荷兮を難じてゐるのは不可解だが、この「一書」が何を指すものかも明瞭でない。芭蕉歿後の書であるやうにも思へるが、或は『橋守集』なのかも知れぬ。然し、こゝに「一とせ故あつて、野水・凡兆と共に先師に遠ざかる。先師そのうらみをすてゝ云々」といふ點は、『曠野後集』あたりを指すことかも知れぬ。一體、荷兮は『曠野後集』では、その序中にも「たゞいにしへこそこひしたはるれ」と記して、貞門古風の作者を尊重し過ぎ、師芭蕉の作は僅に二句を収めたに過ぎないので、同門の人々から、幾分批難される因を作つたものかと思はれる。（註。積翠園の【去來抄評】は、この章に關する記載を缺く。）

二五　下臥につかみわけはやいとさくら

先師路上にて語給ふ此頃其角か集に此句ありいかに思てか入集しけむと去來曰いとさくらの十分に咲たる形容よくいひおふせたるに侍らすや先師曰いひ課て何かある予こゝにおいて肝に銘する事ありはしめて發句になるへきとゝ成ましき事とを知れり

久①わけはや|分はや。　②語給ふ|語り曰。句あり|句有。思てか|思ひてか。入集しけむと|入集しけん。　③いとさくらの|いと櫻の。よくいひおふせたる|能謂おほせたる。　④いひ課て|謂應せて。何かある|何か有。予こゝに|此に。おいて|おゐて。銘する事あり|銘する事有。はしめて|初て。　⑤發句|ほ句。なるへきとゝ|成へき事と。事とを知れり|事をしれり。

帝①わけはや|分はや。いとさくら|糸さくら。　②路上にて|洛上にて。語給ふ|語て曰。思てか|思ひて。入集しけむと|入集しけん。　③いとさくらの|糸櫻の。よくいひおふせたる|よくいひ應せたる。　④いひ課て|いひ應せて。予こゝに|爰に。おいて|おゐて。はしめて|初て。　⑤なるへきとゝ|成へき事と。成ましき|なるましき。事とを知れり|事をしれり。

落①わけはや|分けはや。いとさくら|糸櫻。　②語給ふ|語て曰。思てか|思ひてか。入集しけむと|入集しけん。　③いとさくらの|糸櫻。咲たる|咲きたる。よくいひおふせたる|よく云課せたる。　④いひ課て|云課せて。予こゝに|予爰に。おいて|於て。銘する事あり|銘することあり。はしめて|初めて。　⑤なるへきとゝ|成るへき事と。成ましき|成るましき。事とを知れり|事を知れり。

青①いとさくら|いと櫻。此ノ句ノ頭ニ「(書)いつを昔」トアル。又、此ノ句ノ下ニ「巴風」トアル。　②路上にて|洛上にて。語給ふ|語て曰。此頃|この頃。思てか|おもひて。入集しけむと|入集しけん。　④いひ課て|いひおふせて。何かある|なにかある。予こゝに|爰に。銘する事あり|銘することあり。　⑤なるへきとゝ|成へき事と。成ましき|なるましき。事

とを知れり―事をしれり。

贄①いとさくら―糸櫻。此ノ句ノ頭ニ「(其)いつを昔」トアル。又、此ノ句ノ下ニ「巴風」トアル。②語給ふ―語て曰。句あり―句有。思てか―おもひて。入集しけむと―入集しけん。③いとさくらの―糸櫻を。④いひ課て―いひおふせて。何かある―なにかある。予こゝに―爰に。おいて―おひて。銘する事あり―銘するとあり。⑤なるへきとゝ―成へき事と。成ましき―なるましき。事とを知れり―事をしれり。

架②語給ふ―語り給ふ。思てか―思ひてか。③咲たる―咲きたる。④いひ課て―いひ課せて。

訓讀

下臥につかみわけばやいとざくら

先師、路上にて語り給ふ。此の頃其角が集に此の句あり。いかに思うてか入集しけむと。去來曰はく、いとざくらの十分に咲きたる形容、よくいひおほせたるに侍らずや。先師曰はく、いひ課せて何かある。予、こゝに於いて、肝に銘ずる事あり。はじめて、發句になるべきことと、成るまじき事とを知れり。

口譯

「下臥につかみわけばや絲櫻」――師翁のお供をして歩いて居ります時、師翁のお話に、「このごろ、其角の編んだ『いつを昔』に、この句が入つてゐますが、其角はこの句をどう思うて入れたのでせう。」とのことでございましたので、わたくしはそれにお答へして、「絲櫻が十分に咲いたすがたを、この句は、よく言ひつくしてあると思

ひます。そこを、其角も感心したものでございませう。」と、申しました。すると、師翁は一言ひつくしたればとて、それだけでよい句とは言へますまい。」と、仰せになりました。わたくしは、この時、この一語に、はつと心の中に深く感じたことがございました。そして、初めて、發句になることと、ならぬこととに、相異のあることを知つたのでございます。

語釋

①**下臥**　下陰に臥すこと。　①**絲櫻**　櫻の一種。『栞草』には「樹彼岸櫻と同じ。枝長く糸の如くにして下り垂る。花うゐはじ。彼岸ざくらより花稍おそし。」とあるが、植物學的に解釋すれば、イバラ科に屬する喬小木である。又謠曲『黒塚』には、「絲櫻色もさかりに咲く頃はくる人多き」等の用例も見えてゐる　②**路上**　路のほとり。　②**其角が集**　其角が編纂した書。此處では『いつを昔』を指す。　③**形容**　すがた。有樣。形狀。　③**いひおほす**　言課す。はつきり言ひ盡して餘す所がない。

參考

この「下臥に」の句の出典は『いつを昔』、なほ『俳諧錦繡緞』等にも見えてゐる。但し、『いつを昔』『俳諧錦繡緞』には、これを立句として巴風・其角の兩吟（初裏以下は其角の獨吟）の連句一卷が收められてある。その連句は次の如くである。

兩吟おもひたちける人の、いとまなくてやみにけれ

ば、心ざしゆるしがたくて、獨酌の興になしぬ。

下臥につかみ分ばや糸櫻　　巴風
　犬もこてふも一日の友　　其角
橋造る小屋のかまへの長閑にて　　同
　藪のこなたへ廻る駕籠かき　　風
菊は黄に只しめりたる月の色　　同
　鼻かうだ手を亦秋の水　　角
小坊主に名を案ずればきり〴〵す
　火打あつめて紙子うれしく
いざ嵯峨へざうり一足もらひける
　何を目あてに此比の禪
なぐさみに喧嘩をするか渡し守
　杜秤(ちき)にかゝりて重き身をする
衰へも闘寺ゆるす年なれや
　安養界を斷ふるしむ
板疊階子(はしご)の下のすゞしきに

蚊やり火たてゝ姑いぶせき
泣程にからき花さくたうがらし
月の露なる白黒の胡麻
吹からに一遍どをり秋の風
物すさまじき峯入の供
漸と米とゝのゆるくれの鐘
又たべ酔て寐忙(ほれ)たる顔
ほとゝぎす點せがまるゝ片心
鐺もたせたる今のまろうど
粧はずに娘が常をみせにけり
うつり香せむる袖の蛇
惠心佛法の力を賴む哉
道なる屍(かばね)ありがたやそも
こゑこしの越の白山山いくつ
物あきなふも水からの聲

なほ、この「下臥に」の句に就いて『蕉門俳諧語錄』には、

下臥につりわけ見ばや糸ざくら

先師語曰、この頃其角が集に此句有。いかに思ひて入集しけん。予曰、糸櫻の十分に咲たる形容、よくいひおほせたるに侍らずや。先師曰、云おふせて何か有。爰に於て肝に銘ずる事有。始て發句に成べき事と成間敷をしれり。

と見えてゐる。

こゝに、芭蕉の評言として、「いひおほせて何かある云々」とあるが、これは、前述の「蘿の葉の」の章（二四）に「發句はかくのごとく、くま／＼まで言ひつくすものにあらず云々」との評言と同様に、發句の餘情に關する議論である。（註。積翠園の「去來抄評」はこの章に關する記載を缺く。）

六

手をはなつ中に落けり朧月　去來 ①
魯町に別るゝ時の句也先師曰此句惡しといふにはあらす功者にてた ②
ゝいひまきらかしたるなり去來曰いかさまにさしてなき事を句上に ③
てあやつりたる所ありしかれともいまた十分に解せす予か心中に一 ④
物侍れとも句上にあらはれすと見ゆいはゆる是は意到句不到也 ⑤

【久】②別るゝ時の句也—別るゝ句也。惡しといふには—惡きといふには。③いひまきらかしたるなり—謂まきらされたる也。いかさまに—いか樣に。④所あり—處有。しかれとも—しかれと。心中に—心中には。⑤侍れとも—侍れと。いはゆる是は—是。

【帝】①はなつ—はなす。②別るゝ時の句也—別るゝ句也。惡しといふには—あしきといふには。たゝ—只。③いひまきらかしたるなり—いひまきらされたる也。句上にて—句の上にて。④しかれとも—然れと。心中に—心中には。⑤侍れとも—侍れと。句上に—句の上に。あらはれす—顯れす。いはゆる是は—いはゆる。

【落】①はなつ—放す。落けり—落ちけり。②別るゝ時の句也—別るゝ時の句なり。惡しといふには—惡きと云ふ句には。功者—巧者。たゝ—只。③いひまきらかしたるなり—云紛らかしたるなり。いかさまに—いか樣にも。④しかれとも—然れとも。いまた—未た。心中に—心中には。⑤侍れとも—侍れと。あらはれす—顯れす。いはゆる是は—所謂。意到句不到也—意至て句不$\lrcorner$至なり。

【靑】①はなつ—はなす。此ノ句ノ頭ニ「(要)」トアル。②別るゝ時の句也—別るゝ句なり。惡しといふには—あしきといふには。たゝ—只。③いひまきらかしたるなり—言まきらされたる也。いかさまに—いか樣。句上にて—句の上にて。④しかれとも—然れとも。心中に—心中には。⑤侍れとも—侍れと。句上に—句のうへには。あらはれす—顯はれす。いはゆる是は—いはゆる。意到句不到也—意至句不至なり。

【貫】①はなつ—はなす。此ノ句ノ頭ニ「(要)」トアル。②別るゝ時の句也—別るゝ句なり。先師曰此句惡しといふにはあらす功

者にてたゝいひまきらかしたるなり去來曰―先師曰。　③いかさまに―いか樣。句上にて―句の上にて。　④しかれとも―然れとも。心中に―心中には。　⑤侍れとも―侍れと。句上に―句のうへには。あらはれす―顯れす。いはゆる是は―いはゆる。意到句不到也―意至句不至なり。

〔異〕異同ナシ。

〔訓讀〕

手をはなつ中に落ちけり朧月　去來

魯町に別るゝ時の句也。先師曰はく、此の句、惡しといふにはあらず。巧者にて、たゞ、いひまぎらかしたるなり。去來曰はく、いかさまに、さしてなき事を、句上にてあやつりたる所あり。しかれども、いまだ十分に解せず。予心中に一物侍れども、句上にあらはれずと見ゆ。いはゆる是は、意到りて句到らざる也。

〔口譯〕

「手をはなつ中に落ちけり朧月　去來」――この句は、わたくしが、弟の魯町と別れる時に作りました句でございます。ところが、この句を御覽になつて、師翁は「この句は特に惡いといふのではありません。けれども、お前の叙法のうまさで、たゞ、言ひくるめてしまつたところがあります。」と、仰せになりました。わたくしは、それにお答へして、次のやうに申しました。「なるほど、この句には、それほどでもない事を、一句の上に言ひくる

めてゐる所がございます。けれども、わたくしは、これでもまだ、十分に言ひつくすことが出來てゐないと思ひます。わたくしの心の中には、こんなことを、言つてみたいものだといふ、一つの考へがあつたのでしたが、それを句の上にうまく表現することが、出來なかつたのでございます。この句は、いはば『意到つて句到らず』とでも申しませうか、心持だけが先走つてゐて、それだけのことを、句には表現することが出來なかつたといふ一例でございます。」

語釋

②**魯町**　長崎の人である。向井氏、名は元成、諱は兼丸、字は叔明、又鳳梧と號した。元升の第三子で、去來の弟にあたり、牡年・千子の兄である。延寶七年、父兄の後を襲うて長崎の聖堂祭酒となり、又掌書司監を勤めた。貞享二年、唐船が邪教の書を舶載したのを檢して、これを押收したる功により官俸を受けた。享保十二年二月九日歿す、年七十二。墓は同地海雲山晧臺寺にある。『猿蓑』には「一夏入る山さばかりや旅ねずき」の一句が入集してゐる。　②**功者**　事に巧みな人、また巧みなこと。上手。　③**いひまぎらかす**　まぎらかすやうに言ふ。誤魔化し言ふ。言ひくるめる。　③**いかさまに**　如何にも。誠に。

④**あやつる**　絲をつけ、陰から引いて物を動かす。轉じて、陰にゐて物を樣々に働かせること。　⑤**意到句不到**　意到りて句到らず。所謂心あまりて言葉足らずといふこと。即ち、句に盛らうとする內容が表現不足のため、表面に現はれないこと。後出の「心餘りて詞たらず」(三三)とほゞ同樣の意である。

参考

この「手をはなつ」の句の出典は『泊船集』、なほ『去來發句集』等にも見えてゐる。但し、『泊船集』には、この句に「弟魯町が故郷へかへるを送りて」と前書があり、『去來發句集』には、「弟魯町故郷へ歸りけるに」と前書がある。

骨肉の弟が、長旅に出かけてゆくのを送つての感慨を、一句としたものであるだけに、去來自身が「意到句不到也」とは言うてゐるが、何となく、普通の餞別の吟とは相違してゐることが受取れる。なほ『俳諧寂栞』の「餞別」の條下には、

膳所におもむく人を送る

獺の祭見て來よ瀬田のおく

翁の旅立給ふを送る　二句

箱根山時雨なき日を願ひけり　由之

ころしもや大井の嵐佐屋の霜　蚊足

友なる孤屋をおくる

雲霞どこまで行も同じ事　野坡

髮そりにとてまかる友を送る

罔兩たぶさ見送る朝月夜　卓袋

自他・親疎の辨へをおもふべし。

とあり、續いて「留別」の條下には、

川崎にて人々に分るゝに

麥の穗をちからにつかむ別かな　　巴　風

旅だつ曉

よく咲て人に見られよ宿の菊　　巴　風

道にて翁に別れ奉るとて

行〳〵てたふれ臥とも萩の露（イ原）　　曾　良

九月朔日旅だちけるに

菊の日と月見いづこの泊せん　　枳　風

越より歸るに

おもふさまふるまはれけり越の雪　　凉　菟

自他・親疎の辨へをおもふべし。

と說いてある。

因みに『炭俵』には、

洛よりの文のはしに

臘月一足づゝもわかれかな　　去　來

の句が見えてゐるのであるが、この句も「手をはなつ」の句と同じく、朧月の下に別離を惜む情を敍したものであつて、その點では共通してゐる。而して、句として比較すれば、「手をはなつ」の句が「意到句不到」に反し、「朧月一足づゝも」の方は、印象も明瞭であり、句としては、より勝れてゐると思はれる。ところで、兩句のそれぞれの出典たる『泊船集』（元祿十一年刊）と『炭俵』（元祿七年刊）との刊行年代の關係から見るならば、當然「手をはなつ」の句の方が後年の作と認めなければならぬのであるけれども、この兩句を比較したのみでの直觀で論ずれば、「手をはなつ」の句の方が、初案の作のやうに思はれてならない。或は、やがて「手をはなつ」の句の出典が『炭俵』よりも遡り得るものに發見される機會があれば、私の直觀說も裏書される結果となるのであるが、今の所では單にかやうな想像を爲し得るに過ぎないのは殘念なことである。

積翠園の『去來抄評』には、

〇手をはなす云々。

旅を送る句ならんに、とりかはしたる手をわかれに放たりと見るべきや。

と見えてゐる。

二七　泥龜や苗代水の畦うつり　史邦　①

猿簑の撰に予誤て畦つたひと書入たり先師曰畦うつりと傳ひと形容　②

風流各別なり殊に畦うつりして蛙啼なりともよめり肝要の氣色をあ ③
やまる事筆の罪のみにあらす句を聞事のおろそかなる故なりとてき ④
けんあしかりけり ⑤

校異

久①泥龜―泥かめ。 ②猿簑の撰―さるみの撰。書入たり―書。 ③各別なり―各別也。蛙啼なり―蛙なく也。 ④おろそかなる故なりとて―おろそかに侍るゆへ也と。きけん―機嫌。

帝①泥龜―泥かめ。 ②猿簑の撰―猿簑撰。書入たり―書。 ③各別なり―各別也。あやまる事―誤る事。 ④聞事の―聞事。おろそかなる故なりとて―おろそかに侍るゆへ也と。きけん―機嫌。

落②猿簑の撰―猿簑撰。予誤て―誤つて。書入たり―書入れたり。畦うつり―畦移り。傳ひと―傳ひとは。 ③畦うつりして―畦遷りして。蛙啼なり―蛙鳴くなり。よめり―詠めり。あやまる事―誤りたること。 ④聞事の―聞くこと。おろそかなる故なりとて―疎かに侍る故なりとて。きけん―機嫌。 ⑤あしかりけり―悪しかりけり。

青①此ノ句ノ頭ニ「芭」トアル。 ②猿簑の撰―さるみの撰。予誤て―予あやまつて。書入たり―書。 ③各別なり―格別也。蛙啼なり―蛙鳴なり。あやまる事―誤る事。 ④聞事の―聞事。おろそかなる故なりとて―おろそかに侍る故なりと。きけん―機嫌。

贄①此ノ句ノ頭ニ「芭」トアル。 ②猿簑の撰―猿簑撰。予誤て―予あやまつて。畦つたひと―畦つたりと(ママ)。書入たり―書。

③各別なり—格別なり。畦うつりして—畦移りして。蛙啼なり—蛙鳴也　あやまる事—誤る事。④あらす—あらぬ。おろそかなる故なりとて—おろそかに侍る故なりと。きけん—機嫌。

哭②書入たり—書入れたり。③蛙啼なり—蛙啼くなり。④聞事の—聞く事の。

訓讀

泥龜や苗代水の畦うつり　史邦

猿蓑の撰に、予、誤つて畦づたひと書入れたり。先師曰はく、畦うつりと、傳ひと、形容・風流、各々別なり。殊に、畦うつりして蛙啼くなり、ともよめり。肝要の氣色をあやまる事、筆の罪のみにあらず。句を聞く事のおろそかなる故なりとて、きげんあしかりけり。

口譯

「泥龜や苗代水の畦うつり　史邦」――『猿蓑』の撰をいたしてをります時、わたくしは、この句を間違つて、下の五文字を「畦づたひ」と、原稿の中に書入れました。ところが、それを御覽になつて、師翁は、「この句の下の五文字を、お前は『畦づたひ』と書きましたが、『畦うつり』と『畦づたひ』とでは、その形容といひ、風流といひ、共に違つてゐます。殊に、昔の歌にも、『畦うつりして蛙なくなり』といふ叙法もあります。このやうな大切な景色を間違ふといふのは、たゞ一寸した書き間違ひとだけでは濟まされません。大體、お前が句をいゝかげん

に聞いてゐたから、こんなことになるのです。」と、仰せになりまして、御機嫌がお悪うございました。

語釋

①**泥龜**　すつぽんの別名。又、どんがめ、どうがめ、とちがめ、かはがめ等ともいふ。　①**苗代水**　苗代へそゝぐ水。苗代は稻の種を播いて、苗を育て作る田をいふ。春の季題。　①**畦うつり**　一つの畦から他の畦へ移つて行くこと。　①**史邦**　京都の人である。根津氏、宿之助と稱し、知雨亭と號した。仙洞御所に仕へたが、後浪人して江戸に下つた。「帷子は日々にすさまじ鵙の聲　史邦」の句で、芭蕉及び岱水との三吟がある。芭蕉の二見文臺及び『嵯峨日記』の遺稿を傳來した。『猿蓑逆志抄』にはフミクニと訓んでゐるが、通説はシハウである。一説には、名古屋の醫師、中村春庵とも傳へてゐるが、別人であらう。歿年は明かでない。撰著に『芭蕉庵小文庫』・『俳諧猿舞師』がある。　②**畦づたひ**　畦を傳つて進んで行くこと。　③**風流**　風雅。此處では句の情趣といふ位の意。　④**肝要**　必ず要用なこと。必要。　④**筆の罪**　書き間違ひの罪。　④**おろそかに**　輕々しく。ゆるがせに。

參考

この「泥龜や」の句の出典は『猿蓑』である。但し、『猿蓑』には、

泥　龜　や　苗　代　水　の　畦　づ　た　ひ　　史　邦

と、芭蕉が反對したといふ形のまゝで見えてゐる。

この「泥龜や」の句に就いて、『花實集』には、

去來曰、

泥龜や苗代水の畦うつり　史邦

此句、猿蓑撰の時予誤て畦傳ひと書。先師曰、畦うつりとつたひと、形容・風流格別なり。とに、畦うつりして蛙啼也、とも詠り。肝要の氣色をあやまる事、筆の罪のみにあらず。句を聞事おろそかに侍る故也と、機嫌惡かりけり。

とある。「畦づたひ」と「畦うつり」との相違だけが、かほどまでに問題にされてゐる點、その態度の嚴重さは寧ろ驚嘆すべきものがある。『去來抄』の「修行敎」の中に、

師のいはく、下句・上句、ともに二字三字の間にあり。またその二三字に甚ぬかり落る句あり。骨折べき所也。

とあるのも、このことを指すのであらう。

積翠園の『去來抄評』には、

○泥龜や云々。

拾玉集に、鳴子引賤が山田のむら雀あぜづたひして立さはぐ也。

と見えてゐる。この歌は慈鎭の『拾玉集』の「堀川院題百首和歌」の內に見える一首で、積翠園は「賤が山田」と傳へてゐるが、實際は「賤が門田」となつてゐる。或は、この歌を「畦うつりして蛙啼なり」の證歌と見做すべきかも知れないが、この歌では蛙が雀に、又肝要の「畦うつり」が「畦づたひ」になつてゐるので、芭蕉の言

葉と照合せぬやうに思はれる。「畦うつりして蛙啼なり」と用ゐた歌は、未だ矚目しないが、唯『風雅和歌集』に、

建保四年百首の御歌に

せきかくる小田のなはしろ水澄てあぜこす浪に蛙鳴く也　後鳥羽院御製

と見えてゐるのが、幾分關聯がありはしないかと推察され、又『拾遺愚草』に、

あぜ傳ひもりくる水も凍りゐて刈田寂しき冬の山陰　民部卿定家

とあるのも、考へ合すべきであらうかと思はれる。

六　したらくに寐れは涼しき夕かな　宗次 ①

さるみの撰の時今一句の入集を願ひて數句吟し侍れと取へき句なし ②
一夕先師の傍に侍りけるにいさくつろき給へ我も臥しなんとおほせ ③
られけれは御ゆるしゆへしたらくに居れは涼しく侍ると申けれは先 ④
師曰是こそ發句なれとて今の句に作りて入集せさせ給けり ⑤

〔校　異〕

次 ①寐れは―寢れは。夕かな―夕哉。宗次―此ノ二字ナシ。　②今一句―一句。侍れと―來れと。取へき句なし―取へきな

し。　③先師の傍に侍りけるにいさ—先師のいさ。臥しなん—臥なん。おほせられけれは—の給にけれは〇（ま、）も。　④申けれは—申。　⑤是こそ—是。發句なれとて—ほ句也と。作りて—つくりて。入集せさせ給けり—入集せよとの玉ひけり。

宗①涼しき—涼敷。夕かな—夕ア哉。宗次—此ノ二字ナシ。　②さるみの撰の時—猿簑撰の時に。今一句—一句。侍れと—来れと。取へき句なし—とるへきなし。　③先師の傍に侍りけるにいさ—先師いさ。臥しなん—臥なん。おほせられけれは—宣ふにしも。　④申けれは—申。　⑤是こそ—是。發句なれとて—發句也。入集せさせ給けり—入集せよと宣ひけり。

落①寐れは—ねれは。　②さるみの撰の時—猿簑集の時。今一句—宗次一句。侍れと—来れと。取へき句なし—取るへき句なし。　③先師の傍に侍りけるにいさ—先師のいさ。くつろき給へ—寛ろき給へ。臥しなん—臥なん。おほせられけれは—宣ふに。　④御ゆるしゅへ—宗次御免しゅへ。したらくに—し、た、ら、く、に。申けれは—申す。　⑤是こそ—是則ち。發句なれとて—發句なりとて。入集せさせ給けり—入集せよと宣ひけり。

青①夕かな—夕部かな。此ノ句ノ頭ニ「(民)」トアル。　②今一句—一句。願ひて—ねかひて。侍れと—来れと。取へき句なし—とるへきなし。　③先師の傍に侍りけるにいさ—先師のいさ。くつろき給へ—くつろき玉へ。おほせられけれは—の玉ふ折しも。　④居れは—いれは。申けれは—申。　⑤先師曰—先師。是こそ—これ。發句なれとて—發句なりと。入集せさせ給けり—入集せよと宣ひけり。

贅①此ノ句ノ頭ニ「(民)」トアル。　②さるみの撰の時—猿簑撰のとき。今一句—一句。願ひて—ねかひて。侍れと—来れと。取へき句なし—とるへきなし。　③先師の傍に侍りけるにいさ—先師のいさ。おほせられけれは—宣ふり（ま、）しも。　④申けれは—申。　⑤先師曰—先師。是こそ—是。發句なれとて—發句なりと。入集せさせ給けり—入集せよと宣ひ皃し

架②取へき句なし—取るへき句なし。　④申けれは—申しけれは。　⑤入集せさせ給けり—入集せさせ給ふとなり。

訓讀

じだらくに寐れば涼しき夕かな　宗次

さるみの撰の時、今一句の入集を願ひて、數句吟じ侍れど、取るべき句なし。一夕、先師の傍に侍りけるに、いざくつろぎ給へ、我も臥しなん、とおほせられければ、御ゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍る、と申しければ、先師曰はく、是こそ發句なれとて、今の句に作りて入集させ給ひけり。

口譯

「じだらくに寐れば涼しき夕かな　宗次」――『猿蓑』の撰をいたして居りました頃、宗次は、たゞ一句だけでもその中に加へて頂きたいとて、數句詠みましたが、『猿蓑』の中に入れるほどの句はありませんでした。ある日の夕方のことでした。この宗次が、師翁のおそばに坐つてゐましたとき、師翁は宗次に向つて、「さあ膝をお樂になさい。わたくしも、少し横になりませう。」と、仰せられましたので、宗次は「ではごめん下さい。いやもう、じだらくに居れば、涼しうございます。」と、申しましたところ、師翁は、「じだらくに居れば涼しい――ですか。なるほど、それこそ發句になりますよ。」と、仰せになりまして、その言葉にもとづいて、この「じだらくに居れば涼しき夕かな」といふ句をお作りになり、宗次の名で『猿蓑』の中にお加へになつたのでございます。

語釋

①**じだらく**　しだらないこと。だらしないこと。　①**宗次**　傳不詳。『蕉門諸生全傳』などにも見えないが、『猿蓑』時代に芭蕉の直指を受けた門人の一人であらう。　②**取るべき句**　採用することの出來る句。　③**くつろぐ**　手足を投出したり、安座をかいたりして、ゆつたりと座すること。

［參　考］

この「じだらくに」の句の出典は『猿蓑』である。（註【去來發句集】に、この句を收めて、去來の作と認めてあるのは誤である。）

さて、この「じだらくに」の句に就いては、『はいかい袋』に、

周竹云、ほ句に聞へがたき有、其心をとふべし。句のおもてより心のよき趣向有もの也。ばせを翁の門人に、初心の人あり。夕すゞみの句を、いろ〳〵にあんじたれどよからず。翁曰、いざまづくつろぎ玉へ、われも臥なむと宣ふ。御ゆるし可レ被レ下候。じだらくにおればすゞしく候と。翁の云、今の詞、即ほくなりと。じだらくに居ればすゞしき夕哉。宗次ト有。

とある。この事は結局、巧を弄することの反つて害あることを教へたもので、『去來抄』の「同門評」の一節に、

「外のわる巧をしられぬ故、おのづからかゝる句も出來るめり、云々」と野明を賞してゐることと同じである。

然し、常に會話のまゝの方が却つてよい句になるといふ譯ではなく、また賤しい言葉を句の中に用ゐるのを勸めてゐるのでもない。『葛の松原』に、

古人の語意を用る事、一字半言もたやすからず。いかにおもしろきとて、鄙いやしく妄らくだ〳〵敷いひ出たらむは、貴人・公子に寵せらるゝ辨利のものゝたぐゐなるべし。

とあるのも考へ合すべきである。

積翠園の『去來抄評』には、

○じだらくに云々。

平生今日の上に句作ある事、常に心懸べき。

と見えてゐる。

二九　霊棚の奥なつかしや親の顔　去來

はしめは面影のおほろにゆかし魂祭といふ句なり此時添書に祭時は神いますか如しとやらむ霊棚の奥なつかしく覺侍るよしを申贈る先師返事に霊祭尤の意味なから此分にては古ひに落申へくゆ註に霊棚の奥なつかしやと侍るを何とて句になさゝるやとおとろかし給ひけり

久①靈棚—玉棚。奥—おく。親の顔—おやのかほ。　②はしめは—初は。魂祭といふ句なり—玉祭と云句也。此時—是時。③神いますか如し—神いますの如し。やらむ—やらん。靈棚—玉棚。よしを申贈る—由を申。　④先師返事に—先師いか文曰。靈祭—玉まつり。古ひ—古び。落申へく—落へく。靈棚—玉たな。　⑤侍るを—侍るは。なさゝるやとおとろかし給ひけり—なり侍らん下文字けやけく置てしかるへく侍らん 是則俤のまとへし成へき 也親のかほと置は句成へしと也そのおもふ處和かなれは下をけやけく 直に句となる事をしらすふかく おもひしつめ却て或は心おもく詞さかり或は心たしかならす是等は初心の輩の覺悟あるへき事也。

帝①靈棚—玉棚。奥—おく。去來—此ノ二字ナシ。　②はしめは—初は。魂祭といふ句なり—玉祭りといふ句也。此時—この時は。祭時は—祭る時に。　③やらむ—やらん。靈棚—玉棚。覺侍る—覺へ侍る。よしを申贈る—よしを申。　④先師返事に—先師伊賀の文に曰。靈祭—玉祭り。註に—程に。靈棚—玉棚。　⑤なつかしやと—懐しやと。侍るを—侍るは。なさゝるやとおとろかし給ひけり—成り侍らん中文字和らかなれは下をけやけく 親の顔と置は句に成へしとなり其おもふ所直に句となる事をしらす深くおもひしつめ 却而心重く詞しふり或は 心慥ならす是等は初心輩の覺悟あるへき事也けやけく置てしかるへく侍らん是則俤のまみへし成へき也。

隣①靈棚—魂棚。親の顔—親の貌。　②はしめは—初は。面影のおほろにゆかし—俤の朧に床し。魂祭といふ句なり—魂祭と云句なり。祭時は—祭る時は。　③神います—神在す。やらむ—やらん。靈棚—魂祭。覺侍る—覺え侍る。よしを申贈る—由を申す。　④先師返事に—先師伊賀よりの文に曰。靈祭—魂祭。此分—此句。古ひ—古み。落申へく—落ち可申。註に—程に。

靈棚ー魂祭。　⑤なつかしやとーなつかしと。なさゝるやとおとろかし給ひけりーなし侍らさらん下の五文字和らかなれは下をけやけく親の貌と置かは句なるへしとなり其思ふ所直に句に成る事を知らす深く思沈みて却て心重く詞澁りて心愷ならす是等は初心の輩の覺悟有へき事なり。

青①靈棚ー玉棚。奥ーおく。此ノ句ノ頭ニ「(先)」トアル。　②面影のおほろにゆかしー俤のおほろに床し。魂祭といふ句なりー玉祭といふ句なり。祭時はー祭る時は。　③やらむーやらん。靈棚ー玉棚。覺侍るー侍る。よしを申贈るーよしを申。　④先師返事にー先師伊賀の文に曰。靈祭ー玉祭。古ひー古み。落申へくー落可申。註にー間[イ稿ニ]。靈棚ー玉棚。　⑤何とてーなにとて。なさゝるやとおとろかし給ひけりーなさゝるやとおとろかし給ひけり上五文字和らかなれは下をけやけく親の顔と置かは句になるへしとなり其思ふ所直に句と成事をしらす深くおもひ沈みかへつて心おもく詞しふり或は心たしかならす是等は初心の輩の覺悟有へきことなりけやけく置てしかるへく侍らんこれ則俤のま見えし成へき也。

贄①靈棚ー玉棚。奥ーおく。此ノ句ノ頭ニ「(先)」トアル。　②はしめはー初は。面影のおほろにゆかしー俤のおほろに床し。魂祭といふ句なりー玉祭といふ句なり。祭時はー祭る時は。　③神いますか如しー神いますかとし。やらむーやらん。靈棚ー玉棚。覺侍るー侍る。よしを申贈るーよしを申。　④先師返事にー先師伊賀の文に曰。靈祭尤の意味なからー玉祭は意味なから。古ひー古み。註にー間。靈棚ー玉棚。　⑤何とてーなにとて。なさゝるやとおとろかし給ひけりーなさゝるやとおとろかし給ひけり上五文字和らかなれは下をけやけく親の顔と置かは句になるへしと也其おもふ所直に句と成事をしらす深くおもひ沈みかへつて心おもく詞しふり或は心たしかならす是等は初心の輩の覺悟有へき事なりけやけく置てしかるへく侍らん是則俤のまとひし成へきや。

架②はしめはー初は。　③覺侍るー覺え侍る。

訓讀

靈棚の奥なつかしや親の顔　去來

はじめは、面影のおぼろにゆかし魂祭、といふ句なり。此の時、添書に、祭る時は神いますが如しとやらむ。靈棚の奥なつかしく覺え侍るよしを申し贈る。先師返事に、靈祭、尤もの意味ながら、此の分にては、古びに落申すべく候。註に、靈棚の奥なつかしや、とはべるを、何とて句になさざるや、とおどろかし給ひけり。

口譯

「靈棚の奥なつかしや親の顔　去來」――このわたくしの句は、初めは「面影のおぼろにゆかし魂祭」といふ句でした。この句に就いて、師翁の御評を頂きたいと思ひまして、師翁の御手許まで書送りましたとき、この句に添へて、『神を祭れば神在すが如し』と『論語』にもございますが、全く、靈棚の奥なつかしく覺えたことでございます。」といふことを、書いて差上げました。すると、師翁からの御返事には、「『面影の』といふ句は、魂祭の時の實感を一句としたものと見え、寔に尤もなわけでありますが、このまゝでは、昔の人が言ひふるしたものと、あまり替りがありません。ところで、お前は、この句の添書に、『靈棚の奥なつかしや』と記してゐますが、これは實にうまい言葉ではありませんか。何故、これを句にしなかつたのですか。」と、言うて下さいました。

語釋

①**靈棚** 聖靈棚(しやうりやうだな)に同じ。盂蘭盆の時飲食果物を供へて先祖の精靈をまつる飾り棚。秋の季語。 ②**面影** おもざし。顏つき。 ②**おぼろに** ぼんやりと。 ②**ゆかし** 奥ゆかしいこと。何となくしたはしいこと。 ②**魂祭** 盂蘭盆會。陰曆七月十四日から十六日までの間、佛前に棚を設け、種々の供物を供へて祖先の靈を祀ること。秋の季題。 ②**添書** 句に添へて書加へた文。前書ではない。 ④**古び** 古色。古風な趣味色彩。 ④**註** 此處では添書(そへがき)をいふ。

参考

この「靈棚の」の句の出典は『韻塞』、なほ『去來發句集』等にも見えてゐる。但し、『韻塞』には、「追悼」と前書があり、「靈棚の」は「玉棚の」とある。

この「靈棚の」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば、『花實集』には、

去來曰、

魂棚のおくなつかしき親の顏

此句始は、面影のおぼろにゆかし玉祭、といふ句なり。此時添書に、祭る時は神いますがごとしとやらん、靈棚の奥なつかしく覺え侍るよしを申す。先師伊賀の文に曰、玉祭尤の意味ながら、此分にては古びに落申べく候ほどに、玉棚の懷しやと侍るは、何とて句になり侍らん。下五文字和らかなれば、下をけやけく親の貞と置ば句に成べしと也。其思ふ所、直に句となる事をしらず、深くおもひしづみ、却而こゝろ重く、詞しぶり、或は心たしかならず。是等は初心の輩の覺悟あるべき事なり。

『蕉門俳諧語録』には、

魂棚の奥なつかしや親の顔

はじめは、俤の朧に床し魂祭、といふ句なり。此時の添書に、祭る時は神いますが如しとやらん、魂棚の奥なつかしと覺え侍るよしを申。先師伊賀の文に、魂祭尤の意味ながら、この分にては古びに落申べく候程に、玉棚の懐しやと侍るは、何とて句に成侍らん。上の文字やはらかなれば、下をけやけく、親の顏と置ば句に成べしとなり。其思ふ所直に句となる事を知らず、深く思ひ沈みて、かへりて心重く、詞しぶり、或は心たしかならず。是らは初心の輩覺悟有べき事なり。けやけく置く、然べし。これ卽ち俤のみえしなるべし。

また『はいかい袋』には、

去來の、おもかげの朧にゆかしたままつり、翁其心をとふ。答に祭るときは神在すがごとしとやらん、玉棚のおくなつかしく覺侍る、と申。翁云、しからば其心すぐによろし。玉棚のおくなつかしや親のかほ、と直し、七文字なつかしや、として、下をけやけく、親のかほ、としてよろしかるべしと。都て其おもふ所すぐに句になる處をしらず。ふかくおもひしづみ、かへつて心重く、詞しぶる也と、敎玉ひしと承る。世上大かたかくのごとし。早く心をうちひらき、師に教をうけるがよしと申されし。

との記載がある。

去來の添書に「祭る時は云々」とあるのは、蓋し、『論語』八佾第三に、

祭如在。祭神如神在。子曰、吾不與祭、如不祭。

とあるのを引用したものであらう。此の『論語』の意は、孔子が祭祀に誠敬を盡されたことを記したのである。但し、この『論語』の言葉を、そのまゝ句にしたと思はれるものには、却つて『俳諧古選』に、

まざ〳〵と在すが如し魂まつり　季吟

の一句があるが、去來は或はこの句の影響で、「祭る時は神いますが如しとやらん」と記したのかも知れない。

次に、この章で問題になつてゐるのは、句の古びといふことである。『去來抄』の「修行教」の中にも、

去來曰、風は千變萬化すといへども、句體、新しく・清く・輕く・慥かなる・正く・厚く・閑なる・和なる・剛なる・解たる・なつかしく・速なる、如此はよし。鈍く・濁れる・弱く・重く・薄く・したるく・澁たる・堅く・騷しく・古き、かくの如きは惡し。但し、堅きと鈍なる句には、善惡あるべし。

との一章があるが、古びに落るといふことは、句作上最も誡めなければならぬことであつた。即ち、古人の糟粕を嘗める如き内容表現は、極力これを避けて、新しみ、即ち、清新なる内容表現を要求してゐるのである。『宇陀法師』には、このことに關して、次の如く記されてある。

あたらしみと云事、末々の門人迄きゝ習ひて申侍れど、慥に知たる人なし。新敷と云は趣向に有。あたらしみと云は句作りに有。毎度あたらしき趣向は稀なる故、句作りにてあたらしみを付て云事也。大祕事なれど、末々の門人うろたへ侍る故に出し侍る。惣別流義と云も皆句作りの事也。定家の流・西行の流、皆てには句作のかはり也。心は梅に鶯、古今かはらず。たとへば精進と云事新敷いはゞ、

精進日はまづふるいから上るなり

精進日も添てむすこに代を渡し

など云は、新しき趣向也。あたらしみと云は、

祖父祖母の精進は間にまびかれて

と云をいふべし。

とあり、又『青根が峯』には、

世上に新しきものと、今めかしき物と取違へ侍る。あたらしきものは、成程昔より有來て、人々の見殘じとり殘したる物也。晋子が衣がへに、

越後屋にきぬさく音や衣更

といふ句あり。もちろん、句作り等はよくとりはやしたりといへども、此句晋子などせぬ句也。かやうの今めかしきものを取出し、發句にする事、以の外のいたり也。輿に乘じていひ捨の卷などにはさも有べし。晋子は江戸の宗匠、蕉門の高弟なり。末々の弟子この句を見て、あたらしきといふは、か樣の事とあやまり、證句にせん事うたがひ有べからず。當歳旦にも、二朱判五わりましなどいふ事見えたり、此まどひ也。ひら句は輿に乘じて、予もある時、

海手より夜はほんのりと明かゝり

越後屋見せる松坂の馬士

といふ句也。江戸の越後屋、京の越後屋おかしからず。松坂の越後屋とこそ、はいかいとは申もの也。

初 雪 や い つ 大 佛 の 柱 だ て

翁、これ大佛殿の建立は今めかしきやうなれども、斯ふるき事萬里の相違あり。はつ雪に扨々よきとりあわせもの、初字のつよみ、名人のこつずいなり。

とある。なほ『續五論』の中から「新古論」を次に引用しておく。

俳諧に新古あり。古は守武・宗鑑より貞徳・貞室のともがらにいたる。その後は難波の梅花翁ありて、しばらく胸次の理屈をはなれたるに似たれど、しかも言語の實なし。先師、よのつね俳諧に古人なしとなげき申されしは、むかしの俳諧に誰を師としまなふべき風流なしとおもへるなるべし。詩は杜甫・李白が腸をさぐりて、東坡・山谷が風騷をまなび、歌は人丸・赤人のこゝろをつたへて、定家・貫之の風雅をしたふ。宗祇・宗長は連歌にまことあるやつれ人とこそきくなれ。その詩哥・連俳に風情・風姿のふたつあり。是は華實のふたつに似て、いさゝかたがひもあるべし。是を世上の人にたとはゞ、辨舌口才の人赤裸にて玄關にかしこまりたらんは、なにの使者がつとまり侍らん。綾羅錦繡を身にまとひたる人の耳うとく舌みじかきは、風姿ありて風情なきたとへなるべし。さればいにしの俳諧は風情ありて風姿なし。それも風情のみならば慈鎭・西行の歌のまことにもかなひ侍らんに、風情わづかに動きぬれば理となり、その理きはまりて後を屈といふ。たゞ風情變化の理屈のみありて、をのづから風情の實うすく、風姿はきはめてその論なし。ある人、我も古風の俳諧は名人たるに、今は得せずなどいへるが、い

にしへの雜談俚語をまなびて、いかで詩哥の本情にいたらん。新古のさかひをしらぬ人のいひなるべし。されば、古今集に俳諧の名は現れたれど、萬葉の時已にこの躰あり。然れども、風情はたゞ風情をつくし、風姿はたゞ風姿をつくす。姿情たま〳〵あひあへるものも、しゐて姿情を調へたるにはあらず。是は古代の人のありさまなればならし。詩歌・連俳にかくの如き變化あり。その變化は誰がなせるとにはあらねど、春の花と咲、秋の木葉とおつるものゝとゞむまじき自然の理なり。その理の中にありて、かしこき人は詩歌・連俳の祖師ともいはれ給へる。されば寒暖を本情として、花とさき葉と落るは春秋の姿也。何か風情ありて風姿なからんや。古風の俳諧に姿なしといふは、遠き人々は論ずべからず。

夕 だ ち や 細 首 中 に 大 井 川

是中比何人の句ぞや。水からくりを見る樣にて、今の俳諧といへど此眼前をさらず。しかれどもこの句に新古あり。今の俳諧ならば、五文字に五月雨と置べし。夕立の姿は水のあかばしりて、たつたとながれたれば、見渡しのさまいそがし。五月雨の姿は薄にごりて漫々と引たゝへたれば、細首の浮わたりたるさま殊によし。そのたぐひは姿をしらず。たゞ夕だちは太刀にて首をきるといふ理屈に落たる故なるべし。姿情のさかひはさる事ならんか。

五 畿 内 に 降 白 雪 や つ め た 食

山 〳〵 に 裾 わ け す る や 富 士 の 雪

坊が童たりし時雪の詩つくりて、ある和尚に見せ侍りしに、此二句をたとへものにして教給ひしを、夢

のやうにおぼえ侍るが、今はありがたき事なるべし。五畿内の雪は理屈をいひて姿をしらず、富士の雪はたゞ理をいひて姿あり。理と屈とのさかひは此ほどにや侍らん。

中〳〵に雪よりうへはいざしらず見ゆるばかりも高き山かな

山〳〵の高ね〳〵をつたひきてふじのすそ野にかゝるしら雪

始は姿情のまゝにいひ出し、次は姿情の理をいふ。いづれも高き處をいふなるべし。是を風雅の理とや申侍らん。俳諧は無分別のところにありて理屈なしとのみいへば、吾門にもあやまりたる人ありて、眼前にさえぎりたる物を口にまかせていひちらし、切字・てにをはの詮義もなく、附句はつきもつかず、一字半言も、こゝろにおかざれば、人にへつらひなしといはれて、肌着一枚に世情をふみやぶりたるなど、是を野鐵炮といふ風雅の罪ゞ人なるべし。されば門人の放埒より師の名をはづかしむる事は、むかし今の鑑なるべし。

若衆に供のなきこそ不審なれ

國に古風の殘る鍋しま

前句にかくいひかけたらんに、理屈なしとてその理をいはざれば埒なし。さればとてこの若衆、逢がたき人をしのぶとか、又は討はたすべきけしきとか附たらんは、それは世間の理屈也。若衆の供つれぬは古代の様なりと見なしたる、是風雅の理といふべし。

行水のあがりを人にあふがれて

たゞ一馬場に辨をしる馬

かやうに附たらん、世間の理屈也。あつさに行水するとならば、鞠にあそび木をうへかへたるもおなじ附句ならんや。一句の全躰を見る事なし。行水にあふがるゝといふは、公家長者のたぐひなるべし。千人が千人あふがるゝといへど、あふがるゝは武士の本意にはあらず。此前句には、歌合にまけて不機嫌なるなど附たらば、あふぎゐる妾の何心なきさまゝでおもひやられ侍らん。この句をあふがせてといひかえたらば、さは又機嫌よきさまなるべし。風雅の理・世間の理とて、二になし侍るは、本情にかなふとかなはざるとのさかひ也。理は不盡の妙とて、鷺をからすといはむもいひなすべし。それは天地の本情にあらず。かくいへば理屈の論に似たれど、風情のうごくと動ざるとを此所にさだめたるなり。たゞ新古のさかひをしるは、姿情のふたつをしるべきなる也。

苗代を見てゐる森の烏哉

西華坊一とせこの句をおもひよせ侍しに、始は脇に見てゐるといふ七文字なりしに、一句のさまおもはしからず。百練の後、森の一字を得て、からすの風姿さだまりたれば、はじめて、發句とはおもはれ侍る。是は尾府に有し時の吟也。その頃伊勢にある人の、おなじ春の苗代を一字もたがへず、かくいひ侍るときけば、我はなど森の一字に骨をりたるぞと、風雅にうらめしき心もありしか。

寒(さえ)る夜に躰の出來たる千鳥哉

是は何がし僧の句也。人もほめ、みづからもいみじとおもへるよし。西華坊に見せ申されしを、この句

よからずといふ。されば冬の夜のさえわたりたるに、何の躰はなけれど、千鳥の寒さのみ躰ならんと見たるまなこは、よのつねの趣意にもあらねど、この句に風情ありて風姿なし。千鳥を躰と見たるは、わたくしの作なるべし。千鳥たつときけば、まづ聲のおもひやられ、鶴啼わたるといへば、そのすがたのおもはるゝよ。草木も鳥獸も、とる所をの〳〵ことならん。

寒梅といふこゝろを

雪霜の骨となりてや梅の華

是は西華坊が千鳥をあらそひたる時の句也。是さらに寒の字の躰をいふなり。水仙を仙骨といへる詩あり。是は肌ともいふべけれど、皮肉はあたゝかみあるをいやがりて、古人もこのさかひに眼をくばりたるなり。かの千鳥にいへる躰の字は殊にすこやかならず。されば梅の華の疲てするどに、世のあたゝかみなきを骨といひなせるが天地の本情にして、かつ風姿もとゝのひたりといふべし。ある人夜話にあつまりて、幾人も火燵にあたりたるといふ事を、菊の花の咲たるやうにといへるが、あの人は風雅も心得ぬ人のよき事いへるかなど、うらやましがりしぞ。されば火燵にあたるは情也、菊の華といふは姿也。かりそめの咄だに姿情ははなるまじき事也。かくいふ姿は事物の姿なり。又一句の姿といふ事もあるべし。今やひくらん望月の駒と云歌の姿を葛の松原にも論じ侍しが、此たぐひはあまたあらめど、歌の道をよくしらねば、おぼつかなき事のみぞおほかる。

此一章はおほく姿情を論じたれど、姿情に新古ある故、新古の二字をもてこの論に名づけたるなり。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○玉棚の云々。

俤といひ、おぼろといひ、詞いろどりたるに、心もまた是を風雅と人のきこえをおもふのへつらいあるは、何故に今日の詞をもつて心におもふ事をすぐさまにいはざるや。人皆うつくしくいはんとし、詞に一作あらんとするがゆへに、心の作をうしなふ。されど此迷ひは、前にある畦うつりといふ詞はやさしく、畦づたひは今日の詞にもあれば、是雅なる所をばせをもとりて、うつりとするがよしといふ事よとおもひあやまるもあらんか。按ずるに、傳ひといふは一つの畦をつたひ行也。あぜうつりといふ時は此方の畦よりかなた畦へをよぎてうつる姿なるべし。其姿一つを、つたふよりは一段と其姿に見所ある、爰を以、ばせをのうつりと極し事可ㇾ察。雅語故にうつりといふ方をとれるにはあらじ。

と見えてゐる。

三〇　夕すゝみ疝氣おこして歸けり　去來　①

予か初學の時發句の仕やう窺けるに先師曰發句は句つよく俳意たし　②

かに作すへしとなり試に此句を賦して窺けれは又是にても大笑し給　③

ひけり　④

[校異]

久①夕すゝみ—夕涼み。歸けり—かへりけり。　②發句の仕やう—ほ句の仕やう。發句は—ほ句は。俳意たしかに—徘意たしかに。　③となり—と也。試に—こゝろ見に。窺けれは—窺ひぬれは。給ひ—玉ひ。「是にても」ト「大笑し給ひけり」トノ間ニ「あらすとて師も」ト書キ、ソレヲ抹殺シタ跡ガアル。

帝①夕すゝみ—夕涼み。歸けり—歸りけり。　②發句の仕やう—ほ句の仕やうを。窺けるに—伺ひけるに。句つよく—つよく。俳意たしかに—作意慥に。となり—と也。　③試に—誠に。窺けれは—伺ひぬれは。是にても大笑し給ひけり—是にてもなしと大笑ひし玉ひけり。

蓉①夕すゝみ—夕涼み。おこして—起して。歸けり—歸りけり。　②發句の仕やう—發句の仕様を。窺けるに—伺ひけるに。句つよく—強く。俳意たしかに—作意慥に。　③試に—試みに。窺けれは—伺ひぬれは。是にても大笑し給ひけり—是にてもなしと大笑し給ひけり。

青①歸けり—歸りけり。此ノ句ノ頭ニ「(冊)」トアル。　②發句の仕やう—發句の仕やうを。窺けるに—伺ひけるに。俳意たしかに—作意たしかに。　③窺けれは—伺けれは。是にても大笑し給ひけり—是にてもなしと大笑し給ひけり。

贄①夕すゝみ—夕涼み。疝氣—疝氣。歸けり—歸りけり。此ノ句ノ頭ニ「(冊)」トアル。　②初學の時—初學の時に。發句の仕やう—發句の仕やうを。窺けるに—伺ひけるに。　③試に—寔に。窺けれは—伺けれは。是にても大笑し給ひけり—是にてもなしと大笑ひし給へり。

架①歸けり—歸りけり。　②窺けるに—窺ひけるに。　③窺けれは—窺ひけれは。是にても大笑し給ひけり—是にても大笑ひし給ひけり。

訓讀

夕すゞみ疝氣おこして歸りけり　去來

予が初學の時、發句の仕やう窺ひけるに、先師曰はく、發句は、句強く、俳意たしかに作すべしとなり。試みに此の句を賦して窺ひければ、又是にても大笑ひし給ひけり。

口譯

「夕すゞみ疝氣おこして歸りけり　去來」――わたくしがまだ俳諧を學び始めたばかりの頃、發句の作りかたを師翁にお尋ねいたしますと、師翁は、「發句は、句の調子を強く、意味あひがはつきり現れるやうに作らなければなりません。」と、敎へて下さいました。それで、そのやうにと心がけて、試みにこの「夕すゞみ」の句を作りまして、御評をお願ひいたしますと、「先ほどの言葉を、こんなに風に解してはこまりますよ。」と、仰せられて、またこの句でも大笑ひなさいました。

語釋

①**夕涼**　夕方の納涼。夏の季語。　①**疝氣**　大小腸又は腰部などの痛む病氣。　②**初學**　學び初めのこと。　②**俳意**　俳

諧的な内容。俳意たしかに云々とは、附句には、たとへば、うつりとか響きとか又はにほひとかの仕立方はあるにしても、常に前句を前提として作られるものである。故にその構想には場合々々に一つの限界が規定されてゐるのである。然るに發句は附句と違つて一句立て、即ち一句のみで獨立してゐるもの故に、一句のみを以て、完全な内容表現を具備しなければならぬ、と言ふ意味を言つたものである。

③**賦す** 詩歌・俳諧などを作ること。

參考

この「夕すゞみ」の句の出典は『去來發句集』である。

「俳意たしかに云々」といふ事に就いては、『去來抄』の「修業教」の中にも、

去來曰、先師は門人に教給ふに、其ことば極まりなし。予に示し給ふには、句毎々々にさのみ念を入る物にはあらず。又句は手づよく俳意たしかに作るべしと也。凡兆には、一句わづかに十七字なり、一字もおろそかに置くべからず。俳諧もさすがに和歌の一體なり、句にしをりの有やうに作るべしとなり。是は後者の氣性と口質によりてなり。あしく心得る輩は迷ふべきすぢなり。同門の中にも、こゝに迷をとる人多し。

との記載がある。

積翠園の『去來抄評』には、

○夕すゞみ云々。

此句俳諧の發句とて、言出すべき事にもあらずとは、今の人尤知る所也。しかるを去來此句を出したるは、如レ此うちひらめに句はする物といふを知らせんがためか。しかれ共一體の趣向の、又此所にてもなき事を、ばせをは笑ひたるなるべし。是全く雅語・緣語・比喩をむねとせず、有のまゝにいふべき敎を知らせんがためなるべし。同じ事ながら、覺悟して風引に出る雪見かな　杉風　是は風客の心有りて、只涼みに疝氣おこしたるとは格別也。

と見えてゐる。但し、こゝに「疝氣」といふ語は發句の取材とならぬとの論を述べてゐるが、『五元集』にも、

夏 の 夜 は 寢 ぬ に 疝 氣 の 起 り け り　　其　角

の句も見え、「疝氣」といふ語のみゆゑに、芭蕉が大笑し給うたと斷ずるのは如何かと思はれる。

殊に、俳諧には俗語を用ゐることを許し、例へば『宇陀法師』には、

一とせ先師いせ山田にて俳諧ありしに、山田人、神樂堂を難じ申しける時、俳諧は平話を用ゆ。常に神樂堂といひならはし侍れば、深き事はしらずと答へ給へり。山田の氣情をよく察したる返答成るべし。其の後此事を尋ねたる人有り。師云はく、唯一の神道には神樂殿、兩部には神樂堂と云ふ。只はいかいには神樂殿をかしからずと申されけり。

とあるが、かゝる見解からしても、この場合は「疝氣」といふ語だけが、この「夕すゞみ」の句の缺點ではなかつた筈であると思ふ。

三一　つかみあふ子とものたけや麥畠　　游力

凡兆曰是麥畠は麻畠ともふれんか去來曰麥麻になりてもよもきにな①②
りてもくるしからすと論す先師曰又ふれるふれぬの論かしかまし無③
用なりと制し給けり見る人察せよ④

［校異］

［久］①つかみあふ—つかみ逢ふ。游力—此ノ二字ナシ。　②麻畠とも—麻はたけとも。ふれんか—ふらん。麥麻になりても—麥は麻に成ても。　③又ふれるふれぬの論—又ふるふらぬの論。　④無用なりと制し給けり—と制し給ひけり。

［斎］①つかみあふ—つかみ逢ふ。子とも—子供。游力—此ノ二字ナシ。　②麻畠とも—麻はたけにも。ふれんか—ふれん。麥麻になりても—麥麻に成ても。よもきになりても—蓬に成ても。　③くるし—苦し。又ふれるふれぬの論—又ふるふれぬの論。④無用なりと制し給けり—無用と制し玉ふ也。察せよ—察よ。

［落］①子とも—子供。たけ—丈。游力—此ノ二字ナシ。　②是—此。ふれんか—ふれん。麥麻になりても—麥は麻に成りても。よもきになりても—蓬に成りても。　③くるし—苦し。又ふれるふれぬの論—又ふるゝふれぬとの論。かしかまし—かしまし。④無用なりと制し給けり—無用と制し給ふ。

青①子とも｜子供。麥畠｜麥はたけ。游力｜游刀。此ノ句ノ頭ニ「(丗)」トアリ、又、欄外ニ「觸動ノ論」トアル。②是｜此。麥畠は｜麥畑は。麻畠とも｜麻はたけにも。よもきになりても｜蓬に成ても。③又ふれるふれぬの論｜ふれふれぬの論。④無用なりと制し給けり｜無用也と制し給ひけり。

贊①子とも｜子供。麥畠｜麥畑。游力｜游刀。此ノ句ノ頭ニ「觸動ノ論(丗)」トアル。②是｜此。麥畠は｜麥畑は。麻畠とも｜麻はたけにも。よもきになりても｜此ノ八字ナシ。③くるしからすと論す｜苦しからす論す。又ふれるふれぬの論｜ふれふれぬとの論。かしかまし｜かしまし。④無用なりと制し給けり｜無用なりと制し給ひけり。

架④無用なりと制し給けり｜無用なりと制し給ひけり。

訓讀

つかみあふ子どものたけや麥畠　游刀

凡兆曰はく、是、麥畠は麻畠ともふれんか。去來曰はく、麥、麻になりても、よもぎになりても、くるしからずと論ず。先師曰はく、又ふれる・ふれぬの論、かしがまし、無用なり、と制し給ひけり。見る人察せよ。

口譯

「つかみあふ子どものたけや麥畠　游刀」――凡兆がこの句を評して、「この句の下の五文字の『麥畠』とあるのは、『麻畠』とも置換へることが出來ませう。」と、申しました。わたくしは、それに答へて、「この句の『麥』とありますのは、實は『麻』でも『蓬』でも、一向差支へないことなのです。」と、論じました。それをお聞きになつ

て、師翁は一叉しても、ふれるふれぬといふ議論が始つたやうですが、うるさいことですね。然し、この句では去來のいふやうに、さういふ詮議立ては無用なことです。」と、お止めになりました。師翁がかう仰せられたお言葉の御眞意は、この文を讀む人はよろしく推察して下さい。

語釋

①**麥畠**　麥は冬に種を下し、翌年の夏に至つて熟るが、その熟る頃をとつて季題としてある。故に、麥畠も、麥が熟してゐる頃の畠をいひ、夏の季語である。　①**游刀**　近江膳所の人である。能太夫で、垂葉堂と號した。『芭蕉門人歳旦牒』に「日々放下焉謠曲猶增長　煤掃をしても身にある埃哉　游刀」の句がある。姓氏歿年等を明かにしない。游力とあるのは誤。　②**麻**　夏の季題。　②**ふれる**　此處では、句の文字を置換へることが出來ること。即ち、動くといふ位の意味。當時の作句上に用ゐられた言葉である。　②**よもぎ**　蓬。春の季題。　③**かしがまし**　囂し。やかましい。「かしまし」と同じ。　④**制す**　とゞめる。いましめる。

參考

この「つかみあふ」の句の出典は『猿蓑』、なほ『嵯峨日記』にも見えてゐる。

さて、この「つかみあふ」の句に就いて『蕉門俳諧語録』には、

つかみあふ子共のたけや麥ばたけ

凡兆難じて曰、この麥畑は麻畠にもふれん。予曰、麥麻になりても、蓬に成てもくるしからずと論ず。

先師曰、又ふるふれぬの論かしましき、無用なり、と制し給ふなり。見る人察せよ。

とある。此處に「ふれるふれぬ」といふことがあるが、これは「動く動かぬ」といふ議論と、ほゞ同樣のものである。この事に關しては、なほ『去來抄』の「同門評」に、

唐黍にかげろふ軒や靈まつり　洒堂

洒堂曰、路通いへるは、唐黍は粟にも稗にも觸るべし、發句となしがたしと也。去來曰、路通いまだ句の花實をしらざる故也。此句は軒の草葉に火影のもれたる、賤が靈祭を賦したる也。一句の實こゝにあり。其草葉は、唐黍にても粟稗にても、其場に叶たる物を用うべし。是は一句の花也。實は靈祭にて動べからず。動けば外の句也。花はいくつも有るべし。其内雅なるを撰び用ふのみ。

とあるのが誠に明瞭である。卽ち花實のうち、實は一句の主眼であり、花は實の添物としての表現である。故に例へば「つかみあふ」の句に於いては「つかみあふ子供の丈」が一句の實であり、「麥畑」がこの句の花である。花は幾らもあらうが、その中から最も適切な花を選び得た時に「花實兼備」と評されるのである。而して實がしつかりしてゐないで他の物と換へ得るのが「動く」といふことであり、花が適切でなくて他によりよき物がある場合が「ふれる」といふことである。なほ此の「動く」「ふれる」に關する議論は『篇突』に、

萩・桔梗・女郎花・尾花の類、花の姿は異なれ共、志の趣所大方似たれば、句にのべて萩を桔梗にしらげ直し、薄を萩に曲安し。よくさかひを辨じて例の取合肝要ならん。

とある。「動く」「ふれる」といふことは、その句が存在の意義を失ふといふことであつて、前述した「等類」の

問題とは、又いさゝか相違する。「等類」の場合は、一面「動く」とも「ふれる」とも見られ乍ら、それは兩句共に、他の句さへ無ければ、存在し得るものを言ふのである。『俳諧雪おろし』には、

風ひかぬ人の日頃やあじろ守　　紀逸

此句うごきて發句にならず。風ひかぬ人の日頃や寒念佛、鉢たゝき、夜興引、ともなるべし。されば、月・雪・花・時鳥は更なり、四時の降もの迚も、其風姿々々備りて、春風は眠く、夏の雨は嬉しく、秋の雨はあはたゞしく、時雨は淋し。そのあはたゞしきも淋しきも、時候のおこなはるゝ所にして、己が情はそれにうつるならんを、爰にいふ紀逸が句は、風ひかぬ日頃とおのれが情を先にして、網代守の風姿をいはず。よつて此難あり。姿情の論は、東花坊などの諸集に筆をふるはれたれば、今更いふまじけれど、聊か動くとうごかぬの境を證句を以しらせ可レ申候。

我家は酒に賣てや網代守
今少し年寄みたし鉢たゝき
彌兵衛とは知れど哀や寒念佛
我笠に月夜忘るゝ夜興哉

何れも寒夜の用ひあるものながら、一つひとつに、すがたかはりてうごく事なし。

とあるが、これを反駁して『蓼すり古義』には、

彌兵衛とはしれど哀や寒念佛

彌兵衛とはの句は、鉢たゝき也。寒念佛としてもふれぬにや。難者の耳のふれたるなり。ふれ動き、胸中にしかと居はりあらば、夢に覺違ふべきやうなし。甚之丞の鉢叩をくれたりなど云說は誰も知たる事也。（略）翁の又喧しのふれ動きの論やと申れけるにて、大かた心得知べき事也。

と見え、なほそれに答へて『遲八刻』には、

ふのみ込なる御坊の御答や（略）。翁のやかましのふれ・うごくの論やと申されけるにて、大かた心得しるべき事也とは、御坊が例のめつぽうかい也。翁の詞は、つかみあふ子供のたけや麥ばたけ、といふ句につきて、去來・凡兆を制し給ふ詞也。いかで初學の人に、ふれ・ふれぬの論なうして佳境にいらんや。むかし或人嵐雪の門に入て、發句のうごく・うごかぬの境を敎給ふの折から、かたはらに氷花ありけるが、先生の高論よしといへども、中々貴公の耳には落申まじ。某たとへをとりて、題のうごく・動かぬを解べし。先雷電の謠に、折ふし本尊の御前に、柘榴を手向置たるを、おつ取て噛くだき、妻戸にはつと、吐かけ給へば、ざくろたちまち火焰と成て扉にはつとぞ燃上る。此時の菓子、瓜・柿・桃・梨子の類ひにても、中々火焰とはならず。是うごかざる所也と。入門の人、おほいに悟入す。此氷花が頓智、今も賞する所也。何ぞ昔より、ふれ・うごくの論なしといはんや。

と論じてゐる。さて、句の花實といふ事に關しては『續五論』の中の「華實論」に詳述されてあるから、次に引用しておく。

詩歌といふは道也。道に華實あるべし。實は道のみちにして、人のはなるべからざる道をいふ也。華は

道の文章にして、神のこゝろをもやはらげぬべし。佛は四十九年の世情にたどり、老子は五千余言の世話にしられ給へる魯夫子、なほちかく喩へをとるとぞいへりける。みつの道ともに文字に出たる、世にいふ道の風雅なるなり。五常といひ五戒といふ、悪をさり善によるの外なし。さりとてよそへいはざれば、人の心やはらぎなし。世に人の人を戀せんにも、君をおもふとばかりきかせたらんは、人もなどあはれとはおもひたらん。木曾路の橋のかけてわすられず、沖の石のかはくひまもなきたもとにわびて、あだなる紙筆のあやにもこゝろうごきせらるゝを、是が實に華なければあらず、といふたとへにもあらんか。詩は關雎にやはらぎ、哥は八雲の色〳〵によみひろごりて、古人の托物比興とかいふなる道に、文章あるのはじめとぞなれりける。詩に連句あり、歌に連哥ありて、詩哥連俳の四の道とはわかれたるぞ。しかるに俳諧といふは、和歌に對しての名なるべし。心の俳諧をいふにはあらじ。歌は中品以上をもてあそび、俳諧はそれ以下をのこさず。是をたとへば、僧と俗と一座にありて、僧は野菜の風味にとどまりたるが、俗は魚鳥の美をしり、野菜の風味をものこさゞるがごとし。俳諧など以上の風流なからん。さるを俳諧といへば、肥もち田にしほる賤の男・賤の女もいふやうにおぼえたらんが、口にはいひはらねど、言葉にげなきひとあり。といふもかくいふも、言葉ばかりのものなれば、心のをき處風雅ならんこそ、風雅の人とはいふなれ。くだかけとは庭鳥をいひ、ふかみぐさとは牡丹をいふ。いづれかいつはり、いづれかまことならん。さればとて地藏のあたまに蓼摺小木も、唐がらしの秋に逢ひて紅葉す

るなどいはむも、いふ時はおかしけれど、言語の實なしともいはれぬべし。今の世の俳諧師は、繁花の地に點者の額うちて、野郎・傾城の本寺のやうにおもはれ侍るは、世俗の諺にあそぶゆへなるべし。さりとて、世情にうとき人は、蛙の土中に冬籠りたるやうにて、それも物の理なかるべし。このさかひは二十年の腸をさくべき俳諧の工夫地也。をのれが心は、女色・美肴のたのしみにをきて、口に風雅のさびをいはんとおもへる、心・口のふたつあらばいひもいはれぬべし。風雅は本さびしきもの也。女色・美肴は最上のたのしみ也。たのしきに居ては、淋しきをたのしみがたく、さびしきに居ては、たのしきをたのしみやすしといふ所を、心におもひてつしたらば、終りにそみ終りに喰らふとも、いかで風雅のさびならん。年わかければさびなしなどいふ人は、俳諧のそも心より出るものといふをしらぬ人也。誠におしむべきは今の世の俳諧也。言葉をかざり面にこびて、あの人は殊勝の人なり、俳諧も上手なりと世の人にいはれたらんは、世の中のねばりあまみとて、西華坊が身にとりてはうとましき事の第一也。世に自慢といふ事の侍るは、その道にあきらかならぬ人の事なり。をのれよしとおもふは、人のそしりてもくるしからず、をのれあしゝと思ふは、人のほめてもうれしからず。よきは天地よりよく、あしきは天地よりあし。天地の本情をしらんに、何の自慢かあるべき。このあたりは俳諧の一場也。されば此論は心を實にをきて、言葉を華にあそぶべき、華實相應の風雅のたつきとや申侍らん。

と見えてゐる。句の華實といふことが、古來句作上最も關心を拂はれた點の一であつたことは言ふまでもない。なほ「見る人察せよ」に就いて婆心を添へれば、この「つかみあふ」の句は、一句の實が確かで、「麥畑」とい

ふ花も相當なものであるのに、實の鑑賞を後にして、花の詮議をやかましくするといふ態度を、芭蕉がいましめたものと解すべきであらう。

因みに、この句は『嵯峨日記』には、廿日の條下に、

北嵯峨の祭見むと羽紅尼來る。
去來京より來る。途中の吟とて語る。

つかみあふ子共の長や麥畠

と見え、誰の句ともなく、寧ろ去來の作かのやうに記されてあるため『去來發句集』の中にも、去來の作と認めてこの句を收め、且つ『七部集大鏡』等には、

太笻曰、嵯峨日記に廿日頃嵯峨のまつり見むと、羽紅尼來る。去來途中の吟とてかたる、不審なり。游刀にゆづるやいなや。

の如き記載がある。また『芭蕉新卷』には、この句を芭蕉の作と誤つてゐる。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○つかみ合云々。
ふれうごくの論は、ばせを以前の俳諧に專いふ事にて、其他他門の人ばせをの門に入ざれば、以前よりふれうごくの論心にたへず。しかる故に、此句にも其論あり。今の俳諧をいふもの、此論を見るといへ共、沾徳・麥林等が風義より入たる者は、各ふれうごくの論をいふ。其ふれぬといふは、撫子には子の

事をいひ、女郎花には女の事をむすびて、縁語秀句にて是をふれぬといふ。皆言語のあやにて、心頭の事にあづからず。是ばせを・去來の心を知らざる故なるべし。眼に感じて言出る句に、ふれる・ふれぬの論にて、其句をいはず成侍らば、其感ずるの意をいひ出る事あたはじ。

と見えてゐる。

三　いそかしや沖のしくれの眞帆片帆　　去來

去來曰猿簑は新風の始なり時雨は此集の美目なるに此句仕そこなひ
侍るたゝへ有明や片帆にうけて一時雨といはゝいそかしやよりも句
のはりよく心のねはりすくなからん眞帆もそのうちにこもりてん先
師曰沖の時雨といふも又一ふしにてよしされと句ははるかにおとり
侍るとなり

校異

久②猿簑―猿みの。始なり―始。　③へ―此ノ爪印ナシ。いそかしやよりも句のはりよく―いそかしやも眞帆もその內にこも

りて句のはしりよく。　④心のねはりすくなからん眞帆もそのうちにこもりてん―心のねはりすくなからん。　⑥となり―と也。

帝①しくれ―時雨。　②猿簔―猿みの。始なり―始。美目なるに―欠目なるに。此句仕そこなひ侍る―此句仕損ひ侍る。

③たゝ―唯。へ―此ノ爪印ナシ。いそかしやよりも句のはりよく―いそかしやも眞帆も其うちにこもりて句のはしりよく。

④心のねはりすくなからん眞帆もそのうちにこもりてん―心のねはりすくなからん。　⑤一ふしにてよし―一ふしあるよし。

おとり侍る―劣侍る。　⑥となり―也。

落①いそかし―忙かし。しくれ―時雨。　②始なり―初め。美目なるに―鼻目なるに。此句仕そこなひ侍る―仕損ひ侍る。

③たゝ―只。へ―此ノ爪印ナシ。うけて―受けて。といはゝ―とせは。いそかしやよりも句のはりよく―忙かしやも眞帆も其内

に籠りて句の走り能く。　④心のねはりすくなからん眞帆もそのうちにこもりてん―心のねはり少なからん。　⑤いふも―

云ふも。一ふしにてよし―一ふし有てよし。はるかに―遙かに。おとり侍る―劣侍る。

青①しくれ―時雨。此ノ句ノ頭ニ「(西)」トアリ、又、欄外ニ「心のねはり」トアル。　②猿簔―さるみの。始なり―はしめ也。

美目なるに―美目成に。此句仕そこなひ侍る―此句仕損ひ侍る。　③たゝ―只。へ―此ノ爪印ナシ。　④そのうちに―其内

に。　⑤おとり侍る―をとり侍る。

贄①しくれ―時雨。此ノ句ノ頭ニ「心のねばり(西)心のねばり」トアル。　②猿簔―猿蓑。始なり―はしめ也。此句仕そこなひ

侍る―此句仕損ひ侍る。　③たゝ―只。へ―此ノ爪印ナシ。　④そのうちに―其内に。　⑤おとり侍る―おとる。　⑥

となり―と也。

架②猿簔―猿蓑。美目なるに―美目也しかるに。

訓讀

いそがしや沖のしぐれの眞帆片帆　去來

去來曰はく、猿蓑は新風の始なり。時雨は此の集の美目なるに、此の句仕そこなひ侍る。たゞ、「有明や片帆にうけて一時雨」といはば、いそがしやよりも、句のはりよく、心のねばりすくなからん。眞帆もそのうちにこもりてん。先師曰はく、沖の時雨といふも、又一ふしにてよし。されど、句ははるかにおとり侍るとなり。

口譯

「いそがしや沖の時雨の眞帆片帆　去來」――この句に就いて、わたくしは、「これは『猿蓑』に入つた句でありますが、『猿蓑』は、わが蕉門の撰集の中でも、師翁の大行脚以來の、最も圓熟された風調を基としてある撰集でありますし、また時雨といふ題目は、この集の巻頭に据ゑられた最も高雅な題目でありますのに、折角、その撰に入りながらも、この句は、いま思へば、作り損じてゐますのが、寔に遺憾の極みでございます。たゞ『有明や片帆にうけて一時雨』と言ひましたなら『いそがしや』といふより、句調も緊密になり、言過ぎの言葉に對する心の執着も減じ、句の調子が自然になりませう。そして『片帆』と言つたゞけで『眞帆』の意味も、その中に含まれてゐることになりませう。」と、申しました。すると、師翁は、「『沖の時雨』と言つたのも、亦一寸趣があつて、面白いと思ひます。けれども、句としては、お前の再案の『有明や』と比較しますと、遙かに劣つてゐま

す。」と、申されました。

語釈

①**眞帆**　眞帆は順風にかけた帆。片帆の對。　①**片帆**　帆を一方に傾けて風をふくませたもの。眞帆の對。　②**新風の始**　『猿蓑』は『冬の日』『春の日』『曠野』『ひさご』を經て蕉風の俳諧が最も圓熟した時代の撰集であり、此處に至つて始めて花實兼備となつたと言ふべきなので、去來はかく言つたのである。なほ去來は『靑根が峯』には、「故翁、奥羽の行脚より、都へ越えたまひける。當門のはい諧すでに一變す。我ともがら、笈を幻住庵にになひ、杖を落柿舍に受て、略ゝそのおもむきを得たり。瓢・さるみの是也。」とも記してゐる。　②**此集の美目**　『猿蓑』の名は此の集の卷頭に、芭蕉の「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」の句を据ゑたことによつて、名付けられたものであるが、それに續いて其角・千那・丈草・正秀・史邦・尙白・曾良・凡兆・乙州・羽紅・昌房・去來の「時雨」の句をずらりと並べてあるので、「時雨は此集の美目なり」と言つたのである。美目は、美しい題目といふ意。　③**有明**　有明の月。曉に月が殘つてゐること。月の十五日（陰暦）以後にあること。　④**句のはり**　句の格調。但し、異本の如く「句のはしり」となれば、一句のもつ調子の流麗さといふ程の意と解さねばならぬ。　④**心のねばり**　「同門評」の「ほとゝぎす帆裏になるや夕まぐれ」の章にも「去來曰、時鳥帆裏になるやといふにて景情たれり、此うへに明石潟をもとむるはこゝろのねばりならんか。」とある。要するに、句作に當つて言葉に對する心の執着から、言はなくても景情足りてゐる所へ、不要の語を挿入するその執着心のこと。卽ち、こゝでは「片帆」とだけでいゝ所を「眞帆片帆」と言はねば、滿足しない類である。　⑤**一ふし**　一寸趣があるといふほどの意。

参考

この「いそがしや」の句の出典は『猿蓑』、なほ『去來發句集』等にも見えてゐる。

さて、この「いそがしや」の句に就いて『花實集』には、

去來曰、

いそがしや沖のしぐれの眞帆片帆

猿蓑は新風の始、時雨は此集の美目なるに、此句、仕損ひ侍る。只、有明や片帆にうけて一時雨、といはゞ、いそがしやも眞帆もその中にこもりて、句のはしりよく、心のねばりすくなからん。先師曰、沖のしぐれといふも又一ふし有かし。されど、句ははるかにをとり侍る也。

とある。

次に、所謂「この集の美目」たる『猿蓑』巻頭の時雨の句を、左に掲げておく。

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲　其角

時雨きや並びかねたる魦ぶね　千那

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　僧丈草

鑓持の猶振りたつるしぐれ哉　膳所正秀

廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎　史邦

舟人にぬかれて乘りし時雨かな　　尙白

伊賀の境に入りて

なつかしや奈良の隣の一時雨　　曾良

しぐるゝや黑木つむ屋の窓あかり　　凡兆

馬かりて竹田の里や行くしぐれ　　大津　乙州

だまされし星の光や小夜時雨　　羽紅

新田に稗殼煙るしぐれ哉　　膳所　昌房

いそがしや沖の時雨の眞帆片帆　　去來

積翠園の『去來抄評』には、

○いそがしや云々。

眞帆にかけ、又其船の行方によりて片帆にかける、其いそがしとおもへるとは船中の働の句にて、風景にはあらず。有明の月あるに、片帆にかけて行舟に、時雨の風色殊更に感あり。沖の時雨と、其場を定めたる風色なきにしもあらねど、全くこなたより、有明月に片帆の風色等は及ざる事は、其舟の姿を見て知るべし。若、有明や沖の時雨の眞帆片帆、といふ共、此方より見たる所には成侍れど、片帆のみいひて、眞帆共内にあるとの評、可ㇾ感。

と見えてゐる。

三　兄弟の顔見あはすやほとゝきす　去來 ①

去來曰此句は五月廿八日曾我兄弟の互に顔見合ける頃子規なともう ②
ち啼けむかしむかし光源氏の村雨の軒端にたゝすみ給ひしを紫式部 ③
かおもひやりたる趣をかりて作す先師曰曾我とのはらとは聞なから ④
一句いまたいひおほせす其角か評も同前なりと深川より評し給ふ許 ⑤
六曰此句は心餘りて詞たらす去來曰心餘りて詞たらすといはんはは ⑥
ゝかりありたゝいひおほせぬとも評すへし丈艸曰今の作者はさかし ⑦
くかけ廻りぬれは是等は合點の内なるへしと共に笑けり ⑧

校異

久①顔—かほ。見あはすや—見るやみや。ほとゝきす—時鳥。　②此句—是句。廿八日—廿八日夜。顔見合ける頃—只見合ける比。子規—時鳥。　③うち啼けむかし—うちなきけんかしと。むかし光源氏の—源氏の。たゝすみ—たたすひ。紫式部か—紫式アか。　④趣を—おもむきを。かりて作す—かりて一句を作せり。とのはらとは聞なから—との原の事とはきゝなから。

⑤いひおほせす—謂おほせす。評し給ふ—評。　⑥詞たらすといはんは—詞不足といはんは。はゝかりあり—はゝかり有。⑦いひおほせぬとも評すへし—謂不應也。　⑧なるへし—成へし。笑けり—笑ひけり。

【商】①見あはすや—見るやみや。ほとゝきす—郭公。　②廿八日—廿八日の夜。互に—互に始。顔見合ける頃—果見合ける頃。子規—ほとゝきす。　③うち啼けむかし—うろ鳴けんかしと。むかし光源氏の村雨の軒端にたゝすみ給ひしを—此ノ二十一字ナシ。紫式部か—紫式部の。　④趣を—おもわくを。かりて作す—かりて一句を作せり。先師曰—先師いはく。とのはらとは聞なから—殿原とは聞なから。　⑤いひおほせす—いひ應せす。其角か評—其角評。同前なり—同前也。評し給ふ—評し玉ふ。⑥詞たらす—と葉たらす。はゝかりあり—はゝかり有。　⑦たゝ—誰。いひおほせぬとも評すへし—いひ應せさるなり。さかしく—さはかしく。　⑧かけ廻りぬれは—かけり廻ぬれと。なるへし—成へし。共に—倶に。笑けり—笑ひけり。

【落】①見あはすや—見る闇や。　②廿八日—廿八日の夜。兄弟の—兄弟。顔見合ける頃—顔を見合ける頃。子規—時鳥。　③うち啼けむかし—鳴きけんかしと。むかし光源氏の—昔光源氏の。たゝすみ—佇み。　④おもひやりたる—想像たる。かりて作す—借て一句を作せり。とのはらとは聞なから—殿原とは聞えなから。　⑤いまた—未た。いひおほせす—云課せす。⑥詞たらす—詞足らす。詞たらすといはんは—語足らすと云はんは。はゝかりあり—憚あり。　⑦たゝ—只。いひおほせぬとも評すへし—云課せさるなり。さかしく—騒がしく。　⑧かけ廻りぬれは—馳廻りぬれは。笑けり—笑ひけり。

【青】①此ノ句ノ頭ニ「㊃」トアリ、又、欄外ニ「云をほせぬ句」トアル。　②此句—この句。廿八日—廿八日雨の闇の夜。互に—たかひに。子規—時鳥。　③うち啼けむかし—うち啼けんかし。むかし光源氏の—昔光源氏の。村雨—むら雨。給ひし—玉ひし。　④おもひやりたる—思ひやりたる。趣を—おもわくを。かりて作す—かりて一句を作す。とのはらとは聞なから—殿原とはきこへなから。　⑤いひおほせす—云おふせす。　⑥此句—この句。餘りて—あまりて。詞たらす—ことはたらす。

詞たらすといはんは―詞足らすといはんは。はゝかりあり―憚あり。⑦たゝ―只。いひおほせぬとも許すへし―云おふせぬとも許すへし。今の―いまの。さかしく―さはかしく。⑧是等は合點の內―これは合點のうち。笑けり―笑ひけり。

贅①此ノ句ノ頭ニ「（豊）云ひおほせぬ句」トアル。②此句―この句。廿八日―廿八日雨の闇の夜。顏見合ける頃―顏見合せる頃。子規―時鳥。③うち啼けむかし―うち啼けんかし。むかし光源氏の―昔光源氏の。村雨―むら雨。④おもひやりたる―思ひやりたる。趣を―おもわくを。作す先師曰曾我とのはらとは聞なから―此ノ十七字ナシ。⑤いひおほせす―云おふせす。評し給ふ―評し玉ふ。⑥此句―この句。餘りて―あまりて。詞たらす―言葉たらす。詞たらすといはんは―詞たらすといふは。はゝかりあり―憚あり。⑦たゝ―唯。いひおほせぬとも許すへし―云おふせ（マヽ）とも許すへし。丈艸―丈草。今の―いまの。さかしく―さはかしく。⑧是等は合點の內―合點のうち。笑けり―笑ひけり。

架③うち啼けむかし―うち鳴きけむかし。⑧笑けり―笑ひけり。

訓讀

兄弟の顏見あはすやほとゝぎす　去來

去來曰はく、此の句は五月二十八日、曾我兄弟の互に顏見合せける頃、子規などもうち啼きけむかし。むかし、光源氏の村雨の軒端にたゝずみ給ひしを、紫式部がおもひやりたる趣をかりて作す。先師曰はく、曾我のとのばらとは聞えながら、一句いまだいひおほせず。其角が評も同前なりと。深川より評し給ふ。許六曰はく、此の句は心餘りて詞たらず。去來曰はく、心餘りて詞たらずといはんは、はゞかりあり。たゞ、いひおほせぬとも許すべし。丈草曰はく、今の作者はさかしくかけ廻りぬれば、是等は合點の內なるべしと、共に笑ひけり。

「兄弟の顏見あはすやほとゝぎす　去來」――わたくしは、この句に就いて、「この句は、五月二十八日に、曾我兄弟が本懷を遂げ、ほつとして互に顏を見合せた時、時鳥なども鳴いてゐたであらうといふ景色を想像しましてそれに、昔、光源氏の君が、雨上りの軒端に足をとゞめられて、時鳥の鳴く音を聞いてゐられた心中を、紫式部が推しはかつた景趣を借りて、作りました句で御座います。」と、書添へまして師翁の許へお送りいたしました。すると、深川の芭蕉庵からの御返事に、師翁はこの句を評して「お前の句が、曾我兄弟のことを詠んだものであらうとだけは分りましたが、この句の表現では、まだその事を充分に言盡すことが出來てゐません。其角も同じ樣な批評をしてゐます。」とのことでございました。許六は、この句を見て、「この句では、あなたが詠まうとしてゐる所は分るのですが、その內容が複雜すぎて表現が不足なやうであります。」と、申しました。わたくしは、「それは少しわたくしを賞め過ぎてゐますよ。やはり師翁も仰せられたやうに、これだけでは、わたくしの意圖さへも、明瞭になつてゐないと評すべきでありませう。」と、答へました。すると、丈草は、このことを聞いて、「許六のやうな、今どきの作者は、利口に頭がかけ廻りますから、たとへ、師翁や其角が、これでは曾我兄弟の事と思へないといふほどの句でも、すぐ、なるほどこれは曾我兄弟の事だなと思ひ付いてしまふので、そんなことは、とつくに合點した上で、あゝ言つたものなのでせう。」と、申しました。この丈草の言ひ方がをかしかつたので、共に笑ひ合うたことでございます。

②**五月二十八日**　建久四年此の日、曾我兄弟が父の讐を打取つたのである。此の日に降る雨を「虎が雨」といふ。　②**曾我兄弟**　河津祐泰の子で、兄を祐成といひ、弟を時致といふ。父祐泰が從祖父工藤祐經に殺された時、兄は五歲、弟は三歲であつた。母は二人の孤兒を連れて曾我祐信に再嫁した。兄弟は屢々父の讐祐經を覘つたが、建久四年五月二十八日夜、賴朝が富士野に卷狩をした時本望を達した。時に祐成は二十二、時致は二十。祐成は仁田忠常に討たれ、時致は五郎丸のために擒にされて斬られた。　③**光源氏**　『源氏物語』の主人公である。何時の時代であつたか、帝の御寵愛を一身に集めて桐壺に住む更衣が美しい御男子を儲けた、といふ書起しで、その皇子が臣籍に下つて源姓を賜ひ、平安朝の大宮人らしい風流な生涯を送られて、逝去されるまでに至ることが、物語の骨子となつてゐる。後篇の宇治十帖は、光源氏の子、薰君が主人公である。　③**村雨**　ひとしきり降る雨。　③**軒端**　軒のはし。軒に近い所。　③**たゝずむ**　佇む。立ちどまつてゐること。　③**紫式部**　姓は藤原、名は未詳。初めは藤式部と稱せられた。生歿享年とも諸說があるが未詳である。爲時の女で、幼少より聰明であり、長じて藤原宣孝と結婚し一女を生んだが、間もなく死別して、上東門院に仕へた。『源氏物語』は彼女の畢生の大作と傳へられてゐる。その他、『紫式部日記』・『紫式部家集』・『日記歌』等の著作が殘つてゐる。『枕草子』の作者淸少納言と並んで、平安朝時代が生んだ二大才媛と稱せられてゐる。　④**趣**　樣子。けはひ。　④**とのばら**　殿儕。高貴の人々といふ意から、轉じて數多の男子をいふ。　⑤**許六**　江州彥根の藩士で知行三百石である。森川氏、名は百仲、字は羽官、通稱を五助、金平、又兵助といひ、五老井、菊阿佛、碌々庵、如石齋、風狂堂、無々庵、橫斜庵の諸號がある。初め常矩に俳諧を學び、後、芭蕉晩年の弟子となつて以來、師風の蘊奧を得たと稱し、蕉門十哲の一人に數へられてゐる。彼の自叙傳に「予俳諧を好むこと、千人に過ぎたり。二十餘

年晝夜俳諧に眼をさらす。初學の時は、季吟老人の流に手引せられて、中頃談林の風起つて、急に風をうつし、京師田中氏常矩法師の門人と成て、俳諧する事七八年、晝夜寢食を忘れて、一日に三百韻・五百韻を吐出す。その頃出る諸集に渡て、一天下の誹諧おそらくは掌中に握りたる樣おぼゆ。中略。その後轉變して、自暴自棄の眼出來、我句もおかしからず、他句猶聞取り難し。所詮他人の涎をねぶらむよりはと、やめて亂舞に遊ぶこと四五年なり。然りといへども、元來深く好める道なれば、終に忘れ難くて、折節は他の句を尋ぬるに、この頃の一天下、桃青を翁と稱して、いよ〳〵名人の號を四海に布くと沙汰しけり。中略。願はくは一度對面して、俳諧の新風を聞きたしと云々」（俳諧問答）と記してゐる。畫にも文にも巧みであつた。『俳家奇人談』の傳へる所に依れば、許六は晩年になつて、癩瘡になつたといふが、兎に角宿痾に倒れるに至つた。正德五年八月廿六日歿、年六十。同地長潤寺に葬る。著書には（李由と共著の形式になるもの多く）、『韵塞』・『篇突』・『宇陀法師』・『俳諧問答』・『歷代滑稽傳』・『風俗文選』・『正風彥根體』・『十三歌仙』・『和訓三體詩』などがある。 ⑥**心餘りて詞たらず** 紀貫之が『古今集』の序に於いて、在原業平の歌を評して、「其の心あまりて詞たらず、しぼめる花の色なくて香のこれるがごとし」と言つた言葉があるが、その後しば〳〵詩歌・俳諧の批評に用ゐられたのである。言はうとする內容が豐富すぎて、一句の中に盛切れず、表現不足に陷つてゐる意である。前出の「意到句不到」（二六）とほゞ同樣の意である。 ⑥**はばかり** さしひかへること。 ⑦**さかしく** 利口に。こざかしく。 ⑧**合點** ガテンともガツテンとも訓む。うなづくこと。承知すること。外に、俳諧の點評の時の術語としては、二人以上の判者の點を加へることをもいふ。

參考

この「兄弟の」の句の出典は『韻塞』、なほ『去來發句集』『誹諧曾我』『旅寢論』等にも見えてゐる。但し、『韻

塞』『去來發句集』には、

兄弟か顏見合すや蜀魂　　去來

とあり、『誹諧曾我』『旅寐論』には、

兄弟の顏見るやみや蜀魂　　去來

と見え、且つ『誹諧曾我』には「白雪此句味をしるに、彼廿八日の夜のくらさはくらし、明松さしあげつくぐと見あはしたる時にや」と添書がある。

この「兄弟の」の句に就いて論及してゐる書の中から、代表的なものを次に列擧すれば『花實集』には、

去來曰、

兄弟の顏見る闇やほとゝぎす

此句は五月廿八日の夜、曾我兄弟の生涯に始果見合ける頃、ほとゝぎすなどもうろ啼けんかしと、紫式部がおもひやりたるおもはくをかりて一句を作せり。先師曰、曾我殿原とは聞ながら、一句未いひ應せず。其角評も同前なりと、深川より評し給ふ。許六曰、此句は心あまりて詞たらず。去來曰、心餘りて詞たらずといはんは、はゞかり有、唯いひ應せざる也。丈艸曰、今の作者は、さはがしくかけり廻りぬれど、是等は合點のうちなるべしと倶に笑ひけり。

『旅寐論』には、

兄弟の顏見る闇やほとゝぎす　　去來

我郭公の句も、曾我の句とは聞ながら、今少足らずと、先師も許し玉ひぬ。

と見えてゐる。この「兄弟の」の句が『源氏物語』の中の如何なる趣を借りたかといふことを確かにすることは容易でないが、或は次の如き「花散る里」の趣を指すのかも知れぬと思ふ。

人しれぬ御心づからの物おもはしさは、いつとなきことなめれど、かくおほかたの世につけてさへ、わづらはしうおぼしみだるゝことのみまされば、もの心ぼそく、世中なべていとはしう覺しならるゝに、さすがなることおほかり。れいけいでんときこえしは、みやたちおはせず、院かくれさせ給ひてのち、いよ〳〵哀なる御ありさまを、たゞこの大將殿の御こゝろにもてかくされて、すぐし給なるべし。御おとうとの三の君、うちわたりにて、はかなくほのめき給しなごり、例の御こゝろなれば、さすがにわすれもはて給はず、わざともゝてなし給はぬに、ひとの御こゝろをのみつくしはて給べかめるをも、此比のこることなく、おぼしみだるゝ世のあはれのくさはいには、おもひ出たまふに、しのびがたくて、さみだれの空、めづらしうはれたる雲まに、わたり給。なにばかりの御よそひなく、うちやつして御前などもことになく、しのびたまへり。なか川のほどおはするに、さゝやかなる家の木だちなどよしばめるに、よくなることを、あづまにしらべてかきあはせ、にぎはゝしくひきならすなり。御みゝとまりて、かどぢかなる所なれば、すこしさし出てみいれ給へば、おほきなるかつらの木のをひかぜに、まつりのころおぼしいでられて、そこはかとなくけはひおかしきを、たゞひとめみ給しやどり也と、おもひいで給ふに、たゞならずほどへにけるを、おぼめかしくやとつゝましけれど、すぎがてにやすらひ給。おり

しもほとゝぎすなきてわたる、もよほしきこえがほなれば、御車をしかへさせ給て、例のこれみつをいれ給ふ。

をちかへりえぞ忍ばれぬ時鳥ほのかたらひし宿のかきねに

しん殿とおぼしき屋の、西のつまに人々ゐたり。さき〴〵もきゝしるこゑなりければ、こはづくりけしきとりて、御せうそこ聞ゆ。わかやかなるけしきどもあまたして、おぼめくなるべし。

ほとゝぎすことゝふこゑはそれなれどあなおぼつかなさみだれの空

ことさらにたどるとみれば、よし〳〵、うへしかきねもとていづるを、人しれぬ心にはねたうもあはれにも思けり、さもつゝむべきことぞかし。ことはりにもあれば、さすがなり、かやうのきはに、つくしの五節こそ、らうたげなりしはやと、まづおぼしいづ。いかなるにつけても、御こゝろのいとまなくとし月をへてもくるしげなり。なをかうやうにみしあたりのなさけは、すぐしたまはぬにしも、なか〳〵あまたの人のものおもひぐさなり。さてかのほいのところは、おぼしやりつるもしるく、人めなくしづかにて、おはする有様をみ給もいと哀なり。まづ女御の御かたにて、むかしの御ものがたりなどきこえたまふに、夜ふけにけり、廿日の月さしいづるほどに、いとゞ木だかきかげども、こぐらうみえわたりて、ちかきたちばなのかほり、なつかしくにほひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、あくまでようあり、あてにらうたげなり。すぐれてはなやかなる御覺えこそなかりしかど、むつまじうなつかしきには、覺したりしものをなど、思出きこえ給ふにつけても、むかしのことかきつらねおぼされて、うちな

き給。ほとゝぎすありつるかきねのにや、おなじこゑにうちなく。したひきにけるよとおぼさるゝ程もえんなりかし。いかにしりてかなど、しのびやかにうちずし給。

たち花のかをなつかしみほとゝぎすはなちる里をたづねてぞとぶ

いにしへのわすれがたきなぐさめには、まづまいりはべりぬべかりけり。こよなうこそまぎるゝこともかずそふことも侍けれ。おほかたの世にしたがふものなれば、むかしがたりもかきくづすべき人すくなうなりゆくを、ましていかに、つれ〴〵もまぎるゝことたく、おぼさるらんときこえ給ふに、いとさらなる世なれど、物をいと哀とおぼしつゞけたる、御けしきのあさからぬも、人の御さまがらにや。おほく哀ぞそひにける。

『源氏物語』に限らず、王朝時代の諸文學作品を、俳諧の中に移入することは、一つの俳諧手段と見做されてゐた。『去來抄』の「修行教」の中にも、

浪化曰、今の誹諧物語等を用ふる事いかゞ。去來曰、同じくは一卷に一二句あらまほし。猿蓑の中に、

待　人　い　り　し　小　御　門　の　鍵

も、門守の翁也。此集撰む時、物がたり等の句すくなしとて、粽結ふの句を作して入れ給へり。

との記載があり、又『宇陀法師』の「物語のことば」の條下にも、

水　無　月　や　友　待　雪　の　不　二　颪　　李　由

爐　開　に　這　出　給　へ　き　り　〴〵　す　　許　六

正月や先づきよき物あら莚　　朱廸

源氏若菜巻に、友まつ雪の、ほのかに残れる上に、打ちりそふ空を詠め給へり、と有。紅葉賀に、源氏源内侍が方へ忍ぶ給ふ時、屏風のかげにかくれ給ふを、頭の中將の詞に、壁の中のきり〴〵す這出給へと云々。清少納言枕双紙に、清き物かはらけといへり。正月の五文字に力あるべし。

四五月のう波さ波やほとゝぎす　　許六

無名抄に、筑紫のはて國には、四月・五月に大波たつ。四月をう波といひ、五月をさ波と云。いと興ある事と云々。

とある。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○兄弟の云々。

丈艸がいへる如く、元祿の昔さえ曾我兄弟と聞たるに、今は猶更是を聞かぬ人はあらじ。しかれ共、かくいひてもきこゆと、段々に句をいふ事行過て、既に寳永の末に至りては、今聞てはきこえざる句多く成侍るにや。しかれば此句を、ばせを・其角がいひおふせざると評せしを察して、元祿の句のきこえ安き方にならふべし。

と見えてゐる。

三四　につと朝日にむかふ横雲 ①

青みたる松より花の咲こほれ　去來 ②

先にはへすつへりと花見の客をしまひけりと付侍るか先師の顔つき ③
をかしからされは又前を乞て此句を附なほす先師曰いかに思ふて附 ④
直し侍るや予曰朝雲ののとかに機嫌よかりしを見て初に附侍れと能 ⑤
見るに此朝雲のきれいなるけしきいふはかりなしこれをのかしては ⑥
詮なかるへしと思ひ附直し侍るといへり先師曰やはり初の句ならは ⑦
三十棒なるへし猶陰高きを直すへしとて今の五文字にはなりけり ⑧

校異

久①むかふ―迎ふ。横雲―よこ雲。此ノ句ノ頭ニ「前句」トアル。　③先には―初に。へ―此ノ爪印ナシ。しまひけり―しまいけり。付侍るか―付侍る付なから。顔つき―かほつき。　④をかしからされは―おかしからす。又前を乞て―又前を乞ふて。此句を附なほす―此句を付直す。思ふて―おもひて。附直し侍るや―付直し侍るや。　⑤予曰―去來曰。のとかに―長閑に。

⑥朝雲の｜朝の。けしき｜氣色。これを｜此を。　⑦と思ひ附直し侍るといへり｜とおもひかへしつけ直し侍る。　⑧猶｜なを。直すへしとて｜直すへしと。五文字にはなりけり｜五文字に成けり。

【宗】③先には｜初に。へ｜此ノ爪印ナシ。しまひけり｜仕廻けり。付侍るか｜附侍る付なから。　④をかしからされは｜おかしからす。此句を附なほす｜此句を附直す。思ふて｜おもひて。附直し侍るや｜付直し侍るや。　⑤予曰｜去來曰。のとかに｜長閑に。附侍れと｜付侍れと。　⑥朝雲の｜朝の。きれい｜寄麗。けしき｜氣色。これを｜是を。のかしては｜逃しては。　⑦と思ひ附直し侍るといへり｜と思ひかへし直し侍る。　⑧三十棒｜三十捧。直すへしとて｜直すへしと。五文字にはなりけり｜五文字に成にけり。

【落】①朝日｜旭。　③先には｜先に。へ｜此ノ爪印ナシ。すつへりと｜すつかりと。しまひけり｜仕廻けり。付侍るか｜附侍る附なから。顔つき｜顔付。　④をかしからされは｜おかしからす。又前を乞て｜前句を乞て。此句を附なほす｜附直す。思ふて｜思ひて。　⑤予曰｜去來曰。のとかに｜長閑に。能見るに｜能く見るに。　⑥朝雲の｜朝の。きれい｜奇麗。けしき｜氣色。いふはかり｜云ふはかり。これを｜是を。のかしては｜遁しては。　⑦と思ひ附直し侍るといへり｜と思返し直し侍ると申す。やはり｜矢張り。初の句｜初めの句。　⑧陰高き｜影高き。直すへしとて｜直すへしと。五文字にはなりけり｜五文字に成にけり。

【靑】①此ノ句ノ頭ニ「(西)」トアル。　③しまひけり｜仕舞けり。付侍るか｜附侍るか。　④をかしからされは｜笑しからされは。又前を乞て｜また前を能考て。此句を附なほす｜此句を附直す。思ふて｜思ひて。附直し侍るや｜付直し侍るにや。　⑤予曰｜予レ曰。朝雲｜あさ雲。のとかに｜長閑に。機嫌よかりし｜きけん能りし。初に｜はしめて（イに）。附侍れと｜付侍れと。能見るに｜よく見るに。　⑥けしき｜氣色。いふはかり｜云はかり。　⑦附直し｜付直し。初の句｜はしめの句。　⑧直すへ

しとてーなをすへしとて。今のーいまの。

贄①此ノ句ノ頭ニ「(曲)」トアル。③しまひけりー仕舞けり。付侍るかー附侍るか。④をかしからされはー笑しからされは。又前を乞てーまた前を能考て。此句を附なほすー此句を付直す。思ふてー思ひて。附直し侍るやー付直し侍るや。⑤朝雲ーあさ雲。のとかにー長閑に。機嫌よかりしーきけん能りし。初にーはしめて。附侍れとー付侍れと。⑥きれいーきれり[マヽ]。けしきー氣色。いふはかりー云はかり。⑦附直しー付直し。⑧五文字にはなりけりー五文字にはなし給へり。

架②咲こほれー咲きこほれ。④又前を乞てー又前を乞うて。思ふてー思ひて。

訓讀

にっと朝日にむかふ横雲

青みたる松より花の咲きこぼれ　去來

先には「すつぺりと花見の客をしまひけり」と、付侍るが、先師の顔つきをかしからざれば、又前を乞うて、此の句を附けなほす。先師曰はく、いかに思うて附直し侍るや。予曰はく、朝雲ののどかに機嫌よかりしを見て、初めに附侍れど、能く見るに、此の朝雲のきれいなるけしき、いふばかりなし。これをのがしては、詮なかるべしと思ひ、附直し侍る、といへり。先師曰はく、やはり初めの句ならば三十棒なるべし。尚、陰高きを直すべしとて、今の五文字にはなりけり。

口譯

「につと朝日にむかふ横雲」「青みたる松より花の咲きこぼれ　去來」――この、わたくしの附句は、初めは、「すつぺりと花見の客をしまひけり」と、作つてみたのでございましたが、師翁はそれを耳になさつて、さも面白くないと仰せになりさうな、お顏色をなさいましたので、もう一度、前句を乞ひうけて今度は「陰高き松より花の咲きこぼれ」と附け直しました。さうしましたら、師翁は「何と考へて、附け直したのですか。」とお尋ねになりましたので、わたくしは「前句の、朝雲の長閑に心地よい點だけを捉へて、初めは『すつぺりと』の附句をいたしましたが、よく考へて見ますと、この前句は、朝日に向ふ横雲の麗はしい景色がたとへやうもない點を主眼とした作でありますので、この點を見逃してはならぬと思ひまして、附直したのでございます。」と、申しました。すると、師翁は「よく分つてくれましたね。やはり始めの句でしたら、一叱り叱らなければならぬと思つてゐましたよ。なほ、附直した句の『蔭高き』とあるのは『青みたる』と直した方がいゝでせう。」と、仰せられまして、今の五文字に結着いたしたのでございます。

【語釈】

①**につと**　にゆつと。突然にあらはれ出るさま。　①**横雲**　棚引いてゐる雲。　③**すつぺりと**　すつぺり。さつぱりと。すつかり。　③**付ける**　附句を作ること。連句一巻のうち發句以外はすべて前句を受けて作つた附句である。　④**前。**　前句。連句にあつて、附句をつける直ぐ前の句。　④**乞ふ**　願ふ。望む。求む。もらふ。　⑤**のどかに**　のんびりと。　⑦**詮なし**　甲斐がない。　⑧**三十棒**　禪家でいふ覺醒の三十棒の意。卽ち　禪家の宗匠學人を警醒する語で、俗刑の笞杖に擬するも

の。但し常に罰棒の場合のみではなく、褒貶の二意を含む。『禪林類集棒喝』に「徳山示レ衆云。道道。道得也三十棒。道不レ得也三十棒。」とある如く、棒は徳山に初るとするのが通說である。なほ同書には、「睦州見二僧來一云。見成公案放二汝三十棒一。」等とあり、『碧巖第一則着語』に「好レ與二三十棒一。」等と見えてゐる。但し、この禪家の三十棒も俗刑の三十棒又は三十敲と全然無關係の物でもなささうである。敲は德川時代庶民に課した刑罰の一。傳馬町の牢屋の表門の前に筵を敷き、罪人を裸にして此處に据ゑ、下男四人罪人の手足を押へ、打役は棒を以て罪人の背部又は臀部を敲き、打役筆頭はその棒數を讀み、罪人失心の際には藥を與へた。五十敲・百敲等の別があつた。然し、此處では、叱責といふ程の意味である。なほ明和八年に『誹隱三十棒』といふ書が出板されてあるが、この內容は、江戶座と雪門とが『俳諧雪おろし』『麥すり古義』『遲八刻』『俳諧一字般若』等によつて論爭を續けたのを傍から批判したものである。更に『去來抄』の「同門評」中、赤人の句の章にも三十棒の使用例がある。

參考

この「につと朝日に」及び「青みたる」の句の出典は『となみ山』で、同書所收の歌仙「鶯に」の卷の名殘裏二句目及び三句目に相當するが、文字には小異同がある。その歌仙は次の如くである。

鶯に朝日さす也竹閣子　浪化
　禮者うすらぐ春の靜さ　去來
やぶ入の見やげ似合にこしらへて　同
　又時の間にわるうなる空　化

火燵切塞もちかしくれの月　同

　ひろい處を丸口にかかる　來

旅人に錢をかはるゝ田舍道　同

　かひこの臭き六月の末　化

雫たる網を一ぱい引ちらし　同

　小屋敷並ぶ城の裏町　來

謂分のちよつ〳〵と起る衆道事　同

　梅咲そめて立花はやらす　化

年中を松の内より料理くひ　同

　いせの狀日のいそがしき春　來

上紺の木綿合羽に傘さして　同

　湯屋の手透は八ツさがり也　化

名月のもやう互にかくしあひ　同

　一アでもなき梨子の切物　芭蕉

玉味噌の信濃にかゝる秋の風　同

　不足な寺を無理に持する　來

右の手の振ひしだひに強ふなり　同
點かけてやる相役の文　化
此の宿をわめいて通る鮎の鮓　同
青田うねりて夕立のかぜ　蕉
平めなる石を敷たる行水場　同
給仕をさせて馬夫が食喰　來
月くらき夜の鹽梅を星で見る　同
聖靈棚はよほど窮屈　化
しのぶ間を踊に出るとおもはせて　同
來てうからかす去年の傍輩　來
參宮といへば盜もゆるしけり　化
につと朝日に迎ふよこ雲　蕉
蒼みたる松より花の咲こぼれ　來
四五人とほる僧長閑なり　化
薪過町の子共の稽古能　蕉
いづくも春にしたきよの中　來

この「につと朝日に」及び「靑みたる」の句に就いて、『花實集』には、

につと朝日にむかふ横雲　去來

靑みたる松より花の咲こぼれ

此附句始に、すつぺりと花見の客を仕舞けり、と附侍る。附ながら先師の顏つきをかしからず。又前を乞て此句を附直す。先師曰、いかにおもひて附直し侍るや。去來曰、朝雲の長閑に機嫌能(よか)りしを見て始に附侍れど、能見るに此朝の奇麗なるけしきいふばかりなし。是をのがしては詮なかるべしとおもひかへして直し侍る。先師曰、やはり始の句ならば三十棒なるべし。猶陰高きを直すべしと、今の五文字になりにけり。

と見えてゐる。

この章は附句論の一端を披瀝したものであつて、次の數章と讀合せて見るべきものであるが、なほ『去來抄』の「修行敎」の中にも、次の如き記載がある。

牡年曰、句の位とはいかなる事にや。去來曰、前句の位を知て附る事なり。たとへよき句ありとも、位應ぜざればのらず。先師の戀の句をあげていはゞ、

上置の干菜きざむもうはのそら

馬に出ぬ日は內でこひする

前句は人の妻にもあらず、武家・町人の下女にもあらず、宿屋・問屋の下女なりと見て、位を定めたる

もの也。

細き目に花見る人の頬はれて

　役者もやうの袖のたきもの

前句のさま、今やうの女と見ゆ。

　尼になるべき宵のきぬ〴〵

月影に鎧とやらん見すかして

前句いかにも可然(しかるべき)ものゝふの妻と見ゆ。

　ふすまつかんで洗ふあぶら手

懸乞に戀のこゝろを持たせたや

前句町家のこしもとなどいふべきか。是をもて他はなずらへてしらるべし。

去來曰、蕉門の附句は前句の情を引來るを嫌ふ。たゞ前句は是いかなる場、いかなる人と、其事其位をよく見定め、前句をつきはなして附くべし。

更に『三冊子』には、

師の曰、付といふ筋は、匂、響、俤、移り、推量などゝ形なきより起る所也。こゝろ通ぜざれば及びがたき所なり。

とも記されてある。

積翠園の『去來抄評』には、

○につと朝日云々。

すつぺりと客を仕廻ふたるとは、情のみに落て姿なし。此句陰高き松より花の咲こぼれと、はじめ句作りありしを、其雅語を面白しとして句作するは、其木の高さは勿論ながら、前句へうつり面白からず。青みたるとは、朝日のあかきにうつりを見るべし。歌にも陰高きとあり。其高きは横雲を見上たると、其理論にわたる輩は論ずるにたらず。

と見えてゐる。

三三　梅にすゝめの枝の百なり　　去來 ①

是は歳旦の脇なり先師深川にて聞て曰此梅は二月の氣色なり去來い ②

かにおもひ誤て歳旦の脇には用ゐけるとなむ ③

校異

久②是は—此は。脇なり—わき也。深川にて—深川に。氣色なり—氣色也。③おもひ誤て—おもひ誤りて。用ゐけるとなむ—用ゐけるとなん。

帝①すゝめー雀。　②脇なりー脇也。深川にてー深川に。氣色なりー氣色也。　③おもひ誤てー思ひ誤りて。用ゐけるとなむー用ひけると也。

落①すゝめー雀。　②深川にてー深川に。此梅ーこの梅。二月ー如月。氣色なりー景色なり。　③おもひ誤てー思ひ誤りて。用ゐけるとなむー用ひけるやとなり。

青①すゝめー雀。此ノ句ノ頭ニ「（芭）」トアル。　③おもひ誤てー思ひ誤りて。用ゐけるとなむー用ひけるとなん。

賛①すゝめー雀。百なりー留なり。此ノ句ノ頭ニ「（芭）」トアル。　③おもひ誤てー思ひ誤りて。用ゐけるとなむー用ひけるとなん。

架②聞てー聞いて。　③おもひ誤てーおもひ誤つて。

訓読

梅にすゞめの枝の百なり　去來

是は歳旦の脇なり。先師深川にて聞きて曰はく、此の梅は二月の氣色なり。去來いかにおもひ誤りて、歳旦の脇には用ゐけるとなむ。

口譯

「梅にすゞめの枝の百なり　去來」――この句は歳旦の發句に、わたくしが附けてみました脇の句でございます。

師翁は、深川の芭蕉庵で、このわたくしの脇をお聞きになつて、「この梅の句は、二月の景色です。歳旦の發句の

脇には、やはり歳旦らしい景物を用ゐた方がよいのに、どうして去來ほどのものが、思ひ誤つて、この梅の句を歳旦の發句の脇になどしたのでせう。」と、仰せられたといふことでございます。

語釋

①百なり　なりものが數多く密集して枝に生ずること。此處では、雀が多く群つて梅の枝にとまつてゐることの形容である。**②脇**　連句にあつて、發句につけた第二句目の句、卽ち七七の短句をいふ。『誹諧名目抄』には、「師曰、散樂の脇をするといふ事、元來連歌の脇より出たる名目なり。然ば脇句は發句へのあしらひ第一なる事、是にて覺悟すべし。脇本陣・脇庄屋・すまふの關脇等、みな同意なり。」とある。「脇句」ともいふが「脇」といふ方が正しい。 **②此梅は二月云々**　梅は正月の季題であるけれども、此の梅の句は正月の敍景らしくは見えないとの意。

參考

この「梅にすゞめの」の句の出典は、『去來抄』以外には未だ寓目せぬ。

さて、この「梅にすゞめの」の句に就いて『旅寐論』には、

我とし比、歳旦三ッ物を作といへども其所をしらず。又、先師も汝が三ッ物其格にあらずと、とがめ給ふ事なし。其中、發句はわすれぬ。脇は、

梅に雀の枝の百なり　去來

先師深川にて此句を評して、これ二月の氣色也。去來はいかゞおもひあやまり侍るやと、のたまひける
となん。

とある。

この章では、附句の中の脇が問題になつてゐるのであるが、連句の脇の作法に關しては『三册子』に次の如く
詳述されてある。

師の句を以て其筋のあらましをいはゞ、

あれ〳〵て末は海行野分かな

鶴のかしらをあぐる粟の穗

蔦の羽もかいつくろひぬ初しぐれ

一吹風の木の葉しづまる

此脇二は、前後付一體の句也。鶴の句は、野分冷じくあれ、漸くおさまりて後をいふ句なり。靜なる體
を脇とす。木のはの句は、ほ句の前をいふ句也。脇に一あらし落葉を亂し、納りて後の蔦のけしきと見
込て、發句の前の事をいふ也。ともにけしき句也。

寒菊の隣もありやいけ大根

冬さし籠る北窓の煤

此脇、同じ家の事を直に付たる也。內と外の樣子也。煤の字有て句とす。

しろべして見せばやみのゝ田植うた

笠あらためん不破の五月雨

此脇、名所を以て付たる句也。心は不破を越る風流を句としたる也。

秋の暮行先〳〵の笘屋かな

荻にねようか萩に寐ようか

此脇、發句の心の末を直に付たる句なり。

菜種干す莚の端や夕涼み

螢迯行あぢさいのはな

此脇、發句の位を見しめて事もたく付る句也。同前裁其あたりの似合數物を寄。

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申

古人かやうの夜の木がらし

此脇、凩のさびしき夜、古へかやうの夜あるべしといふ句也。付心はその旅寐心高く見て、心を以て付たる句也。

おくそこもなくて冬木の梢哉

小春に首の動くみのむし

この脇、あたゝかなる日のみの虫なり。あるじの貌に、客悅のいろを見せたるはたらきを付たる句也。

市中は物の匂ひや夏の月

あつし〳〵と門々の聲

此脇、匂ひや夏の月、と有を見込て、極暑を顯して見込の心を照す。

いろ〳〵の名もまぎらはし春の草

うたれて蝶の目をさましぬる

此脇は、まぎらはしといふ心の匂に、しきりに蝶のちり亂るゝ様思ひ入て、けしきを付たる句也。

折〳〵や雨戸にさはる荻の聲

はなす所におらぬ松むし

この脇、發句の位を思ひしめて、匂よろしく事もなく付たる句也。

又、同じく『三冊子』には、

ほ句に三月に渡る景物出る時は、わきにて當季を定むべし。是は連歌の習也。俳にも其心遣ひ也。師のいはく、ほ句に、神祇・釋教其外一事ある時は、應じて脇すべし。たとへ詞に出さずとも心にはあるべし。但水祝などの季一通りにして云句は、脇に戀なくてもあるべし。たゞほ句に依べし。對付・違付・うち添ひ留の類、むかしより云置所也。師云、第一ほ句をうけてつりあひ專にうち添て付るよし。句中に作を好む事あるべし。留りは文字すはり宜すべし。かな留め自然にある心得口決あり。第一應對介體の心とおもふべし。作者心得べきは、先ほ句出るとよく聞しめさせる事見えずとも、作者より句意をあ

らはすやうに挨拶して、よく聞ふせて脇すべし。心とゞかざれば、無禮にして無下成事也。たとへば連哥のほ句は聯句の唱句也。脇は對也。此格を以て文字留也。詩聯句に習て韵といふ也。

とも記されてある。その他、『二十五箇條』には、

脇はしつかりと、韵字にて留といふは、まづは初心への教なり。定の字にかなへむがため也。

『山中問答』には、

脇の句は發句と一體の物なり。別に趣向・奇語をもとむべからず。たゞ發句の余情をいひあらはして、發句の光をかゝぐる也。脇に五つの附方あれども、これみな附やうの差別にして、外に趣向を覓るにあらず。

『宇陀法師』には、

脇に五つの仕やう有。其外ひとからみ・對付・拾ひ付・大小の脇など云事有。當流用捨多し。發句の季三月に渡る物ある時、脇の句にて其月を定る事連哥の式也。

とある。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○梅に雀の云々。

元日や晴て雀の物語り、と嵐雪が發句あり。然ば、此句難ずべきにあらず。さるを此句を二月の景色とて嫌ふ式、脇は發句に實にのがれぬやうに作るべきの教と知るべし。發句は元日に雀の集りて啼べき事

ともおもはれざりけるに、元日にはや春とて、二月頃のごとく、雀のあつまりて居るよと、其感を嵐雪が起し侍る。（註。嵐雪の「元日や晴れて雀の物がたり」の句をいふ。）此處が發句の魂にして、脇とは格別のさた也。と見えてゐる。

兲　船にわつらふ西國の馬　　彦根の句也　①

許六こゝろみの點を乞ける時此句に長をかけたり先師曰いまはかゝ　②
る手帳らしき句はきらひ侍る是等は手帳なり長あるへからす重て上　③
京の時此句何ゆゑに手帳に侍るや先師曰船の中にて馬の煩ふ事はい　④
ふへし西國の馬とまてはよくこしらへたる物なりとなむ　⑤

校異

久①船―舟。わつらふ―煩ふ。馬―むま。彦根の句也―彦根の句。　②こゝろみの點―こゝろ見の點。乞ける―乞ひける。此句に―此句を。先師曰―先師に窺ふに先師曰。かゝる手帳―手帳。　③句はきらひ侍る―句も嫌ひ侍る。是等は手帳なり―是等の句手帳也。あるへからす―あるへからすと也。重て―曾て。　④上京の時―上京の時問曰。此句何ゆゑに―此句いかなる處。いふへし―謂ふへし。　⑤よく―能。物なりとなむ―物也となん。

商①わつらふ—煩ふ。彦根の句也—彦根の句。　②こゝろみの點—試に點。かけたり—かけけり。先師曰—先師に伺ふに先師曰。いまは—今は。かゝる手帳—手帳。　③句はきらひ侍る—句も嫌ひ侍る。是等は手帳なり—是等の句手帳也。あるへからす—あるへからすと也。重て—曾て。　④上京の時—上京の時問曰。此句何ゆゑに—此句いかなる所。手帳に侍るや—手帳に侍る也。船—舟。　⑤西國の馬とまては—西國とまては。よく—能。物なりとなむ—もの也となむ。

落①船—舟。わつらふ—煩ふ。彦根の句也—彦根の句。　②許六—許六に。こゝろみの點—試みに點。乞ける—乞ひける。かけたり—掛たり。いまは—今は。かゝる手帳—手帳。　③句はきらひ侍る—句も嫌ひ侍る。あるへからす—あるへからすとなり。　④上京の時—上京の時問て曰。此句何ゆゑに—いかなる所。船—舟。馬の煩ふ事は—馬煩ふとは。いふへし—云ふへし。
⑤西國の馬とまては—西國の馬と迄は。よく—能く。こしらへたる—拵へたる。物なりとなむ—ものなりとなり。

青⑴わつらふ—わつろふ。彦根の句也—彦根の句なり。此ノ句ノ頭ニ「丗」トアル。　②こゝろみの點—試の點。此句に—此句を。先師曰—先師に伺ふに先師曰。いまは—今は。　③あるへからす—有へからす。　④上京の時—上京のとき問ふて曰。此句何ゆゑに—この句何かゆへに。　⑤物なりとなむ—物なりとなん。

贊①西國—兩（西カ）國。彦根の句也—彦根の句なり。此ノ句ノ頭ニ「丗」トアル。　②こゝろみの點—試の點。此句に—此句を。先師曰—先師に伺ふに先師曰。いまは—今は。　③手帳らしき—手張（マヽ）らしき。是等は手帳なり—是等は手張也。あるへからす—有へからす。　④上京の時—上京のとき問ふて曰。此句何ゆゑに—此句何か故に。手帳に侍るや—手張に侍るや。　⑤物なりとなむ—物なりとなん。

架③重て—重ねて。

【訓読】

船にわづらふ西國の馬　彦根の句也

許六、こゝろみの點を乞ひける時、此の句に長をかけたり。先師曰はく、いまはかゝる手帳らしき句はきらひ侍る。是等は手帳なり、長あるべからず。重ねて上京の時、此の句何ゆゑに手帳に侍るや。先師曰はく、船の中にて馬の煩ふ事はいふべし。西國の馬とまでは、よくこしらへたる物なりとなむ。

【口譯】

「船にわづらふ西國の馬　彦根の句也」――許六が試みに此の句の點を乞はれました時に、秀れた句と思うたのでございませう。この句に長點をつけました。すると、師翁はそれをお聞きになられて「昔はこれでもよかつたかも知れませんが、近ごろは、この句のやうな、巧を弄した句は賞める人が尠くなりました。それは、當然のことでせう。この句などは、言ふまでもなく手帳の句です。これに、長點などを附けてはいけません。」と、仰せになられました。わたくしには、その時、この句が手帳であるといふお言葉が、よく分りませんでしたので、師翁が、次に御上京になられた時に、「この句は、どうして手帳の句なのでございますか。」と、お伺ひいたしますと、師翁は「船の中で馬が煩ふといふ事までは、句にすることも出來ませう。けれども、それを『西國の馬』とまで言ふのは、よく〳〵こしらへ過ぎたものと、言はなければなりますまい。」と、仰せられました。

語釋

①**わづらふ**　惱み苦しむ。病氣にかゝる。　①**西國**　我國西部の稱。その範圍は明確でない。もとは九州の稱であつたらしいが、屢々中國・四國を含んでも用ゐられ、時には、三關以東の諸國に對して、三關以西の諸國の義にも用ゐられた。西國三十三所といふやうな場合は其の例である。　①**彥根**　近江犬上郡の小都市。舊井伊氏三十五萬石の城下で、有名な彥根城がある。彥根にゐた蕉門の人達には、許六を始めとして、李由・木導・汶村・朱廸・毛紈・程己・吾仲等があり、大津・膳所等にゐた湖南の連衆に對して、湖東の連衆とも呼ばれた。彥根の句とは、かうした人々のうちの作との意。　②**點**　品評。評點。　②**長**　長點。點の中には平點・長點・珍重點などがあるが、長點は佳句に對してつける點の意。なほ、長をかけるとは、長點をその句につけることであるが、句の上に點印をつけるために、これをかけると言ひならはしてゐる。　③**手帳**　當時の評語で、巧を弄して云ひ過ぎた嫌ある句を云ふ。

參考

この「船にわづらふ」の句の出典は、刊本では『去來抄』以外には未だ寓目せぬ。但し、彥根龍潭寺所藏の寫本『許六句集』に據れば、同書所收の連句中、馬佛・許六・米巒・木導の四吟歌仙「笠椴(かさだに)に」の卷の初裏六句目に相當してゐる。參考の爲め、その歌仙一卷を揭げれば、次の如くである。

市中

笠椴(かさだに)に中(うち)の灯(ひ)移る暑さかな　　馬佛

破風にやどりし夏の三日月　許六

行水の長雪院にさめ果てゝ　米潛

鷹乘物のなまぐさき也　木道

麓より毎日通ふ豆腐賣　六

奥から口へ同じ狩野の繪　佛

小皷に淺黄調のいかめしき　道

蠟燭の炎に光る剃たて　潛

老僧の女車に手を懸て　佛

扇を口にかざすたしなみ　六

見しり置ク舞臺小袖のなつかしく　潛

舟に煩ふ西國の馬　道

夕月の出づれば明日の味噌すりて　六

踊崩れに寢た子おびえる　佛

田を買し伏見の秋の餘マヽ力衆　道

首きられても走る鷄　潛

發心の愚案半に花もちり　六

裏(うち)へ這入ればくらき春の日　道
彼岸から民の仕事のいそがしく　佛
汁かけて出す馬士の食　六
風吹に桐油の繼めばら〱と　ラン
一間臺に干鯛一箱　佛
竹賣の旛(のぼり)節句を心がけ　道
植田の苗の袖付るころ　樗
初(うひ)旅の我慢を跡に笑れて　六
抱てかふちに印とらする　道
きぬ〲にふすまの歌の返歌なく　フツ
酒打かけてしめす袖口　六
川御座を晝から下す後の月　ラン
鴫落し込む水かれの蘆　フツ
初瀬山堂を見付て秋の風　道
油草集て番々に持　樗
急雨に團の舟を打ながし　六

干飯して置く乞食の軒　　佛

尋入ル並木の花の奥は寺　　道

藤もかづらもかゝる立石　　稽

即ち、これに依つて「舟に煩ふ」の句は、許六が一座してゐる連句に於いての附句であつて、その作者は木導(寫本に木道とあるのは略字)であつた事を明かになし得たのである。

さて、この章では「長點」といふ事が問題にされてゐるが、「長點」とは言ふまでもなく、「平點」に對する語である。芭蕉が、『芭蕉門人古人眞蹟』の中に於いて、探丸・拙許・式之の三吟歌仙に、點評を附したものを見るに、その奥書には、

二十五點

内　長七

〇四七

近比感心仕候。

武陽　芭蕉庵桃青印

とある。こゝに「内長七」とあるのは、點をかけた二十五句の中に、長點の句が七句あるとの意である。

『點印論』に依れば、

哥の點は八分とかや。詩に圈批楚滿の四點有。、圈也。一句一字の感也。批は圈を越もの也。一點の如くに長く引く句の章を褒美す。楚は長點也。たとへば三五夜中新月色、一字も屑たき句を、楚のごとく

立のびたる姿にたとへたり。滿は七言四句滿足せるを以て、二十八字こと〳〵く一、を點じて義を分たり。俗に四點八點と云は、その判談の詞に爲〻持と同じ事なり。たとへば圈一、の文字にて、詩の章面白く成ゆへ批點を倍し、批の章に楚の位を倍階して、をのづから滿りと褒美したる、一詩の八點にむかふ心を以て、もの事にけぢめなきことを、四點八點をとらぬといふ也。此事、梵千長老に承りて、俳諧に倍點を用ゆる事をはじめ侍る。それよりして、家々の點形、物數奇かはる〳〵に風流をつくされたり。ことしより花影上欄干の字、新月色の字、回雪の二字に改め侍るも、此道、雪月花の三を專らにかざやかすわざなれば也。雁字は雲上に翔る句のひゞきに應ずるものか。屯字はその屯をとる也。尤句に群をなすの趣のみ也。十哥仙に於ては、二字已上の評義、これ其勝劣を論ぜざるの旨也。

と見え、また『俳諧十論』の「法式の論」の一節には、

判者の心得といふは、宗匠の一體別名ながら、釋門に佛と菩薩とのごとき、三十二應の自在を得て、世法をあつかふに分別あらん。されば詩哥の勝劣は、昔より君子の射にならひて、連俳は賭物をあらそふ時もあれば、道を損ずるも判者にあり、道を益するも判者にあり。況や百韻の點式には長點の法あり、圈點の格あり。秀逸の印は例の危ければ、點も無點も判者の變といふべし。第一に判者の心得は、俳諧一道の點といふ事をしるべし。本より其卷にむかふ時は、宗匠の附合を聞に殊ならず。指合は筆者の役なれど、目にあたる時は斷るべし。さて一道の點といふは、判者の心の好所を捨て、例に當句のよしあしになづまず、附合のはこびの會釋と見えば、たとへ心にいらずとも、一點加ふるは勸懲の法なり。い

でよそ一本の筆を動かして、一國一城の人をなびけ、西へも東へもむかすべきに、其人は判者の癖をまなべば、判者は其癖に化粧をつけて、果は其黨の相詞となりなむ。

『靭随筆』には、

むかしの長點は、巻中の秀逸とする也。その後風流うつりて、趣ある句を長として、抜群とはせず、沾徳いはく、發句・脇・第三までは、主客功者のすることとあれば、さはることなくば、第三まで長點然るべしとなり。近來は、發句より表八句、大かたぬしなき句にて、咏藻したゝめける。沾徳のこともいたづらに成りたり。

『随齋諧話』には、

近來風體抄に曰、點に長點とて二つ引事いかなる事ぞと試しに、まづ基俊の悦目鈔に、點の長さあまりおびたゞしく長く引事、口傳なきがいたす處也。長點一寸二三分に過ぐべからず。平點は七八分乃至一寸なるべしと書たり。また備州に、宗祇の點の巻あり。點の長短ばかりあり、二つ引し點はなかりしなり。またいつのころか、烏丸資慶卿へある人歌の點を乞しに、點の長短のみ有て、奥書に、歌の勝劣は點の長短を以て定むべし、とあそばしたるなり。かれ是おもふに、長とはながき也。一分二分のあらそひも、たび定めがたき事なれば、二つ引て長のしるしとするなるべし。

などと見えてゐる。更に「長點」(點印)に關する記載としては『去來抄』の「同門評」中に、

あさがほに箒うちしく男哉　風毛

魯町曰、此句或人の長點也、いかゞ。去來曰、發句といはばいはれんのみ。

ともあり、『三冊子』には、

或二三子、俳諧にしほこりて、歌仙二三卷老翁に點を乞ふ。師是をうけず。再三の後その人に對していはく、皆秀作也。しかれども、我おもふ所に非ず、しゐてとらんとせば、是彼の內、此二三やり句と捨られし物や取侍らんと也。その人猶思ひやまずして、終に老師の門に入となり。

等が見え、『誹諧世說』には、このことに關する逸話が見える。卽ち「或人其角に卷の點を乞說」に、次の如く出てゐる。

ある人其角が方へ點取の一卷を遣はすに、其卷甚初心にして、よき點すべきにもあらず。其角その卷を一ぺんさら〳〵と見て、使に返していふやう、此卷はあまり初心の事なれば、我が附墨を勞するに及ばず、連中の先輩に點を乞べしと云り。使も是非なく其卷をうけ取、さて點料も返したびてんやと云けるに、其角が云、點料は見賃におさめ置なりとて、返さざりけるとぞ。されど其角が平常風流なる事を人皆知りけるゆへ、かゝる事をなせども、誰あつて貪れりといふ人もなく、もとより風雅に私なき其角、何を以て小錢をむさぼらんや。今の宗匠顏する者の內に、其德もなく其志もいやしふして、みだりに古人の洒落に擬せんとするものもあり。甚しきものは、風雅を賣物にして短冊に價を定め、點料に甲乙を定むるに至る。悲しき哉。其角がごときは其志あつて其德あり。故に貪るも又風流なり。二三子よく戒めつゝしみて、無欲無垢の風雅人と成るべし。穴賢、卑俗におとりたる誹諧賣となる事なかれ。いに

しへ貞徳老人の連中、老人の高點すくなき事をかこちたるに、老人、

三絃の糸より細き誹諧に

點とろ〳〵といふぞおかしき

と申されけるを、連中の返しに、

三絃の糸より細き誹諧に

點ちんとろといふぞおかしき

と云かへして笑ひたりとぞ。かゝる事は只おかしきたとへのみにいひ出して、さらに貪りとおもふ人なし。是天よりおもはするところにして、平生のきよければなり。いにしへより誹諧をもて口を糊するものゝ點料を受る事は、則儒師の束修、佛家の布施に同じく、是なくてなんぞ口腹を助けんや。故にむかしの隱者桑門たりとも、外の業なく、誹諧のみをもて今日の業とするものゝ、料を定めて點を出すも、又風流家の一律なり。

更に、この「船にわづらふ」の句は、所謂旅躰の句である。『俳諧手挑灯』には、旅躰の詞として、

門出　餞別　乘掛　輕尻　蒲團張　駄賃　木賃　跡附(あとづけ)　本陣　旅籠屋　出女

駄荷　泊女　宿取　川留

と規定してあるが、單に、これだけの語彙のみに、制限される必要はない。なほ『續五論』の「旅論」を、次に援引して置く。

旅は風雅のやつれなれば、旅の情見る事かたからん。たま〳〵風雅にやつれたる人もおのれが觀相にのみ落入て、一句の姿しづむにちかし。吾翁の、ひよろ〳〵とこけて露けし、といへるも、足縱橫にふむで伊達の大木戶を越るとあるも、その人をおもへばみなたふとし。世はたのしむべく、世はかなしむべしとしりたらば、あるいはあらく、あるいはこまかに、どんすの夜着に逢ひては、年わすれの酒によひふし、一枚の薦を身にまきても、花の春をいはひありく、是を世にある自在人といふなるべし。旅はまづうきものとおぼへて、おもしろきはその日の德とおもふべし。

されば俳諧に、旅の附句ばかりにはかぎらねど、まづ旅といふ字の見ゆれば、たゞ馬・駕籠・わたし場の船とばかりおもひよりて、丸藥・干薑の附合も耳にありておかしからず。煎豆・麥焦(こがし)は順禮の時の附合とおぼゆらん。さるは旅といふ一字につけて、その外の寒暖風雨すら貴賤貧富のさかひを見さだめず。何を何に附たりとも、山川草木のすべて旅にあらざる物なし。されど附べき處に附れば、物の名に古しあたらしといふ事はあるまじ。名所舊跡などいへば、松の木を臼にするといふ附句の、行先の國〳〵にいひわたりたるは、いかなる冥加の松の木にかあらんとおかしがりしか。臼といひ松といふ名の古しといふにはあらず。この故に、旅の句と戀の句とは、中にありて骨折るべき事也。

初　旅　に　先　雨　の　降　る　ふ　仕　合

は　つ　旅　に　み　な　見　る　事　の　お　も　し　ろ　く

初旅ときけば、むすこか、むすめとおもひよらるゝに、始の初旅は、庄屋のむすこなどの參宮するにぞ

ありける。この泊より雨にふられて、連の人もあまた侍るが、柿の葉人形のように薦に穴あけて、首さし出したる人もあるに、さるは草鞋にかゆる時わるしとて、金柑の覆のやうに髭ながら身にまき廻したる人も侍り。手島御座は損のたゝぬ物とて、行末負ひありくも心ながし。されどこのむす子は若むらさきの一字のゆかりやあるらん、手習師匠に合羽かされて、この時かゝりたりとうちきぬれど、終日の雨に、うは着のゆかたもしぼるばかりなる、雨の日のふ仕合と、前句を見さだめて、

初旅に先雨の降不仕合

若衆のさがる髪の結ぶり

かくいへば、前髪の笠におされたるありさままで、など前句の意味を附落し侍らん。次に出立たる初旅のさまは、みな見る事をおもしろがれば、ねよげの草のはづかしき頃にはあらで、廿もやゝ過行たる女の情と見るべし。しからば、人のなさけ世のあはれも、おもひわくべき年のほどゝ見て、

はつ旅にみな見る事のおもしろく

男戀しう城でとしよる

かくいへば、ひたぶるおもしろきは、ひたぶる氣のつまりたる事あるべしと、言外の余情も見わたりたるは、城の一字骨折なるべし。

土橋にかゝる馬の鈴おと

富士を眞向に乗て行馬

旅に馬・かごの句はあまたありながら、一句の姿と情にて附句まち〳〵ならん。かゝる旅躰のあらんに、田打・畑打・村はづれ・宿はづれといひたらんに、つかぬ句はあるまじけれど、始の馬は土橋にかゝるといへるいきほひを見れば、我門を出て十町には過ぬ馬也。たゞ今あの土橋にかゝりたりと見送りて、

土橋にかゝる馬の鈴おと

機嫌よふ旅にたゝする親心

かくいへば、出入の姥もそこの門に立まじりて、寺のぼりの頃の稚名までいひふらし、今のゆゝしさをもほむるなるべし。次の馬は眞向に乘て行といさみたれば、心にうれしき事あらんと見さだめて、

富士を眞向に乘て行むま

元服になを奉公のおもしろく

かくいへば、御物あがりの一江戸に千石とおもひとりたるは、うかめ過て行するゑおぼつかなし。是は富士といふより見定たる旅の情なるべし。

風呂敷を片よせて置窓の下

たびねはさむき老僧の咳

かく附侍しに、風呂敷の句ぬし、片の字さし合て侍り、拵ると直し侍らんと云。しからば附句の心もたがひぬべし。

風呂敷を拵て置窓の下

始の片寄てといへば、二三日も旅にある句也。後の拵てといふ時は、をのれが家にありて、明日たゝんといふ今宵なるべし。しか又片寄て置とは、用心ぶかき年寄也。拵て置とは手まはしはやき若人也。かく老若のさかひまでもあるべし。親ごゝろのくど〳〵敷、矢橋の船にはのるな、芝居の巾着・寐所の帶の置どころまで、まして色町のわるづかひなど、たら〳〵の異見しかゝりたれば、むすこは親仁よりかしこしと聞なぐりて、小便に立ふりして友達の方へ暇乞に行たりと見て、二句のさかひ分明なるべし。されば旅・戀の二躰ばかり、あるが中に附わきがたきもの也。よのつねの附句といへど、このさかひあるまじき也。世に俳諧する人のけふもいひ、あすもいへば、おなじ事ばかりいふやうにおもへど、それはさしあたりたる氣變をしらぬ人のいひなるべし。たとへば、明くれあそびに來る人に、お出か、あがり給へといはむに、いふ人の顔つき・聲のすみにごりにて、あがれとおもふ時も有、あがるなとおもふ時もあるべし。いふ人もいはるゝ人もかはらず、詞もおなじことばなるに、得失是非のたがひあるは、是さしあたりたる氣變也。しかるを、あがれといふは、いつもあがりて、たばこ吸ふ事とのみおぼえたる人は、俳諧のみにはあらじ、仕官・商買の道にも心もとなし。まして附句などは、夕べいひたる事を今宵又いふとも、一字一點のたがはぬ事はあらじ。よしたがはずとも、今宵の氣變によるべし。旅といへばなら茶・田樂とおもひ、戀といへば紅皿・おしろいと覺ならひたるは、神樂人形の笛吹やうに、笛は鼻のあたりにも押あてつべし。世の言葉を濱の眞砂にたとへたるは、つきせぬ風雅なるべし。その砂

の數には、五色のたがひはなければ、おなじ事のひとつ〳〵わかれたる也。道は言葉をもて意をやぶるべからずといふは、意の新古を論ぜず、文章は意をもてことばをやぶるべからずといふは、意の新古を論じたるなり。道にあきらかならん人の、なにか言葉にまどひあらん。

お寺から目下に城も見ゆる也

笠しきながらたばこ吸ゐる

されば、よのつねの附句といへど、かく附たらんは、宮も寺も、山類も水邊も、おなじ事ならんや。たとへ、豆腐・こんにやくと思ひよせたりとも、寺からはといふ五文字になりて、おの字の風情は附落し侍らん。

お寺から目下に城も見ゆるなり

夜着の馳走に逢し久六

かくいへば、城下の寺の富貴を、久六がほめなぐりたるありさま、おの字ばかりならんや、樣の字なをあるべし。

隱居には灯もとぼさずに宵まどひ

垣の干葉の風にからつく

かく附たらんは、木陰の社家・在鄕寺などいはむも、おなじ附句ならんや。たとへ行水・夕食と附たりとも、灯もとぼさずといふ處は附落し侍らん。

隱居には灯もとぼさずに宵まどひ
　　先度の餅は何になつたぞ

かくいへば、本屋の女房の下部共相手にして、隱居をそしりゐるありさま迄おもひやらる。さるは世にありふれたる情なるべし。

されぱとて、附句は、暑さいかむ、寒さいかむと、前句を料理して附たらんは、土圭の中のからくりを見るやうにて、むづかしき糸のむすぼれも侍らん。明くれ枕の上の工夫をその座にあたりていはんに、よきもあしきも、その情にいたりてしるべき事也。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○船にわづらふ云々。

今嫌ふとは、貞享の頃までは、此趣向一句にたしか成處をはたらき侍る。元祿には、船の中にて馬の煩ふと作るべし。是句にゆるみありて、心に西國方の大名の馬と聞へし、是を餘情ともいふ。前句へ付ては西國ときこえ侍れど、其船に煩ふ馬を東國の馬とも、渡し船の俄煩ひ共、又附句より變化して行かれるやうに句にゆるみある、其ゆるみより一卷のはこびよろし。是元祿の專とする所、他門に一句の落着曲節を好むとは、格別なるを知るべし。

と見えてゐる。

三七　弓張の角さし出す月の雲　　去來 ①

去來問曰此句も手帳なるへきや先師曰手帳ならす雲も角も弓張月も ②
いはねは一句きこえす ③

校異

久異同ナシ。

商②去來問曰—去來曰。雲も角も弓張月も—雲も弓張月も。　③一句きこえす—聞へす。

落②去來問曰—去來曰。雲も角も弓張月も—雲も角も弓張も。　③いはねは—云はねは。一句きこえす—一句聞えす。

青①此ノ句ノ頭ニ「(卅七)」トアル。　③一句きこえす—一句聞えす。

贊①此ノ句ノ頭ニ「(卅七)」トアル。　②此句も手帳—此句も手張。曰手帳—曰手張。　③一句きこえす—一句聞えす。

架異同ナシ。

訓読

弓張の角さし出す月の雲　　去來

去來問うて曰はく、此の句も手帳なるべきや。先師曰はく、手帳ならず。雲も角も弓張月も、いはねば一句きこえず。

口譯

「弓張の角さし出す月の雲　去來」――わたくしはこの句を作つてはみましたものゝ、多少不安でございましたので、師翁に「この句も手帳でございませうか。」と、お伺ひいたしますと、師翁は「いや、この句は手帳ではありません。雲も角も弓張月も、みな必要な言葉で、言はなければ、一句の景趣が通じません。言はでものことまでを句の上に並べて、徒に巧を弄したものと同一にはできませんよ。」と、仰せになりました。

語釋

①**弓張**　弓張月。弓形をなしてゐる月、卽ち弦月。半月。弓張の角とは、弓張月の一端が雲から出た所を、角に見立てたもの。

參考

この「弓張の」の句の出典は『去來抄』以外には未だ寓目せぬ。

なほ、この「弓張の」の句は、恐らく月の定座の句であらうと思ふが、連句に於いては、月又は花の定座の句の作者は、一座中の先輩或は上手に囑すべき定めになつてゐたものである。『葛の松原』には、これに關して、次

の如き記載がある。

さりぬべき人〳〵の會にも、句の所をあらそひ、月花の座をねらふ事、いかにあさましや。人その位にあらましかば、などおのれが心にも叶ざるべきや。物はかならずおくれよと、古風の老子も申され侍りしを、かゝる事、風雅の上のみにもかぎらじ。

因みに『猿蓑』中の連句の中から、月の定座の句に、それ〴〵の前句を添へて、次に列擧してみる。

たぬきをおどす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　芭蕉（鳶の羽の巻）

此春も盧同が男居なりにて　史邦
さし木つきたる月の朧夜　凡兆（同　）

おもひ切たる死ぐるひ見よ　史邦
青天に有明月の朝ぼらけ　去來（同　）

僧やゝさむく寺にかへるか　凡兆
さる引の猿と世を經る秌の月　芭蕉（市中の巻）

てんじやうまもりいつか色づく　去來
こそ〳〵と草鞋を作る月夜さし　凡兆（同　）

あぶらかすりて宵寢する秋　芭蕉

新疊敷ならしたる月かげに　野水（灰汁桶の卷）
金錣と人によばるゝ身のやすさ　芭蕉
あつ風呂ずきの宵〳〵の月　凡兆（同）
何おもひ草狼のなく　野水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　芭蕉（同）
しとぎ祝うて下されにけり　素男
片隅に虫齒かゝえて暮の月　乙州（梅若菜の卷）
雀かたよる百舌鳥の一聲　智月
懷に手をあたゝむる烑の月　凡兆（同）
此夏もかなめをくゝる破扇　園風
醬油ねさせてしばし月見る　猿雖（同）

積翠園の『去來抄評』には、

○弓張の云々。

去來が問は、馬の船にて煩ふは西國の船路なれば、是定たる事也。其定たる事をいふを手帳といへるにやとおもひて、此弓張月は角の有物故、其角の雲より出るは定たる事故、是も手帳にやと問たるなるべし。ばせをの手張ならずと答しは、發句は其姿の眼前をいへば、弓張月の少し斗雲間より出たる、その

わづか成處を見付て、感じて言出せる、其姿をとれば、手帳にあらず。有べき事の中に見付て句にすると、又誰々も常見に見る事との境あり。上手はよき事を見付、下手はあしき事を見付る、此物好を、よしともあしともいふが、發句なるべきか。

と見えてゐる。

三八　丁稚か擔ふ水こほしけり　　凡兆 ①

初は糞なり凡兆曰尿糞の事も申へきか先師曰嫌へからすされと百韵 ②
といふとも二句に過へからす一句なくてもよからむ凡兆水に改む ③

校異

久①丁稚―てつち。擔ふ―荷ふ。　②初は―初めは。事も―事。百韵―百韻。　③過へからす―過くへからす。よからむ―よからん。此ノ章ニ續イテ、次ノ一章ガアル。「妻呼雉子の身をほそうする　去來　初は雉子のうろたへてなく也先師曰去來かくはかりの事をしらすや凡句には姿といふ物有同し事をかくいへは物おと也」。

帝①丁稚―てつち。擔ふ―荷ふ。　②事も―事。嫌へからす―嫌ふへからす。百韵―百韻。　③なくても―なくとも。よからむ―能からん。凡兆―兆。此ノ章ニ續イテ、次ノ一章ガアル。「妻呼ふ雉子の身を細ふする　去來　初は雉子のうろたへて啼

也先師曰去來かく斗の事をしらすや凡句は姿といふ物あり同し事をかく姿とはなる物をと也」。

落①擔ふ―荷ふ。こほしけり―こほしたり。　②嫌へからす―嫌ふへからす。百韵―百韻。　③いふとも―云ふとも。過へからす―過くへからす。よからむ―能からん。此ノ章ニ續イテ、次ノ一章ガアル。「妻呼ふ雉の身を細うする　去來　初は雉のうろたへて鳴くなり先師曰去來斯ばかりのことを知らすや凡そ句には姿と云ふ物有り同し事も斯う云へは姿とは成るものとなり」。

青①丁稚―てつち。擔ふ―荷ふ。こほしけり―こほしたり。此ノ句ノ頭ニ「(朔)さるみの」トアル。　②糞なり―糞也。嫌へからす―嫌ふへからす。百韵―百員。　③過へからす―不可過。よからむ―よからん。改む―あらたむ。此ノ章ニ續イテ、次ノ一章ガアル。「(朔)妻よふ雉子の身を細うする　去來　初は雉子のうろたへてなく也先師曰去來かく斗のことをしらすや凡句は姿といふものあり同し事を成て姿とはなる物をとなり」。

贄①丁稚―てつち。擔ふ―荷ふ。こほしけり―こほしたり。此ノ句ノ頭ニ(朔)猿蓑」トアル。　②嫌へからす―嫌ふへからす。百韵―百員。　③過へからす―不可過。改む―あらたむ。此ノ章ニ續イテ、次ノ一章ガアル。「(朔)妻よふ雉子の身を細ふする　去來　初は雉子のうろたへて鳴先師曰去來かくはかりの事をしらすや凡句は姿といふものあり同し事を成して姿とはなる物をとなり」。

架②嫌へからす―嫌ふへからす。　③過へからす―過くへからす。

訓讀

丁稚(でっち)が擔(にな)ふ水(みづ)こぼしけり　凡兆(ぼんてう)

初めは糞なり。凡兆曰はく、尿糞の事も申すべきか。先師曰はく、嫌ふべからず。されど、百韻といふとも二句に過ぐべからず、一句なくてもよからむ。凡兆、水に改む。

口訳

「丁稚が擔ふ水こぼしけり　凡兆」――初めはこの凡兆の句は「丁稚が擔ふ糞こぼしけり」といふのでございました。けれども、凡兆が、師翁に「糞尿などの事も、一巻の中に言出して、よろしいものでございませうか。」とお伺ひいたしますと、師翁は「それは言うても差支へありませんが、百韻でさへも、糞尿を詠んだ句が二句以上もあれば、目立ち過ぎていけません。又かうしたことは、百韻の中に一句もなくてもいゝものです。」と、申されました。そのお言葉を伺つて、百韻でさへもその位のことならば、まして歌仙の中の一句としては少し穏かでないと、凡兆も考へたのでせう。みづから、この句の「糞」を「水」に改めたのでございました。

語釈

①**丁稚**　職人又は商人が年期を定めて使ひ育てる幼年者をいふ。　②**百韻**　百句で一巻満尾する連句の本式である。蕉門にあつては、比較的百韻よりも歌仙（三十六句で一巻満尾するもの）の方が、多く試みられたが、蕉門以前にあつては、連句といへば、百韻が普通であつた。そして、多くの連句作法書に規定された去嫌の法則なども、百韻を規準として定められてある。なほ百韻の内容は、初表八句、初裏十四句、二の表十四句、二の裏十四句、三の表十四句、三の裏十四句、名殘の表十四句、名殘の

裏八句である。

【参考】この「丁稚か擔ふ」の句の出典は『猿蓑』で、同書所收の歌仙「市中は」の卷の名殘表四句目に相當するが、「水こほしけり」は「水こほしたり」と見えてゐる。その歌仙は、『猿蓑』中でも第一の作品と、古來評せられてゐるもので、次の如くである。

市中は物のにほひや夏の月　凡兆
　あつし〳〵と門〳〵の聲　芭蕉
二番草取りも果さず穗に出て　去來
　灰うちたゝくうるめ一枚　兆
此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉
　たゞひやうしに長き脇指　來
草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆
　蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
道心のおこりは花のつぼむ時　來
　能登の七尾の冬は住うき　兆

魚の骨しはぶる迄の老を見て　蕉
待人入し小御門の鎰　來
立かゝり屏風を倒す女子共　兆
湯殿は竹の簀子侘しき　蕉
茴香の實を吹落す夕嵐　來
僧やゝさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を經る秌の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　來
五六本生木つけたる潴（みづたまり）　兆
足袋ふみよごす黑ぼこの道　蕉
追たてゝ早き御馬の刀持　來
でつちが荷ふ水こぼしたり　兆
戸障子もむしろがこひの賣屋敷　蕉
てんじやうまもりいつか色づく　來
こそ〳〵と草鞋を作る月夜ざし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉

そのまゝにころび落たる升落　來
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やぶり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　來
さまぐに品かはりたる戀をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　來
御留主となれば廣き板敷　兆
手のひらに虱這はする花のかげ　蕉
かすみうごかぬ晝のねむたさ　來

但し、由誓舊藏の『猿蓑草稿』には、この句は、

わつぱがこゑを打こぼしけり　生

と見えてゐるとの事である。こゝに「生」とあるのは「加生」の略、加生は凡兆の別號である。

即ち、糞などの句は一卷のうちに何箇所も出てはあまりに目立ち過ぎるから、せめて一箇所位に止めよとの意嚮なのであつて、全然連句に用ゐてはいけぬといふ意味ではない。芭蕉が一座してゐる連句（歌仙）の中にも、例へば『別座舗』所收の「紫陽花や」の卷の名殘裏二句目には、

糞汲むにほひ隣さうなり　子珊

と見え、又『雪まろげ』所收の「星今宵」の巻の名殘表一句目には、

糞を引雪車もおかしき雪の上　芭蕉

の句さへ散見するのである。『葛の松原』に、

古人の語意を用る事、一字半言もたやすからず、いかにおもしろきとて、辭いやしく姿もくだ〴〵敷いひ出たらむは、貴人・公子に寵せらるゝ辨利のものゝたぐゐなるべし。

とあるのも、この意味の言葉と見做し得よう。

積翠園の『去來抄評』には、

○でつちか荷ふ云々。

凡兆にかぎらず、風雅といへば上品にきれいなる事のみ、やさしく作る事と心得たる輩多し。何事もいとはざる俳諧の活計、可レ察。

と見えてゐる。（註。積翠園の「去來抄評」には、この章の次に「妻よぶ雉子の云々」の章に關する記載がある。）

三九　（前句）ほんとぬけたる池の蓮の實　(一)

咲花にかき出す椽のかたふきて　芭蕉　(二)

此前句出る時去來曰かゝる前句をのかすへからすとて數刻案したれ ③
と皆〳〵なし先師に附句を所望しけれは斯こそ附給へれ ④

［校異］

久①前句—前。ほんと—ぼんと。 ②芭蕉—はせを。 ③出る時—出ける時。のかすへからすとて數刻案したれと皆〳〵なし—のかさすつけんにはいかゝと。 ④先師に—先師の。附句—付句。斯こそ附給へれ—かく付給ふなり。

帝①前句—此ノ二字ナシ。ほんと—ぽんと。 ②かき出す—花出す。芭蕉—はせを。 ③出る時—出ける時。去來曰—去來。のかすへからすとて數刻案したれと皆〳〵なし—迯さす付んにはいかゝと。 ④先師に—先師の。斯こそ附給へれ—斯付玉ふ也。

落①前句—此ノ二字ナシ。ほんと—ぽんと。ぬけたる—拔けたる。 ②かき出す—かきたす。かたふきて—傾きて。芭蕉—はせを。 ③出る時—出ける時。かゝる—斯る。のかすへからすとて數刻案したれと皆〳〵なし—遁さす附んにはいかゝと。 ④先師に—先師の。斯こそ附給へれ—斯く附給ふ。

青①前句—此ノ二字ナシ。此ノ句ノ頭ニ「(畧)」トアル。 ②かたふきて—かたむきて。芭蕉—はせを。 ③出る時—出ける時。前句をのかすへからす—前句迯すへからす。 ④皆〳〵—皆ゝ。附句—附。斯こそ附給へれ—かくこそ付給へれ。

贅①前句—此ノ二字ナシ。此ノ句ノ頭ニ「(畧)」トアル。 ②かたふきて—かたむきて。芭蕉—はせを。 ③出る時—出ける時。前句をのかすへからす—前句を逃すへからす。 ④附句—附。斯こそ附給へれ—かくこそ付給へれ。

架異同ナシ。

訓読

前句　ぽんとぬけたる池の蓮の、實

咲く花にかき出す縁のかたぶきて　芭蕉

此の前句出づる時、去來曰はく、かゝる前句をのがすべからずとて、數刻案じたれども、皆々なし。先師に附句を所望しければ、かくこそ附給へれ。

口譯

「ぽんとぬけたる池の蓮の實」「咲く花にかき出す縁のかたぶきて　芭蕉」――この「ぽんとぬけたる」といふ前句が出ました時、わたくしは、このやうな秀れた前句を附けのがしては殘念であると思ひまして、何とかしてこの前句にうまく附くやうな秀れた句を作りたいものと、しばらくの間、考へ續けました。一座の連衆も、皆わたくしと同じやうに句案に耽りましたが、誰にもいゝ句が出來ませんでした。それで、最後に、師翁に附句をお願ひいたしましたところ、このやうにお作りになつて下さいました。

語釋

(1) **蓮の實**　蓮は夏の季題であるが、その實の飛ぶのは秋の季題となつてゐる。所でこの秋の句に對して、次の咲花即ち春の附句

を治定することは、季移りも甚しく、殊に情景に緊密な關聯がない。次の咲花は或は誤傳かとも思はれる。②**かき出す** 擔ぎ出す。③**數刻** 刻は一晝夜の百分の一、一日を十二時とし、晝夜の長短によつて、一時に伸縮の差があるが、平均一時は八刻三分の一に當る。春分及び秋分は晝夜各五十刻。冬至は晝四十刻、夜六十刻。夏至は晝六十刻、夜四十刻である。但し、刻は一時の三分の一を意味して、巳の上刻、申の下刻等と使用する場合もあり、又一時の四分の一を意味して、目盛をほどこした漏刻も昔はあつた。此處に數刻とは、そのやうな嚴重な穿鑿は必要とせず、唯暫くといふ程の意である。④**所望** 望みねがふこと。註文すること。

參考

この「ぽんとぬけたる」及び「咲く花に」の句の出典は、『去來抄』以外には未だ寓目せぬ。

こゝに「ぽんとぬけたる」の句に對して、門人の人々が數刻考へたが、遂によい附句が出來ず、芭蕉に所望したと傳へられてあるが、『三冊子』に、

發句は門人にも作者あり。附合は老吟のほねといひ給ひけると、或俳書にあり。

とあり、また『宇陀法師』には、

先師常に語て云、發句は門人の中、予にをとらぬ句する人多し。俳諧においては老翁が骨髓と申されける事毎度也。

とも見えてゐる如く、芭蕉の連句での手腕は、發句よりも數等勝れ、且つ自信があつたらしい。『三冊子』に「或俳書」とは恐らく此の『宇陀法師』等を指すのでもあらうが、此のことは、なほ諸書に傳へられてある。

また『行脚の掟』の一節に、

人のもとめなきに、己が句をいだすべからず。望をそむくもしからず。

とあるのも、この際考へ合すべきであらう。

積翠園の『去來抄評』には、

○ぽんとぬけたる云々。

蓮の實ぬけるは秋季也。そこへ花を附るにむづかしく、又花嫁・花心の類ひより、此蓮の實のぬけたるに、座禪のさとりとも、又は身のおとろへたる觀相も、付けば付くべし。されど夫等の附心の深く一句重ければ、所にもよるべし。爰におゐては、此句は、蓮池は秋の頃ぬけたる蓮の實の　の池の岸などに有る、さるを見ればそこに花も咲て、そとへ涼み臺樣の物片付置たるを、二人してかき出せば足などゆがみて有る、其さま見る心地せらる。たとへば、しのばずの池のほとりの如し。

と見えてゐる。

四〇　くろみて高き樫木の森　①

咲花に小き門を出つ入つ　芭蕉　②

此前句出ける時去來曰前句全躰樫木の森の事をいへりその氣色を失　③

はす花を附る事むつかしかるへしと先師の附句を乞けれは斯付て見　④
せ給ぬ　⑤

［校異］

久①此ノ句ノ頭ニ「前」トアル。　②芭蕉―はせを。　③前句全躰―前句全体。樫木の森―樫の森。失はす―失なはす。
④附る事―付けん事。附句を―付句を。斯付て―かく付て。　⑤見せ給ぬ―見せたまひけり。

奇①くろみて―黒みて。樫木の森―樫の木の森。　②小き門―小サき門。芭蕉―はせを。　③前句全躰―前句全体。樫木の森―樫の森。その氣色―其氣色。　④附る事―付ゆはん事。　⑤見せ給ぬ―見せ玉ひけり。

落①くろみて―黒みて。樫木の森―かしの木の森。　②芭蕉―はせを。　③樫木の森―樫の森。いへり―云へり。その氣色―其景色。　④附る事―附候はん事。乞けれは―乞ひければ。斯付て―斯く附て。　⑤見せ給ぬ―見せ給ふ。

青①樫木の森―樫の木の杜。此ノ句ノ頭ニ「㊃」トアリ、又、欄外に「樫の木に花」トアル。　②小き門―小さき門。芭蕉―はせを。　③前句全躰―前躰。樫木の森―樫の木の杜。失はす―うしなはす。　④附る事―付る事。附句を―付句を。斯付て―かく付て。　⑤見せ給ぬ―見せ給ひぬ。

贇①樫木の森―樫の木の森。此ノ句ノ頭ニ「㊃」トアル。　②小き門―小さき門。芭蕉―はせを。　③出ける時―出ける。前句全躰―前躰。その氣色―その氣（キ）色。失はす―うしなはす。　④附る事―付る事。附句を―付合。斯付て―かく付て。
⑤見せ給ぬ―見せ給ひぬ。

〔語〕②小き門―小さき門。　③その氣色―その色と氣。　④乞けれは―乞ひけれは。斯付て―斯付けて。　⑤見せ給ぬ―見せ給ひぬ。

訓讀

　くろみて高き樫の木の森

咲く花に小き門を出つ入りつ　芭蕉

此の前句出でける時、去來曰はく、前句全體、樫の木の森の事をいへり。その氣色を失はず、花を附くる事むづかしかるべしと、先師の附句を乞ひければ、斯く付けて見せ給ひぬ。

口譯

「くろみて高き樫の木の森」「咲く花に小き門を出つ入りつ　芭蕉」――この「くろみて高き」といふ句が花の定座の前に出ました時、わたくしは、「この前句は、全體が樫の木の森の事を敍してあります。その情景を失はないで、次に花の句を附ける事はむづかしいことでございませう。」と、申しました。そして、わたくしどもの手には負へませんでしたから、師翁に附句をお願ひいたしますと、この通り附けてお見せになりました。

語釋

②花　俳諧に於いて、花の定座は月の定座と共に重要視されたものである。歌仙に於いては、花の定座は普通初裏十一句目、名殘の裏五句目の二個所であるが、實際にはそれよりも引上げて作る場合もある。④花を附る事むづかし云々　連句では、植物が二句續いたりすることを嫌つて、なるべく一卷が變化多いやうに作るのであるが、此の場合には、前句に樫木の森といつてあるので、これに、なほ植物の花を附けることは、避けなければいけない場合になつてゐる。さて、此の句の出典に徴すると、實際は「月花に小き門を出つ入りつ」であるが、斯樣に實景の花以外のものを作らなければならぬのである。

参考

この「くろみて高き」及び「咲花に」の句の出典は『市の庵』で、同書所收の歌仙「柳小折」の卷の初裏十句目及び十一句目に相當するが、「咲花に」は「月花に」と見えてゐる。その歌仙は、次の如くである。

閏五月廿二日

落柿舍亂吟

柳小折片荷は涼し初眞瓜　芭蕉
　間引捨たる道中の稗　洒堂
村雀里より岡に出ありきて　去來
　塀かけ渡す手前石がき　支考
月殘る河水ふくむ船の端　丈艸

小鰯かれて砂に照り付　素牛
上を着てそこらを誘ふ墓參　堂
手桶を入るゝお通のあと　蕉
瘧にも食はいつものごとくにて　來
大工の邪魔に鋸をかる　考
竹樋の水汲かくる庫裏の先　牛
便をまちて酢德利をやる　堂
降出しも忘るゝ雨のした〳〵と　艸
惣〳〵やめにしたる洗足　來
打飩を燒と鱠と兩方に　堂
黑みてたかき樫の木の森　牛
月花に小き門ンを出つ入つ　蕉
巢おろす兒の登る腰板　堂
陽炎に眠氣付たる醫者の供　艸
新茶のかざのほつとして來る　蕉
片口の溜をそつと指し出して　堂

迎をたのむ明日の別端　來
薄雪の一遍庭に降渡り　考
御前はしんと次の田樂　蕉
追込の網を鼠のならす音　堂
隣の明屋あらし吹也　牛
葬禮のあとで經よむ道心坊　來
手拭脫でおろす牛の荷　考
川ひとつ渡て寒き有明に　蕉
岩にのせたる田上の庵　艸
正月もいにやれば淋し廿日過　堂
種漬に來ると〻の名代　來
咲花の片へら殘スしほ鰹　牛
彼岸をかけてお隙さ〻やく　艸
白粉をぬれども下地くろい顏　考
役者もやうの衣の薰　來

なほ、この歌仙は『落柿舍日記』にも收められてある。

因みに、此の章も前の章と同じく、花の定座の前に難句が出て、次を附け惱んだ例であるが、『猿蓑』中の連句の中から、花の定座の句に夫々の前句を添へて、次に列擧してみる。

さし木つきたる月の朧夜　凡兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　芭蕉（鳶の羽の卷）

たゝらの雲のまだ赤き空　去來
一構鞦つくる窓の花　凡兆（同　）

蕗の芽とりに行燈ゆりけす　芭蕉
道心のおこりは花のつぼむ時　去來（市中の卷）

御留主となれば廣き板敷　凡兆
手のひらに虱這はする花の陰　芭蕉（同　）

何を見るにも露ばかりなり　野水
花とちる身は西念が衣着て　芭蕉（灰汁桶の卷）

しよろ〳〵水に藺のそよぐらん　凡兆
糸櫻腹一ぱいに咲にけり　去來（同　）

汐さだまらぬ外の海づら　乙州
鑓の柄に立すがりたる花の暮　去來（梅若菜の卷）

うす雪かゝる竹の割下駄　史邦

花にまたことしのつれも定らず　野水（同）

積翠園の『去來抄評』には、

○黒みて高き云々。

前句を聞、眼をふさぎ考見れば、樫の木の森に塀あり、門有り、其門は表門にもあらず、ちいさき門有り、それを人が出つ入つの姿見へる、夫れを何故と見れば、咲花故と、是塀門は附にて、其門を人の出つ入つといふは、花のむすびなるべし。是先きに塀を案じて、後に咲花と置たるにや。爰に支考が季節を後に入れるの作ともいふべきか。

と見えてゐる。但し、こゝに「支考が季節を後に入れる云々」とあるのは、『葛の松原』に、

月花にかぎらず、春秋の季を結ばむに、その季をさきに工夫せば、あたらしき趣向なかるべし。唯、平生の心にて、當季は後にくはへたるがよしと承し也。曲水、歳旦の第三には、

お葛籠に花の端綱のすゑ振りて

といふは、葛籠より趣向は起りて、花は末後の一決ならし。鳥獸草木の用をいひつゞけたる、おほくはあさまし。

との記載を指すのである。

四一　綾の寐まきにうつる日の影

なく〳〵も小き草鞋もとめかね　去來

先師曰よき上﨟の旅なるへしとそ予これをきゝて頓に此を句附侍りける好春曰上﨟の旅ときゝて言下に句出たり蕉門の徒の修練格別也と感す

校異

久①綾の寐まき—あやのねまき。此ノ句ノ頭ニ「前」トアル。　②草鞋—わらち。　③先師曰—此前句出て座中暫く付あくみたり先師曰。よき—能。なるへしとそ—なるへし。予これをきゝて頓に—やかて。此句を附侍りける—此句を付。　④上﨟—上人。蕉門の徒の修練—蕉門の徒修練。格別也と感す—各別也。

帝①綾の寐まき—綾の寐巻。　②なく〳〵も—泣〳〵も。小き—小サき。草鞋—わらち。もとめかね—求めかね。　③先師曰—前句出て座中暫附あくみたり先師曰。よき—能。なるへしとそ—なるへしと。予これをきゝて頓に—頓て。此句を附侍りける—此句を附て。　④上﨟—上人。きゝて—聞て。蕉門の徒の修練—蕉門(マヽ)の徒の修錬。格別也と感す—各別也。

落②なく〳〵も—泣々も。小き—ちいさき。もとめかね—求めかね。　③先師曰—此前出て座中暫く附あくみたり先師曰。よ

き—能き。予これをきゝて頓に—去來これを聞てやかて。此句を附侍りける—此句を附る。④きゝて—聞て。蕉門の徒の修練—蕉門の徒修練。格別也と感す—格別なり。

青 ①綾の寐まき—あやの寐卷。此ノ句ノ頭ニ「㊃」トアリ、又、欄外ニ「上臈の旅」トアル。②なく〳〵も—泣〳〵も。小き—小さき。草鞋—わらち。もとめかね—求めかね。③先師曰—此前句出て座中暫く附あくみたり先師曰。よき—能。予これをきゝて頓に—予是を聞て。④格別也と感す—格別なりと感す。

贅 ①綾の寐まき—あやの寐まき。此ノ句ノ頭ニ「上臈ノ粧㊃」トアル。②なく〳〵も—泣〳〵も。小き—小さき。草鞋—わらち。もとめかね—求めかね。③先師曰—此前句出て座中しはらく附句あくみけり先師曰。よき—能。予これをきゝて頓に—予是を聞て。④きゝて—聞て。格別也と感す—格別なりと感す。

架 ②小き—小さき。④出たり—出てたり。

訓讀

綾の寐まきにうつる日の影

なく〳〵も小き草鞋もとめかね　去來

先師曰はく、よき上臈の旅なるべしとぞ。予これをきゝて、頓に此の句を附侍りける。好春曰はく、上臈の旅ときゝて、言下に句出でたり。蕉門の徒の修練格別也と感ず。

口譯

「綾の寐まきにうつる日の影」「なく〳〵も小き草鞋もとめかね　去來」――この「綾の寐まきに」といふ前句が出まして、わたくしどもが附け惱んでをりました時、師翁が、「この前句は、雅びな女の方の、旅の有様を詠んだものと、解したらよろしいでせう。」と、仰せられましたが、このお言葉を伺ふや否や、すぐに、わたくしは、その意を承けまして、この「なく〳〵も」といふ句を附けることが出來ました。折から、その席には、好春が居合せましたが、わたくしの附句を見て、「雅びな女の方の旅の有様と聞いて、その言下にこの句が出來るとは、感じ入りました。さて〳〵蕉門の方々のお手なみは、格別なものでございます。」と感嘆いたしました。

語釈

①**綾**　模様を織出した織物。　①**寢まき**　寢床に就く時に着る着物。　②**なく〳〵も**　泣きながらも。　③**上﨟**　二位又は三位の典侍の稱。又一位或は二位となつた大臣家の娘をもいふ。轉じて身分の高い貴婦人の稱。　③**頓に**　急に。直ぐに。
④**好春**　坂上氏、後見玉氏に改めた。本姓は中尾氏、宗悦と稱し、向陽堂、汲谷軒と號した。伏見の人で、季吟門である。寶永四年八月十一日歿、年五十九。京都の點者として當時貞門に於ける一流の作者であつたが、蕉門の人々とも風交があり、芭蕉と一座した連句の作品なども殘つてゐる。　④**言下に**　言葉の終るか終らぬかの時に。　④**蕉門**　芭蕉門。門は師の家に就いて教を受けることの意。　④**修練**　修め練ること。みがききたへること。　④**格別**　とりわけ。別段。

参考

この「綾の寐まきに」及び「なく／＼も」の句の出典は『物の親』で、同書に「芭蕉翁哥仙一卷は、ひと度山櫻といへる集にいづるといへども、今は只名のみ殘りて」傳はらぬ爲め再錄した次第を記してある。而して、同書所收の歌仙「半日は」の卷の名殘裏二句目及び三句目に相當するが、「寐まきにうつる」は「寐卷に匂ふ」と見えてゐる。（註。【芭蕉翁俳諧集】には「寢まきにうつる」とある。）その歌仙は、次の如くである。

上御靈にて

半日は神を友にやとし忘　芭蕉
雪に土民の供物納る　示石
水光る芦のふけはら鶴啼て　凡兆
闇の夜わたる表（おも）楫（かぢ）の聲　去來
なまらずに言（ものい）ふ月の都人　景桃
烋に突折虫喰の杖　乙州
賣入よき岡部の早田赤らみて　史邦
里近くなる馬の足蹟（あしあと）　玄哉
抑わつて犬にくれけり炙もち　石
奉加に出る僧の首途　蕉
白川や鬪屋の土をふし拜　來

右も左も荊蕀咲けり　兆
洗濯にやとはれ歩行賤が業　州
猫のいがみの聲もうらめし　桃
上はかみしもは下とて物おもひ　蕉
みな白張のふすま也けり　石
高麗人に名所を見する月と花　好　春
春のうみ邊に鯛の濱燒　邦
晝下り寢たらぬ空に歸る鴈　兆
雨ほろ〳〵と南吹なり　來
米飾隣づからのものがたり　桃
日をかぞへても駕は戻らず　蕉
くだりばら短夜ながら九十度　哉
おさへはづして蚤逃しける　來
閑成窓に繪筆を引ちらし　邦
麓の里のおてゝ戀しき　兆
首取かとらるべきかの鳥啼　石

野中に捨る錢の有たけ　春

月細く小雨にぬるゝ石地藏　邦

世は成次第いも燒て喰ふ　兆

萩を子に薄を妻に家建て　蕉

あやの寐卷に匂ふ日の影　石

泣〳〵も小き草鞋求かね　來

たばこの形の風にうごける　哉

眞向に花表を見込花ざかり　桃

霞にあへる鷹の羽遣ひ　邦

この「綾の寐まきに」及び「なく〳〵も」の句に就いて、『花實集』には、

綾の寐まきにうつる日の影

泣〳〵も小き艸鞋求めかね　去來

此前句出て座中暫く附あぐみたり。先師曰、能上臈の旅なるべし。頓而此句附。好春曰、上人の旅と聞て言下に句出たり。蕉門の徒修練格別也。

とある。

こゝに「蕉門の徒の修練」といふことがあるが、『去來抄』の「修行教」の中には、隨所に所謂「蕉門の徒の修

練」に關する記述を見出し得るので、例へば、その中には、次の如きものもある。

去來曰、俳諧の修行者は、おのが好みたる風の先達の句を一すぢに尊み學びて、一句々々に不審をおこし、難を構ふべからず。若し解がたき句あらば、いかさま故あらんと工夫し、或は功者に尋明むべし。我が俳諧の上達するにしたがひ、人の句も聞るもの也。初めより一句々々をとがめがちなる作者は、吟味のうちに月日かさなりて、終に功の成たるを見ず。先師曰、今の俳諧は日頃に工夫をつけて、席にのぞんでは氣鋒を以て吐べし、心頭に落すべからずと也。支考曰、むかしの俳諧は如來禪のごとし、今のはいかいは祖師禪の如し。捺着すれば卽ち轉ず。

凡そ修行は我が得たる處をやしなひ、いまだえざる處を學ばゞ、次第にすゝみなん。おのれ纔に得たる所になづみて、他の勝りたるをうらやまずば、功をなす事終にあるべからず。

また『花實集』には、

去來曰、人各才智ありて修行いまだ足はずとも、句も附合も能し、人々是をほむれば、我も能なすぞとおもひとりて、心にひとつ關を居れば、それより長く風雅の逆路におもむくべし、おそるべきの一筋也。たとへ心は古人を耻ずとおもふとも、修行におゐて何ぞ及ぶべき所あらん。されば此道の習ひとして、心は高う遊ぶとも、業におゐては我眼當とすべき人をたよりて、渠は上手、是は及ぶべくもあらずとおもひて精出しなば、一際其人より上達すべき事疑ひなし。人のそしるも是ならず、我よしとおもふも非ならず、唯修行の道を心得ると心得違ふるとにあり。

彼俳諧の修行地は、淺きより深きに入、深きより淺きにもどるべしとは、先師も敎置れしなり。

などとも見えてゐる。更に『俳諧十論』中「修行地」の一節には次の如く記されてある。

そも俳諧の修行とは其道をあとへ戻る事也。(略)修行地の次第といふは、十年往く時は其事を見つくし、十年還る時は其理を知つくす。理と事とは道の馬車にして、此ふたつを得たる時に、廿年の功をつみたる俳諧の上手とはいふべき也。爰に俳諧の知と不知とを論ぜば、廿年の下手は論にも及ばず、廿年の上手と百日の下手と其場はおなじ麓にあそびて、馬といへば大名とおもひ、車といへば公家とおもへど、俳諧は其日の摸様によりて、或は打越のはこびにかはり、或は四折の附合にちがひて、種々と附合の變化あらんに、上手はしづまりて其理をさばき、下手はあはてゝ其事にまどふ。彼は十年の始に居て、其道の物理にあきらかならぬと、是は十年の始にかへりて、其道の物理にくらからぬと、明暗のさかひは遙にちがへども、口にいふ所はあひちかし。爰に、上手の下手に似て、下手の上手に似ざる事を知るべし。是等は我家の訓言にして、唐には手短に不肖といへり。かくは俳諧の俗談平話にて、往くも還るもおなじ道規(みちのり)なるに、戻りて故里の俳諧にあそばざるや。一字に媚たる人の來らんには、鰯の頭に柊木をさして、堅く我門には入べからず。

但し、この論は『嵐亭俳話』には、

十年の學問を跡へもどりて俳諧せよとは、支考みづからの發明ながら、龍頭蛇尾の傳まゝあるにや。

などと評されてはゐるが、然し「蕉門の徒の修行」といふ事に關して、相當理解のある言說として聽くべきもの

であらう。
最後に、積翠園の『去來抄評』には、
○あやのねまきに云々。
光る源氏などのわかれと見るはよのつねにして、上﨟の旅と見るは當流の働なるべし。
と見えてゐる。

四二　二つにわれし雲の秋風　正秀 ①
中連子中きりあくる月影に　去來 ②
正秀亭の第三なりはしめに〻竹格子影もまはらに月澄てと付侍ける ③
を先師かくは斧正し給けり其夜ともに曲翠亭に宿す先師曰今夜初て ④
正秀亭に會す珍客なれは發句は我なるへしと兼て覺悟すへき事也其 ⑤
上發句と乞はゝ好惡をゑらはす速く出すへき事也一夜のほと幾はく ⑥
かある汝か發句に時をうつさは今宵の會むなしからむ餘り不興のい ⑦
たりなれは我か發句を出すへしとて其夜は先師の發句なりし正秀忽 ⑧

脇を賦す二つにわるゝとはけしき雲の氣色なるをかくのひやかなる ⑨
第三附る事前句のけしきを探らす未錬の事なりと夜すからいかり給 ⑩
ひける去來曰其時にへ月影に手のひらたつる山見えてと申一句侍り ⑪
けるをたゝ月の殊更にさやけき處いはんとのみなつみて位をわすれ ⑫
侍ると申き先師曰其句を出さはいくはくのましならん此度の膳所の ⑬
恥を二度すゝかん事を思ふへしと也 ⑭

校異

次①われし—はれし。秋風—烋風とやらんなり。此ノ句ノ頭ニ「前」トアル。 ②中達子—中れんし。きりあくる—切あくる。月影に—月かけに。 ③第三なり—第三也。はしめに—初は。へ—此ノ爪印ナシ。影もまはら—影も。付侍けるを—付けるを。 ④先師かくは斧正し給けり—かく先師の斧正し玉へる也。ともに—共に。初て—初。 ⑤發句—ほ句。兼て—兼而。 ⑥發句と乞はゝ—ほ句と乞はゝ。好悪を—秀拙を。ゑらはす—撰はす。速く—早く。 ⑦發句—ほ句。むなしからむ—むなしからん。餘り不興のいたりなれは—無風雅の至也餘り不興(キャウ)に侍る故。 ⑧我か發句を—我ほ句を。出すへしとて其夜は先師の發句なりし—いたせり。 ⑨脇を—わきを。雲の氣色なるを—空の氣色成を。かくのひやかなる—かくのひやか成。 ⑩附る事—付る事。探らす—さくらす。未錬の事なり—未練の事なり。給ひける—たまひける。 ⑪其時に—其時。へ—此ノ爪印

ナシ。たつる｜立る。　⑫處いはんと｜處をいはんと。　⑬申き｜申。　⑭恥を｜はちを。思ふ｜おもふ。

【商】①秋風｜秋風とやらん。　②中連子｜中れんし。きりあくる｜切あくる。　③第三なり｜第三也。はしめに｜初は。へ｜此ノ爪印ナシ。影もまはらに｜陰もし（ママ）。付侍けるを｜附けるを。　④先師かくは斧正し給けり｜先師斧正し玉へる也。ともに｜共に。初て｜初めて。　⑤正秀亭｜正秀の亭。發句｜ほ句。兼て｜惣て。　⑥發句｜ほ句。好惡を｜秀拙を。ゑらはす｜撰ます。速く｜早く。幾はくかある｜いくはくかある。　⑦發句｜ほ句。むなしからむ｜むなしからん。餘り不興のいたりなれは｜無風雅の至なり餘り不興に侍るゆへ。　⑧我か發句を｜我ほ句を。出すへしとて其夜は先師の發句なりし｜致せり。⑨雲の氣色なるを｜空の氣色成を。　⑩けしき｜氣色。未錬の事なり｜未練の事也。いかり｜しかり。　⑪給ひける｜給ひけり。其時に｜其時。へ｜此ノ爪印ナシ。たつる｜立る。見えて｜見へて。　⑫たゝ｜唯。殊更に｜殊に。處いはんと｜所を言はんと。　⑬申き｜申。いくはくのまし｜いくはくの增し。　⑭恥を｜恥。一度すゝかん｜一度雪かん。と也｜となり。

【落】②中連子｜中欞子。きりあくる｜切あくる。　③はしめに｜初は。へ｜此ノ爪印ナシ。影もまはらに｜影も疎らに。付侍けるを｜付侍るを。　④先師かくは斧正し給けり｜先師の斧正し給へるなり。ともに｜共に。今夜｜今宵。　⑤事也｜ことなり。　⑥好惡を｜秀拙を。ゑらはす｜撰はす。速く｜早く。事也｜ことなり。幾はくかある｜幾許かある。　⑦うつさは｜移さは。むなしからむ｜空しからん。餘り不興のいたりなれは｜無風雅の至なり餘り無興に侍る故。　⑧我か發句を｜我發句を。出すへしとて其夜は先師の發句なりし｜出せり。忽｜忽ち。　⑨わるゝ｜割るゝ。はけしき｜烈しさ。雲の氣色なるを｜空の氣色なるを。かくのひやかなる｜斯く延やかなる。　⑩附る事｜付ること。けしき｜氣色。未錬の事なり｜未練のことなり。夜すから｜終夜。いかり｜呵り。　⑪其時に｜其時。へ｜此ノ爪印ナシ。たつる｜立る。申一句｜申す句。　⑫たゝ｜只。處いはんと｜頃を云はんと。なつみて｜耽みて。わすれ｜忘れ。　⑬申き｜申す。いくはくのまし｜幾許の增。　⑭と

也ーとなり。

【書】①二つにーふたつに。秋風ー秋風とやらん也。此ノ句ノ頭ニ「(雪)」トアリ、又、欄外ニ「はけしき前句」トアル。②中連子ー中れんし。きりあくるー切あくる。③第三なりー第三也。はしめにー初に。付侍けるをー付侍りけるを。④先師かくは斧正し給けりー先師かくは斧正し給ひけり。其夜ーその夜。ともにー共に。初てーはしめて。⑤兼てーかねて。事也ー事なり。⑥發句と乞はゝー發句乞はゝ。好惡をー好惡。速くー早く。幾はくかあるーいくはくか有。⑦うつさはー移さは。むなしからむーむなしからん。餘り不與のいたりなれはー無風雅の至りなり餘り無興の至りなれは。⑧我か發句をー我發句を。⑨雲の氣色なるをー空のけしきなるを。⑩附る事ー付る事。探らすーさくらす。未錬の事ー未練のこと。⑪給ひけるー給ひけり。其時にー其とき。たつるー立る。見えてー見へて。⑫たゝー唯。處いはんとー所をいはんと。わすれー忘れ。⑬いくはくのましー幾はく増し。⑭一度すゝかんー一度に雪かん。と也ーとなり。

【贊】①二つにーふたつに。秋風ー秋風とやらん也。此ノ句ノ頭ニ「(雪)動(まゝ)しき前句」トアル。②中連子ー中れんし。きりあくるー切あくる。③はしめにー初に。格子ー挌子。付侍けるをー付侍るを。④先師かくは斧正し給けりー先師かくは斧正し給ひけり。其夜ーそのうへ。ともにー共に。⑤兼てーかねて。事也ーとなり。⑥好惡をー好惡。速くーはやく。事也ーとなり。幾はくかあるーいくはくかある。⑦うつさはー移さは。むなしからむーむなしからん。餘り不與のいたりなれはー無風流の至りなり餘り無興の至りなれは。⑧我か發句をー我發句を。⑨わるゝー破るゝ。雲の氣色なるをー空の氣色なるを。⑩附る事ー付る事。けしきー氣色。探らすーさくらす。未錬の事なりー未練の事なり。⑪給ひけるー給ひけり。其時にー其時。たつるー立る。見えてーみへて。⑫たゝー唯。處ー所。わすれー忘れ。⑬いくはくのましーいくはく増し。⑭一度すゝかんー一度に雪かん。

【架】①雲の—雲の。　③月澄て—月澄みて。付侍けるを—付侍りけるを。　④先師かくは斧正し給けり—先師かくは斧正し給ひけり。其夜—その夜。　⑤兼て—かねて。　⑦餘り不興のいたりなれは—餘り不興の至りなれは。　⑧忽—忽ち。
⑩附る事—附くる事。未錬の事なり—未鉢マヽの事なり。　⑬出さは—いたさは。

【訓讀】

二つにわれし雲の秋風　　正秀
中連子中きりあくる月影に　　去來

正秀亭の第三なり。はじめに「竹格子影もまばらに月澄みて」と付侍りけるを、先師かくは斧正し給ひけり。其の夜、ともに曲翠亭に宿す。先師曰はく、今夜初めて正秀亭に會す。珍客なれば、發句は我なるべしと、兼て覺悟すべき事也。其の上、發句と乞はば、好惡をゑらばず、速く出すべき事也。一夜のほど幾ばくかある。汝が發句に時をうつさば、今宵の會むなしからむ。餘り不興のいたりなれば、我が發句を出すべしとて、其の夜は先師の發句なりし。正秀、忽ち脇を賦す。二つにわるると、はげしき雲の氣色なるを、かくのびやかなる第三附くる事、前句のけしきを探らず、未練の事なりと、夜すがらいかり給ひける。去來曰はく、其の時に、「月影に手のひらたつる山見えて」と申す一句侍りけるを、たゞ、月の殊更にさやけき處いはんとのみなづみて、位をわすれ侍ると申しき。先師曰はく、其の句を出さば、いくばくのましならん。此の度の膳所の恥を、一度すゝがん事を思ふべしと也。

「二つにわれし雲の秋風　正秀」「中連子中きりあくる月影に　去來」――この「中連子」の句は、膳所の正秀の家で、わたくしどもが歌仙を卷きました時、その第三として定められた句でございます。初め、わたくしは、「竹格子影もまばらに月澄みて」と付けましたが、それを、師翁が、このやうにお直しになつて下さつたものでございます。その夜は、正秀の家からのお歸りに、師翁は、正秀の甥に當る曲翠の家にお立寄りになり、こゝでお泊りになりましたので、わたくしもそのお供をして、共に曲翠の家に一夜を明しました。その時、師翁は、わたくしに、「お前は、今夜初めて正秀の家での俳席に加つたのですが、さうすれば、發句は客、脇は亭主との定めでありますから、その夜の發句は、當然、初めて客となつた自分が所望されるであらうと、前から心構へして置かなければならぬところでした。そして、いよ〳〵發句をと望まれた時には、好い惡いは問はず、なるべく早く出すのが禮儀です。その位のことは知つてゐる筈ですのに、今夜はお前が發句を所望された時、何故、あんなにぐづ〳〵してゐたのですか。一晩の中に、歌仙一卷を卷上げようとするのには、ぐづ〳〵してゐる時間はありません。お前が發句を作るのを、皆で待つて、徒に時間をつぶしてしまうたならば、今夜の會は一卷滿尾することなく、空しく中途で終つたことでせう。餘り興ざめも甚しいので、わたくしが發句を出しませうと言うて、取敢へずお前の代りをして上げたのです。そして、その夜の發句は、わたくしが作り、すぐ續いて、その夜の亭主正秀が『二つにわれし』といふ脇を附けました。次の第三は、お前が附けたのでしたが、前句が『二つにわれし』と言つて、激しい雲の情景であるにも拘らず、お前の作つた句は『竹格子影もまばらに月澄みて』などと、いか

にも、のんびりとした句でしたが、このやうな句を作るなどとは、前句の情景を少しも探つてゐないもので、そ
の手際の未熟なことは、いつものお前とも思はれないほどでした。もつと〳〵一生懸命にならなければいけませ
ん。」と仰せになりまして、その夜は夜通しお叱りになりました。わたくしは、何とも申しやうもございません次
第でしたが、たゞ、「實は、あの時には、『月影に手のひらたつる山見えて』といふ一句を作りましたのでしたが、
どうも面白くないと思はれましたので、その句の中の、月の光の、殊更に清々しい所だけを詠まうといふ考に拘
泥して、何時の間にか、前句と並べてみて、少しも附味のないやうな句を作つてしまつたのでございます。甚だ
不面目な仕儀をいたし、申し譯もございませんでした。」と、申しました。師翁は、わたくしの辯解をお聞き下さ
つてから、「すると、『月影に』といふ句が浮び、それを直さうとして、あんな下手な句を作つたといふのですね。
反つて、その『月影に』といふ句を、そのまゝで出した方が、まだいくらかましだつたでせう。まあ〳〵これか
らは、よく〳〵注意して、今度の膳所正秀亭での恥を、次にはすゝぐつもりで、しつかりやつて下さい。」と、仰
せ下さいました。

語釋

①**正秀**　近江膳所本多家の藩士、物頭役であつた。水田氏、利右衞門と稱し、曲翠の叔父に當る。元祿初年祝融の災に逢ひ、「藏焼けてさはるものなき月見哉」と吟じ、芭蕉その風懷を稱揚してから、蕉門に參じ、竹青堂・竹節堂の號がある。訓讀してマサヒデともいふ。享保八年八月三日歿、年六十七。龍ヶ岡の丈草の墓の隣に葬つた。『白馬集』・『粟雀』などの著書がある。妻は

しげ女といひ、また風雅に遊んだ。　②**中連子**　連子（櫺子）は窓に竪に並べて取付けた木叉は竹。これに對して縦横に組んだものを格子といふ。中連子は中型の連子で、茶室では、客の座す後壁に、この中連子を用ゐることが多い。　③**正秀亭**　正秀の家。　③**竹格子**　竹で作つた格子。　④**曲翠**　近江膳所の人である。菅沼氏、外記といひ、藩主本多氏に仕へた。一に曲水・馬指堂と號した。芭蕉はその剛直を愛して、風雅の三等を論じた書を與へて論す處があつた。蝶夢がこれを註解し、『俳諧三等文』と題した刊本が世に行はれてゐる。芭蕉を幻住庵に住はせたりして盡す所が多かつた。同僚曾我權太夫の奸を憎み、之を刺殺して後自刃した。時に享保二年七月二十日。享年不詳。妻は落飾して奥州に隱れ、破鏡尼といつた。　⑤**珍客**　滅多に來ない珍しい客人。　⑤**覺悟**　心に待ちまうけること。心構へすること。　⑥**好惡**　よい惡い。　⑥**幾許**　どれ位。何程。⑦**不興**　興醒めなこと。　⑨**のびやか**　のび〳〵した。のんびりとした。　⑩**未錬**　未練。習練の足らぬこと。　⑩**夜すがら**　終夜。夜どほし。　⑫**さやけし**　はつきりとしてゐる。淸々しい。　⑫**なづむ**　拘泥する。　⑫**位**　連句にあつて發句以外は前句あつての附句であるから、前句と照應して最も適切な附味のものを治定する必要がある。故に附句には一句々々その句でなくてはならぬといふ位置がある。此處では、前の「二つにわれし雲の秋風」といふ句に續くものとしての位置を忘却したの意。　⑬**膳所**　近江琵琶湖に臨み、もと本多氏の城下であつた。今は大津市の一部に屬してゐる。膳所にゐた蕉門俳人には、洒堂・曲翠・正秀・呂房・游刀・野徑・探志・里東・怒誰・及肩・裾道・遲望・萬里女・素顰女等がある。『俳諧七部集』の一である『ひさご』は、この膳所の連衆の作品を主とした撰集である。　⑭**すゝぐ**　水で穢を洗ふこと。恥をすゝぐとは、一度受けた恥を取返すの意。

【參考】

この「二つにわれし」及び「中連子」の句の出典は『去來抄』以外には未だ寓目せぬ。

但し、芭蕉が正秀亭での興行の時の發句としては『笈日記』に、

正秀亭初會興行の時

月しろや膝に手を置宵の宿　翁

萩しらけたるひじり行燈　正秀

と見えてゐるが、恐らくは、この次の機會に芭蕉が正秀亭を訪れた時の吟詠が、本章に取扱はれてゐるのでもあらうが、或は去來の失態から一卷滿尾せずに終り、諸書にも收められなかつたのであらうか。

この「二つにわれし」及び「中連子」の句に就いて『花實集』には、

去來曰、正秀亭の會に、

ふたつにわれし雲の秋風　正秀

中れんし中切あくる月影に　去來

此附句第三也。初は、竹格子影も露けく月澄て、と附侍るを、かく先師の斧正し給へる也。其夜ともに曲翠亭に宿す。先師曰、今夜始て正秀亭に會す、珍客なれば、ほ句は我なるべしと兼て覺悟すべき事なり。其上ほ句と乞はゞ秀拙を撰ず、はやく出すべきなり。一夜のほどいくばくかある、汝發句に時をうつさば、今日の會むなしからん、無風雅の至なり。あまり不興に侍る故我ほ句を致せり。正秀忽腕を賦す。ふたつにわるゝと烈敷空の氣色成を、かくのびやかなる第三附る事、前句の氣色を探らず、未練の

事也と、夜すがら呵り給ひけり。その時、月影に手のひら立る山見えて、と申一句侍りけるを、唯月の殊にさやけき所を申さんとのみなづみ、位をわすれ侍ると申。先師曰、其句を出さば、いくばくの増ならん。此度膳所の恥一度雪がん事をおもふべしと也。

とある。

この章には、先づ連句の第三の作法が問題になつてゐるのであるが、それに關しては、『二十五箇條』の中の「第三に手爾葉之事」の項に、

第三の留りに文字の定りたる事は、一句の様、發句のやうなれ共、下のとまらぬ所にて、次の句へ及すべき爲なり。此理をしる時は、にの字ての字にもかぎらずとしるべし。され共、此句は第三の様成と、百句の中にても撰び出すほどに第三の様をしらざれば、やはり定りたる留りしかるべし。世に匂字留に傳受ありとて、あるひははつ櫻、あるひは郭公たど押字・かゝへ字の沙汰あるは、しらぬ人の推量なり。

かうろぎもまだ定らぬ鳴所

いづれの時か、我も此第三ありしが、一坐をいましめて他聞を免さず、發句と平句などのさかひ、此第三の韻字にてもしるべし。されど尋常の留りにて事欠くまじき事也。

とあり、また『宇陀法師』に、

第三の句、第一難儀の場所也。上手の入ると云は第三也。發句の打越、脇の句にはなれて付を、上手の手際とは云也。しかも第三のふりを持て、留りに去嫌あれば第一の難所也。一巻の出來・不出來、脇第

三より極る也。

とある。

次に「發句は客の位、脇は亭主の位」といふことが論ぜられてあるが、これに就いては『二十五箇條』に、

發句は客の位にして、脇は亭主の位なれば、已が心を負ても發句に云殘したる草木山川の一字二字の風情を加へて、客の餘情をつくすべきなり。

と見え、『三冊子』には、

脇は亭主のなす事むかしより云。しかれども首尾にもよるべし。客ほ句とて、むかしは必、客より挨拶第一にほ句をなす。脇も答るごとくにうけて挨拶を付侍る也。師のいはく、脇、亭主の句を云ふ所、則挨拶也。雪月花の事のみ云たる句にても、あいさつの心地との教也。

又いはく、人の方に行に、發句心に持行事あり。趣向、季のとり合障りなき事を考べし。句作りはのこすべし。孕句出たるは出る品うるはしからずと也。

等の記載がある。更に前章に於いても『俳諧十論』の「修行地」の一節を引用したが、次にも、その中の他の一節を掲げて置く。

むかしより儒佛の學者も修行は先へ行事かと覺えて、爰をさがしかしこを尋れど、くらがり峠を越えかねて、あるは虚勞の現人(うつゝ)となり、あるはなまさとりの媚人となる。まして俳諧の虚闊なる、曠野(あらの)に駒を取はなして、こなぎ・さいたづまの名をだに知らず。芝生のかくれの花はいざ、心の手綱のかへすかた

なからん。誠や漢の人情にて伊呂波をならひ、丘乙己をおぼえぬれば、庭訓はよし三月ぎりにて、先とて文選の坂にかゝれば、古文眞寶は礒の波の沖に鷗のうかれ心より、三線もひきたし茶の湯もおぼえたし、さて〳〵いそがしき心の猿の其手もつたなく、人をたのみて藝もしかと覺えず。况や俳諧は我身がちに、和哥所の式もさだまらず、里村家の掟もまたざれば、諸國にをのが道をつくりて、哥にもゆき詩にもゆき、書籍目錄を枕とし、寐るにも起るにも行過て、廿年工夫の俳諧をきけば、史記の俳諧といふ物にはあらで、世にいふ唐人の寐言なるべし。そもいへ儒佛の證文にも、回は愚なるがごとしとも、悟了同未悟とも聞えたるは、學で先へゆけとにはあらず。其道をあとへ戻れとのいひ也。あなかしこ、若き人々は、始に五七の字數をならひて、發句の切字も附合の八躰も、さし合はかくのごとく、去きらひはかくのごとくと、例の師をえらびて其故を學べし。さて俳諧の世法なるをしれば、俳諧はつねの夜咄を、五七五七々の句につくりて、我もいふなれば人もいひ、きのふもすなり、あすもすなれば、百日の功をへざれども、廿年工夫の俳諧よりも今様の變化ははなやかならん。爰に老俳の若俳をねためども、例の修行のふみたがひより、親仁はこびたる下手にして、息子はあどけなき下手といはむ。纔に世法の憎愛はありながら、いづれも俳諧の虚實をしらねば、例の道理と理屈とにまどひて、どちらも下手は下手なりと思ふべし。いざとよ、我門の俳諧師は、學びて十年の功をつみなば、其場に俳諧の眼をひらきて、媚るは人情の病なりとや。俳諧は平生の詞にありて、外には五倫の人をなぐさめ、内には七情の我をやはらげて、誠に今日の世法なりしをと、峠の松の風にも涼しく、十年の道をあとへ戻れば、前に背

おりて見置たるをのが故里の道筋なれば、野山の風姿も、花鳥の風情も、麥蒔・田植のしわざまで、春は夜雨の晴わたりて橋の出買のおかしさも、秋は夕日のさし入て店の煮買のさびしさも、宮古の遊女は緞子にほこりて、痞おさするも心にくげに、田舍の冶郎は蓬生にしのびて瘡ふるふも物あはれなる。武士の朝起も大工の宵寐も、世界にありとある事は、皆々をのがしりたる事にて、何かは俳諧のむづかしかるべき。爰を游心和説とも詼諧聶嚅とも、ほめ置しもろこし人の滑稽を、我家の俳諧に傳へたり。しかるに、其道をあとへは戻らずして、尙も行さきをまよひありけば、山のあなたに宗匠の追剝ありて、發句には切字の子細をほのめかし、第三には韵字の祕傳をかまへ、古今の三鳥の傳受とやらん、戸をさしこめてさゝやきまはれば、おろかなる人は信心をおこして、果は金銀をも剝とられなむ。言語道斷なげかはしき沙汰也。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○二つにわれし云々。

竹格子影もまばらに月澄て、といふも、月を見る姿にはあれ共、影もまばらにとあれば、竹格子の疊か壁なんどへうつりたる聞へもありて、只うち聞所、內の事にて、見上たる姿うとし。中れんじを中切あくるは、限の字の心にて、今物もつて切りあけたるにはあらず。あくるは開きたるの心なるべし。其中れんじより空を見たる風色故に、雲の二つにわれし空を見るによし。しかれ共、月影に手のひら立る山見へてと、其雲の見ゆる向の方を附侍れば、見る所の此方の中れんじ窓よりいかほどか勝り侍るべし。

是等に此方を付ると、向方を附るの意味を知るべし。
と見えてゐる。

四三　分別なしに戀をしかゝる　　去來 ①

淺茅生におもしろけつく伏見脇　　芭蕉 ②

先師京より野坡方への文に此句を書出し此邊の作者いまた此甘味を ③
はなれすそこもと隨分輕みをとり失ふへからすと也 ④

校異

久①戀を―戀に。　②伏見脇―伏見わき。芭蕉―先師。　③京より―都ゟ。野坡方への文に―野坡かゝたへの文に。此句―此の句。書出し―かき出し。此甘味―こゝの甘味。　④隨分―すいふん。

両①戀を―戀に。　②淺茅生に―淺茅に。伏見脇―伏見わき。芭蕉―はせを。　③京より―都より。野坡方への文に―野坊(マヽ)か方への贈り文に。　④そこもと―其元。とり失ふ―取失ふ。と也―となり。

落①戀を―戀に。　②伏見脇―伏見舟。芭蕉―先師。　③京より―都より。野坡方への文―野坡か方へ贈る文。此甘味―此甘み。　④はなれす―離れす。そこもと―其許にても。とり失ふ―取失ふ。と也―となり。

靑 (1)此ノ句ノ頭ニ (曾)」トアル。 (2)伏見脇―伏見わき。芭蕉―はせを。 (3)京より―都より。野坡方への文に―野坡か方への贈文に。此甘味―この甘味。 (4)そこもと―其許。輕み―かるみ。とり失ふ―取失ふ。と也―となり。

贄 ①戀を―戀お。しかゝる―しかくる。此ノ句ノ頭ニ「(曾)」トアル。 ②伏見脇―伏見わき。芭蕉―はせを。 ③京より―都より。野坡方への文に―野波(マヽ)か方への贈文に。此甘味―この甘味。 ④そこもと―其許。輕み―かるみ。とり失ふ―取失ふ。

架 ④と也―也。

訓讀

分別なしに戀をしかゝる　　去來
淺茅生におもしろげつく伏見脇　　芭蕉

先師、京より野坡方への文に、此の句を書出し、此の邊の作者、いまだ此の甘味をはなれず。そこもと隨分輕みをとり失ふべからずと也。

口譯

「分別なしに戀をしかゝる　去來」「淺茅生におもしろげつく伏見脇　芭蕉」――師翁が京においでになられた頃、江戸の野坡へお遣はしになられたお手紙の中に、この句をお書きになられて「近ごろ、かうした附句を作りました。この邊の作者は、まだかういふ甘みのある附味を好んでゐますので、自分も不滿ながら、つひこんな附句をしたのです。けれども、もし、お前がたと一座であつたら、自分もこんな句は附けないで、もつとあつさり

と、附け流してみたことでせう。それにしても、お前は、折角、あの輕みの調子を失はないやうになさい。」といふことを、お書添へになられました。

語釋

⑴**分別**　かんがへ。わきまへ。　⑵**淺茅生**　淺茅の生ひ茂つた野。蓬生（よもぎふ）・芝生（しばふ）などといふ言ひ方に同じ。　⑵**おもしろげつく**　おもしろげに着くの略。　⑵**伏見**　山城京都の南に當り、今は京都市の一區をなしてゐる。淀川は南を、桂川は西を流れ南には巨椋池（おぐらのいけ）がある。昔は大阪・京都の往來は河船に多く依つたが、伏見はその船着場である。伏見脇とは伏見のそばの意。
⑶**京**　京都。芭蕉は京都では、嵯峨の落柿舍に、最も多く滯在してゐたと思はれるが、或は此の落柿舍を言ふのであらう。
⑶**野坡**　越前福井の人である。志田氏（炭俵に志太氏）、本姓は武田（又竹田）、通稱は半次郎・後彌助といひ、麻生庵（淺生庵）、高津翁、紗帽子、秋草庵、半醉堂、三日庵、かゝし庵の諸號がある。江戸に出て越後屋の手代を勤めた。蕉門に入つて、世に蕉門十哲の一に數へられてゐる。特に、附合の輕みを以て名を得た。利牛・孤屋と共に『炭俵』を撰し、後大阪に樗木社を起し、近江の無名庵を高津に移し、自ら高津の翁と稱した。又數次九州に遊び、同地方に門葉が頗る多かつた。『虚栗』に野馬とあるのはその初號である。元文三年一月三日歿、年七十八。大阪小橋町寳國寺に葬る。著書には『炭俵』の外に、『草の道』・『木曾谷』・『杉丸太』・『枯野塚』・『初蟬集』などがある。　⑶**甘味**　甘つたるい附味。　⑷**そこもと**　其許。貴方。　⑷**隨分**　身分相應。轉じて、せい〴〵　せつかく等の意。　⑷**輕み**　『猿蓑』の後、『炭俵』などに現れた蕉門後期の俳風。野坡が附合の輕みを以て名を得たことは、前述の通りである。

【参考】

この「分別なしに」及び「淺茅生に」の句の出典は『砂川集』で、同書所收の歌仙「牛流す」の卷の名殘表十句目及び十一句目に相當するが、「淺茅生に」は「蓬生に」と見えてゐる。その歌仙は、次の如くである。

元祿七後五月下旬洛參會時

落柿舍卽興

牛流す村のさはぎや五月雨　諷竹

あを葉ふき切梅檀の花　去來

一枚の莚に晝ねをし合て　芭蕉

つかもこじりもふるきわきざし　惟然

月影に苞の海鼠の下る也　丈草

堤おりては田の中のみち　支考

家〳〵はなよ竹はらの間にて　來

お齋は月に十五はいあり　竹

秋もやゝ今朝からさむき給がけ　然

雁より鴨のはやう來て居る　野明

抱込て松山廣き有明に　考

　あふ人ごとの魚くさきなり　蕉
雨乞のしぶりながらに降出して　草
　紡苧をみだす櫛箱のふた　然
極樂でよき居所をたのみやり　竹
　しはうきたなううき世經にけり　來
道もなき畠の岨の花ざかり　草
　半夏を雉子のむしる明ぼの　考
川船のにごりにくだすうす霞　明
　塔にのぼりて消るしら雲　然
賣に出す竹の子掘ておしむらん　考
　茶どきの雨のめいわくな隙　竹
このごろの上下の衆のもどらるゝ　來
　腰に杖さす宿の氣ちがひ　蕉
わらぶきにゆふこの形のおもたくて　然
　ちら〱鳥のわたり初けり　明
朝の月起き〱たばこ五六ぷく　竹

分別なしに戀を仕かゝる　來
蓬生におもしろげつく伏見脇　蕉
かげんをせゝる淺づけの桶　然
出來て來る靑の下染氣に入て　明
なにをけら〳〵わらふかみゆひ　竹
吸物で座敷の客を立せたる　來
肥後の相場を又聞てこい　蕉
幾口か花見の連にさそはれて　然
ひぐせになりしはるのあめかぜ　明

但し、『砂川集』と同じく元祿十一年の板行になる『續有磯海』にも、この歌仙は收められてあるが、兩書の間に文字の小異同があり、殊に「分別なしに」の句は、『續有磯海』には、

分別なしに戀に仕かゝる　來

と見えてゐる。

この章には「輕み」といふ事が問題になつてゐるのであるが、それに關しては、『三冊子』中に、

木のもとは汁も鱠もさくら哉

この句の時、師のいはく、花見の句のかゝりを少し得て、かるみをしたりと也。

との記載がある。更にこれを詳述したものは『芭蕉葉ぶね』に於ける次の議論であらう。

輕み重みといふこと、是をも當世心得違ひ、ものまね、おとしばなしのかる口などいふと同じ事に思へる人多きかな。その違へる品さま〴〵ありと見ゆるぞ。

一に曰、沉案もせずして卽坐に、目に遮るまゝをさつといひ出すを輕みとおもへるもあるが、是は輕みにあらず、安みなり。

二にいはく、いやしき言葉を用ひ、俗中に引落し、うつかりと言を輕みとおもへるもあるが、是はかるみにあらずして、うき拍子なり。

三にいはく、意幽玄にして急に聞取がたき句。

四に曰、深く案じて工みにいひのべたる句。

是を重みとこゝろへたるもあるかな。右のごとく思ひ違る輩亦少からず聞ゆ。それ重み輕みとは根元口中の事にあらず、心のうち也。尤、作の輕・重、手爾葉の輕・重もあれど、畢竟は是もこゝろより出る枝葉なり。第一は趣向にある也。たとへば野中に月が捨てあると見出して句に作る、是趣向の輕み也。女郎花の文字になづみて、草枕に一夜契たしといふ、是重みの趣向なり。更にいやみ也。猶、越人が蒴黄の蝃の句、翁の論のごとし。(略)

長　松　が　親　の　名　で　來　る　御　慶　哉　　　野　　坡

是古人、輕みの格に引たり。是は作の輕み也。こゝろは左のみ輕からず。

まじきゆへありて也。世にいふ娵・娘・女房・後家のたぐひ、野郎・傾城の文字を戀とはさだむべからず。それもこゝろの戀あらば、百年のつくも髮も、わりなきおもかげにはたちぬべし。女、戀ならば男も戀也。むすめ戀ならばむすこも戀ならん。娵・娘を戀とさだめたるは、男のさだめたる戀なるべし。をんな國の風雅ならば、さは又さだむまじきを、人はあさぢが宿に立しのび、雲井の余所をおもひやりて、さながらいひもし、いはずもなりて、物のあはれも是よりやおぼゆらんと、をしはかる情もいとふかし。しかるをおやにしらせ、仲人のいひしろひて、樽肴にさゞめかれたる、何のやるかたなき戀にかあらむ。

されば戀の附句といへば、文か夢か、おもふぞ、うらむるぞとつけたらんに、つかぬ事はあるまじ。このさかひを見さだめがたければ、吾門には戀の句を筋骨とおもへるかし。戀の事は一座の宗匠にまかすべしと、先師も遺誡申されし。

月華にむかし小袖の袖せばく

つねのなさけを出がはりに泣

この附句戀にあらず。年のほど四十ばかりなる女房の主の氣に入、我も氣にいりて、家に久しきものなりしが、國所に見捨がたき事いひわたりて、いとまとりたるにぞ有ける。この句に戀をつくれば、前句も戀のなさけにならん。しからば人の句の意味をやぶるにちかし。たゞ文字にまよふ事あるまじき事也。

八朔も九日も酒のさたばかり

朝寐夕寐に年寄の妻

この附句戀也。節供・節日は着かざりて、あそばむとおもへる浮世ごゝろあらんに、酒はさたばかりにて、朝寐・夕寐の淋しさ、心ゆかぬ處あれば、此つまは年若き後妻など見るべし。此句に戀をつけざれば、是又人の句の意味を破(やぶる)にちかし。されば戀に僻あり、俗あり、年わかく、老たるもあるべし。さるは上中下のしなをさだめざらむや。いつはり人・まめ人のさかひまでも、一句のいひはなしたる言葉のあやには見ゆらんかし。かゝる氣變は戀にもかぎらじ。

燈籠に人を見そめたる戀

冠きて稚(をさな)き袖の露なみだ

このさま何人ぞや。とうろに人を見初るとあれば、あどなき所ありて、高家の公達など見るべし。しからば、夕霧の君の雲井の鴈をおもひそみたる、おもかげもかよひ侍らん。しかれども、おさなき袖の泪とばかり句をつくり侍れば、はしたなき賤童の、たゝかれても泣やうに侍れば、冠きてとしづめたるは句法也。

忍ぶ夜の月影さむき投頭巾

山の若衆が里で戀する

このさま何人ぞや。頭巾投たる人はあまた有ながら、僧にもあらず、男にもあらず、まづは寺若衆と見るべし。山といへば日枝・横川の山法師のおもわれ人也。是をお寺若衆と句作りたれば、年まだ十四五

まじきゆへありて也。世にいふ娵・娘・女房・後家のたぐひ、野郎・傾城の文字を戀とはさだむべからず。それもこゝろの戀あらば、百年のつくも髪も、わりなきおもかげにはたちぬべし。女、戀ならば男も戀也。むすめ戀ならばむすこも戀ならん。娵・娘を戀とさだめたるは、男のさだめたる戀なるべし。をんな國の風雅ならば、さは又さだむまじきを、人はあさぢが宿に立しのび、雲井の余所をおもひやりて、さながらいひもし、いはずもなりて、物のあはれも是よりやおぼゆらんと、をしはかる情もいとふかし。しかるをおやにしらせ、仲人のいひしろひて、樽肴にさゞめかれたる、何のやるかたなき戀にかあらむ。

されば戀の附句といへば、文か夢か、おもふぞ、うらむるぞとつけたらんに、つかぬ事はあるまじ。このさかひを見さだめがたければ、吾門には戀の句を筋骨とおもへるかし。戀の事は一座の宗匠にまかすべしと、先師も遺誡申されし。

月華にむかし小袖の袖せばく

　つねのなさけを出がはりに泣

この附句戀にあらず。年のほど四十ばかりなる女房の主の氣に入、我も氣にいりて、家に久しきものなりしが、國所に見捨がたき事いひわたりて、いとまとりたるにぞ有ける。この句に戀をつくれば、前句も戀のなさけにならん。しからば人の句の意味をやぶるにちかかし。たゞ文字にまよふ事あるまじき事也。

八朔も九日も酒のさたばかり

朝寐夕寐に年寄の妻

この附句戀也。節供・節日は着かざりて、あそばむとおもへる浮世ごゝろあらんに、酒はさたばかりにて、朝寐・夕寐の淋しさ、心ゆかぬ處あれば、此つまは年若き後妻など見るべし。此句に戀をつけざれば、是又人の句の意味を破(やぶる)にちかし。されば戀に僻あり、俗あり、年わかく、老たるもあるべし。さるは上中下のしなをさだめざらむや。いつはり人・まめ人のさかひまでも、一句のいひはなしたる言葉のあやには見ゆらんかし。かゝる氣變は戀にもかぎらじ。

燈籠に人を見そめたる戀

冠きて稚(をさな)き袖の露なみだ

このさま何人ぞや。とうろに人を見初るとあれば、あどなき所ありて、高家の公達など見るべし。しからば、夕霧の君の雲井の鴈をおもひそみたる、おもかげもかよひ侍らん。しかれども、おさなき袖の泪とばかり句をつくり侍れば、はしたなき賤童の、たゝかれても泣やうに侍れば、冠きてとしづめたるは句法也。

忍ぶ夜の月影さむき投頭巾

山の若衆が里で戀する

このさま何人ぞや。頭巾投たる人はあまた有ながら、僧にもあらず、男にもあらず、まづは寺若衆と見るべし。山といへば日枝・横川の山法師のおもわれ人也。是をお寺若衆と句作りたれば、年まだ十四五

にして、顔に肉黍(にきび)なし。山若衆といへば、廿にちかきうら枯の髮かたちもおもひやられて、投頭巾のさま、よづきていとおかし。

時ならぬけはひに行燈とぼすらん

うそにほれたる人もまちつゝ

是あだし人の戀也。この女年にもあらぬ化粧などに傍輩中にもにくまれ、をのれが心のうは氣より、人のたのむまじき心も得しらで、うそにほれたる人もまちならひたるは、なにがしをんなの、おいがほにおしろいぬりて、森の下草にかこちたるありさまにもかよひ侍らん。

無筆にはいかにうまれて美しき

なりもならずもいふて見る戀

是かりそめの戀也。世に髮かたちいときよらに、顔の色もうすべにたちて、饅頭とかいふなるむまげなるかほあり。かならずあほうのうき名たちて、たゞにこやか人と、人にいはるゝなるべし。何の手わざにも心つたなくて、御用木などいへる世話の侍るは、聲もよくて歌うたひたる時の事なるべし。しからばおもひしみたる戀路のたどりもなからん。されば、なりもならずもねてかたらはむとよみたる歌は、人をなだめてふかき心をいはむとなるべし。此句に云て見るとあれば、たゞかりそめの戀とはしらる。さばかりの文字のたがひにて、哥の心のかくひるがへりたるにやあらん。

野郎戀

むかしばなしに野郎泣する

きぬ〴〵は宵の躍の箔おきて

傾城論

湯漬の膳になみだこぼるゝ

傾城の人まつふりをかくし合

馬士戀

うは置の干茶きざむもうはの空

馬に出ぬ日は内で戀する

浮草のおもはずもあひあへる、あだなる野郎・傾城の枕だに、何なき夜ごとをかさねたれば、はじめのいつはりたる言葉も、いつしか袖ぬらすべき泪とも、時雨とも降かはりたるは、誰がまことよりといひけん歌の心も、このあたりなるべし。いやしき馬かたの戀といへど、上置のほし茶に手をとゞむるといへば、針をとゞめて語るといへる宮女のあり樣にも、心の花はなどおとり侍らん。かくのごときは、戀の本情を見て、戀の風雅をつけたりといふべきか。

とあり、又『俳諧寂栞』には、

戀の句の事、言葉をもて戀とせず。一句の戀、二句の間の戀をもて戀とす。他門には女・聟・娘のたぐひ皆戀なりとす。戀にあらずといふにはあらねど、一句の意、二句の間、戀なき時は戀とせず。

とも記されてある。

最後に積翠園の『去來抄評』には、

○分別なしに云々。

甘味とはいづれをいふにや、可レ考。分別なしに戀するはいづ方ぞとおもふに、伏見脇にして旅商ひなどのさまなるべしと見て、おもしろげつくとは戀をするのつなぎなるべし。是其句に其句の眼目也。爰をばせをの魂とする所、其上の五文字は、いくほども置べきを、淺茅生とは伏見脇の鄙びたる形容なり。其形容又いかほどもあるべきに、淺茅生と置たるは、かの、淺茅生の小野のしのはらしのぶれどあまりてなどか人の戀しき、とよめる戀に其事あればと、爰を嬉しとおもふは甘味にして、輕みとはいふべからず。貞享體をとるまじきの證文也。

と見えてゐる。

四　赤人の名はつかれたりはつ霞　史邦 ①

先師曰中の七文字よくおかれたり發句の長高く意味すくなからす ②

校異

久②先師曰―先師文曰。中の七文字―中の七字。よくおかれたり―能おかれたり。發句の長高く―ほ句長高く。すくなからす―

すくなからすと也。

商①はつ霞―初霞。　②よくおかれたり―能置れたり。發句の長高く―ほ句たけ高く。すくなからす―すくなからすと也、

落①はつ霞―初霞。　②先師曰―先師の文に曰。よくおかれたり―能く置かれたり。發句の長高く―發句丈高く。すくなからす―少なからす。

青(1)此ノ句ノ頭ニ「(奚)」トアル。　②先師曰―先師文に曰。中の七文字―中七文字。よくおかれたり―よく置れたり。發句の長高く―發句たけ高く。すくなからす―すくなからすと也。

贅①此ノ句ノ頭ニ「(奚)」トアル。　②先師曰―先師文に曰。中の七文字―中七文字。よくおかれたり―よく置れたり。發句の長高く―發句たけ高く。すくなからす―すくなからすとなり。

架異同ナシ。

訓読

赤人の名はつかれたりはつ霞　史邦

先師曰はく、中の七文字よくおかれたり。發句の長高く、意味すくなからず。

口譯

「赤人の名はつかれたりはつ霞　史邦」――師翁は、この句を御覧になりまして、「中の七文字の『名はつかれたり』がよく置かれてあります。發句の氣品も高く、また、そこに含まれてゐる意味も豊かであります。」と、仰せ

になりました。

語釋

①赤人　山部氏、藤原朝から奈良朝にかけて活躍した當時の代表的歌人で、現存せる作品はすべて『萬葉集』に出てゐる。長歌十三首、短歌三十八首。純客觀的な自然詩人である。『古今集』の序文にも「人丸は赤人がかみに立たむ事難く、赤人は人丸がしもに立たむ事難くなむありける」とある通り、後世、柿本人麿と竝んで、我が國の二歌聖といはれてゐる。赤人の短歌の中では、「田子の浦ゆうち出て見れば眞白くぞ不盡の高嶺に雪はふりける」「かつしかの眞間の入江にうちなびく玉藻刈りけむ手兒名し思ほゆ」「若の浦に潮みちくれば潟をなみ蘆邊をさして鶴鳴きわたる」などが、殊に人口に膾炙してゐる。　**②中の七文字**　一句（發句・長句）の中の七字。中七ともいひ、上五・下五に對していふ。　**②長高く**　氣品の高いこと。高雅。和歌連歌の用語を踏襲した言葉である。

參考

この「赤人の」の句の出典は『鷹獅子集』で、「桃花坊に春をむかへて」と前書がある。なほ『彼此集』『眞木柱』『芭蕉盥』等にも見えてゐるが、いづれも前書はない。

なほ『去來抄』の「修行教」の中には、この句に去來の附句を添へて、「うつり」の例としてある。即ち、

先師曰、發句は昔より樣々替り侍れど、附句は三變にとゞまれり。むかしは附物を專とす。中頃は心附を專とす。今は移り、響き、爾保比、位を以て附くるをよしとす。

牡年曰、いかなる事を響き、匂ひ、移りといへるにや。

去來曰、支考等あらましを書出せり。是を手にとりたるごとくにはいひがたし。いま先師の評をあげてさとさん。他はおしてしらるべし。

赤人の名はつかれけ、りはつ霞　史邦

鳥もさへづる合點なるべし　去來

先師曰、うつりといひ、匂ひといひ、實は去年中三十棒をうけられたるしるしなりと悦び給ひけり。爰におもへば、匂ひといふも移といふも、わづかに句作のあやにして、のるとのらぬとの境なれば、冷暖自知の時ならでは悟し明らむる事あるまじ。此句もし、赤人の名もおもしろや、とあらば、鳥も囀るけしきなりけり、とも作るべきを、名はつかれたり、といへるより、合點なるべし、と、相うつり行くところ、味ひ見らるべし。響はうてばひゞくがごとし。たとへば、

くれ緣に銀かはらけを打くだき

身細き太刀のそるかたを見よ

先師、此句を引いて敎るとて、右の手にて土器を打ちつけ、左の手にて太刀にそりかくる眞似をして語り給ひける。一句々々に趣のかはる事なれば、言語に盡しがたきところ看破せらるべし。

と見えてゐる。なほ、この說は、『花實集』にも、大同小異で收められてゐるが、同書には、「名はつかれけりはつ霞」が、「名につかれけり初かすみ」とある。

また、この章には、「發句の長高く」といふ語があるが、『宇陀法師』にも、

百韻の巻頭なれば、たけ高き句第一也。平句にのびたる句あれば、發句見をとさるゝ也。發句は大將の位なくては巻頭にたゝず。平句は士卒の働きなくては鈍にしてぬるし、其用にたゝず。

とあつて、「長高き句」は「のびたる句」の對として用ゐてある。

「初霞」は初めて棚引く霞をいふことは、いふ迄もないことであるが、かゝる類の「初」の字に就いては、『篇突』に、

惣じて初霜・初雪等の初の字、大事の一字也。

と出てゐる。

積翠園の『去來抄評』には、

○赤人の名は云々。

山にうちむかへば、初霞に元朝の日の赤々とうつりたる風色より、山邊といふに赤人とまで名につかれたる、いかにも此春色のおもしろければと、昔の人をおもひ出たる、其中七字感ずるの言語のきこえを可レ察。然共史邦は京の人也。俳諧は京には合はぬ其所に侍れば、此句位の所をばせを稱美したる、是亦可レ察にや。

と見えてゐる。

四五　駒牽の木曾やいつらん三日の月　　去来 ①

今や引らん望月の駒といへるをふりかへて木曾や出らん三日の月と ②
いへり先師曰此句は算用を合せたる句なりとあさけり給へり ③

〔校異〕

久 ①駒牽―駒ひき。　②引らん―越ゆらん。ふりかへて―ふりかえて。出らん―いつらん。　③此句―この句。算用を合せたる―さん用よく合せたる。

帝 ①駒牽―駒曳。いつらん―出らん。　②引らん―越らん。いへるを―いへるあり。　③算用を合せたる―算用を能合せたる。句なり―句也。あさけり給へり―嘲り玉へり。

落 ①いつらん―出つらん。　②引らん―牽らん。いへるを―云へるを。ふりかへて―振かへて。出らん―出つらん。　③いへり―云へり。此句は算用―算用。あさけり給へり―嘲り給へり。

青 ①駒牽―駒曳。いつらん―出らん。此ノ句ノ頭ニ「(巴)」トアル。　②引らん―ひくらん。　③いへり―云り。算用を合せたる―算用をよく合せたる。あさけり給へり―嘲り給へり。

贄 ①駒牽―駒曳。いつらん―出らん。此ノ句ノ頭ニ「(巴)」トアル。　②ふりかへて―ふりかえて。　③算用を合せたる―算用を能合せたる。あさけり給へり―嘲り給へり。

架 ②引らん―ひくらん。出らん―出つらん。

【訓讀】

駒牽の木曾やいづらん三日の月　去來

今や引くらん望月の駒、といへるをふりかへて、木曾や出づらん三日の月、といへり。先師曰はく、此の句は算用を合せたる句なりと、あざけり給へり。

【口譯】

「駒牽の木曾やいづらん三日の月　去來」——この句は、古歌に「今や引くらん望月の駒」とありますのを借りてきて、中の言葉を置換へ、「木曾や出づらん三日の月」と作つてみたのでございます。所が、この句を御覽になつて、師翁は、「これは、駒牽の式が八月の十六日ですから、それに間に合ふやうに、馬が木曾の牧を牽き出されるのは、丁度三日月の頃だらうと、その日數を考へ合せて作つた句です。實景にあたつての句ならば、また許しやうもありますが、これでは、たゞ日數の計算をしたといふだけのことで、少しも感服できませんね。」と、仰せられて、お笑ひになりながら、おたしなめ下さいました。

【語釋】

⑴**駒牽**　昔八月に諸國の牧場から馬を京都へ獻じた式で、元は十五日であつたが、朱雀院御國忌に依つて、その後は十六日に改め用ゐた由が、『江次第』に見えてゐる。『公事根源』には、「公卿以下次第御馬を給る。馬の差縄をとりて御前にすゝみ、一拜

す。取殘したる馬をば、引分の使とて、次將を以て院・東宮など、しかるべき所々へまゐらせ給ふ。」とある。駒を奉る牧場は、甲斐穗坂の牧、信濃望月の牧、桐原の牧、武藏秩父の牧、立野の牧、小野の牧などが著名であつた。駒牽は古歌にも數多く詠まれ、歳時記類にも、秋の季題として擧げてある。なほ古歳時記の夏の部に見える駒牽は、八月に行はれるものとは全然別の行事で、四月二十七日（小の月）又は四月二十八日（大の月）、天皇が武德院に出御あらせられて、五月に行はるべき騎射の馬、及び射手人（いてにん）等を御覽遊ばされることである。　①**木曾**　木曾谷の略稱で、古くは吉蘇・吉祖・岐蘇とも書いた。信州西筑摩郡を北々東から南々西に延びた木曾川の溪谷で、東側に木曾山脈、西側に飛驒山脈が走り、福島町を中心として村落が點在し、又寢覺の床を始め奇勝に富んでゐる。古來中山道の重險で、木曾路、又は木曾山道の稱がある。木曾山林には良材を產する。

②**今や引らん云々**　「あふ坂の關の淸水にかげみえていまや引くらむ望月の駒」の歌をいふ。　②**望月の駒**　望月は信濃の地名で、こゝに、昔朝廷に奉る馬を飼育する牧場があつた。而して望月の駒は、毎年二十八匹奉る定めであつた。鎌倉時代に入つて、諸國の駒牽が絕えて後も、望月の駒ばかりは、後醍醐天皇の御時まで行はれた。それは『建武年中行事』に「八月十六日、信濃の駒牽、甲斐の穗坂以下樣々あれども、近比は絕えたり。甲斐の御馬ぞ、此の一兩年興し出でらる。望月ばかりは今迄絕えず」との記載がある。古歌にも、駒牽の歌の中では、望月の駒を詠じたものが特に多く見えてゐる。　②**ふりかへて**　置換へて。　③**算用**　計算。

參考

この「駒牽の」の句の出典は『句兄弟』、なほ『去來發句集』『其便』『浮世の北』『眞木柱』等にも見えてゐる。

「今や引くらん望月の駒」の歌は『拾遺和歌集』『古今和歌六帖』『貫之集』等に、次の如く見えてゐる。

延喜の御時月次の御屏風に（註。諸書によつて、前書に相違がある。）

あふ坂の關の清水にかげみえていまや引くらむ望月の駒　　貫之

この歌詞をそのまゝ踏襲した俳諧作品の一例としては『毛吹草』に、

しんこ馬も今やひくらん望月夜　　弘永

の句が見出される。

『葛の松原』には、

風雅は一句のしたつる所、風流なるべし。たとへ意は害すべくとも、詞は破るべからず。いまやひくらむ望月の駒と讀めるは、まさしくそのたぐひなるにや。今の人この間をさとらず、飽まで姿のくだけぬるをさへ、一句の意味淺からずといふ。あさまし。

との記載がある。

さて、この貫之の歌の外に「望月の駒」と用ゐた例を、散見するまゝに列擧すれば、次の如くである。

延喜の御時、御馬を遣はして早くまゐるべき由おほせつかはしたりければ、即ち參りて、おほせごとうけたまはれる人につかはしける。（註。【拾遺和歌集】には前書が「花山にまかりて侍りけるに駒ひきの御馬を遣はしたりければ」とあり、【素性法師集】には「延喜の御時に御馬遣はして只今石山に參るべきよし仰せごとあるに參りて」とあり、又【古今和歌六帖】には前書がない。）

望月の駒より遲く出でつればたどる〳〵ぞ山はこえつる　素性法師（後撰和歌集）

屏風の繪に駒迎したる所をよみ侍りける（註。「惠慶法師集」には、前書が「八月相坂に駒迎」とある。）

望月の駒ひく時は逢坂の木の下やみもみえずぞありける　惠慶法師（後拾遺和歌集）

八月駒むかへをよめる

逢坂の關の杉むら（イすぎのむらだち）ひくほどはをぶちにみゆる望月のこま　良暹法師（後拾遺和歌集）

駒迎の心をよめる

東路をはるかに出づるもち月の駒にこよひや逢坂のせき　源仲正（金葉和歌集）

後白河院栖霞寺におはしましけるに、駒引のひきわけの使にて參りけるに

嵯峨の山千世のふるみち跡とめて又露わくる望づきの駒　定家朝臣（新古今和歌集）

文治六年女御入内の屏風に、駒迎の所

あづまよりけふ相坂の山こえて都にいづるもち月のこま　後京極攝政前太政大臣（新勅撰和歌集）

逢坂の關たち出づる影見ればこよひぞ秋のもちづきの駒　大藏卿雅具（續後撰和歌集）

年をへて雲のうへにてみし秋のかげも戀しき望月のこま　後嵯峨院御製（續拾遺和歌集）

承久三年八月駒引上卿に參りて侍りける時、前中納

言定家、參議にて參りて侍りけるに、殿上の硯にて
ひあふぎのつまに書きつけて、出でける車につかは
しける

引更へてけふはみる社悲しけれさやはまたれし望月の駒　常磐井入道前太政太臣（玉葉和歌集）

返　し

物ごとにこその面影ひきかへておのれつれなき望月の駒　前中納言定家（玉葉和歌集）

堀河院の百首の歌に、駒迎

あふさかの關の村杉葉をしげみ絶え間に見ゆる望月の駒　權中納言國信（續後拾遺和歌集）

後宇多院の七夕の七百首の歌に、駒迎を

今もかも絕せぬ物か年ごとの秋のなかばのもちづきのこま　權中納言公雄（風雅和歌集）

駒牽の駒とてよませ給ひける

むかし見し雲居はとほくへだつれど面影ちかき望月の駒　花園院御製（新千載和歌集）

信濃の國にすみ侍りし頃、駒迎の心を

都へといそぐをきけば秋をへて雲居に待ちし望月のこま　中務卿宗良親王（新葉和歌集）

望月の駒すら年に引かるゝを我すぐしくる秋ぞ悲しき　曾禰好忠（曾丹集）

駒　迎

望月の駒のあなたに見ゆる哉引並べたる影にや有覽　入道大納言資賢卿（入道大納言資賢集）

望月の駒引越ゆる山見れば覺束なくも飽かずぞ有りける　貫之（古今和歌六帖）

ひごの少將、扇に大井川に馬ひやしたるを書きてよませ給へるに

望月の駒引立てゝ冷しけるみやは桂の渡りなるらむ　安法法師（安法法師集）

こまひき

望月の駒引渡す影見れば覺束なくて見えずぞ有けり　伊勢（伊勢集）

少將にて駒迎に本院の女御の御前を曳かせて御前に參る人々ゐたる所によりて

望月の駒引渡る秋の夜は光さやけきものにぞ有ける　朝忠（朝忠集）

駒迎

望月の駒ひく袖も打しめりさよふけにけり相坂の關　家隆（壬二集）

古今の一句をこめて秋の歌よみ侍りしに

相坂の關の清水に引きとめて暫し水かへ望月のこま　家隆（壬二集）

六百五十九番

相坂のせきの岩角引きつれて影をならぶる望月の駒　左　具親（千五百番歌合）

又あれより

秋の夜の望月の駒引く迄は都にいかゞさのみすむべき　幕下（拾玉和歌集）

かへし

なほも唯都にぞすめもち月の駒に心をげに勇むまで　慈鎭（拾玉和歌集）

逢坂の關の清水にうつりきて影にかげある望月の駒　慈鎭（拾玉和歌集）

駒迎、内府にて

逢坂の關もる神にことゝはむ幾よか見つる望月の駒　中納言雅兼卿（中納言雅兼卿集）

同じき月の十六日に女の許へ

忍びづま獨にもあらず望月の駒いづ方に心ひくらむ　中納言雅兼卿（中納言雅兼卿集）

また、望月と同じく信濃にあつた桐原の牧の駒を「桐原の駒」と用ゐた例を、次に擧げれば、

少將に侍りける時こまむかへにまかりて　（註。「古今和歌六帖」にはこの前書なく、又「大貳高遠」を「藤原高遠」とある。）

逢坂の關の岩かどふみならし山出ち出づるきりはらの駒　大貳高遠（拾遺和歌集）

夕暮の月よりさきに關こえて木の下くらききりはらの駒　正三位知家（續拾遺和歌集）

關駒迎を

逢坂や清水に移る影もみず關路へだつるきりはらのこま　源義將朝臣（新續古今和歌集）

次に「桐原の駒」と用ゐた俳諧の例としては、『七柏集』所收の歌仙「雲絶て」の卷の初裏六句目に、

けふ牽わけの桐原の駒　雨后

の一句を擧げ得る。

最後に、積翠園の『去來抄評』には、

○駒曳の云々。

逢坂の關の清水に影見えて今やひくらん望月の駒とよめるを、ふりかえてかく作るは、增山井に、信濃の牧の駒牽は、昔は十五日、近代は十六日也と見えたれば、木曾より京迄の道の日數を考へて、三日月に木曾を出ると、是算用を合するの句也。すべてかゝる算用合の句はこのむまじき敎也。

と見えてゐる。

去來評傳

附錄第一



(芭蕉堂歌仙圖より)

出自　去來は肥前長崎の人、向井氏、幼名は慶千代、後、兼時、又義焉、通稱は平次郎、後、治郎太夫といひ、蘭亭、落柿舍等とも號した。慶安四年、向井元升の次男として生れた。『落柿舍去來先生事實』（去來の兄震軒の孫元仲が明和七年記）によれば、まづ冒頭に、

> 向井義焉子元淵先生は予が伯公なり。諱は兼時、字は平次郎、號は去來なり。父は向井觀水子元升先生、母は久米氏の女なり。人となり好んで文學武備を善くし、幼にして屢々前筑福岡にありて叔父久米諸左衞門の家に養はる。武術を學び騎を能くす。國主大に先生の才藝を奇とし、釆地を以て招かんと欲す。固辭して仕を求めず、萍身隱逸して芭蕉翁の門に遊び、國雅俳諧に工なり。（原文は漢文）

と記されてある。

父母　この父元升は、儒學・天文學・本草學等に秀で、長崎にあつては正保四年に聖堂を建て、その祭酒を任めてゐたが、萬治元年には上洛して（この時去來は八歲）醫を業とした。延寶五年歿、年六十九。洛東鈴聲山眞如堂に葬る。その墓碑銘は當代の大儒貝原益軒の撰文に成つたものであるが、その一節に、

> 先生姓は藤原、氏は向井、名は元升、字は以順。慶長十四年二月二日肥前州神崎郡酒村に生る。其先は伊豫守京畿の人也。（略）先生廿二歲、始めて書を讀み昕夕倦まず。遂に醫と爲り、俗に從ひて薙髮し、名を玄松字、素栢と稱す。此時長崎に師友の從ふべき無く、獨學刻苦して日夜精研す。故に其の進む所日に超詣し闔鄉の學者皆先生に師事し、講を聞く者常に堂に滿つ。心を方伎に用ひること深し。故に其

の術漸く世に行はれ西裔に僻在すと雖も、隣國の諸侯使を邀して招聘する者絶えず。肥州平戸牧君松浦氏鎮信、其の術を信じ先生を招きて釆地三百石を與へんと欲す。辭するに多病を以てして就かず。筑前國君黒田忠之、招きて其の病を治せしめて效有り。國君大いに悦び七百石を以て先生の釆邑と爲し、且つ朝廷に奏して爵位を昇進せしめんと欲す。先生親の老いたるを以て應ぜず。四十六歳、其の怙恃を失ひ哀悼切なり。萬治元年に至り、先生五十歳、妻子を携へて京師に入り家居す。(略) 其の術益々盛に行はる。八條金剛壽院宮の病篤くして、衆醫術窮するや、後水尾太上皇の詔に依り、藥を獻じて驗有り。太上皇大いに感じ給ひ、御筵二握・如意一柔・藘杖一莖を賜ふ。人咸以て榮と爲す。皇子後宮及び公卿大夫病有れば、勅を奉じて治すること甚だ多し。四方の諸侯招聘して治を求むる者亦尠からず。名聲籍甚都鄙に震耀す。醫を學ぶ者以て景慕し、當世の良醫を稱する、必ず先生を以て巨擘と爲す。(原文は漢文)

以て、その爲人を知り得よう。且つ、以上は多く名醫としての元升を記してあるが、この他、國書漢籍にも明るく、當代有數の逸材であつた。母は久米氏、去來が一時久米諸左衛門に養はれてゐたが、これは母方の叔父といふ關係に由るものである。天和二年歿、元升と同じく眞如堂に葬る。卽ち、去來は二十七歳にして父を失ひ、三十二歳にして母に別れたことになる。

兄弟 去來には九人の兄弟があつた。兄元瑞はやがて父の業を嗣いで典藥に進み、法印に叙せられ、益壽院の號を賜つた人、又震軒とも號し、芭蕉の「幻住庵記」の後書をも記してゐる。父元升の歿後は「兄に仕ふる、極め

て恭愛」（「落柿先生行狀」による）であつたと傳へられる。姉春は早世。次が去來。去來の下には、弟妹それ〴〵三人があつたが、弟三人の中、三男成元は長崎に留つて聖堂祭酒となつた人、又魯町とも號し、去來と共に芭蕉に師事した。四男利文は母方の久米氏を繼いで七郎左衛門となつた人、號は牡年。五男彖之は、天和二年、比較的若年で歿してゐる。又、妹三人の中、二女佐世は宇野氏に嫁し、三女は元祿元年に歿した千代で、清水氏に嫁した人、これが『伊勢紀行』に現はれてゐる女流俳人千子である。『曠野』に、

いもうとの追善に

手のうへにかなしく消る螢かな　　去來

の句が見えてゐるのは、この千子（千代）に對する追悼の作であつた。四女の八重は早世。

人物　想へば、去來は實に文學的に多幸な家に育つた譯であるが、去來自身、初めは武藝に大いに熱心であつたらしく、『落柿先生行狀』（「道齋諸話」所收）に依れば、

はじめ紫陽に在てひとへに武事を講習し、弓馬の故事をきはめ、御術は大坪式部大輔廣秀が嫡流福山某にきゝ、和（やはら）は笠原氏の門にならひ、劍術は安部の何某に學び、共に其大意をさとす。軍は甲州一流の奧をきはむ。其後洛に歸て、又薄田某の門にあそぶ事年あり。八重垣の神法および玉法陣の圖を傳受す。かつ橘家傳來神道の祕奧、三種の神器五科十種神籬（ひもろぎ）神垣風水磐坂干滿土金等の諸傳を相承す。かねて餘力あれば、古今の人物を論じ、忠義純確なるものはみづから撰で鑑とせり。

と傳へられてある。「甲州一流の奥をきはむ」といふのは、どの程度までの事かは明かでないが、兎も角も非凡な腕前であつたかも知れない。『落柿舍去來先生事實』の中の一節に、

先生考の喪に在り、日に墳墓を拜謁す。聖護院村中の一農夫．畝を耕し、圖らず猛猪の炮を負うて走り來り、牙を以て農夫に觸るゝに行き遇ふ。喪中に在りと雖も、其の危害、之を見るに忍びず、頓に刀を拔き飛びて猛猪を刺殺す。農夫乍ち危難を免る。村人擧げて之を驚嘆す。其の仁勇も亦此くの如し。

と見え、これは『去來發句集』の序中にも「沈勇にして猛猪を刺す」とあるが、少くともこの位のことは爲し得るだけの武に達した人ではあつたらしい。然し、許六の『去來誄』（【本朝文選】所收）に、

武を業とし、若かりしより洛に居す。弓矢を捨て十五年と吟じたるは、十五年先の事也。合せて三十年來の大隱士、和名これを浪人とはいふ也けり。

とある如く、やがて武人としての望みは全然捨てゝしまつた。この三十年を歿年から逆算すれば、去來は二十三四歳の時には、既に、所謂「弓矢を捨てゝ」ゐたことになる。が、この「弓矢を捨て」たといふのは、致仕を願つたといふことではあらうが、然し、何故に中年にして去來は弓矢を捨てたのであらう。その當時は父母も健在であつたし、また芭蕉にも面接してゐない時であるのに、一朝にして飄然と弓矢を捨てゝ、風月に遊び花鳥を愛する隱逸の生活に入つたといふのは、そこに何か然るべき理由があらうと思はれるのであるが、今は明かでない。丈草が潘川に宛てた書簡（【枇杷園隨筆】所收）中に、去來の爲人を記して、

長崎の唐人哥所望いたし申候。甲頭巾影をかしく壁にうつり、夜着蒲團のないをとり得に、火燵にて、は

なし明し、さきに書付候詩を一ッむりにまげ出し候。隨分かたや（去來をいふ）も又おかしみの通ずる男にて御座候。句もまた何やら吐候へしが忘れ申候。にや〳〵風詠たえず、やさしき事とほめ仕舞にいたし候。

したが此人も、昔は具足を賣て傾城にかゝり候とて、其角なども大ほめのよし、自身にも笑申候。

と記してゐるが、「昔は具足を賣て傾城にかゝり候」といふやうな時代があつたとすれば、それが弓矢を捨てた一因を爲したものかも知れないと思はれる。『續虚栗』には、

遊女ときは身まかりけるをいたみて久しくあひしれりける人に申侍る

露烟この世の外の身うけ哉　去來

の句が見えるが、これに因つても去來が柳暗花明の巷をよく知つてゐたことが分るのである。然し、それは去來の全生涯を通じてのことでもなく、又固よりそれが去來の生活の全部でもなかつた。否、寧ろ惇朴貞諒、恭愛誠意の人と評すべきであつて、『落柿先生行狀』の中に、

先生もとより官仕の途をたち、退てもつぱら兄に仕るきはめて恭愛、其家事を治め、內外のかぎりわかち、財用の節を制し、使令を給する。おの〳〵その役にたへざるものなし。誠意懇切其勞をゆるべず、人のかたしとする處、みづから處する裕如なり。いはんや、その子弟・宗族・朋友の間にあるをや。

とあるのを、更に傾聽すべきであらうと思ふ。

妻子　『落柿舍去來先生事實』には、

去來先生、長崎又洛陽に來往す。崎に來りては田上の千載亭に止宿して風月を翫ぶ。（千載亭は田上寺の傍に在り。昔時、久米氏の別業也）洛に歸りては聖護院村に寓居し、一妾（名は貞從）有り。二女（登美・多美）を生み、皆嫁す。

この「一妾二女」といふ事は、諸說一致してゐる。然も『蕉門諸生全傳』には、

妾の名在命尼、五條坂遊女なり。鎧を賣りてうけ出す丈草が狀あり。士朗隨筆に出づ。

として、この「一妾」は五條坂の遊女で、特に「具足を賣て傾城にかゝり候」の相手であると斷定してある。去來には正妻がなかつたが、その原因も、一つは、武人として、或は父兄に對しての遠慮から、落籍した遊女をすぐ正妻とすることが出來ずにゐたかも知れぬと思はれてくる。所が、卯七の『渡鳥集』の名寄の部には、去來の次に「同妻」として「可南」の名が見え『土大根』にも、

行春のうしろ姿や藤の花　　去來妻かな

となつてゐる。この事實は、去來には正妻に可南女があり、妾に貞從・在命尼の二人があつたやうにも受取れるのであるが、實際は、こゝに三人らしく見える名前は、同一人の異名及び誤傳なのである。卽ち「在命尼」といふのは、原松の論に、

去來妾在命、尼となりて今下長者町油小路西へ入町に住す（『隨齋諧話』による）

とあるのを讀み誤り「在命」が「存命してゐる」の意であるのを、その名と誤傳したものである。又可南女は『有

磯海』には、

岡崎村に住侍りけるころ

うしなはで落穂をたくや大師講　可南

等の如く、『渡鳥集』を初めとして去來歿後に上梓されたものには、特に「去來妻」或は「去來室」と肩書があつても、それ以前の書には曾て妻と見えてゐない。即ち、この事實から、可南女こそは去來の妾であつて、去來歿後は表向に正妻と名告り得るやうな狀態になつたのであらうと判定されるのである。そして、貞從といふのは恐らくは可南女の死後の法號で、やはり元仲の記した如く、一妾說が妥當とすべきなのであらう。これは、去來の追善集たる『誰身の秋』にその悼句として、

その事此ことおもひ出るかぎりはなかりけるが、過つる名月の夜は病の床に有ながら、とかくもの語りもなし給ひぬるに、今はかゝるなげきとなりて、うき世の月をかこつばかり悲しかりける

ふして見し面影かへせ後の月　可南尼　貞松

とある「可南尼貞松」（貞松は貞從の誤か）に徵しても明かである。この可南女は、去來歿後は去來の兄元瑞の子なる向井元桂の扶持を受けて、後洛北嵯峨に舍を營んで住してゐたと傳へられる。可南女は、去來の感化からか、俳諧のたしなみがあつたらしく、その作品も諸書に散見する。然し、

去來死後、傳書共、支考に賣る。乾金拾五兩。（【蕉門諸生全傳】による）

の如き不德な（不德といふ言葉は可南女よりも支考の方が多く負ふべきであらうが）所業を傳へられてゐるのは遺憾な事である。

さて、登美・多美の兩女は、去來の追善集たる『誰身の秋』には、

さや豆を手向て悲し後の月　娘とみ

正月の二日に墓まいりして

雪汁に裾をそめけり墓の前　娘たみ

の句をそれ〳〵手向としてゐる。兩句共にさほど初心とも思はれぬ程の作ではあるが、同書以外にはこの兩女が俳諧作品を發表してゐる資料を未だ寓目してゐない。去來自筆の「回家休」の詩幅（籾山梓月氏所藏）に、

回家休　家在洛東聖護院村

自笑客衣齊錦繡　回家今日着紅楓
關山路遠詩囊敗　田圃霜降菜葉空
季女三齡唯賴母　阿兒五歲不忘翁
堪喜如意峯頭月　尙照洛陽鴨水東
謾寫新詩告平安　十月中旬書

山州逸民去來稿

崎陽學思堂諸君子　机右

とあるが、これに從へば、長女五歳の時に次女は三歳で、二歳違ひの姉妹であつた事は分るのであるが、この詩稿の識語なる十月が、果して何年に相當してゐるかが不明である爲めに、この姉妹の年齢を知るたよりにはならぬのが遺憾である。然し、許六は『去來誄』の一節に、去來の臨終を叙して、

心の中さへ思ひやりぬ。現の境も千々の思ひを碎き、娘の生ひさき、其の子の母の行末、いかに覺束なく見果つらん。あゝ悲しい哉。

と記したに從へば、去來の歿年頃は、二女とも未だ成人してゐなかつたとは想像されるのである。而して、明和七年に、元仲は『落柿舍去來先生事實』の中には、この二女が既に嫁いで了つたと明記してゐるが、その後の消息は明かでない。

落柿舍　去來はやがて洛西嵯峨に別墅を設け、これを「落柿舍」と稱し、こゝに隱栖して、專ら俳諧に遊んだ。『續虛栗』には、

嵯峨に小屋作りて折ふしの休息仕候なれば

月のこよひ我里人の藁うたん　　去來

の句が見えてゐる。なほ『落柿舍記』(【本朝文選】所收)には、自ら次の如く記してゐる。

嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六とせ經ぬれど、このみも持來ら

ず、代かゆるわざもきかねば、もし風雨に落されなば、王祥が志にもはぢよ、若鳶烏にとられなば、天の帝のめぐみにもゝれなむと、屋敷もる人を常はいどみのゝしりけり。ことし八月の末、かしこにいたりぬ。折ふしみやこより商人の來り、立木にかい求めむと一貫文さし出し悦びかへりぬ。猶そこにとゞまりけるに、ころ／＼と屋根はしる音、ひし／＼と庭につぶるゝ聲、よすがら落もやまず。明れば商人の見舞來り、梢つく／″＼と打詠め、我むかふ髮の頃より、白髮生るまで、此事を業とし侍れど、かくばかり落ぬる柿を見ず。きのふの價かへしくれたびてむやと侘ぶ。いと便なければゆるしやりぬ。此者のかへりに、友どちの許へ消息送るとて、みづから落柿舎の去來と書はじめけり。

柿ぬしや木ずゑはちかきあらし山

これで庵號の由來も明かである。この落柿舎には、後に芭蕉を初め、其角・嵐雪・桃隣・凡兆等、蕉門の人々が多く訪れることになるのである。この落柿舎に訪れた人々の吟詠は『落柿舎日記』に多數拾錄されてあるが、いまその中から、主なる人の作を一章づつ再錄すれば、次の如くである。

柚の花にむかしをしのぶ料理の間　芭蕉

千鳥なく鴨川こえて鉢たゝき　其角

今少し年寄見たしはち叩　嵐雪

瓢單は手作なるべし鉢敲　桃隣

水仙の花のみだれや藪やしき　惟然

初花や猪ふりむかす嵯峨の里　支考

破垣やわざと鹿の子のかよひ道　曾良

すゞしさや塀にまたがる竹の枝　卯七

世の嵯峨と人のいへばやならず柿　先放

野の梅のちりしほ寒き二月かな　尙白

卯の花の麥藁にちる垣根かな　昌房

椀家具のたらぬ住居や菊の花　李由

栗柿の花に隙なり草の庵　如行

紅葉ちる屋根の木の葉や石まじり　氷固

宇治木幡京へしぐれてかゝる雲　曲翠

竹の子に道のふさがる客湯殿　浪化

柿つゝむ日和もなしや村しぐれ　露川

小夜時雨屋根のちかきに休べし　玄梅

またや來ん覆盆子あからめ嵯峨の山　羽紅

山陰の藪うつりしてきぬたかな　素行

戸障子や何所の時雨のあまり風　魯町

木がらしにかくれすますや四疊半　素民
痩藪や作りたふれの軒の梅　千那
清瀧の音やそら〲ほとゝぎす　野坡
此中の古木はいづれ柿のはな　此筋
秋空や日和くるはす柿の色　洒堂
羽拍子よどむ茶畑や雉子の聲　正秀
秋風にむしの聲々あはせけり　乙州
菊の香のそゞろにゆかし藪屋敷　芙雀
なつかしう桐にならぶやことし竹　史邦
笹一葉ちりと成けり雪のうへ　土芳
妓王寺の鉦かあらぬ歟秋の雨　吾仲
柿陰や鮎もとるべき網のやれ　風國
しぐるゝや黒木つむ屋の窓明り　凡兆
北嵯峨や町をうちこす鹿の聲　丈草
目をむいて梟すむや菴の留主　野明
たゝきあふ角見て啼や女鹿の聲　閑夕

狐火のしらけて過やそばの花　荒雀

名月にもたれて廻る柱かな　野童

諸角に月いたゞきて出鹿かな　來几

井の底に蛙をもどす釣瓶かな　爲有

然し、去來の終焉の家は、この落柿舍ではなかつた。『笈日記』に、

落柿舍

放すかと問るゝ家や冬ごもり　去來

の句が見えてゐる。恐らく「落柿舍記」にも「古家」とある通りで、その古家のために住むに適したくたつた爲めであらうが、やがてこの落柿舍を離れて、洛東聖護院の家に移り住んだのであつた。『去來先生行狀』にも、

落柿舍は嵯峨に在、先生寓居の處なり。往歳、芭蕉翁桃青此處に來て此舍の記を述し（案ニ、落柿舍の記は作者去來也。此後芭蕉此家に閑居せし頃嵯峨日記を書り）よりこのかた、此舍をさして落柿舍と號く。此故に諸友よんで落柿先生と稱す。去來は俳集に載る所の名也。後、洛東聖護院にうつり、幽窓のうちにかげをひそむといへども、春のけはひは東山の風景にあらはれ、月は加茂川の清きながれにうつり、時鳥の折にふれ五月雨の窓をうつ音、夕の嵐、あしたの雪、自然に先生幽居の意にかなひ、山水のたのしびを枕として終焉の地とはなりぬ。

とある。而して『芭蕉庵小文庫』には、

芽立より二葉にしげる柿の實と申侍りしは、いつの

年にや有けむ。彼落柿舍もうちこぼすよし、發句に
聞えたり。

やがて散る柿の紅葉も寢間の跡　　去來

とある如く、去來存命中に既にこの家は取壞してしまつたのであつた。然し、後になつて、落柿舍の遺跡再興の氣運おこり、現存の落柿舍が、重厚等の盡力によつて建立されたのである。『落柿舍日記』の重厚の序中に、

むかし嵯峨に去來先生の別業落柿舍あり。芭蕉翁もつねに行通ひ給ひて、嵯峨日記を書給ふとぞ。されど多くの年月を經て、所の人だに其跡をしらずなりにき。さしも此地に定家卿の時雨の亭、去來の落柿舍と風流のすきものにしられたる古跡の、かたなくなりけるを歎く事年久し。予もとより去來先生にしたしきゆかりあれば、かの迹再興の思ひ頻にして、過し明和のはじめ菊亭殿に參りて、ことの序そのよし申上けるに、いにしへをしたふ心を哀れと聞し召上給ひて、御庭の御腰掛一字を下し賜ひ、また、むかし落柿舍に額を賜ひける、故内府公の舊例を思召出給ひて、落柿舍の三字を染筆し下されける。こゝに北嵯峨小倉山の麓、山本村に弘源寺の跡といふ所あり。嵐山にむかひ野々宮に隣て、しかも柿の古木數株今もありて、梢はちかきあらし山、の吟の、その景致にまぎるべくもなければ、やがてかの賜ひける一字を移し御額をかけ、傍に石を建て、あらし山の發句をえりてその世の面影をうつす。

とあるによつて、その再建の次第も明かであるが、それと同時に、現存の落柿舍が、その位置も昔の所ではなかつたといふ事を知り得るのである。

俳歴　さて、去來が芭蕉と師弟の關係が結ばれるやうになつたのは、初めは其角を通してのことであつた。其角は貞享元年の夏京阪に遊んだ。かの西鶴の大矢數の際に、その後見役をつとめた時である。この旅中に、去來と交る機會を得たに相違ないと思はれるのは『伊勢紀行』の芭蕉の跋中に、

其角ひとゝせ都の空に旅寢せし頃、向井氏去來のぬし睦じき契り有て、酒飲み茶に語る折々、甘き辛き濃き淡き心の水の淺きより深きを傳へて、將に一掬して百川の味を知れるなるべし。

とあるに徴しても知り得る。こゝに「ひとゝせ」とあるのは、當然、貞享元年のことと思はれるのであるが、貞享元年に其角が上洛して、忽ち「睦じき契り有て」といふ交遊關係が生じたと見るのは、餘り突然過ぎることであるから、これは恐らく、それ以前より、去來は其角乃至江戸の蕉門の人々と交渉があつたものと推定されるのである。然し、また一方から、この『伊勢紀行』の跋文を吟味して見れば、こゝに洩らされてある芭蕉の口吻には、未だ芭蕉と去來とは面接してゐないといふことと、面接はしてゐないけれども、既に蕉門に歸依してゐたといふことをも想定し得るのである。即ち、芭蕉が去來に宛てた書翰（「蕉翁消息」集所收）に、

月をわび、身を侘、つたなきをわびて、わぶとこたへんとすれど、問ふ人もなし。猶わび〳〵て、

わびてすめ月侘齋がなら茶哥　　ばせを

と申候。已上。

九月十九日

とあるが、この句が『武藏曲』に、殆んど同樣の前書で見えてゐる爲め、この書翰は天和年代のものとの推定が行はれてゐる。これは、去來の芭蕉入門を天和年代に溯らせ得る資料の一として、絕對的のものではないが、見逃し難いものであらう。而して、貞享三年の其角の『歲旦帖』には、早くも去來の句が入集し、同四年の『續虛栗』には、千子ともゞ入集してゐる。其角との交りは殊に親しかつたらしい。所で、問題になるのは、去來が芭蕉に始めて面接したのは何時であらうかといふ點である。これに關して『芭蕉庵春秋』には、貞享四年、芭蕉・其角・嵐雪・去來の四吟歌仙「初雲雀」興行の時といふ說を立ててゐる。卽ち、

久方やこなれ〳〵と初雲雀　去來

を發句とする芭蕉・其角・嵐雪と去來との四吟歌仙を興行した時に、芭蕉と一座したもので、この興行は、貞享四年の春であらうとの推定である。但し、その歌仙が貞享四年の春としても、それならば、去來は果してその年に江戶へ下つたものか、或は前年の冬邊りに出て、江戶で越年したものか、その間の消息を未だ明確にする事は出來ない。芭蕉に初めて面接した時が、恐らく貞享三・四年であるとすれば、その年代は、他の門人に比して餘り早いとはいへない。然し、なほ且つ去來が蕉門の高弟に推されることが出來たといふのは、偏へに去來の精進によることではあるが、試みに考へてみれば、他の門人が多くは他流から蕉門に轉向した人であり、或は、芭蕉の初期(古風時代)・中期(談林時代)に、その門下となつた人である事に比すれば、去來は芭蕉のいはゞ後期の純蕉風となつてからの膝下についたので、門下としては最も惠まれた年代に入門したとも言ふべきである。そして、

又、他の多くの人が、生活に追はれ乍らこの道にいそしんだ人であり、或は、一方に俳諧以外の俗世間的希望を持つてゐた人であつた事に較べれば、去來は父兄の批護の下に生活には殆んど心配なく、且つ武人としての希望を捨てて、只管俳諧に專心して生涯を送り得たのであるから、實に惠まれた境涯であつたと言ふべきでもある。そして降つて元祿四年の『嵯峨日記』の時には、既に親しく芭蕉と膝を交へ得る迄になつてゐる。又、その頃は落柿舍去來の名聲は既に高く、杉風に比して西國三十三ケ國の俳諧奉行（『杉風句集』梅人序）とまで稱せられるに至つてゐた。而してこの落柿舍にあつて『猿蓑』の編撰といふ一大事業が、その時、美事に成し了せられたのである。但し、これは凡兆が協力し、又芭蕉の嚴格なる監修があつて、始めて成就したものであることは言ふまでもない。落柿舍制札の中の第一條「我家の俳諧に遊ぶべし、世の理窟をいふべからず」とは、去來が蕉門の高弟としての堂々たる識見と、十二分の自信とが窺ひ得られると思ふ。なほ、芭蕉が去來に宛てた書翰（『蕉翁消息集』所收）には、

近日芳野行脚存立候間、金子二歩御かし可レ給候。おしつけ貰ひ溜返濟可レ申候。されど我等事に候へば、得なす間鋪も候。以上。

ばせを

去來様

との一通が見えてゐるが、これによれば、芭蕉と去來との關係は、かゝる事も虚心に披瀝し合へる程の親密さであつた事と、また去來が、恰も江戸に於ける杉風の如くに、芭蕉の後援者としての立場にあつた事とを知り得るのである。

元祿七年、芭蕉の病篤しと聞くや、去來は急いでその病床に馳せつけたのであつた。『有磯海』に、

芭蕉翁の難波にてやみ給ぬときゝて、伏見より夜舟さし下す

舟にねて荷物の間や冬ごもり　　去來

の句が見えるのは、その時の感慨である『花屋日記』によれば、十月三日の條に、

夜半過、去來來る。二日朝の狀、三日の朝屆く。その座よりすぐに打立ち、伏見に出でしは巳の時なりし。それより船にうち乘り、八軒屋に著きしは亥の時なりしと。すぐに御病床にまゐりたりしに、師もうれしさ胸に迫り、暫時はものものたまはざりしが、諸國に因みし人々は、われを親の如く思ひたまふに、われ老ぼれて、やさしきこともなければ、子の如く思ふこともなく、殊更汝は骨肉を分けし思ひあれば、三日見ざれば千日の思ひせり。然るに、今度かゝる遠境にて、難治の采薪の患に罹り、再會あるまじく思ひ居たりしに、相見ることのうれしさよとて、袂をしぼりたまへば、去來もしばしは嗚咽せしが、暫くしていふ、僕世務に暇なければ、させる實意も盡さゞるに、かゝる御懇意の御言を蒙ること、生をへだつとも忘却つかまつらずと、數行の泪に咽ぶ。

と見えてゐる。また芭蕉の終焉記たる『枯尾花』には「賀會祈禱の句」として、

凩の空見なをすや鶴の聲　　去來

とあり、「露しるしなき藥をあたゝむるに、伽のものども寢もやらで、灰書に」との文の後に、

病中のあまりすゝるや冬ごもり　　去來

等の句が見えてゐるが、たゞこの二句のみからでも、その病床にあつて、去來がいかに心を傷めて、快癒を祈つたかを想像することが出來よう。然し、かゝる門人達の手厚い看護と祈願ともその效空しく、芭蕉はその十月十二日には遂に永眠したのであつた。『枯尾花』には、

十二日の申の刻ばかりに、死顏うるはしく睡れるを期として、物打かけ、夜ひそかに長櫃に入て、あき人の用意のやうにこしらへ、川舟にかきのせ、去來・乙州・丈艸・支考・惟然・正秀・木節・呑舟・(壽貞が子)次郎兵衛・予ともに十人、苫もる雫、袖寒き旅ねこそあれ、たびねこそあれとためしなき奇縁をつぶやき、坐禪・稱名ひとり〴〵に、年ごろ日比のたのもしき詞、むつまじき教をかたみにして、誹諧の光をうしなひつるに、思ひしのべる人の名のみ慕へる昔語りを今さらにしつ。

と見えてゐる。「俳諧の光をうしなふ」との悲痛なる感慨は、殊に去來等にとつては、その時の最も切實なる眞情であつたらうと思はれる。かくて、義仲寺に葬送して、懇ろな追善の法要を行ひ、去來も手向の句として、

忘れ得ぬ空も十夜の泪かな　　去來

の一句をものしたのであつた。

芭蕉歿後、蕉門の諸士が各自の勢力を張ることにのみ汲々として、次第に蕉風の眞髓を忘れつゝあつたが、去來にとつては、かゝる現狀を見るに忍びなかつたに違ひない。「翁なくなり給ひて、むなしく四とせの春秋をつもり」といふ頃、其角に一書を呈して(【青根が峰】所收)、その俳風の墮落をいましむる所があつたのは、去來として當然のこと

であつたとも言へる。但し、これに對して其角は明答を避けた爲めに、反つて、この一書を中心問題として、去來と許六との間に俳論の應酬が行はれた。許六の「贈落柿舍去來書」、去來の「答許子問難辨」、許六の「再呈落柿舍書」（青根が峰」所收）がそれである。然し、その際去來が許六に答へた文中に、

予が性もと柔弱にして、敵に當るの器にあらず。今日藥におこたらず。向來猶弓を引、矛を振の力なけん。曾て十月（この書は元祿十年十二月記）のはじめより、心虛勞ゑきを兼病す。（答許子問難辨）

と記してゐるし、又更に之に答へて許六は、

先生例の物ぐさき隱逸を先とし給ふ事をなげく。予が如きの勇士はいふに及ばず。關羽・張飛が大勇あれども、將器なければ荊州にて犬死す。千兵得安く、先生のごとき一將は得難きと、和漢のことぐさにも見えたり。蕭何夏侯嬰とひとしき家の宰相あらば、元帥印を贈りて、第二世の宗派をおこさん。惜むべし。〱。（再呈落柿舍書）

とも述べてゐる。去來は、一つには病體の理由から、又一つには芭蕉歿後の蕉門の人々の動向の遺憾なのを、自分の手一つでは元に引戻すことの困難であるのを自覺したからでもあらうが、最早、蕉門俳壇の矢表に立つて活躍することを、斷念したのであつた。『去來抄』の末尾にも、

今年素堂子洛の人に傳へて曰。蕉翁の遺風天下に滿ちて漸く變ずべき時至れり。吾子志を同じうして、我と吟會して一つの新風を興行せんとなり。去來答へて云ふ。先生の言忝く悅びはべる。予も豫て此の思ひなきにもあらず。幸に先生を後楯とし、二三の新風を起さば、恐くは一度天下の人を驚かさん。然

れども、世の波、老の波、日々打ち重なり、今は風雅に遊ぶべき遑もなければ、たゞお殘り多く思ひはべるのみと申す。素堂子は先師の古友にして、博覽賢才の人なりければ、世に俳名高し。近來此の道打ち荒みたまふといへども、またいかなる風流を吐き出だされんものをと、いと本意なき事なり。

と見えてゐる。これも、その頃の心境を洩らしたものであらう。そして、いよ〳〵閑寂を愛しつゝ、蕉風の純境を守つて、その病勝ちの晩年を送つたのであつた。寶永元年九月十日、聖護院の寓舍にて歿。時に年五十四歲。（この享年を、『風俗文選』の作者列傳には五十三歲と誤つてゐる。）東山神樂岡の北鈴聲山の眞如堂內覺圓院の先塋の地に葬られた。

編著　去來はその編著が頗る少い。然も『猿蓑』以外は『花實集』『去來抄』『去來文』『旅寢論』『伊勢紀行』のいづれもが、總べて去來の歿後、後人の手に依つて出版されてゐるが、この點なども、去來の篤實な性行を如實に物語つてゐるものに外ならない。然し『猿蓑』の編者であつたといふ一事は、去來に他の幾十の編著があることにも優つて、特筆すべきものであらう。『猿蓑』は『廣益書籍目錄大全』又は『誹諧書籍目錄』には「去來撰」となつてゐるが、序跋によつて見ても、これは凡兆との協力になるものである。而して、元祿四年に梓行され、發句では、芭蕉の「奧の細道」行脚中の作品を中心とする四十二句を初めとして、全國的の作者の中から、いづれも最高の標準で佳句が精選され、連句では、芭蕉の最も圓熟した時代の手腕を十分に發揮した歌仙四卷が收錄されてある。其角は、その序中に「この道のおもて起すべき時なれや」と記してゐるが、實に『猿蓑』こそは、芭蕉が風雅の道に透徹した時代、蕉門の最も華々しい時代を代表する撰集であつて、許六の言の如く、これは俳諧

の古今集ともいふべきものである。（なほ詳しくは拙著『猿蓑定本』を參看せられたい。）その他、浪化の『有磯海』『となみ山』、卯七の『渡鳥集』等には、去來の助力は尠くなかつたと思はれる。これは單なる假定に過ぎない事ではあるが、その晩年には、俗世の煩はしさから逃れて、たゞ一人念々として、亡師の遺教を書綴つてゐたに相違なく、その時の所産の一が『去來抄』であつたと思はれるのである。（なほ詳しくは、本書中篇附錄「去來抄論」を參看せられたい。）

門流　去來は、かく篤實な、名譽心の淡い人であつた爲めに、門下を多く養成して自己の俳統を世に誇らうとするやうな點が少しもなかつた。許六が「集作りて善惡の沙汰におよぶ。當時撰者の手柄なり。この頃の集は、あて字・てにをはの相違・かなづかひのあやまり、かぞふるにいとまなし。しらぬ他門より論ぜば、高弟去來公のあやまりと、沙汰し侍らんもむべならんか」と云つたに對して、去來は次の如く答へてゐる。

　これなにといふ事ぞ。今諸方撰集、そのつたなきもの、予が罪を得んこと、近年誹書のおこるや、われこれをしらず。たゞ浪化集のみ、ゆへ有てこれをたすく。もし浪化集にあやまる所多くば、是予が罪のがれがたし。その他は我あづからず。又蕉門の高客、國々所々に珍らしからず。世人なんぞ罪を予一人に責んや。我京師に在といへども、惣て諸生の事にあづからず。たゞ嵯峨の爲有・野明、長崎の魯町・卯七・牡年のみ、故ありて予これを教訓す。其余は予があづかるべからざる所なり。（答許子問難辨）

こゝには、自ら、去來門下として、僅かに爲有・野明・魯町・卯七・牡年の五人に過ぎないと明記してゐるのであるが、この中、魯町・牡年の兩人は前述した如く、去來の實弟である。卯七は蓑田氏で『和漢文操』によれば去來の

従弟で、長崎に住してゐた『梟日記』には「牡年・魯町は骨肉の間にして、卯七・素行はそのゆかりの人にてぞおはしける」ともあるから、卯七は素行と共に、従弟の關係であつたと信ずべきであらう。又、一族の人々であつて、且つ去來の感化により俳諧をたしなんだと思はれる人に、田上ノ尼（叔母）、風國（甥）等の名も擧げ得る。かく數へてくれば、去來のいはゞ門下と目される人々は、多くはその一族の人々であつて、然らざる者は、僅に前掲の嵯峨の野明・爲有、及び、京の仙洞御所に勤めてゐた野童位たものであつたらしい。さて、去來の指導下にあつたこれ等の人々の作品を一句づつ次に掲げて置かう。

月影にうごく夏木や葉の光り　　可南女（炭俵）

一夏入る山さばかりや旅ねずき　　魯町（猿蓑）

いせにまうでける時

葉月や矢橋に渡る人とめん　　千子（猿蓑）

どん栗のころび合たり窪たまり　　牡年（有磯海）

三熊野へ詣ける時

螢火やこゝおそろしき八鬼尾谷　　田上尼（猿蓑）

誰とても健ならば雪のたび　　卯七（猿蓑）

おもたさやわろふて力む稲になひ　　素行（初蟬）

芋ほりに男はやりぬむら時雨　　風國（有磯海）

明る夜をとらで仕舞ふや下手相撲　　野　明（有磯海）

瀧つぼに命打こむ小あゆ哉　　爲　有（炭俵）

大比叡やはこぶ野菜の露しげし　　野　童（猿蓑）

なほ、この外にも例へば『渡鳥集』に見える多くの人々の中には、去來の指導下にあつたと見做し得る人々が多いのであるが、それにしても、芭蕉の高弟の一人として、其角等に比較すれば、その門下の人數が非常に尠かつたといふことは事實である。これは、浪化が芭蕉に入門した時の事情などから想像すれば、或は、ある程度以上の力量をそなへるに至つた人に對しては、もはや去來が自己の門下とはして置かずに、直接に芭蕉に向けて教を乞ふやうにさせ、去來自身はその仲介役をつとめてゐたと思はれる節があるが、去來の門下の人數が尠かつたのには、かゝる理由があつたのではないかとも思はれるのである。

追善　去來の死は、蕉門の人々の誰もに惜まれた。これは去來生前の德望の如何に篤かつたかを裏書きするものである。支考は「落柿先生挽歌」（本朝文選所收）なる、次の如き一文を發表してゐる。

ことしはいかなる年なれば、かくあぢきなき人をのみ見るらん。去年の神無月は浪化の君にわかれて、霜の光に名をしたひ、粟津の丈艸は、此きさらぎの願ひにみちて、花の陰に歸り給ひぬ。卯月のはじめは、落柿舍に日をくらし、其事彼事語り合て、是よりたれが身の上をや、鳥も啼らむと、はかなみいひしが、去來はいはるゝ人の數に入て、かくいふ我ばかり殘り居たらん。沖の船の友を失ひて、老の波の

よるかたなき心地ぞせらる。なき人の此ごろおほき世やさらにと、むかしの人のたげかれしも、かくあぢきなきをりなるべし。人は廿ばかり三十も過るまでは、をのれが友達も、同じ心のすこやかにおもひたちて、たま／＼なき人の上を見ても、あはれとはおもひけめ、おどろくほどの悲しさにはあらず。よそぢも過行ほどよりは、幾とせの交をかさねて、その人ならねば此事はしらず、あはでは戀しう、見ざらんはいかにと、文にもいひかはすほどに、けふは其人もなくなりて、世は扨はかなきもの哉と、ことしはじめてしらる也。誠に此人よ。風雅は武門より出れば、かたき所にやはらみありて、先師もそれをゆるし給へりしが、我はやはらぎたる所にかたみあらんをと、逢時はたはぶれていひもしつ。まして蕉門の高弟にして、吾輩の先生なるをや。何にか此人をおしまざらん。我のみかくおしむにや、あやし。

其歌ニ曰ク。

家は聖護院の森にかくれて、寒き梟の聲に驚き、
名は落柿舍の梢に殘りて、空しき秋の色を恨む。
世ははたいかならん。我はたかくならん。
窓のあらしに燈をまもり、
軒のしづくに影をしたふ。
おしむべし。アヽ。かなしむべし。アヽ。

柿の木もあれ行猿のなみだには、夜こそねられね。人も數らむ。嵐の山の山あらし。世にあらしとは山

ぞしる。嵯峨野に人のさがなごゝろや。

傲岸不遜、他に屈することをしなかつた支考でさへもが、かくの如き哀悼の辭を綴つてゐることは、特に注目すべきことであらうと思はれる。去來歿して翌年、吾仲はその追善集『誰身の秋』を撰んだが、その中に見える諸家の追悼吟の中から、四五の人々の手向の句を次に掲げておかう。（前書はすべて略す。）

枯にけり芭蕉を學ぶ葉廣草　素堂

何と申きのふの菊をけさの霜　凉菟

志賀越や都の秋を啼鳥　李由

丈草は枯て去來は時雨かな　許六

是非ともにあはで悲しや秋の風　北枝

而して、馬才人（吾仲）の筆になる次の如き「落柿先生墓誌」と題する一文も見えてゐる。

落柿先生の遺骸は洛東の眞如堂に葬れり。その形は馬鬣封にして、碑石に向井元淵之墓とあり。葬埋の式は儒家の禮に類せるものなるべし。堂の東南の隅に親族先亡の墓をならべたり。けふは神無月十日なればとて、連衆積善のまことをおもひ、五花一香の手向をぞなしける。されば歸り花のいづこにか歸り咲けん、歸らば又も來なんに、去來といふ名のなつかしく、今もわするまじき人也けり。山茶花・茶の花は、二種一物にして、風雅のほそき一筋をわきまふるたより、水仙の白きは霜におくるゝ操ありて、先生が武門のまことをしたへり。また寒菊の時に咲出たるその菊は、終焉の月の名にして、十日の菊と

いふ事をおもへば、過去帳の名こそ忘るまじけれ。彼もゆかしくこれもなつかしき手向の袖の涙なるべし。一とせ先生この眞如堂に供養の事侍りて、

涼しさは野山にみつる念佛哉

と吟じ殘し給へるも、まことに契りふかき此地なるべしと、おの〳〵この人の德をぞいひ出ける。

なほ『誰身の秋』と同年に、同じく去來の一周忌追善のために、卯七は、

彿や菊も名にちる日は十日　卯七

の追悼吟を手向けて、この句に因み追善集『十日菊』を撰んだ。又七回忌には素民の撰になる追善集(書名未詳)、十三回忌には不雄の撰になる追善集『菊の杖』が梓行されたのである。

因みに、京都眞如堂内に於ける向井家の墓地には、去來の墓碑は現在は見出し得ない。(眞如堂覺圓院の過古帳には明らかに現存してゐる。)然し、長崎の片淵町春德寺には、芭蕉の碑に並んで去來の遺髮を祭つた塔が現存してゐる。その塔に刻された文字は、次の如くである。

恭祭落柿舍去來翁之靈

享和癸亥九月十日　一百年忌建石記之

敬修追薦一座千句集艸焚香埋

結社　十名

果程赤城敬書

なほ長崎の郊外、日見峠には、

　君が手もまじるなるべし花薄　　去來

の句碑、所謂「薄塚」が現存してゐる。これは、句碑の裏面に、

天明四甲辰年三月吉旦　發起玉淵

　崎陽蕉門末流某等謹建　　石工　正廣

と見えてゐる。

作風　去來の作風に就いては、『青根が峯』中の「同門評判」の筆始めに、許六は、

第一先生の風雅を論ぜば、その器すぐれてよし。花實をいはゞ花は三ッにして實は七ッなり。天性正しくうまれつきたまふによりて、難じて言はゞ、とりはやしすこしかけたり。故に不易體の句は多けれども、流行の句はすくなし。たとへて言ふときは、衣冠束帶の正敷人、遊女町にたてるがごとし。殿上まじわりにおゐては、一人の人とも稱すべし。遊女町のとりはやし少しかけたり。師說の月雪を經給ふ故に、天晴中華門人の第一とは稱す。

　水うみの水增りけり五月雨

　凩の地にも落さぬ時雨かな

　杜宇鳴や雲雀の十文字

など言へる一代の秀逸の句いくらもあり。師の句たりとも、なか〳〵上に立がたし。一人もうらやまぬものはなし。

と叙してゐる。こゝに引用してある發句の中で、後の二章に就いては、この許六の所説を、そのまゝ無條件では受取り兼ねると思ふが、蓋し、去來の俳風を評して、よく盡し得たりといふべきであらう。又『去來誄』の中の一節には、

先師蕉翁にま見えて、風雅の名高ぶり、京師にかまへて、諸子のかしらに坐す。南西の氣を押へ、東北の風を護す。天下蕉門の高弟と稱して、あら野の時、正風體のまなこをひらきて、

湖の水まさりけり五月雨

とかや。猿蓑の選を篆りて、不易流行の巷をわかち、後猿の新風にのぞみても、終に幽玄の細みをわすれず。

木がらしの地にも落さぬ時雨かな

ほとゝぎす啼や雲雀の十文字

とは申けり。又いづれの仲烌にや。

岩はなやこゝにもひとり月の客

と吟じて、先師の耳を驚かし、月賞翫の第一、古今の秀逸にはきはまりたり。すべて一代秀逸は、一兩句もてる人さへ稀なるべし。此おのこは、已に數句に及べり。

とも見えてゐる。これ等は聊か過褒の嫌ひがないでもないが、評し得て遠からざるものと言ふべきであらう。なほ支考は『口狀』の中に「杉風・去來は實情を寫し」といひ、風之は『誹諧耳底記』中に「嵐山あらし吹柿の木に鳴鳥こそ、正風をたがえずして、しかも秀逸すくなからず」とも記してゐる。

なほ去來は遲吟であつたらしく『去來抄』の「先師評」には「發句と乞はゞ好惡をゑらばず速く出すべき事也。一夜のほど幾ばくかある云々」(第四十二章)と芭蕉に叱責されたとの傳へもあるが、反對に「同門評」の中には、次の如き事も傳へられてゐて、その遲吟も故なく難ぜられぬことを知り得るのである。

朝顏に箒打ち敷く男かな　風毛

魯町曰。此の句、或人の長點なり、いかゞ。去來曰。發句といはゞいはれんのみ。牡年曰。先師の、

蕣にわれはめしくふ男かな

とは、いかなる處に秀拙ありや。去來曰。先師の句は、其角が蓼喰ふ螢といへるにて、飽くまで巧みたる句の答なり。句上に事なし、答ふる處に趣あり。風毛が句は、前後表裏一の見るべきところなし。斯くの如き句は、口を開けば出るものなり。試みに作りて見ん、何なりと題を出されよ。魯町、則ち露の句を乞ふ。

露落ちて襟こそばゆき木陰かな

また菊の題にて、

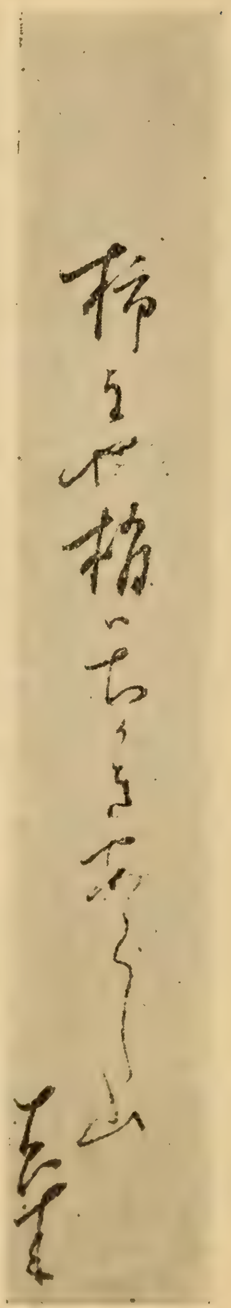
菊咲いて家根のかざりや山畠

と、十題十句、言下に賦したり。若し孕句の疑もあらん、一題に十句せんといふ。魯町、則ち砧の題を出だす。

娘より嫁の音聟き砧かな

乘掛の眠りをさます砧かな

といふをはじめ、十句筆を措かず。予は蕉門遲吟第一の名ありてすら斯くの如し。況んや集にも出でたる先師の句なれば、格別のことありと知らるべし。



（中澤利八氏藏）

なほ、作品を以て實例を示すとしよう。まづ連句では『猿蓑』中の名作たる凡兆・芭蕉・去來の三吟歌仙「市中」の巻の初裏六句目までを左に掲げる。

市中は物のにほひや夏の月　　凡兆

あつし〳〵と門〳〵の聲　　芭蕉

二番草取りも果さず穗に出て　　去來

灰うちたゝくうるめ一枚　　凡兆

此筋は銀も見しらず不自由さよ　芭蕉

たゞどひようしに長き脇指　去來

草村に蛙こはがる夕まぐれ　凡兆

蕗の芽とりに行燈ゆりけす　芭蕉

道心のおこりは花のつぼむ時　去來

能登の七尾の冬は住うき　凡兆

魚の骨しわぶる迄の老を見て　芭蕉

待人入し小御門の鎰　去來

この雅樸醇美なる風韻を見よ。一句毎の附について、所謂、移・響・匂の巧緻は言ふまでもないが、それよりも、遊戯の域から飛躍して、完全に文學の領に入つたこれらの作品を見よ。此處に到つて、芭蕉の目標とした所まで蕉門の俳諧は到り得たと考へてよからうかと思ふ。

次に、發句五章のみを選出して置く。初めの一句は『曠野』、終りの一句は『炭俵』、他は『猿蓑』。（なほ詳しくは附錄二「去來發句集」を參看せられたい。）

秋風やしら木の弓に弦はらん

鉢たゝき來ぬ夜となれば朧なり

振舞や下座になをる去年の雛

螢火や吹とばされて鳰のやみ

花守や白きかしらを突あはせ

なほ『去來抄』等によつて、例へば不易流行の說、蕉門と他門の辨、又は、移・響・匂の解、寂栞の論等を初めとして、その卓越な俳論を窺ひ得、更に『本朝文選』等によつて、例へば鉢叩辭等の如き、その輕妙な俳文を味ひ得ることは言ふまでもない。實に、名實共に蕉門の一流作家であつたことが思はれるのである。

附言 本稿は、嚮に改造社發行の『續俳句講座』中に「去來評傳」として執筆せしものを、今回本書の附錄たるべく、增補訂正したものである。然し、結局は附錄としての目的に添ふべく、予の私見はなるべく差控へて、單に通說を紹介したに過ぎない。

又本稿の挿畫には、去來の肖像の一例として『芭蕉堂歌仙圖』（明和七年刊の『施主名錄發句集』の上卷の改題後刷本かと思はれる）所收のものを採り、未發表の眞蹟の一例として、中澤利八氏所藏の短册とを選んだ。前者は肖像中の秀逸と認めたからであり、後者はこの短册と同じ句が『落柿舍日記』中にも、模寫複刻されてゐるから、容易に比較なし得る便を思うたからである。

去來の眞蹟は、年來、微力を盡して集め、且つはその所在を確めつゝあるため、やゝ多くの眞蹟に接し得てゐるが、それ等は他日まとめて發表すべく用意を持つてゐる。

幸にして本稿が機緣ともなり、去來評傳中の幾多の疑問に關し、先輩諸雅の御教示に與るを得、又去來の眞蹟に就いて、所藏家各位の御芳情に接するを得るならば、予の喜び之に過ぐるはない。（昭和十年二月記）

新編

去來發句集

附錄第二

一、本集は安井小洒氏の快諾を忝うして、同氏編『蕉門名家句集』第六輯去來の部を増補改編せしものなり。

一、本集は安永三年板の『去來發句集』の分類に準じて、四季別の形式を採用せしものなり。但し歳旦は春季に含む。

一、本集に於ける發句は、總べて刊本に據り、且つ出典の文字に從ふを以て原則とせり。但し判讀の便を思ひ、新たに濁點を施すこととなせり。

一、本集に於ける發句の排列は、『蕉門名家句集』に於ける形式を踏襲し、大體それぞれの出典の刊年順となせるものなり。

一、本集には假りに各句上に番號を附したり。之は脚註と照應せしむべき爲めのみの便宜上の手段にして、他意あることなし。

春の部

一 初春や家に譲りの太刀はかん（其角歳旦帖

二 一畦はしばし鳴やむ蛙哉（蛙合

三 何事ぞ花みる人の長刀（曠野

四 月雪のためにもしたし門の松（同

五 鶯の鳴や餌ひろふ片手にも（同

六 うごくとも見えで畑うつ麓かな（同

七 いくすべり骨おる岸のかはづ哉（同

八 あそぶともゆくともしらぬ燕かな（同

九 朝櫻よし野深しや夕ざくら（いつを昔

一〇 雛のおかしがるらん雛のひな（花つみ

一一 一昨はあの山越つ花盛り（同

一 『續虛栗』『松餚集』『去來發句集』所收。以上三書には「初春や」が「元日や」とある。又『去來發句集』には「太刀はかん」が「太刀帶ん」とある。

二 『去來發句集』所收。同書には「一畦は」が「一畔は」とある。

三・四・五 『去來發句集』所收。

六 『其袋』『去來發句集』所收。以上兩書には「麓かな」が「男かな」とある。

七 『水ぐるま』『去來發句集』所收。『去來發句集』には「骨おる岸の」が「骨折岸の」とある。

八・九・一〇 『去來發句集』所收。

一一 『葛の松原』『去來發句集』『去來抄』『旅寐論』『去來俳諧評判』所收。『葛の松原』には「一昨は」が「おとゝひは」とあり『去來發句集』『旅寐論』『去來俳諧評判』には「一昨日は」とあり、また『去來抄』には「をとゝ日は」とある。

一二 『去來發句集』所收。同書には前書の末尾「候し奉りて」が「候し侍りて」とあり、また「山路獵入る」が「山路分入る」とある。

一三 『去來發句集』所收。

上臈の山荘にまし／＼けるに候し奉りて

一二 梅が香や山路獵入る犬のまね（猿蓑

一三 ひとり寝も能宿とらん初子日（同

一四 鉢たゝきこぬよとなれば朧なり（同

一五 うき友にかまれてねこの空ながめ（同

一六 振舞や下座になをる去年の雛（同

一七 知人にあはじ／＼と花見かな（同

一八 みのむしのさがりはじめつ藤の花（北の山

一九 歸るとてあつまる鴈よ海の端（已が光

二〇 山藤のもとのゆがみを机かな（同

二一 万歳や左右にひらいて松の陰（柞原

二二 ちり籠る花や般若の紙の間（同

二三 花守や白きかしらをつき合せ（鷹獅子集

二四 一莚ちるや日かげの赤椿（同

二五 花にきてあれでもあらぬ謠哉（彼此集

二六 春や祝ふ丹波の鹿も歸とて（炭俵

一四 『眞木柱』『去來發句集』所收。

一五 『よとぎの詞』『去來發句集』所收。

一六 『去來發句集』『去來抄』所收。

一七 『節分集』『去來發句集』所收。『去來發句集』には「知人に」が「知る人に」とある。

一九 『去來發句集』所收。同書には「海の端」が「海のはた」とある。

二〇 『去來發句集』『落柿舎日記』所收。『去來發句集』には「閑居」と前書がある。

二一 『續猿蓑』『去來發句集』所收。

二二 『泊船集』『去來發句集』所收。『去來發句集』には「南都の般若寺にて」と前書がある。また『風俗文選犬註解』にも「南都般若寺にて」と前書して收められてある。

二三 『炭俵』『餅黄鳥』『名月集』『去來發句集』『去來抄』所收。『名月集』には「つき合せ」が「さし合せ」とある。

二四 『流川集』『曉山集』『去來發句集』所收。以上三書には「ちるや日かげの」が「ちるや日うらの」とある。

二六 『去來發句集』『落柿舎日記』所收。『去來發句集』には「嵯峨にてあ

洛よりの文のはしに

二七 朧月一足づゝもわかれかた（同

二八 鶯や雀よけ行えだ移り（藤の實

二九 青柳や覆ひ重るいと櫻（其便

歸郷の人に戯れ侍る

三〇 獨活蕨何もおこさず旅の殿（名月集

向去來老たる叔母田上の尼を伴ひて春の末より夏かけて西國順禮の志あり先いせに參宮して

いせじ

三一 商人のそらねゆたかやいせの春（浪化上人日記

間の山

三二 花雪とちらすや錢のあひの山（同

奉納の心を

三三 神風の彌生もふかし門の竹（同

三四 瘦はてゝ香にさく梅の思ひかた（有磯海

三五 五六本よりてしだるゝ柳かた（同

る曙に」と前書がある。

二七 『去來發句集』所收。同書には前書が「洛よりの文の返しに」とある。

二八・二九 『去來發句集』所收。

三〇 『住吉物語』『初蟬』『去來發句集』所收。以上三書には前書がない。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、同じ時の旅中吟と思はれる句が續いて七章見えてゐる。卽ち、「花雪と」（三二）の句、「神風の」（三三）の句、「美濃かけて」（一一八）の句、「住かへよ」（一一九）の句、「順禮も」（一二〇）の句、「夏の日に」（一二一）の句がそれである。

三一 『芭蕉庵小文庫』『去來發句集』所收。以上兩書には前書がない。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「商人の」（三一）の句に續いて記載されてある。

三三 『喪の名殘』『去來發句集』所收。以上兩書には前書が「參宮の折奉納の心を」とある。また『喪の名殘』には「彌生もふかし」が「彌生をふかし」とあり、『去來發句集』には「彌生はふかし」とある。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「花

三六 花見にもたゝせぬ里の犬の聲(有磯海

翁の身まかりたまひしあくる年の春義仲寺へ詣て

三七 石塔もはや苔つくや春の雨(後の旅

三八 春風にふき出されけり水の胡蘆(芭蕉庵小文庫

三九 呼出しに來てはうかすや猫の妻(同

呂丸追悼

四〇 ふみきやす雪も名殘や野邊の供(同

三月三日堺の海邊に遊て

四一 のぼり帆の淡路はなれぬ塩干哉(同

四二 陽炎や足もとにつく戻駕籠(韻塞

四三 芳野山又ちる方に花めぐり(同

四四 鶯や内のもなけば野から來る(初蟬

四五 青柳のたゝいてあそぶ戸びらかな(同・

四六 花を待日數によごすこゝろもかな(同

四七 竹原や二疋あれ込ねこの戀(喪の名殘

假二西行の詞一 難二頼政の詠一

雪と」(三二)の句に續いて記載されてある。

三四 『梅櫻』『去來發句集』所收。

三五・三六・三七・三八 『去來發句集』所收。

三九 『去來發句集』所收。同書には「猫の妻」が「猫の戀」とある。

四〇 『去來發句集』所收。

四一 『續猿簑』『梅の草紙』『去來發句集』所收。以上三書には前書がない。

四二 『去來發句集』所收。

四三 『横平樂』『去來發句集』所收。

四四 『去來發句集』『落柿舍日記』所收。

四五 『浮世の北』『去來發句集』所收。以上兩書には「戸びらかな」が「板戸かな」とある。

四六 『浮世の北』『四幅對』『去來發句集』所收。

四七 『記念題』『去來發句集』所收。

四八 『梅櫻』『去來發句集』所收。『梅櫻』には前書がない。

四九 『去來發句集』『落柿舍日記』所收。

五〇 『去來發句集』所收。

五一 『皮籠摺』『去來發句集』『去來抄』所收。『皮籠摺』『去來抄』には前書がなく、『去來發句集』『去來抄』

うときも人は折にこそよれ使は來たり馬に鞍をけ

四八 供ぶれも折にこそよれ初櫻（菊の香）

四九 藪の根やあけてゆり出す茶摘歌（同）

五〇 鶯のなく〳〵そこに樂寐かな（鳥の道）

落柿舍歳旦

五一 元日は土つかうたる顔もせず（元祿戊寅歳旦牒）

五二 若菜摘ミ敷物やらうさん俵（續有磯海）

五三 小初瀬や花にくれゆく香袋（同）

猗子守壽十六歳の春身まかりけるに

五四 死顔のおぼろ〳〵と花のいろ（同）

五五 木の空の天狗も今は花の友（泊船集）

弟魯町が故郷へかへるを送りて

五六 手をはなつ中に落けりおぼろ月（同）

五七 瀧壺もひしげと雉のほろゝ哉（續猿蓑）

五八 手一ぱいゆすのかるたや躑躅山（淡路島）

五九 立枯の殘多さやはなの中（後れ馳）

には「元日は」が「元日や」とある。

五四 『泊船集』『去來發句集』所收。

五五 『旅袋』『去來發句集』所收。『去來發句集』には「山深く分入りて」と前書がある。

五六 『去來發句集』『去來抄』所收。『去來發句集』には前書が「弟魯町故鄕へ歸りけるに」とあり、『去來抄』には前書がない。

五七・五八 『去來發句集』所收。

五九 『去來發句集』所收。同書には「殘多さや」が「殘り多さよ」とある。

六〇 『東華集』『去來發句集』所收。『東華集』には「咲花に」が「花に出て」とある。

六一 『旅袋』『去來發句集』所收。

六二 『菊の道』『渡鳥集』『續寒菊』『去來發句集』所收。前書は『菊の道』にはなく、『渡鳥集』には「田上尼の前栽の花見にまねかれて」、『續寒菊』には「田上の尼の庵に花見にまねかれ侍りし時」、『去來發句集』には「田上の尼へ花見にまねかれて」とある。また『菊の道』には「海を見た目つきも出さず花の雲」とあり、『渡鳥集』には「海を見る目つきも出ず花

六〇 咲花にうき世の人や神せゝり（けふの昔

六一 姑の氣に入人は柳かな（誹諧曾我

長崎立春

幼ころ此浦を出四十の後春をむかへてみやこを古郷となす

六二 うぶすなにあまへて旅ぞ花の春（小弓俳諧集

長崎にて

六三 海を見た目つきも出ず花の雲（青むしろ

六四 たのしさよ闇のあげくの朧月（同

六五 けなりではいふてもけふは花のはる（菊の道

六六 小袖ほす尼なつかしや窓の花（射水川

翁塚記の内

六七 鶯の朝日まつ音や谷の底（そこの花

六八 蓬萊にかけてかざるや老の袖（同

六九 老の身に青みくはゆる若菜かな（追鳥狩

七〇 田の畔や虹を負ねて啼蛙（志津屋敷

の空」、『續寒菊』には「海を見た目付さへせず花の雲」、『去來發句集』には「海を見る目つきも出ず花の雲」とある。

六四 『俳諧金毘羅會』『去來發句集』所收。

六五 『艸之道』『去來發句集』『蓑蟲庵小集』所收。以上三書には「いふても」とある。また『去來發句集』には「けもけふは」が「逢はじいふても」とある。また『去來發句集』には「けなりでは」が「褻形では」とある。

六六 『去來發句集』所收。

六七 『去來發句集』所收。同書には前書がない。

六八 『蝶すがた』『去來發句集』所收。

六九 『初便』所收。

七〇 『草苅笛』『麻生』『去來發句集』所收。以上三書には「虹を負ねて」が「虹を背負ふて」とある。

七一 『續山彥』『去來發句集』所收。『續山彥』には「海より暮し」が「海より暮る」とあり、『去來發句集』には「海より暮て」とある。

七二 『三日歌仙』『白扇集』『去來發句集』所收。以上三書には「寒かへり」が「冴かへり」とある。『白扇集』には「神鳴ルや」が「神鳴りや」とある。

七一 行春の麥に追はるゝ茶種かな（三河小町）
七二 高汐や海より暮し梅の花（小柑子）
七三 神鳴ゝや一むら雨の寒かへり（同）
七四 鶯の又鳴まいか今朝の雪（夜話狂）
七五 三月と文にかくのも名殘かな（渡鳥集）
風叩が春の氣色見んと舟さし寄けるに乘て
七六 鶯か人の眞似るか梅が崎（同）
丈艸禪師追悼（文章略）
七七 なき名聞春や三とせの生別れ（幻の庵）
七八 花に今眼入けり志賀の浦（白扇集）
稚きものを愛して
七九 正月を出して見せうか鏡餅（既望）
八〇 なにも應かも應〱と柳かな（星會集）
八一 應〱で人を賺せる柳かな（芭蕉盥）
南窓一片春と云題に
八二 久かたやこなれ〱と初雲雀（梅の草紙）

七四 『去來發句集』所收。同書には「鶯の」が「黃鸝の」とある。
七五 『去來發句集』所收。
七六 『去來發句集』所收。同書には前書が「風扣が春の景色見んと舟に乘て出けるに」とある。
七七 『去來發句集』所收。同書には前書が「丈草を哭す凡十年の笑は三年の恨に化しその恨は百年の悲を生ず惜しみても猶名殘おしく此一句を手向て來しかた行すゑを語り侍るのみ」とあり、「なき名聞」が「なき名きく」とある。また『風俗文選』中の「丈艸誄」の文中にも見えてゐる。
七八 『去來發句集』所收。同書には「湖上の花」と前書がある。また『風俗文選犬註解』にも「湖上花」と前書して記載されてある。
七九 『芭蕉盥』所收。同書には前書が「いとけなきものを愛して」とある。
八一 『去來發句集』所收。但し、この句或は「なにも應かも應〱と柳かな」（八〇）の再案か。
八二 『去來發句集』所收。同書には「散錢も用意顏なり森の花」とある。

八三 賽錢も用意顏なり花の森（去來抄

八四 切かぶの芽立を見ればさくら哉（去來文

八五 春や今水に影ゆく鳥と雲（よとぎの詞

八六 長さきのながきも訪はん雲霞（同

八七 うぐひすの音づよになりぬ二三日（去來發句集

八八 山雀の高音になるも別かた（同

聖護院むら寓居

八九 家こぼつ土のにほひや朧月（たわらの口

夏之部

其角の母の悼

九〇 蚊遣にはなさで香たく悔み哉（續虚栗

九一 たま〳〵に三日月拜む五月哉（同

木津へまかりて

九二 山里の蚊は晝中に喰ひけり（同

九三 旅寐して香わろき草の蚊遣哉（同

九四 更る夜を隣に效（なら）ふすゞみかた（同

九五 鎧着てつかれためさん土用干（同

九六 ゆふがほや名を落したる花の形（なり）（續の原

九七 笋の時よりしるし弓の竹（曠野

九八 涼しさよ白雨ながら入日影（同

九〇 『去來發句集』所收。同書には前書が「其角の母の悼に」とある。

九一・九二・九三 『去來發句集』所收。

九四 『去來發句集』所收。同書には「效ふすゞみかな」が「ならふ納涼哉」とある。

九五 『去來發句集』所收。同書には「つかれためさん」が「疲ためさん」とある。

九六 『元祿百人一句』『去來發句集』所收。

九七 『去來發句集』所收。同書には「武士の子の生長をいはふて」と前書がある。

九八 『去來發句集』所收。同書には「白雨ながら」が「夕立ながら」とある。

九九 『雜談集』『青根が峯』『芭蕉堂歌仙圖』『去來發句集』所收。また『風俗文選』中の許六の「去來誄」の文中にもある。

一〇〇 『去來發句集』所收。同書には前書が「妹千子身まかりけるに」とある。

一〇一 『いつを昔』には、「舍利講拜み侍りしに十如是の心をおもひよせてこの心に叶べきを拾ひ出侍る」と前

九九 湖の水まさりけり五月雨（曠野

いもうとの追善に

一〇〇 手のうへにかなしく消る螢かな（同

一〇一 弓になる竿は別のそだち哉（いつを昔

一〇二 心なき代官殿やほとゝぎす（猿蓑

一〇三 たけの子や畠隣に悪太郎（同

大和紀伊のさかひはてなし坂にて往來の順禮をとゞめて奉加すゝめければ料足つゝみたる紙のはしに書つけ侍る

一〇四 つゞくりもはてなし坂や五月雨（同

一〇五 百姓も麥に取つく茶摘哥（同

膳所曲水之樓にて

一〇六 螢火や吹とばされて鳰のやみ（同

一〇七 夕ぐれや屼並びたる雲のみね（同

一〇八 鶏もはら／＼時か水鶏なく（同

一〇九 石垢に猶くひ入や淵の鮎（雜談集

書して、相性體力作因緣果報の九文字に相應する各家の吟九章が收められてあつて、この書は、その中の「因」の字の下に記されてある。

一〇一 『去來發句集』所收。

一〇三 『京羽二重』『眞木柱』『去來發句集』所收。『京羽二重』には「中長者町堀川東へ入、去來」として、この句を收めてある。因みに、宮内松三郎氏藏の去來自畫讃には、この句に「落柿舍にて」と前書があり、且つ「畠隣に」が「畠隣の」とある。

一〇四 『眞木柱』『去來發句集』所收。『眞木柱』には前書がなく、『去來發句集』には前書の末尾「書つけ侍る」が「書付ける」とある。

一〇五 『去來發句集』所收。同書には「春の部」中に收められてある。

一〇六 『去來發句集』所收。同書には前書がない。

一〇七 『色杉原』『卯辰集』『去來發句集』所收。『色杉原』には「夕ぐれや」が「夕山や」とある。

一〇八 『幻住庵記』に附錄してある「几右日記」の中に收められてある。

一〇九 『去來發句集』所收。

一一〇 『後れ馳』『去來發句集』所收。

二一〇 舟ナ乗リの一濱留守ぞけしの花（罌粟合

二一一 郭公なくや雲雀と十文字（巳が光

曲水子にいざなはれて勢田の螢見にまかりけるに夕のほどながれにつゞきて下りぬるとかたれば猶舟をさし下して

二一二 螢火や黑津の梢見が嶋（同

二一三 蕣の二葉にうくるあつさ哉（鷹獅子集

二一四 うのはなの絶間たゝかん闇の門（炭俵

二一五 すゞしさや浮洲のうへのざこくらべ（同

二一六 門賣も聲自由也夏ざかな（市の庵

泊瀨にて

二一七 笈づるに卯の雪寒しはつせ山（浪化上人日記

みのに入て

二一八 美濃かけて眞桑も見えず暑サ哉（同

靑野が原人見の松

二一九 住かへよ人見の松の蟬の聲（同

二一一 『靑根が峯』『去來發句集』『去來文』所收。『靑根が峯』には「雲雀と」が「雲雀の」とあり、『去來文』には「雲雀も」とある。また『風俗文選』中の許六の「去來誄」の文中にも「雲雀の」としてある。

二一二 『去來發句集』所收。同書には前書の末尾「下りぬるとかたれば」が「下りぬと語れば」とある。

二一三 『名月集』『芭蕉庵小文庫』『去來發句集』所收。

二一四 『藤の實』『名月集』『去來發句集』『去來抄』所收。『名月集』には「闇の門」が「闇の梅」とある。

二一五 『名月集』『去來發句集』所收。『名月集』には「すゞしさや」が「涼風や」とある。

二一六 『去來發句集』所收。同書には「洒堂が難波に居を移せし時」と前書がある。

二一七 『初蟬』『末若葉』『淡路島』『幸陀稿本』『去來發句集』所收。『初蟬』には前書がなく、『末若葉』『幸陀稿本』には「順禮のとき」、『淡路島』には「順禮のとき初瀨にて」、『去來發句集』には「順禮のころ」とある。また『初蟬』には「笈づるに卯の雪

順禮日を重ねて谷汲に札打納めてはや門前なる茶店に精進おちけるを

一二〇 順禮も仕まふや襟に鮓の飯（浪化上人日記

美濃あふみの旅寐物語の茶屋にして

一二一 夏の日にねものがたりや棒枕（同

元祿七年久しく絶たりける祭のおこなはれけるを拜て

一二二 醉顔に葵こぼるゝ匂ひかた（有磯海

一二三 水札なくや懸浪したる岩の上（同

紀の藤代を涌ける比此處に三良重家の末今にありと聞およびぬれば道より少山そひに尋入侍しに門のついぢ押廻し飼たる馬みがきたる矢の根たてかざりていみじきものゝふ也又庭にいにしへの弓懸松とて古木など侍りけり

一二四 藤代やこひしき門に立すゞみ（同

一二五 葉がくれをこけ出て瓜の暑さ哉（同

寒し」が「卯の雪に負摺さむし」とあり、『末若葉』には「笈弦に卯花さむし」、『淡路島』『幸陀稿本』『去來發句集』には「卯の花に笈弦さむし」とある。且つ以上五書には「はつせ山」が「初瀨山」とある。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「神風の」（三三）の句に續いて記載されてある。

一一八 『笈日記』『初蟬』『猿舞師』『去來發句集』所收。『笈日記』には前書が「此夏回國の時みのにて申侍る」とあり、『初蟬』には「順禮の時に」、『猿舞師』には「所々順禮して美濃の國に至る」、『去來發句集』には「美濃の國熊坂が人見の松にて」との前書のある句に續いてゐる爲め「同じ國にて」とある。また『笈日記』には「美濃かけて」が「夏かけて」とあり、『去來發句集』には「眞桑も見えず」が「眞桑もみへぬ」とある。なほ『猿舞師』には左註に「右の句笈日記に書あやまり侍るよし史子申されけるまゝ此次手となしぬ」と見えてゐる。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「笈づるに」（一一七）の句に續いて記載されてある。

一二六 猫の子の巾着なぶる涼みかな（笈日記

一二七 みな月の竹の子うれし竹生島（芭蕉庵小文庫

一二八 兄弟が顔見合すや蜀魂（韻塞

一二九 見物の火にはぐれたる歩行鵜哉（同

一三〇 暮待や藪のひかへの雲の峯（同

熊野のあたしかといふ處に初音をきゝて

一三一 こちの身もあたしかにきく郭公（初蟬

一三二 町筋は祭に似たり夕涼み（同

一三三 新足に聞や内野のほとゝぎす（浮世の北

一三四 よし野にてあはれうものか郭公（菊の香

雲鳥の峠にて

一三五 五月雨にしづむや紀伊の八庄司（鳥の道

みのゝ國人見の松にて

一三六 わるあつく吹や人みの松のかぜ（同

一三七 夏豆の二葉や麥の株かへし（續有磯海

一三八 一聲は闇のつぶてや郭公（同

一二九 『末若葉』『去來發句集』所收。『末若葉』には前書が「みのに人て」とあり、『去來發句集』には前書がなく、前句に「美濃の國熊坂が人見の松にて」と前書がある。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「美濃かけて」（一一八）の句に續いて記載されてある。

一三〇 『そこの花』『去來發句集』所收。『そこの花』には前書が「谷汲にて」とあり、『去來發句集』には「谷汲寺にて」とある。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「住かへよ」（一一九）の句に續いて記載されてある。

一三一 『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「順禮も」（一二〇）の句に續いて記載されてある。

一三三 『去來發句集』所收。同書には前書の末尾「拜て」が「拜して」とある。

一三三 『去來發句集』所收。

一三四 『梅かゞみ』『去來發句集』所收。『梅かゞみ』には前書がなく、添書に「古人落柿舍紀路順禮の書捨は柿降子の所持集にものせよとすゝめにて」とある。『去來發句集』には前書

熊野に詣ける比八鬼尾谷といふ處にふりこめられて

一三九 逗留のまどに落るや栗の花（續有磯海

一四〇 ほとゝぎすきのふ一聲けふ三聲（記念題

一四一 横雲の間や山出しの子規（泊船集

一四二 さみだれの尻をくゝるや稲びかり（同

一四三 いろ〳〵の作となり鳧麥の跡（同

一四四 石も木も眼にひかるあつさかな（同

一四五 立ありく人にまぎれてすゞみかな（續猿蓑

洛東の眞如堂にして善光寺如來開帳の時

一四六 涼しくも野山にみつる念佛哉（同

一四七 うかれ出て山がへするかほとゝぎす（けふの昔

一四八 朝〳〵の葉のはたらきや杜若（旅袋

一四九 卯の花も海のかざりや淺間山（青むしろ

一五〇 あけくれの空鳴ひらけ時鳥（艸之道

つくしへまかりけるとき伏見の舟中より都に侍る子どものかたを歸りみて（マヽ）

中、「紀の藤代」が「紀伊の藤代」、「道より少山ぞひに」の八字なく、「門のついぢ」が「門築地」、「みがきたる」が「みがき立たる」、「ものゝふ」が「武士」、「弓縣松とて古木など侍りけり」が「弓掛松とて古木今もあり」とある。

一三五 『去來發句集』『落柿舍日記』所收。『落柿舍日記』には「蕉翁落柿舍に偶居しゐ給ひけるころ」と前書がある。

一三六・一三七 『去來發句集』所收。

一三八 『誹諧曾我』『旅寐論』『去來發句集』『去來抄』所收。『誹諧曾我』『旅寐論』には「兄弟の顔見るやみや蜀魂」、『去來抄』には「兄弟の顔見あはすや時鳥」とある。また『誹諧曾我』には左註に「白雪此句味をしるに彼二十八日の夜のくらさはくらし明松さしあげつく〴〵と見あはしたる時にや」とある。

一三九・一四〇 『去來發句集』所收。

一四一 『去來發句集』所收。同書には前書が「熊野にあたしかといふ所あり初音をきゝて」とある。

一四二 『去來發句集』所收。

一四三 『去來發句集』所收。同書には

一五一 夕立の雲もかゝらず留主の空（金毘羅會

一五二 熊野路に知人もちぬ桐の花（そこの花

一五三 百出てもみな中間也麥の蝶（きれ〳〵

一五四 ひかりあふ二つの山の茂りかた（枕かけ

一五五 鶯もやゝ受太刀やほとゝぎす（渡鳥集

六玉川之記

田中山本といへる所のおほく竹の森松むらの少なからねば玉川もむつには限るまじきをたゞもてはやす人のめでたく侍れば名もともに聞ゆるなりされば人は所によりてなつかしく處は人を待て顯るべし又玉といへるもゆへありわきみ百丸子是をしり給ふや

先井手の玉川は殊に山吹の咲亂れて花には黄玉葉には青玉と置添ふ露の玉川也

次は卯の花のさよ更て待人ありと時鳥の蜀の國より津の國まで飛來る玉川也

三にむさしの女の手づくりやさらす細布さら〱と

「西山へまかるとて」と前書がある。

一三四 『續山彦』『心ひとつ』『去來發句集』所收。『去來發句集』には「あはれうものか郭公」が「逢れう物かほとゝぎす」とある。

一三五 『去來發句集』所收。同書には前書が「雲とりの峠にて」とあり、「八庄司」が「八莊司」とある。

一三六 『去來發句集』所收。同書には前書が「美濃の國熊坂が人見の松にて」とある。

一四〇 『後れ馳』『去來發句集』所收。『後れ馳』には「けふ三聲」が「今朝三聲」とある。

一四一・一四三・一四四 『去來發句集』所收。

一四五 『よとぎの詞』『去來發句集』所收。

一四六 『去來發句集』『去來抄』所收。『去來發句集』には前書が「洛東眞如堂にて善光寺如來開帳の時」とある。『去來抄』には前書がなく、「涼しくも」が「涼しさの」とある。

一四七 『東華集』『去來發句集』所收。

一四八 『菊の道』『東華集』『務津之波那』『渡鳥集』『去來發句集』所收。『渡鳥集』には「先放が別墅」と前書がある。

淸く流るゝ砂玉川也
野路の玉河は春の氣色にやゝかはり萩の錦に浪こへて色ある月の玉川也
其五の川は淺瀨も見えぬ汐風に打あげらるゝ水玉川也
終りは高野の奥にて旅人のもしや忘れて汲べきかと墨の袂にいとわれし衣のうらの玉川也
人ありて我が言をたしかならずといはゞさもあるべきものと後には思ひしり侍らんかししたしく此所〳〵を見めぐり給ふ事のうらやましくて

一五六 六玉川たかのゝ外は淸水かや（寒菊隨筆

長崎へ赴く道中

一五七 世を海に高飛したる水鷄哉（芭蕉盥

一五八 靑柴を蚊屋にもつるや矢瀨小原（芋がしら

一五九 つかみあふ子供のたけや麥ばたけ（嵯峨日記

一六〇 夕すゞみ疝氣起して歸りけり（去來抄

一四九 『金毘羅集』『枕かけ』『白扇集』『去來發句集』所收。『金毘羅集』『去來發句集』には「伊勢にて」と前書があり、『白扇集』には「いせのあさまにて」と前書がある。また以上四書には「淺間山」は「朝熊山」とある。

一五〇 『去來發句集』所收。同書には「空鳴ひらけ」が「空啼ひゞけ」とある。

一五一 『渡鳥集』『去來發句集』所收。『渡鳥集』には前書が「筑紫に下りける比伏見の舟中」とあり、『去來發句集』には「伏見の舟中より都の方をながめて」とある。

一五二 『去來發句集』所收。同書には「知人もちぬ」が「しる人もちぬ」とある。

一五三・一五五 『去來發句集』所收。

一五六 『去來發句集』『芭蕉句選拾遺』所收。『去來發句集』には前書が「六玉川の記あり」とあり、「たかのゝ外は」が「高野ゝ外は」とある。『芭蕉句選拾遺』には前書中に左の如き異同がある。「聞ゆるなり」は「きこゆなり」、「卯の花の」は「花垣の」、「飛來る」は「啼て飛來る」、「細布」は

一六一　張がさに雨もいとはずほとゝぎす（よとぎの詞

一六二　戀のためにあらず蚊にやるひざがしら（同

一六三　じだらくに寐れば涼しき夕かた（去來發句集

従兄弟の筑紫より上りけるに

一六四　むかし思へ一ッ畑のふり茄子（同

「調布」、「我言をたしかならずと」は「或は我が言たしかならずと」。又、『寒菊隨筆』には左の如き左註が添へられてある。「此玉川の記は魯町先生のもとに久しく殘され侍りしをこひ求て畫賛に寫しぬまさに落柿先生の述作也」。

一五八　『去來發句集』所收。同書には「青柴を蚊帳にも釣や八瀨大原」とある。

一五九　『去來發句集』『去來抄』所收。但し、『去來抄』には作者名が「游刀」と見えてゐる。

一六〇　『去來發句集』所收。

一六三　『猿蓑』『去來抄』所收。以上兩書には作者名を「宗次」として收めてある。去來の作とするのは誤である。

秋之部

遊女ときは身まかりけるをいたみて久しくあひしれりける人に申侍る

一六五 露烟此世の外の身うけ哉（續虚栗）

一六六 躍子よあすは畠の艸ぬかん（同）

一六七 たれ〳〵も東むくらん月の昏（同）

嵯峨に小屋作りて折ふしの休息仕候なれば

一六八 月のこよひ我里人の藁うたん（同）

一六九 盲より啞のかはゆき月見哉（同）

一七〇 長き夜も旅くたびれにねられけり（同）

一七一 名月や海もおもはず山も見ず（曠野）

一七二 秋風やしらきの弓に弦はらん（同）

一六五 『去來發句集』所收。同書には前書が「遊女常盤身まかりけるをいたみて相しれりける人に申侍る」とあり、「露烟」が「露けぶり」とある。

一六六 『去來發句集』所收。同書には「躍子よあすは」が「踊子よ翌は」とある。

一六七 『去來發句集』所收。同書には「たれ〳〵も」が「誰〳〵も」とあり、「月の昏」が「月のくれ」とある。

一六八 『去來發句集』『落柿舍日記』所收。『落柿舍日記』には前書がない。

一六九 『去來發句集』『去來抄』所收。

一七〇 『去來發句集』所收。『伊勢紀行草稿』には、去來を消して千子の句としてある。

一七一 『いつを昔』『去來發句集』所收。『いつを昔』には「海もおもはず山も見ず」が「山も思はず海も見ず」とある。

一七二 『去來發句集』所收。

一七三 『去來發句集』所收。『花つみ』には「鼠說」と題する去來の文章を収め、その末尾にこの句を掲げ、次に「いつをむかしのねうびくつくづく承りて法師ばらに申しつたへたれば相ﾚ鼠ヲをしへありがたく侍るほ

鼠説（文章略）

一七三 面扶持をへつるか粟の鼠共（花つみ）

甲陽軍鑑をよむ

一七四 あらそばの信濃の武士はまぶしかな（同）

一七五 月すむや室のやだ船是一つ（江鮭子）

一七六 うき人を又くどきみん秋のくれ（其袋）

一七七 はつ露や猪の臥芝の起あがり（猿蓑）

一七八 みやこにも住まじりけり相撲取（同）

つくしよりかへりけるにひみといふ山にて卯七に別て

一七九 君がてもまじる成べしはな薄（同）

一八〇 月見せん伏見の城の捨郭（同）

仲秋の望猶子を送葬して

一八一 かゝる夜の月も見にけり野邊送（同）

一八二 一戸や衣もやぶるゝこまむかへ（同）

自題落柿舎

どに一夏百句のけちえんにとて此集にかき次ぎ侍るなり」との附記がある。『去來發句集』には「鼠の説」と前書があり、また「粟の鼠共」が「栗の鼠共」とある。

一七四 『其袋』『去來發句集』所收。以上兩書には前書が「讀甲陽軍鑑」とある。また『去來發句集』には「あらそばの」が「あら蕎麥の」とある。

一七六 『破曉集』『去來發句集』所收。

一七七・一七八 『去來發句集』所收。

一七九 『眞木柱』『去來發句集』所收。『眞木柱』には前書がなく、『去來發句集』には前書が「ひみといふ山にて卯七に別るゝとて」とある。

一八〇・一八一・一八二 『去來發句集』所收。

一八三 『去來發句集』『落柿舎日記』所收。『落柿舎日記』には去來の眞蹟を摸寫複刻してあつて、その前書には「題落柿舎」とある。また『風俗文選』には「落柿舎記」と題する去來の文章の末尾に、この句が掲げてある。

一八四 『己が光』『句兄弟』『去來發句集』所收。

一八五 『己が光』『去來發句集』所收。以上兩書には前書がない。

一八三 柿ぬしや梢はちかきあらし山（猿蓑）

一八四 淺茅生やまくり手おろす虫の聲（西の雲）

　　數十里を一日に過て

一八五 打たゝく駒のかしらや天の川（同）

一八六 馬の子のかけ違けりはまの月（北の山）

一八七 名月や緣とりまはす秬のから（桃の實）

一八八 秋の日のかりそめながらみだれけり（曠野後集）

　　なには津にて

一八九 芦の穂に箸うつかたや客の膳（炭俵）

一九〇 駒牽の木曾や出らんみかの月（句兄弟）

　　雲津川にて船よぶ人多かりけれどむかふにさしとめて見むかず

一九一 秋風に耳の垢とれ渡し守（藤の實）

　　人〳〵嵯峨の宿をとはれけるに

一九二 木の本に圓座取巻け小練年（同）

一九三 稲妻にゆられて月も一ころび（名月集

一八七 『炭俵』『名月集』『三日月日記』『去來發句集』『落柿舍日記』所收。

一八八 『熱田三歌仙』『去來發句集』所收。

一八九 『去來發句集』所收。

一九〇 『其便』『浮世の北』『眞木柱』『去來發句集』『去來抄』所收。

一九一 『伊勢紀行』『去來發句集』所收。『去來發句集』には前書がない。

一九二 『去來發句集』所收。同書には前書がなく、また「小練年」が「木練どし」とある。

一九四 『笈日記』『三日月日記』『浮世の北』『柴のほまれ』『藁人形』『芭蕉盥』『鴨矢立』『去來發句集』『去來抄』所收。『三日月日記』には「山野に逍遙して」と前書があり、他の八書には前書がない。また『三日月日記』には「岩はなやこゝにもひとり」とあり、他の八書には「岩はなやこゝにもひとり月の客」とある。且つ『風俗文選』中の許六の「去來誄」の文中にも『笈日記』と同形式で收められてある。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「夏の日に」（一二一）の句に續いて記載されてある。

旧年よりの作

一九四 又ひとりこゝにもあるや月の客（浪化上人日記

同廿一日の便來る酬書來る于蘭盆に古翁の事思ひ出て

一九五 里人も一門なみや魂まつり（同

名月の夜は世波いそがはしくて聖護院の邊へ出行夜深て歸り侍るまことに人の月見る夜却而野外より家路に歸る淺ましく世を渡り果ぬる物哉と鴨川にてたはむれの巾捨

一九六 鴨川や月見の客に行あたり（同

一九七 早稲干や人見え初る山のあし（有磯海

一九八 酒もりとなくて酒のむほしむかへ（同

一九九 臥處かや小萩にもるゝ鹿の角（同

二〇〇 明月や向への柿やでかさるゝ（同

ありそ海集撰たまひける時入句ども書あつめまいらせけるにそへて祝す

一九五 『續有磯海』所收。同書には「故翁の靈を祭りて」と前書がある。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「はなすかと」（三一七）の句に續いて記載されてある。

一九六 『芭蕉庵小文庫』『去來發句集』所收。以上兩書には前書が「世波にたゞよひて日暮の比岡崎より京に歸るとて」とある。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「里人も」（一九五）の句に續いて記載されてある。

一九七 『去來發句集』『落柿舍日記』所收。

一九八 『去來發句集』所收。

一九九 『去來發句集』所收。『有磯海』には「秋日游小倉山、同詠鹿角」と前書して諸家の吟詠を並べてある中に收められてある。

二〇〇 『去來發句集』所收。同書には「名月やむかひの柿屋照さるゝ」とある。

二〇一 『去來發句集』所收。同書には「鷲の子や」が「鷲の巣や」とある。

二〇二 『去來發句集』所收。同書には「木間に見付たり」が「木の間に見付けり」とある。

二〇三 『續猿簑』『去來發句集』所收。

二〇一 鶯の子や野分にふとる有そ海（有磯海

二〇二 啼鹿を椎の木間に見付たり（笈日記

二〇三 寐道具のかた〳〵やうき玉祭（芭蕉庵小文庫

芽立より二葉にしげる柿の實と申侍りしはいつの年にや有けむ彼落柿舍もうちこぼすよし發句に聞えたり

二〇四 やがて散る柿の紅葉も寐間の跡（同

嵐蘭追悼

二〇五 千貫のつるぎ埋けり苔の露（同

追悼

二〇六 玉棚の奥なつかしや親の顏（韻塞

二〇七 こけざまにほうと抱ゆる西瓜哉（初蟬

二〇八 夜あらしや空にふきとるしかの聲（同

落柿舍感偶

二〇九 柿買や見ればぬいたる眞桑賣（同

二一〇 のりながら馬草はませて月見哉（同

『去來發句集』には「妻におくれたる人の許にて」と前書がある。

二〇四 『去來發句集』『落柿舍日記』所收。以上兩書には前書が「芽立より二葉にしげる柿の實と丈草申されしもいつの頃にや有けん彼落柿舍もうちこぼつよし」とある。

二〇五 『去來發句集』所收。同書には「つるぎ埋けり」が「劍うめけり」とある。

二〇六 『去來發句集』『去來抄』所收。以上兩書には前書がない。

二〇七 『去來發句集』所收。同書には「ほうと抱ゆる」が「ほうと抱つく」とある。

二〇八 『淡路島』『去來發句集』所收。

二〇九 『去來發句集』『落柿舍日記』所收。

二一〇・二一一 『去來發句集』所收。

二一二 『青根が峯』『去來發句集』『去來抄』所收。

二一三 『荒小田』『去來發句集』所收。『荒小田』には前書がなく、「腰がたな」が「竹刀」とある。また『去來發句集』には「聞まひと」が「聞まつと」とある。

二一六 『去來發句集』所收。同書には

二一一　あさがほや夜は葎のばくち宿（菊の香
二一二　稲妻のかきまぜて行やみよかな（同
　　田家
二一三　聞まひといふか案山子の腰がたた（鳥の道
二一四　夜あるきにから櫓の音や浦の秋（續有磯海
二一五　死事としらで下るや瀬〻の鮎（同
二一六　いなづまやどの傾城とかり枕（同
二一七　尻なで〻落馬さするな花す〻き（記念題
　　小倉にて七夕のひる
二一八　七夕をよけてやた〻が舟躍り（泊船集
　　七夕は黒崎沙明にて
二一九　うちつけに星待顔や浦の宿（同
　　長さき盆會に
二二〇　見し人も今は孫子や墓参り（同
　　同所諏訪大明神にまうで〻
二二一　貴さを京でかたるもすはの月（同

「長崎丸山にて」と前書がある。なほ『梟日記』には「後賦」と題する文章の末尾に、『風俗文選』には「後膺山賦」と題する文章の末尾に収められてある。

二一七『後れ馳』『きれ〲』『去來發句集』所收。『後れ馳』『去來發句集』には「落馬さするな」が「馬とばするな」とある。

二一八『去來發句集』所收。『泊船集』には左註に「た〻は漁夫の女舟躍は雨乞なり」とある。『去來發句集』には前書が「筑前の黒崎にて明日は此邊りのた〻ども沖に出て雨乞の跡し侍るといふを聞て」とあり、左註には「た〻とは此邊にて漁父の妻娘の事也けふは七月七日の事にぞ侍りける」とある。

二一九『去來發句集』『筑紫貝』所收。『去來發句集』には前書が「黒崎砂明亭にて」とあり、「星待顔や」が「星まつ顔や」とある。『筑紫貝』には前書が「黒崎」とある。

二二〇『射水川』『渡鳥集』『去來發句集』所收。『射水川』には前書が「長崎にて」、『去來發句集』には「年經て長崎に歸りけるに」とあり、『渡鳥

田上といふ山家にて

二二二 山家にて魚喰ふ上に早稻の飯（泊船集

二二三 樫の木の色もさむるや秋の空（同

田上の名月

二二四 名月やたがみにせまる旅心（同

二二五 松茸や人にとらるゝ鼻の先（けふの昔

崎陽に旅寢の比

二二六 故郷も今はかり寢や渡鳥（同

二二七 氣遣ふて渡る灘（なだ）や鱸釣（誹諧曾我

長崎にて

二二八 浦人を寐せて海見る月夜かな（同

二二九 手討した下から笑ふ西瓜かな（小弓俳諧集

長崎不休亭菊見

二三〇 そくさいの數にとはれむ嵯峨の柿（梟日記

備中國吉備津宮奉納

二三一 はつ霜や名乘くはゝる菊ばたけ（蓑笠

集』には前書がなく、「入長崎記」の文中に見えてゐる。また『射水川』には「今は孫子や」が「孫子になりし」、『渡鳥集』には「孫子になりて」『去來發句集』には「孫子となりて」とある。

二二一 『渡鳥集』『梟日記』『去來發句集』所收。『渡鳥集』には前書がなく「入長崎記」の文中に收められてある。『梟日記』にも前書がない。『去來發句集』には前書が「長崎諏訪の社にて前書あり」とある。

二二二 『去來發句集』所收。同書には前書が「田上にて」とある。また『泊船集』には「是は漁村のかよひ路也」と左註がある。

二二三 『冬紅葉』『蓑笠』『去來發句集』所收。『冬紅葉』『去來發句集』には「聖護院にて」と前書がある。また『冬紅葉』には「椎の木の色もさめけり秋の空」とあり、『蓑笠』には「椎の木の色もさむるや秋の空」、『去來發句集』には「樫の木の色もさめるや秋の空」とある。

二二四 『けふの昔』『渡鳥集』『砂川』『去來發句集』所收。『けふの昔』には前書がなく、『渡鳥集』には前書が

二三二　あき風や鬼とりひしぐ吉備の山（青むしろ

園木の宿にて小姫のまだらぶしうたふをきゝて

二三三　月かげに裾を染たよ浦の秋（同

いつくしまにて

二三四　滿汐の岩ほに立や鹿の聲（同

長月末つくしよりのぼりける道あきのひろしまを通けるに人〳〵とゞめられけれども故鄕に心いそぎせられてのがれ出るあかつき一夜の宿にかきとゞめ侍る

二三五　けふ翌となりていそがしわたり鳥（同

二三六　浦陰や通しも交るわたり鳥（菊の道

二三七　山陰や鳥入來る星むかえ（同

二三八　いざよひや慥にくるゝ空の色（同

福岡にて

二三九　福岡や千賀もあら津も雁鱸（同

二四〇　名月や三年ぶりに如意が嶽（金毘羅會

「長崎より田上山に旅寢移しける比卯七素行に訪れて」とある。また『砂川』には前書がなく、左註に「此句卯七よりの文に見えたり詞がきあるよししれず」とある。『去來發句集』には前書が「長崎より田上に旅寐うつしける時」とあり、「たがみにせまる」が「たが身にせまる」とある。

二三五　『去來發句集』所收。

二三六　『渡鳥集』『去來發句集』所收。『渡鳥集』には前書がなく、「入長崎記」の文中に收められてある。『去來發句集』には前書が「長崎に旅寐のころ」とある。

二三七　『旅袋』『去來發句集』所收。以上兩書とも「渡る灘や」が「わたる灘女や」とある『旅袋』には「黑崎にて探題」と前書がある。『去來發句集』には前句に「筑前の國にて」と前書がある爲め、「同黑崎にて」と前書がある。

二三八　『花の雲』『渡鳥集』『笈の塵』『去來發句集』所收。『渡鳥集』には前書が「素行亭」とあり、『笈の塵』には前書がなく、『去來發句集』には「長崎素行亭」とある。

二三九　『花見車』所收。

二四一　十五夜の月のひらきや前後（金毘羅會

二四二　黒い身に照こむ旅の月見哉（そこの花

筑前博多にて

二四三　菊の香にもまれてねばや濱庇（同

宰府奉納

二四四　幾秋の白毛も神のひかり哉（同

悼風國

二四五　朝夕に語らふものを袖の露（同

七月朔日難波津に船待して

二四六　盆比に直るやけふの雲ちぎれ（きれ〴〵

宰府にて

二四七　松杉もおがめと晴るゝ秋の雲（蝶すがた

二四八　名月やさすがに夜の姿にて（玉まつり

二四九　小男鹿や岩に踏張る雲の透キ（白馬集

筑前直方にて

二五〇　行秋や花にふくるゝ旅衣（初便

二三〇　『去來發句集』所收。同書には「長崎にて支考に逢て京の事などたづねられて」と前書があり、また「そくさいの」が「息才の」とある。

二三一　『去來發句集』所收。同書には前書が「吉備津宮奉納」とある。

二三二　『小柑子』『折つゝじ』『去來發句集』所收。『小柑子』には前書が「薗木にて小姫のまだらぶしといへるをうたふを聞て」とある。また『折つゝじ』には前書が「その木に泊りける夜しなといへる小姫のまだらぶしうたひけるを聞て」とあり、「裾を染たよ」が「裾は染たよ」とある。

二三四　『去來發句集』所收。同書には前書が「伊都岐島にて」とあり、「滿汐の」が「みつ潮の」とある。

二三五　『折つゝじ』『去來發句集』所收。『折つゝじ』には前書がなく、「けふ翌となりて」が「今日明日の秋も」とある。『去來發句集』には前書中「人〴〵とゞめられけれども」が「人〴〵とらへけれども」とある。

二三六　『去來發句集』所收。

二三七　『渡鳥集』『去來發句集』所收。以上兩書には「山陰や」が「山本や」とある。また『渡鳥集』には「立山

二五一 馬の子の濱かけ廻る月夜哉（柿表紙）

はかたにて

二五二 五里の濱月を抱て旅寐哉（當座拂）

長月廿日あまりの旅行ならん廣しまの人〳〵のせちにとゞめ申されしをわりたく立出るとて

二五三 此ごろとなりていそがしわたり鳥（草苅笛）

二五四 朝あらしあたまの上を渡り鳥（渡鳥集）

二五五 雁がねの竿に成時猶さびし（同）

先放をあくの浦に訪

二五六 八月や潮のさはぎの山かづら（同）

牡年亭にて

二五七 海山を覺へて後の月見哉（同）

二五八 天河大事に星もひかるかな（土大根）

二五九 日和見る窓にはちかし月の暮（續山彦）

殺生石

二六〇 穗にたゝぬ薄生けり石の隈（七異跡集）

下谷町がもとにて」、『去來發句集』には「谷町が許にて」と前書がある。

二三八 『艸之道』『柴はし』『去來發句集』所收。

二三九 『去來發句集』『筑紫貝』所收。『去來發句集』には前書が「筑前の國にて」とあり、「福岡や千賀もあらはに鷹すゝき」とある。また『筑紫貝』には前書が「福岡」とあり、「布久岡や千賀も荒津も鷹鱸」とある。

二四一 『きれ〳〵』『去來發句集』所收。『きれ〳〵』には「月のひらきや」が「月の闇や」とある。

二四二・二四三 『去來發句集』所收。

二四四 『去來發句集』『去來抄』所收。『去來抄』には前書が「大宰府奉納」とあり、「幾秋の白毛も」が「幾年の白髪や」とある。

二四五 『去來發句集』所收。

二四八 『藁人形』所收。同書には「委にて」が「たからにて」とある。

二四九・二五四・二五五 『去來發句集』所收。

二五六 『去來發句集』所收。同書には前書が「先訪をあくの浦に訪ふ」とあり、「潮のさはぎの」が「潮のさはぎを」とある。

二五七 『長月集』『去來發句集』所收。

周防の徳山を過るとて
支考は當季あらざるよし

二六一 綿もふく蕎麥しら妙に徳の山（白扇集

筑前の相撲取に褒美とらすとて

二六二 秋風や西に名を得し金(かな)碇(いかり)（芭蕉盥

二六三 老らくの腿(もゝ)たけあまるすゝきかな（同

二六四 内畑や千とせの秋の種茄子（雪薺集

老さらぼひたる行脚をいたはられて

二六五 行灯に飛ぶや油覃のきりぎりす（柴のほまれ

二六六 蠅ならぶはや初秋の日數かな（折つゝじ

奥の細道の奥書の末に

二六七 濡つ干つ旅やつもりて袖の露（蝶夢本奥の細道

二六八 猪の寐に行かたや明の月（去來抄

二六九 露落て襟こそばゆき木陰哉（同

二七〇 菊咲て屋根のかざりや山畑（同

二七一 乘掛の眠をさまますきぬた哉（同

以上兩書には前書がない。

二五九 『去來發句集』所收。

二六一 『去來發句集』所收。同書には前書が「周防にて」とあり、「徳山の蕎麥白たへや綿もふく」と見えてゐる。

二六四 『雪薺集』には「是は田上の尼の千載亭の記を述られし句なるを今記文を略しぬ」と左註がある。

二六五 『丈草發句集』に「行燈に飛や袂のきりぎりす」の句があるのを考慮に入るべきである。

二六六 『去來發句集』『芭蕉翁俳諧集』所收。但し、『葛の松原』に「野童」の作として「蠅ならぶはや初秋の朝日かな」の句があるのを考慮に入るべきである。

二六七 『去來發句集』所收。同書には前書が「芭蕉翁の奥の細道を拜してその書寫の奥に書付ける」とある。また『風俗文選犬註解』にも同様の前書で收められてある。

二六八 『去來發句集』『旅寐論』『去來文』『桃の杖』所收。

二六九 『去來發句集』所收。同書には「襟こそばゆき」が「尻こそばゆき」とある。

二七二 娘より嫁の音よはき砧かな（同

二七三 奥山や五聲續く鹿の聲（旅寝論

二七四 秋はまづ目にたつ菊のつぼみ哉（同

二七五 あきの水淡路島根をかこひけり（よとぎの詞

二七六 みちかくる月になみだぞ須磨のあき（同

二七七 白川や屋根に石おく秋の風（伊勢紀行

二七八 秋風もこゝろまゝなりにほの海（同

二七九 馬の口よくとれ霧の谷ふかし（同

二八〇 朝ぎりや處のものに雨とはん（同

二八一 藁たゝくひゞきによわる砧かな（同

二八二 一ふしはいづれの虫もつかまつる（同

二八三 今よりは棘もからず花薄（同

二八四 芋洗ふ人より先に垢離とらん（同

老て神職かふむりたる人を賀して

二八五 花も實も晩稲に多し神の秋（去來發句集

唐人の枕とて故郷にて人のくれけるに

二七〇・二七一 『去來發句集』所收。

二七二 『去來發句集』所收。同書には「嫁の音よはき」が「嫁よりよはき」とある。

二七三 『去來發句集』『伊勢紀行』所收。『伊勢紀行』には「鹿の聲」が「鹿をきく」とある。

二七四 『去來發句集』所收。同書には「園女亭にて先師の事ども申出ける序に」と前書がある。

二八六 囉(もら)へどもまづ此秋はより枕（去來發句集

二八七 眠たる目をあらはばや秋の水（俳僊遺墨

冬之部

二八八 雲よりも先にこぼるゝしぐれ哉（續虚栗

二八九 年の夜や人に手足の十ばかり（同

二九〇 御神樂や火を燒衞士にあやからん（續の原

二九一 榾の火に親子足さす侘ね哉（曠野

李下が妻のみまかりしをいたみて

二九二 ねられずやかたへひえゆく北おろし（同

十月九日嵯峨遊吟

ひろさは

二九三 池のつら雲の氷るやあたご山（いつを昔

臨川寺

二九四 凩の地迄落さぬしぐれかな（同

二八八・二八九・二九〇・二九一 『去來發句集』所收。

二九二 『去來發句集』所收。同書には前書が「李下が妻の身まかれるに」とある。

二九三 『去來發句集』所收。同書には前書が「廣澤」とあり、「池のつら」が「池の面」、「あたご山」が「愛岩山」とある。

二九四 『葛の松原』『鳥羽蓮花』『青根が峯』『桃の杖』『去來發句集』『去來抄』所收。以上六書には前書がない。また『青根が峯』以下四書には「地迄落さぬ」が「地にも落さぬ」とあり、且つ『風俗文選』中の許六の「去來誄」の文中にも「地にも落さぬ」としてある。

二九五 『去來發句集』所收。同書には前書がなく、また「木間のぞかん」が「木の間覗ん」とある。

二九六 『俳諧錦繡緞』『去來發句集』所收。『俳諧錦繡緞』には前書が「番匠の入口に俳諧に力なき輩かたく入べからずと定たるも」とある。『去來發句集』には前書がなく、また「十餘年」が「十五年」とある。

二九七 『俳諧錦繡緞』『去來發句集』『落

大井里

二九五 冬枯の木間のぞかん賣屋敷（いつを昔

續みなしぐりの撰びにもれ侍りしに首尾年ありて此集の人足にくはゝり侍る

二九六 鴨啼や弓矢を捨て十餘年（同

鉢たゝき聞にとて翁のやどり申されしにはちたゝきまいらざりければ

二九七 箒こせまねてもみせん鉢扣（同

二九八 そのふるき瓢簟みせよ鉢たゝき（同

二九九 いそがしや沖の時雨の眞帆片帆（猿蓑

三〇〇 尾頭のこゝろもとなき海鼠哉（同

三〇一 あら礒やはしり馴たる友衞（同

三〇二 ひつかけて行や雪吹のてしまござ（同

三〇三 うす壁の一重は何かとしの宿（同

三〇四 くれて行年のまうけや伊勢くまの（同

三〇五 鳶の羽も刷（かいつくろひ）ぬはつしぐれ（同

柿舍日記』所收。『俳諧錦繡緞』には前書が「鉢たゝき聞にとて翁のやどり申されしにまいらざりければ」とあり、『去來發句集』には前書がない。また『風俗文選』中の去來の「鉢扣辭」の文中にもある。

二九八 『眞木柱』『去來發句集』所收。『去來發句集』には「瓢箪」が「瓢單」とある。共に「瓢簞」の誤である。

二九九 『去來發句集』『去來抄』所收。但し、『去來抄』にはこの句を改めて「有明や片帆にうけて一時雨」とする說がある。

三〇〇 『去來發句集』所收。同書には「海鼠哉」が「生海鼠かな」とある。

三〇一 『去來發句集』所收。同書には「友衞」が「友千鳥」とある。

三〇二 『眞木柱』『去來發句集』所收。『去來發句集』には「てしまござ」が「豐嶋御座」とある。

三〇三 『去來發句集』所收。

三〇四 『眞木柱』『去來發句集』所收。

三〇五 『去來發句集』所收。

三〇八 『去來發句集』『一字幽蘭集』所收。

三〇九 『去來發句集』所收。同書には

三〇六 初雪や羅紗の羽織にのしめ鞘（西の雲

三〇七 嫁入の歩で吹るゝ霞かな（同

まつもとにて

三〇八 初雪や四五里へだてゝひらの嶽（俳諧勸進帳

三〇九 年の夜や鰤や鰯や三の膳（已が光

三一〇 はきちぎる八疊敷の寒さ哉（薦獅子集

三一一 暖簾や雪吹わたす旅籠町（流川集

三一二 應〱といへど敲くや雪の門（句兄弟

三一三 雪雲や鬼も肱を出すべう（藤の實

芭蕉翁病中祈禱の句

三一四 凩の空見なをすや鶴の聲（枯尾花

三一五 病中のあまりすゝるや冬ごもり（同

傷亡師終焉

三一六 忘れ得ぬ空も十夜の泪かな（同

三一七 はなすかと問はるゝ家も冬籠り（浪化上人日記

時ならぬ冬籠の句を思ひ出て

「鰤や鰯や」が「鮇や鰯や」とある。

三一一 『名月集』『去來發句集』所收。

三一二 『有磯海』『翁草』『眞木柱』『俳諧錦繡緞』『梟日記』『ねなし草』『幸陀稿本』『去來發句集』『去來抄』所收。『翁草』には「應〱と」が「あふ〱と」とある。また『俳諧寂栞』には「いへど敲くや」が「いふに扣くや」とある。

三一三 『去來發句集』所收。同書には「雪雲や鬼も肱を」が「雪空や鬼も腕を」とある。

三一四 『浪化上人日記』『去來發句集』所收。『浪化上人日記』には元祿七年の部の去來書翰中にある。また『去來發句集』には前書が「翁の病中祈禱の句」とある。

三一五 『浪化上人日記』『去來發句集』所收。『浪化上人日記』には元祿七年の部の去來書翰中にある。また『去來發句集』には「翁の病中」との前書があり、且つ「病中の」が「白粥の」とある。

三一六 『木がらし』『去來發句集』所收。

三一七 『笈日記』『初蟬』『末若葉』『去來發句集』『落柿舍日記』所收。『笈日記』には「落柿舍」と前書があり

三一八　墨染に眉の毛長し冬籠り（浪化上人日記

三一九　しぐるゝやもみの小袖を吹かへし（有　磯　海

芭蕉翁の七日〳〵もうつり行あはれさ猶無名庵に偶居してこゝちさへすぐれず去來がもとへ巾つかはしける

朝霜や茶湯の後のくすり鍋　丈艸

かへし

三二〇　朝霜や人参つんで墓まいり（同

芭蕉翁の難波にてやみ給ぬときゝて伏見より夜舟さし下す

三二一　舟にねて荷物の間や冬ごもり（同

三二二　旅人の馳走に嬉しはちたゝき（となみ山

賀刀奈美山撰集

三二三　凩や劔を振ふ礪浪山（同

三二四　食どきにさしあふ村のしぐれ哉（芭蕉庵小文庫

三二五　行かゝり客に成けりえびす講（韻　塞

『初蟬』には「落柿舍へ遣しける文のかへりに」、『末若葉』には「落柿舍へつかはす文のかへりに」、『去來發句集』には「其角へかへし」と前書がある。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「又ひとり」（一九四）の句に續いて記載されてある。

三一八　『菊の香』『去來發句集』所收。以上兩書には前書がない。『浪化上人日記』には元祿八年の部に見え、「鴨川や」（一九六）の句に續いて記載されてある。

三一九　『去來發句集』『去來抄』所收。

三二〇　『去來發句集』所收。同書には前書が「丈草の許より芭蕉翁の七日〳〵とうつり行あはれさ猶無名庵に偶居して心地さへすぐれずとて朝霜や茶湯の後の藥鍋といへるかへし」とある。

三二一　『去來發句集』所收。同書には前書が「翁の病給ふを聞て伏見より夜舟さし下す」とある。

三二二　『去來發句集』『落柿舍日記』所收。『去來發句集』には「十錢を投じて百聲の瓢を聞しむ」と前書がある。

三二三・三二四・三二五・三二六　『去來發句集』所收。

三二六 行年に疊の跡や尻の形（同

訪僧

三二七 馬道や菴をはなれて霜の屋根（初蟬

三二八 夕照にひらつく礒のかれ葉かな（同

三二九 塗ものゝ上にちよぼ〳〵しぐれかな（浮世の北

芭蕉翁三回忌

三三〇 夢うつゝ三度は袖のしぐれ哉（喪の名殘

三三一 火いけむし背戸から寒しかまの前（同

三三二 河原毛の烏帽子の上や初しぐれ（陸奥衛

三三三 神鳴もさはぐや年の市のをと（梅櫻

三三四 年もはや牛の尾程の便りかな（元祿戊寅歳旦牒

三三五 せめ寄て雪のつもるや小のゝ峯（篇突

三三六 有明にふりむきがたき寒さ哉（同

三三七 介病も一人前の火燵哉（同

大雪の降けるとし

三三八 九重に見なれぬ雪のあつさ哉（續有磯海

三二七 『浮世の北』『去來發句集』所收。『浮世の北』には前書が「僧丈草をとぶらふ」とあり、『去來發句集』には「訪僧丈草」とある。

三二八 『折つゝじ』『去來發句集』所收。『折つゝじ』には「丈艸の住まれける湖南の山家を訪ひて申侍る」と前書がある。

三二九 『去來發句集』所收。

三三〇 『去來發句集』所收。同書には前書が「翁三回忌に義仲寺にて」とある。

三三一 『去來發句集』所收。同書には「かまの前」が「竈の前」とある。

三三二 『去來發句集』所收。

三三三 『鳥の道』『去來發句集』所收。

三三四 『篇突』『泊船集』『後れ馳』『當座拂』『去來發句集』所收。

三三五 『續有磯海』『猿舞師』『けふの昔』『去來發句集』所收。

三三六 『續有磯海』『泊船集』『猿舞師』『けふの昔』『梟日記』『花の雲』『笈の塵』『去來發句集』所收。『去來發句集』には「堀川を通りて」と前書がある。

三三七 『續有磯海』『泊船集』『續別座敷』『去來發句集』所收。『續有磯海』

三三九 老武者と指やさゝれむ玉霰（記念題

三四〇 山がらの里かせぎするしぐれかな（泊船集

三四一 一しぐれしぐれてあかし辻行灯（けふの昔

三四二 霜月や日ませにしけて冬籠（誹諧曾我

旅中歳暮

三四三 としなみのくゞりて行や足の下（小弓俳諧集

三四四 山畑に青み殘して冬がまへ（青むしろ

除風子の撰集をいわゐほ句まいらせんとおもふに青むしろはことしのわらをもつてをり出せるものなりと人の申ければかならず冬季なるべしとさたしはべりて

三四五 草庵に一のたからや青莚（同

三四六 雪ふれば常盤御前のいとおしき（菊の道

三四七 老樂の口もと寒し御佛名（歸華

三四八 俵物に年とらするや牡丹土（草庵集

三四九 詠めやる奥のところゝや比良の雪（そこの花

には「病中吟」と前書があり、『泊船集』には「持病にこもりける比」とあり、また兩書には「一人前の」が「一人前する」とある。『續別座敷』には「介病も一人前の」が「介病を一人前する」とある。『去來發句集』には「介病も」が「看病も」とある。

三三八 『泊船集』『續別座敷』『去來發句集』所收。以上三書には前書がない。

三三九 『去來發句集』所收。

三四〇 『去來發句集』所收。同書には「山がらの」が「山雀の」とある。

三四一 『續別座敷』『旅袋』『去來發句集』所收。『續別座敷』『旅袋』には「辻行灯」が「辻燈籠」とある。『去來發句集』には「しぐれてあかし」が「しぐれて明し」とある。

三四二 『旅袋』『去來發句集』所收。以上兩書には「卯七亭」と前書があり、また「日ませにしけて」が「日ませにしけく」とある。

三四三 『青むしろ』『艸之道』『きれぎれ』『去來發句集』所收。『青むしろ』『艸之道』には前書が「長崎のうらに旅ねせし年」とあり、『去來發句集』には「長崎の浦に旅寐して」とある。

三五〇 盗人に負(をう)ともいはむ鰒の錢（同

三五一 繪の中に居ルや山家の雪げしき（きれ〳〵

三五二 柳など梢は重し初時雨（蝶すがた

三五三 布子着て淋しき顔や神送（柿表紙

三五四 笹垣のどちらに啼ぞみそさゞゐ（草苅笛

三五五 朝霜の花も奥あり茶の木原（同

木曾塚にて

三五六 船馬にまた泣よるや神無月（幾人水主

悼浪化君

三五七 その時や空に花ふる野べの雪（白陀羅尼

宿丈艸庵

三五八 さむきよやおもひつくれば山の上（渡鳥集

南

三五九 眞夜半や火燵際迄月のかげ（同

土大根集を賀して

三六〇 鴈鴨や又うちあけて神送（麻生

『きれ〳〵』には前書がなく、「としなみの」が「としなみも」とある。また『風俗文選犬註解』には「としなみの」が「水鳥の」として收められてあるが、これは誤か。

三五四 『渡鳥集』、『去來發句集』所收。『渡鳥集』には「影照院は崎陽の辰巳に有入江みぎりに廻り小島山向に横たふ吟友支考が蕎麦にまた染かはりけん山畠と聞へしは秋の比にや來りけん其年の名殘惜まんと人〳〵に誘れて」と前書がある。また以上兩書とも「山畑に」は「山畠や」とある。

三五五 『去來發句集』所收。同書には前書中「わらをもつてをり出せるものなり」は「藁をもて織出たる物なり」とある。

三五六 『きれ〳〵』『ぬれ若葉』『去來發句集』所收。『きれ〳〵』には「伏見常盤」と前書があり、「いとおしき」が「いとしさよ」とある。『ぬれ若葉』には「雪ふれば」が「雪の日は」とある。また『去來發句集』には「軍書を讀て」と前書があり、「いとおしき」が「最惜しき」とある。

三五七 『去來發句集』所收。

三六一 月花の世帶上手や大根主（土大根）

三六二 牛賣て伯父と道きる時雨かな（續山彦）

三六三 年暮ぬ我に似合ひし松買ん（松餝集）

三六四 戀をしておもへばとしの敵かな（旅寐論）

三六五 道を經て散り來し嵯峨の木の葉哉（よとぎの詞）

三六六 雪の山かはつた脚もなかりけり（去來發句集）

三六七 旅人の外は通らず雪の朝（同）

三六八 松杉にすくひ上たるみぞれ哉（同）

三六九 賽錢を落して拂ふ落葉哉（同）

三七〇 物くるゝ門にも立ず鉢たゝき（同）

三七一 種や飛ぶ千里の外の枯野づか（筑紫貝）

枯野塚

三四九 『去來發句集』所收。同書には「奥のとろゝや」が「奥のとろくや」とある。

三五〇 『去來發句集』所收。同書には「負ともいはむ」が「おひともいはん」とある。

三五一 『藁人形』『類柑子』『渡鳥集』『去來發句集』所收。『渡鳥集』には「畫の中に居て見る雪の山家哉」、『去來發句集』には「繪の中に居て見る雪の山路かな」とある。

三五二 『渡鳥集』『去來發句集』所收。『渡鳥集』には「梢は重し」が「あたまぞ寒き」とあり、『去來發句集』には「天窓は寒き」とある。

三五三 『小柑子』『去來發句集』所收。

三五五 『夢の名殘』所收。

三五六 『去來發句集』所收。同書には前書が「木曾墳に參りて」とある。

三五七 『白扇集』『去來發句集』所收。『白扇集』には前書が「浪化追善」とある。

三五八 『土大根』『ものいへば』『去來發句集』所收。『土大根』には前書が「丈艸庵に宿して」とあり、『ものいへば』には「丈艸庵を訪ふ」とある。『去來發句集』には前書が「懷僧丈草」と

あり、「おもひつくれば」が「おもひつゞける」とある。また『風俗文選』中の「丈艸誄」の文中にも、『枇杷園隨筆』中の丈艸書翰の中にも見えてゐる。

三五九『渡鳥集』に「南」と前書があるのは、「一折出來ぬれば物うち喰ひ咄ししこりてあとつゞけんとも謂はず例の卯七火燵の方位を分ちて又題を探らしむそれが中に主の灰つくろひ先放があたりかねたるもおかし櫓の上に眠たる猫をかはらせて小僧が句となし各〳〵其趣を賦す」とあつて、これに續いて東西南北上中角の七題により各家の吟詠を記載した中の一章であるによる。『去來發句集』には前書がなく、また「眞夜半や」が「眞夜中や」とある。

三六二『去來發句集』所收。

三六三『松餝集』は二柳庵三四坊の明和七庚寅の歲旦帳である。その中に貞享三丙寅刊『其角歲旦帖』の一部を抄錄したものがあり、この句はその中の一句である。然し原典たる『其角歲旦帖』には、この句が見えてゐないから、或は當時他に異板のものが行はれてゐたか、又は編者の獨斷で加へたものか詳かでない。

三六四『去來抄』に「凡兆」の作「大としをおもへば年の敵かな」の句に就いて「もとの五文字戀すてふと置て予が句也云々」との說がある。

三六八『幽蘭集』『金蘭集』『芭蕉袖草紙』『俳諧一葉集』所收。

三七〇『風俗文選犬註解』所收。

昭和十年三月二十一日印刷
昭和十年三月二十六日發行
俳書堂藏版
五百部限定

著作者之章



第一七六册

去來抄新講 上（先師評） 定價金五圓

著作者 宇田久

發行者 上川井良
東京市麹町區丸ノ内三丁目二番地

印刷者 植田庄助
東京市芝區濱松町一丁目十三番地

印刷所 成文堂
東京市芝區濱松町一丁目十三番地

發行所 俳書堂
東京市麹町區丸ノ内三丁目二番地三菱二十一號館
振替東京二七一〇九番
電話丸ノ内四八〇〇番

發賣所 籾山書店
東京市麹町區丸ノ内三菱二十一號館一階南入口
振替 東京 二四一七番
電話丸ノ内 七三一番
七三二番